九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

福岡高等学校学而寮史 第一篇 学而寮正史

折田, 悦郎
九州大学大学史料室

井澤, 華子

https://doi.org/10.15017/1319135

出版情報：九州大学大学史料叢書. 6, 1998-03-20. Archives of Kyushu University
バージョン：
権利関係：

九　州　大　学

大学史料叢書

第 6 輯

福岡高等学校学而寮史　第一篇　学而寮正史

1998年3月

九州大学大学史料室

目次

凡例

福岡高等学校学而寮史　第一篇　学而寮正史……1

彙報……189

凡例

一、漢字は人名も含めて新字体を使用した。また送り仮名等については、原則として原文通りとした。

一、句読点は原文のままとしたが、一部改めたところがある。

一、体裁は原則として原本通りとした。

一、口絵写真については省略した。

一、誤字、脱字等で明らかな誤りと思われるものはこれを訂正したが、疑問のある場合は原本のままとし、その右傍に（マヽ）をつけた。

一、校訂者の注記は、〔　〕に入れた。

一、本輯は折田悦郎、井澤華子が編集校訂した。

福岡高等学校学而寮史

第一篇　学而寮正史

解説

『福岡高等学校学而寮史』は、同校学而寮寮史編纂委員会が編集した旧制福岡高等学校の寄宿寮＝学而寮の沿革史である。昭和二十四年（一九四九）十月に刊行されたもので、B5判、縦書き二段組、全二三三頁。校内にあった学而寮の歴史が、大正十一年（一九二二）九月の開寮から同校が最終的に廃止される前年の昭和二十四年二月にわたって詳述されており、また福岡高等学校自体の歴史にも言及がなされている。

福岡高等学校は、大正十年十一月、勅令第四三二号をもって福岡市大字鳥飼字大坪に設置されたもので、これによりそれまで第五高等学校（熊本県）や第七高等学校（鹿児島県）など、他県の高等学校に進学していた福岡県中学出身者は、以後必ずしも地元を離れる必要がなくなった。大正十一年四月、福岡高等学校第一回の入学試験および入学式が行われたが、志願者は文科定員一二〇名に対し五九六名、理科定員八〇名に対し四三九名、平均競争率五・二倍という難関で、入学者は履修する第一外国語により、文科甲類（英語）、同乙類（独語）、同丙類（仏語）、理科甲類（英語）、同乙類（独語）の五クラスに分けられた。合格者は修猷館以下、福岡、小倉、明善、嘉穂と、上位五校を福岡県立の中学校が占め、全体でも七割近くが本県中学校の出身者であった。これは同じ九州でも、他府県からの入学者が多かった第五高等学校などに比べると、福岡高等学校の大きな特徴であり、同校のこの性格は第二回生以降についてもほとんど変化がみられない。

初代校長は、前鹿児島県立第一鹿児島中学校長の秋吉音治。秋吉は福岡県豊津尋常中学校から第五高等学校、東京帝国大学文科大学へと進み、卒業後、福岡県立中学明善校教諭、同朝倉中学校長等を経て鹿児島に赴任、そして大正十年十一月、新設された福岡高等学校の校長に抜擢された人物であった。『学而寮史』からも窺えるように、日本主義を信奉し、「思想問題」には勿論のこと、従来の高等学校にみられた生徒の自治・自由についても、厳しい態度で臨んだ。大正十年の創立から昭和十二年（一九三七）七月まで、十五年以上にわたって校長を務め、福岡高等学校の校風形成に大きな影響を与えた。

『福岡高等学校学而寮史』の構成は、「学而寮正史」、「思想史」、「先輩寄稿、寮歌集」の三篇からなり、終戦後のものとしては珍しく、口絵写真四頁も付けられている（本叢書では省略）。本書の最も大きな特徴は、企画、原稿作成、資金調達、刊行という一連の活動が、編纂委員を中心とした在学生の手によって行われたことである。本書は廃校を目前にした福岡高等学校の生徒委員たちが、総力を挙げて作り上げた寮史であった（その具体的な活動は、次回復刻予定の『学而寮史』の「編集後記」に詳しい）。学内では大学史料室と附属図書館にしか原本が残されておらず、また刊行から既に五十年近くが経過したが、本書は現在でも旧制福岡高等学校に関する第一級の史料である。

今回は「学而寮正史」、「思想史」、「先輩寄稿、寮歌集」の三篇のうち、第一篇「学而寮正史」部分の復刻を行おうとするものである。

（折田悦郎）

〔表紙〕

〔縦二四・五㎝、横一七・四㎝〕

福岡高等学校学而寮史

福岡高等学校学而寮綱領

一、自由ヲ愛シ自治ヲ重ンジ寮生活ノ真髄ヲ発揮スベシ

一、世界ノ進展ニ鑑ミ学而寮ノ伝統ニ遵ヒ寮生タルノ矜持ヲ失フベカラズ

一、広ク知識ヲ世界ニ求メ人類文化ノ発展ニ寄与スベシ

巻頭の辞

山尾政治

吾々の生涯を通して一番意義深い印象と感銘を残すものは高等学校生活であり、その高校生活中寮の生活ほど人物の根底に滲透しているものはあるまい。正義観と感激性の最も旺盛な時代だけに、真理を探求し教養を豊にし以て国民の先達となり、進んでは人類文化の向上に寄与すべき人材たらんとの高い理想の下、純真にして素朴な英才学徒達の営む切瑳琢磨の共同生活は、正にさもあるべきことだと思う。自由を愛し自治を重んずる気風清秋にして高邁なる気格、明朗にして闊達なる気宇、そして雄渾にして不撓なる気魄を養い、以て人物の根柢に培うの点に於て、断じて他の追随を許さない異色ある修養道場たらしめんとの、開寮当初先輩達の建設的な苦心と努力、並に之を刷新、補強して大成せしめんとの、歴代先輩達の向上的な工夫と励行とが、年々歳々積み重なり織り込まれて、遂に動かすべからざる尊い伝統と、薫化せられざるを得ない力強い寮風とを作るからである。

我が学而寮は大正十二年四月、福岡高等学校の開講と同時に発足し、正に二十有七年を閲したのであるが、その間時勢の変動と世相の推移実に幾曲折、思潮の奔流と人心の動向亦幾展開、随つて教育趨勢も幾度か形実の変遷を経たとはいえ我が学而寮は、歴代教官方の適切妥当なる指導の下、寮生諸君の徹底せる自覚と節度ある自治により、常にその執る所中を失わず、その嚮う所正を謬らず、済々多士を出しつゝ寮風日と共に振い、遂に今日の隆運を致したことは、誠に仕合せの至りだと思う。

先般寮生諸君の間に寮史編纂の企てありと聞き、『これあるかな』

と只管その成功を祈つていたのであるが、最近その稿成れりと聞いて実に欣快に堪えない。凡そ天地の悠久、宇宙の永劫に比すれば、二十七年の歳月の如き、固より所謂白駒過隙に過ぎないけれども、吾々が歴史を繙いて既往を追懐し過去を偲ぶことに依つて、現在への認識を深め、将来に対する多くの示唆を得ることは極めて有意義のことゝいわねばならぬ。この意味に於て寮史の編纂は実に意義深いものがあるけれども、中々容易ならざる大業というべきである。学而寮史の編纂も並大抵の苦労ではなかつたであろうと思う。寮生諸君の熱意と労苦に対し、且つ之に就いて多大の指導と助言を頂いた先生方、並に資料を提供し直接間接賛助して下さつた先輩方の御厚意に対し、茲に深甚なる敬意と感謝の意を表す次第である。

只惜しい哉。学而寮の歴史は我が福岡高等学校の歴史と共に、明年三月を以て永久に終焉を告げる。寂寞を感ぜざるを得ない。然し又、さればこそ我が寮史の編纂がいよ〳〵深い意義を持つというべきであろう。蓋し、我が寮史こそは母校のありし日の盛運を永遠に伝えるのみならず、寮生たりし諸士をして之を繙くことにより光輝ある伝統と異彩ある寮風とを永くその中に活かし、以て懐かしい追憶と共に、純真にして若々しい情熱と、剛直にして軒昂たる意気と、寛闊にして巧偽なき友誼と、そして超放にして簡素なる風尚の本源となさしめ、尽きせぬ泉となさしめ得るであろう。加之、後代一般の青年学徒にとつては、正に一服の清涼剤、否蘇生剤、将た復魂剤たらしめ得るであろうことを疑わないのである。

聊か蕪辞を述べて巻頭の言葉とする。

（昭和二十四年天皇誕生日に記す）

小引

永井重義

吾が福岡高等学校は、愈々現在の文科二学級と理科四学級の諸君の卒業を以て、永い歴史に終止符をうつことゝなる。二十八年の間、吾が校風の発揚に貢献した吾が学而寮も学校と運命を共にして新らしい発足をせねばならない。宿命とは云ひながら感慨無量である。学而寮が辿つてきた跡を回顧するに、時勢の推移と共に内容形式に幾多の変遷はあつたが、質実剛健を伝統として和衷協同、切磋砥礪、共同生活によつて、個性の陶冶に役立たしめた効に至つては、いひ知れぬものがあつたに違いない。私は昭和十三年この方、寄宿寮に関係してをるのであるが、今日から見るとその大部分は暗い時代で、勤労作業、勤労奉仕、勤労動員と時勢は激動して、学徒は追い立てられて、先輩が描いたような夢はなかつた。この激浪は寮生活にも波動して寮生活は訓練一点張りとなり、無理を強いたこともあり、色々と不満もあつたろうが、我慢して貫つたことに対し感謝している。学而寮が生れて今日に至る二十八年の生涯は、大正の後期から今日に至るので、吾が国内情勢には政治、経済、文化、思想、道徳の上に異常なる変革があつたので、この社会現象が寮生活にも影響を与えているに違いないから、年々の寮生が如何にこれを感受し、生活したかをこの転換の機会に一巻の歴史にまとめて、その生命を伝えたい気がしていた。幸にも昨年夏休暇前から寮生有志の間に、寮史編纂が企てられた。洵に時宜に適したことゝ思つて大に賛成した。然し寮史編纂は壮挙ではあるが、仲々難事で、かつても企てられてことやみになつたことがあるので、慎重に進めるようにはかつた。殊に現下の資財、資金の入手調達の困難、

更に戦災による資料の焼失を思う時その感を深くした。所が編纂委員の愛寮の精神と勇気と、智欲はこの錯節を解決して稿成り上梓するという。洵に欣快の至り。労を謝するのみである。この苦心の寮史はやがて同窓諸士の手に届いて、さまざまの思出を提供して親睦を増すよすがとなるに違いない。終りに寮史編纂に当り資金の醵出に資料の輯集に並々ならぬ教示と援助を賜はった先輩諸士に謝意を表し健安を祈ります。

序

南風薫る舞鶴城変遷茲に二十有七年、玄濤の潮音若人の胸奥に潜み、独異の寮風を誇る伝統の揺籃吾が学而寮はその歴史の終幕をこゝに迎へたり。顧れば幾多星霜波乱重畳の吾が楽宴の地に、悠久の意気と感情の宴に酔いし青陵の園、遠望せる油嶺の薄雲、遠くかすむ背嶺の連峯、玄海を隔てゝ、志賀の雄姿を望み、海岸に連なる灘の潮、落日反映する雅勝の地は吾等若人の熱情の糧ともなれり。或時は暗黒の淵に、或時は歓楽の巷に、孜々刻々として励みて、青陵魂の大旆を打振り乍ら理想を追ひ疲れ、輝かしき伝統とその創造へとはてはこの歴史の燦然たる結実を見たり。吾等かの二十有七年の歴史を繙きつゝ、先人の辿りし足跡を偲び、青陵の雄魂漲る真情を吐露しつゝも、終幕の将に垂れんとする学而寮を偲びては、只管熱情の逆流を覚えしむるものあり。寮風の純正また薄雲に比し、友垣の団欒の糧を克明に知る。

変動極まりなき世界の動揺、祖国の暗澹正に若人の覚醒を促す。吾等この寮に学びし者必ずやこの峡路を翔破し、かゝる暗迷の彼方に一光明を招じ齎らさんが為に奮発せん。若き我等は世の先駆を以て自ら任じ個人の信念を確立し、人格の完成を期し、高き知性と愛をかゝげて、来るべき黎明の曙を見ん為には如何なる、盤根錯節をも敢て辞せず、唯勇躍前進の一途あるのみ。希はくば、こゝに織り込まれたる寮史の意義に則り、明日への生命の糧を体されん事を。

嗚呼光輝あるこの歴史、祖国日本の前衛たる吾が学而寮、今や広辺渺茫たる大海の彼方に巣だつ大鵬の姿にも似て、いやが上にも寮生の奮起を促がすかに見ゆ。

歴史は終鐘と共に消ゆ。されど友情に結ばれ愛の世界に彷徨せる吾等寮生の胸に宿る回想の存する限り、永久にこの夢は消えず。

学而寮史の編纂の意義や重且大なり。その完成をようやく見る。この委員の労苦又人のみぞ知る。万難を排しての労苦を以て多とし、諸先生並びに原稿を下されし先輩諸兄に深甚なる謝意を表し、些か蕪辞を述べて序とす。

さらば！　学而寮！　さらば！

昭和二十四年六月

福岡高等学校

学而寮全寮総代

目次

第一篇　学而寮正史

第一章　高等学校史略　……〔四〕

第二章　福高の創立　……〔八〕

第三章　大正年間　……〔一〇〕
第四章　昭和前期（二―十二）……〔三一〕
第五章　昭和後期（十三―二十三）……〔九三〕
第二篇　思　想　史〔以下、第七輯にて復刻〕
第一章　大　正　年　間
第一節　校内の風潮
第二節　時代思潮の様相
第三節　社会科学研究会と蜷川事件
第二章　昭　和　前　期
第一節　校風発揚と自治進展
第二節　自由主義と福高
第三節　共済部事件
第四節　共済部事件の影響
第三章　昭　和　中　期
第一節　末期自由主義
第二節　国家主義の勃興
第三節　寮の統一と十五週年記念祭
第四節　支那事変以後
第四章　昭　和　後　期
第一節　報国学而寮の結成
第二節　太平洋戦争と二十週年
第三節　二十四時間教育
第四節　学徒出陣と通年動員
第五節　終戦前後
第五章　終　戦　後
第一節　自由と理想
第二節　校風寮風
第三節　伝統の終焉
第三篇　先輩寄稿、寮歌集
先輩寄稿
寮歌集
編集後記

装幀　牧　川　鷹之祐　教授

第一篇　学　而　寮　正　史

第一章　高等学校史略

福高創立の経緯を記述するに先立ち、高等学校史の概略を述べる事も、あながち無駄な事ではあるまい。現在諸般の状勢により大きな改革を余儀なくされてゐる我国学制の変遷の大略でも朧げながらも理解し得るならば、それは学生として、出身者として、将来教職にある方として、学制改革に関心をもつ場合、また何等かの参考ともなるであろう。

明治五年八月二日政府は我国教育制度を統一せんが為学制を頒布した。高等学校の濫觴ともいふべきものは、この学制中に含まれてゐる。

その大略は、全国の学校を文部一省の統轄下に置き、全国を整然たる学区に分割し、学区を大学区、中学区、小学区の三区に分ち、各区に夫々大学、中学、小学を置かんとしたもので、この中、中学は上下二等に分かれ、上等中学は十七才より十九才までの者を収容する事となつてゐる。この上等中学はその程度に於て今日の旧（現制）高等学校の制度に該当するものであり、あまりに理想的でありすぎた為に遂に実現を見ずに終つてしまつた学制ではあるが、高等学校の濫觴となすのである。

然し乍ら、学制所掲の所謂上等中学が程度として高等学校に相当するものであるけれども、それは現実に設置されたものでなく、寧ろ現実に高等学校の前身となつたものは他にある。即ち明治十年東京大学の設立と共に医学部に置かれた五ケ年の予科、法、理、文の三学部の為に置かれた予備門等で、又東京英語学校を東京大学予備門と改めた。この東京大学予備門は一高の前身である。

明治十二年九月二十九日、太政官布告第四十号を以て教育令が公布せられ、学制は廃止せられた。この教育令は前の学制が当時の国情に比し高遠劃一にすぎたのを改め、より簡単ならしめんとしたものである。その大要を示せば、

教　育　令

第一条　全国ノ教育事務ハ文部卿之ヲ統摂ス故ニ学校幼稚園書籍館等ハ公立私立ノ別ナク皆文部卿ノ監督内ニアルベシ。

第二条　学校ハ小学校中学校大学校師範学校専門学校其他各種ノ学校トス。

以下各条各学校の性質を明らかにし、しかしてその設定に付いては、原則として自由主義を採つている。

第八条　以上掲ぐる所何の学校を論ぜず、各人皆これを設置すべきことを得べし。

この教育令中には高等学校に相当する制度を欠いている。中学校につき左の規定あるのみである。

第四条　中学校は高等なる普通学科を授くる所とす。

もつとも右教育令に基づき制定せられた中学教則大綱（明治十四年文部省達第二十八号）に依れば中学校を分つて初等高等科の二等とし、初等科を四ケ年、高等科を二ケ年と定めたけれども、高等科なるものが直ちに高等学校に該当したとも云ひ難く、第一高等学校の前身たる大学予備門は依然として存在した。

この高等科なるものは大学科及高等専門科の予科的存在であつたが、その教課を見るに初等中学科より僅かに進んだにすぎず、その水準は甚だ低いものであつた。従つて大学予備門と連絡が出来難かつたと伝へられる。

斯くの如く中学校教則大綱による中学校に内容甚だ振はざるものがあつたので、明治十九年森文相の時に至り、中学校令を公布して中学校の大整理を行つた。而して此の中学校令に於て高等学校の前身たる高等中学校が認められたのである。

中　学　校　令

第一条　中学校は実業に就かんと欲し、又は高等の学校に入らんと欲する者に須要なる教育を為す所とす。

第二条　中学校を分ちて高等尋常の二等とす高等中学校は文部大臣の管理に属す。

第三条　高等中学校は法科医科工科文科理科農業商業等の分科を設

くる事を得。

第四条　高等中学校は全国（北海道沖縄県を除く）を五区に分劃し毎区に一箇所を設置す、其区域は文部大臣の定むる所による。

第五条　高等中学校の経費は国庫より之を支弁し又は国庫と該学校設置区域内に在る府県の地方税とに依り之を支弁することあるべし、但此の場合は其管理及経費分担の方法等は別に之を定むべし。

（以下略）

右に引用した中学校令に於ては中学校を分けて尋常高等の二段階とし、高等中学校は総て官立とし、全国に五校を置く事と定めてある。此の高等中学校が（旧制）高等学校の前身なのである。即ち中学校令の公布と共に、東京大学予備門を第一高等中学校とし、大阪の大学分校を第三高等中学校とし、同年山口中学校を昇格して山口高等中学校とし、翌年第二高等中学校（仙台）第四高等中学校（金沢）第五高等中学校（熊本）を新設し、又鹿児島県立中学造士館を高等中学校に改制した。

高等中学校の修業年限は二箇年であつて（明治十九年文部省令第十六号第二条）学科目は志望分科大学の如何によつて塩梅することとなつていた。なお中学校令第三条には種々の分科を設け得る旨の規定があるが、前記文部省令第十六号は『分科に関する学科及其程度は別にこれを定む』（第八条）となし、これを実現しなかつた。

明治二十一年文部省令第四号にて高等中学校の学科に改正を加へ、学科を一部二部三部に分ち各生徒をして其の一を修めしむる事となした。その学科目を眺めてみると、現今の高等学科の学科目と大差はないが、ラテン語（一部二年ノミ）、天文、理財学、法学、通論、測量等の専門的学科も加わつている。

高等中学校の制は明治二十七年井上文相の時代に至り高等学校と改まり、ここに今日の高等学校が生れたのである。即ち明治二十七年勅令第七十五号を以て高等学校令が公布せられ、次の如く規定された。

第一条　第一高等中学校、第二高等中学校、第三高等中学校、第四高等中学校及、第五高等中学校を高等学校と改称す。

第二条　高等学校は専門学科を教授する所とす、但帝国大学に入学する者の為め予科を設くる事を得。

第三条　高等学校は其附属として低度なる特別学科を設くることを得。

第四条　高等学校に於て設くる所の学科及講座の数は文部大臣之を定む。

第五条　本令は明治二十七年九月十一日より施行す、但各高等学校に於て学科を設置するの時期は文部大臣之を指定すべし、本令を施行し又は一部を施行する所の高等学校に於て高等学校高等中学校の学科を履修する年期内にある生徒の為に旧学科を存することを得。

高等学校は必ずしも大学の予備門たる趣旨ではなく、寧ろ専門学科を教授するを本体とした。然し同時に大学予科を置くことを得となし、当初は第三高等学校に法学部工学部を各高等学校に医学部を置いたが（明治二十七年文部省令第十五号）これは皆分立又は廃絶してしまつた。即ち各高等学校医学部は医学専門学校となり、第三高等学校の法学部及び工学部は廃絶し、茲に高等学校は事実は全然大学予科のみとなつた。

大学予科は当初は第三高等学校を除く他の高等学校に置かれたのであるが、明治三十年に至つて第三高等学校にも大学予科を置いた。大

学予科の修業年限は三ケ年であつて、高等中学校の時より一ケ年の延長となつた、大学予科は一部（法科及文科）二部（工科理科及農科）（獣医科を含む）三部（医科）の三部に分れてゐた。

抑々高等中学校を改めて高等学校を設けた精神は、低級の大学を置き、短期間に専門の学術を修めしめんとしたもので、たゞ帝国大学に遠慮してドイツのHochschuleの名に倣つて高等学校と称したのである。然るに本体である専門学部は振はずに大学予科のみが成長した為その本来の目的より甚だ逸脱したものとなつた。即ち専門的教育を高低の二段階に分けて、大学に於て学問の蘊奥を極めると同時に速成の教育により実際的な活動に資せんとしたにも拘はらず、その意図は裏切られ本末顚倒の形になつたのみならず、大学予科より大学へのコースは学問に一生を捧げんとする者の外は過分の負担に過るといふ意見が出て来る様になつた。問題は低度の専門教育の為に高等学校の内容を改革するか或はその年限を短縮するかしなければ解決が出来ない様になつた。

明治三十四年菊池文相は、高等学校を分解して一方に大学予備門を設置すると共に他方に専門学校を新設、然して大学予備門はその修業年限を二ケ年とし従来より一ケ年の短縮を実行せんとした。しかしこの案は高等教育会議に諮問せられ、専門学校の設置のみ通過して高等学校は従前の通りとなつた。

その後日露戦役の為一時は学制改革も中絶してゐたが、明治四十一年就任の小松原文相の時に至り、再び高等中学校案となつて表れた。同案は最初七年制であり高等科三年中等科四年とし、高等科を文理科に分かち、高等科は中学四年修了者をも入学せしめ、即ち一年の年限短縮を為さんとするものであつた。しかしこの案は高等教育会議において反対に遭ひ大いに修正を加へねばならなかつた。修正の要点は高等科のみを高等中学校とし、且年限を二年半とするにある。当時帝国大学及び高等学校の学年開始期は九月であり、中学期の卒業期は三月であつたから、その空隙をうめて高等中学校の学年初を四月とすれば修業年限を従来より半年減ずる事により正味一ケ年の年限短縮が出来るといふ案であつて、余り学力の低下を来たさずに短縮の目的を達せんとするものであつた。この修正を以て高等教育会議を通過し、高等中学校令の発布となつた。

高　等　中　学　校　令

第一条　高等中学校は中学校を修了せる者に対し更に精遠なる程度において高等普通教育を為すを以て目的とす。

第二条　高等中学校は官立とし、其数は全国を通じて二十校以内とし一校の生徒定員は四百八十人以内とす。

第三条　高等中学校の修業年限は二年五月乃至二年六月とす。

第四条　高等中学校の学科を分ちて文科及理科とす。

第五条　高等中学校に入学することを得る者は中学校を卒業したる者又は年齢十六年以上にしてこれと同等の学力ありと検定せられたる者たるべし。

第六条　高等中学校の学科目及其程度ならび入学退学及懲戒に関する規定は文部大臣之を定む。

（第七条、第八条　略）

第九条　本令は明治四十六年四月一日より之を施行す。（以下略）

右の高等中学校令は大正二年に『本令施行の期日は文部大臣之を定む』と改め、次で施行期日を無期延期となし、又新たに制定せられた高等学校令により廃止せられ、結局全然実施を見ずに終つた。その理

由としては内閣更迭により該案反対の奥田氏が文相となり、全国に二十校もの高等中学校を設けるのは財政上覚束ないといふ為であつた。

その後大正六年に設置された臨時教育会議において多年の懸案であつた高等学校問題も解決を見た。その議決の結果、次の様な事柄が内閣総理大臣に答申せられた。

一、高等学校は高等普通教育を授くる所とす。
二、高等学校の修業年限は三ケ年とす。
三、高等学校第一学年には中学四年修了者を入学せしむ。
四、高等学校は官立、公立、私立（財団法人の設立）とす。
五、高等学校は単独に之を設置し、又は尋常科四年高等科三年合計修業年限七年制によりて之を設置することを得しむ。
六、高等学校及七年制高等学校の高等科の学科を分ちて文科及理科とす。
七、高等学校及七年制高等学校高等科に於ては第二外国語は之を随意科目とす。
八、高等学校及七年制高等学校高等科の第三学年を卒りたる者は帝国大学に入学することを得しむ。
九、高等学校及七年制高等学校高等科にはその第三学年の上に更に修業年限一年の課程を置くことを得しむ。
十、七年制高等学校の尋常科並中学校には予科を置くことを得しむ。

（以下略）

右の答申に基づき高等学校令（大正七年）が制定せられ、多年の懸案であつた学制改革は一応解決された。

この高等学校令による高等学校は戦争末期一度二年制に改変せられた外、大きな変化も見ずに終戦を迎へ、内外の状勢のため再三の学制改革により事実上その姿を消すことになるのである。

第二章　福高の創立

大正七年に発せられた高等学校令によつて学制改革は一応完成したものの、それは単に形式上における改革にすぎず、以前よりの烈しい入学難は少しも緩和されなかつた。もつとも明治三十三年には第六高等学校が設置され翌三十四年には先に廃校になつた造士館は復活して第七高等学校造士館と名付け、さらに明治四十一年には第八高等学校が設置されたが、到底向上する教育熱に応ずることが出来なかつた。茲において原内閣の文相中橋氏は高等教育機関増設計画を立てた。

この計画に対し陛下は一千万円の御内帑金を御下賜され、政府はこれに公債財源を加へ案を実行した。其結果成つたものが高等学校としては、新潟、松本、山口（大正八年）、水戸、山形、佐賀（大正九年）、弘前、松江（大正十年）、東京、大阪、浦和、福岡（大正十一年）、静岡、高知（大正十二年）、姫路、広島（大正十三年）の十七校であり、旧設八校を加へて二十五校となる。吾が福岡高等学校もかくして誕生したのである。

福高創立当初の経緯は同窓会誌第七号（創立十周年記念号）に創立当初より校長の職にあつた秋吉音治氏の『既往十年の回懐』なる一文にある外確たる文献もないが、以下この一文を元にして記述を進めてみよう。

大正八年福岡県は政府の高等教育機関増設計画に応じて高等学校創立費として結局四十二万五千円の寄附を決して政府に申請した。思うに福岡市には之より先九州帝国大学が設置されており、茲に高等学校

を設立し、九州各地の学都を圧して九州一の学問の都とせんとしたのであろう。元来福岡は黒田候の治下にあり明治以来北九州第一の商都として栄えて来た都市であるが、之に大学高等学校を設え、名実に近代的都会たらしめんとの意図が察せられる。ともあれ、この寄附申請の結果本校の設置が決定された。

大正十年十一月八日勅令第四百三十二号で本校の設置、同四百三十三号で職員の員数を定められた。同日、秋吉氏は本校の校長を拝命され、十日に鹿児島を出発して十二日に文部省に出頭し、その日から省内の事務所で事務を開始した。しかし何分にも学校にとっては草分けともいふべき頃である為各種事務には大分手古ずられたらしい。秋吉氏の筆を借りて、福高のうぶ声に耳を傾けてみよう。

『……然るに紙一枚筆一本ない。幸ひ文部省内の熟練した方々の援助を得たので学校印から校長印硯箱から筆紙といふ色々の必要な用具を急速に調達して一週間位を混雑の間に用意し、初めて教官の人選本校敷地及建築の実地を視察する為め九州に下って来た。顧みればその頃の事は丸で夢の如き心地がする。』

当時の六本松は現在の如き住宅地ではなく、初夏には早少女の田植歌の調べも長閑に、秋ともなれば黄金の波が風にそよぐ、平和な田園であった。その田の地固めをなし工事にかゝったのは何時頃からであったらうか。大正十一年十一月十八日の開校記念祝典にこの工事報告があっている。即ち、

『……（前略）大正十年三月ニ文部省建築課福岡出張所ヲ開始致シ文部技師竹下武吉郎氏ニ出張所長ヲ命ゼラレ諸般ノ工事ニ着手致スコトト相成リマシタ。

本校創設工事ノ予算ハ総額七拾六万九百五十円デアリマシテソノ内建築工事ニ使用スベキ金額ハ五拾八万九百五拾円ニテソノ継続年度ハ大正八年ヨリ十一年度マデノ予定ニテ当初八年度ニハ敷地ノ買収地均シヲナシ建築ニハ九年度ヨリ着手スベキ見込ミノ所敷地決定マデニ日数ヲ要セシタメ工事ガ一年度遅レテ十年三月ト相成リマシタトコロ十一年四月開校ト決定致セシタメ僅々一年間ニ開校シ得ラルルダケノ工事ヲ完成セシムルコトト相成リマシタノデ出張所員モ極力勉励致シマシテ予定ノ開校ニハ漸ク間ニ合セマシタガ多少ノ工事ハ十二年度ニ渉ルノ已ムヲ得ザルコトト相成リマシタ。

昨年三月工事着手以来只今迄ニ竣工致セシ建物ハ本館、寄宿舎、書庫、生徒控所、柔剣道場、銃器室、其他附属家等ニシテ其坪数ハ延坪トシテ合計二千四百六十五坪五合其工費ハ参拾六万弐千参拾七円五銭デアリマス。又一坪当リノ工費ハ本館ガ木造二階建ニテ参百拾五円寄宿舎ガ同ジク木造二階建ニテ参百五拾五円ニ相当致シマス。尚目下施行中ノ建物ハ組別教室及附属家五百四十九坪五合ニシテ未着手ノ工事ハ講堂閲覧室及舎監舎等約二百五十坪デアリマス。』（以下略）

本校創立に際し尽力された方に、秋吉氏の外吉村、田辺の両氏がある。

『吉村先生は明治三十四年予が大学を出て京都真案中学校の教師となった時同時に福井中学校から転じて来た旧友である。其後両三年してから第三高等学校に教鞭をとらるゝこと既に十幾年に及高校に多大の経験をつまれた唯一の畏友なので、私は先づこの人に教を乞はんとして立ちより相談の結果幾多の犠牲を払ふて本校に転ぜられることを承諾せられた。これに力を得て私は本校の計劃をすゝむるに到ったことを深く感謝するものである。それから福岡では土地の事情に通じた一人を事務に入れて地方との交渉物品の調査等に便宜を得たい希望で

ゐた所、幸ひ現任会計の田辺氏が応諾してくれたのでこれ又本校の創始に当りて適者を得たことをいたく満足した。爾来先輩知己の擁護の下にそれ〴〵教官の選任交渉に当つたが、現今記憶してゐないし記述することも差控へる』。

吉村氏は現在に至る迄健在であるが田辺氏はすでに歿せられた。

『兎に角一通り目算が立つてから愈々四月開校の準備がせまるので事務所を福岡に移転することゝなつて、時の鳥飼役場、今の鳥飼公会堂に引越したのが一月の十六日であつた。当時その庭にあつた蘇鉄を記念に貰つて来て植えてあるのが中庭の蟠居して今に一異彩を放つているあの樹である。

四月の第一回入学試験は到底新校舎では行へぬので新築早々の福岡男子高等小学校を借用して執行した。応募者は多いし検査官は不足だし色々苦心したが中学校以外の相当学識と経験とのある方々の援助や在郷将校方の試験監視応援の下に無事果し得たことも私は県当局をはじめとし市民並に学校関係の方々に対してここに謹んで厚意を感謝せずにおれぬ』

斯くして本校最初の入学試験が挙行され、文科三組理科二組計百五十人が第一回生として入学を許可されたのであつた。

第三章　大正時代

大正時代概説

福高が呱々の声を挙げた大正十一年頃、それは第一次世界大戦後の好景気の波が過ぎ、巷間には漸く不景気の徴候が現はれた頃であつた。日清、日露の戦役に続き、この第一次世界大戦によつて我国は漸く世界の一流国に遅ればせながらその足並を揃へかけてゐたのだが好景気の夢破れた世間には、戦時中から好景気時代にかけて急速な発展を遂げた日本資本主義が生んだ労働問題、ひいては社会主義運動の新らしい動きが見えて来てゐた。労働争議の頻発、共産党弾圧……等々、社会は騒然たる響を立てながら動いてゐた。各高等学校専門学校大学には社会主義研究会が生れた。若いマルキシストの間には福本イズムが強烈な勢で浸透しつゝあつた。則ちよくいはれる言葉でいへばスツルムウントドランクの時代であつたのである。

マルキシズムの勃興する一方、阿部次郎、阿部能成の理想主義は依然として知識層に強い地盤を有してゐた。又吉野博士などによるデモクラシーの流れも強く当時次第に勢力を伸しつゝあつたミリタリズムに強い反抗を見せてゐた。

かゝる社会状勢の下にあつて、福高は成立したのであるが福高の創立を社会的に見れば、当時急速に発展しつゝあつた資本主義社会に必要なインテリ階級の補充の為といへるであらう。時の文相は中橋氏でこの時の大拡張は十七の高校を新設した。

福高の内部はどの様な状態であつたらう。それは平穏の二字に尽きる。創立されたばかりの学校の事である為、生徒側も教授側も極めて建設的な態度を持してゐた。最初のうちは事を構へるなどといふことは全くなかつた。

校長は秋吉音治氏。秋吉氏は創立以来昭和九年その死に至る迄福岡高校長として在職、その影響は大なるものがあつた。『文部省は輓近巷間に姿を現はして来た社会運動に対する警戒の為、新設の高校長の選任に関しては従来の『識見ある人格者』より文部省直属の『監督的教育者』を選んだ』（学生社会運動思想史）はやゝ酷であるにせよ、

久しく中学校長の職を歴任し、その手腕を買われて福高校長となつた秋吉氏の学校統率の状況を見ると、その様な傾向を伺い知る事が出来ない事はない。秋吉校長は深く日本主義を信奉され、国粋的な色彩は濃厚であつた。その抱懐する教育方針は、『国家に法律ある如く学校にも学則あり。学則を犯すは国法を侵犯するに等し』といふ言に依つて見る如く、至つて規則を重んぜられた。教育者として学則を重んじ規律を尊ぶのは当然の事ではあるが、更に自治自由の限界に関して、規則の制限内に於てのみ自由は許容せらるゝとの見解又高等学校は大学予備門であるとの意見などは、やゝ厳格に失する憾なしとしない。秋吉校長は成績優秀品行方正の模範生徒を有する模範校を目的としておられたものゝ如くである。生徒の身上その他に非常な温情を有し、公正無比な態度を持せられた人格者であつたが、その見解なり識見なりが極めて誠実厳格又日本的なあまりに日本的な性格から出てゐた為に、ともすれば頑固無理解の非難を若い生徒達から受けた事は已むを得ないことであつた。

高校生活には単なる大学予備門以外の性格が存在する。曰く自己完成、曰く真理の探究、曰く意気と情熱、これら一連の事柄はあながち高校生活に限られたのではないが、中学の子供つぽい生活から一躍成人した青年達が集つて醸し出す一種独特なアトモスフイアはこれらの理想を育てるのに最も適した沃土である。この様な学生の気持が秋吉校長には理解出来なかつた。いや理解出来たにせよ、これらの理想的な名目の下になされる彼等の行動が常軌を逸する事は到底黙認し得べき事ではなかつた。秋吉校長には模範生徒以外の学生はすべて邪道であつたのだ。

かゝる教育方針の下では所謂秀才型の生徒が多く生れるが、幾分潑剌とした生気に欠くる所があつたといはねばならない。ストーム、弊衣破帽を称揚するのではないが、青年には幾分の邪気があつて然るべきである。

この校長の下に、福高は最初から理性的な大人びた校風を形成するべき運命に置かれてゐたのである。しかしかゝる雰囲気を構成したのはあながち学校の方針ばかりではない。生徒自体又福高の育つた環境も与る所が大きいのである。

前述の如く、福高創立の大正十一年頃は不景気の時代であつた。就職難、失職、矢張り学生達も考へる。又福岡市は商港として栄えた都市である。学問の都市ではない。大阪に於て学生であるといふ事は子供であると見做される迄はないにしろ学生に対する感情は悪くないとも之をはぐくみ育て上げるものを持つてゐない。又先に大学が設置されてゐたことは、福高の存在を薄くし、他の高校が最高学府である土地などに比べてお山の大将的な気勢を甚だ削いでゐたことも否めない事実であつた。福岡の風物気風と熊本のそれとを比較してみる時、福岡出身者が大半を占める本校の気風なるものも理解し得るであらう。

かゝる環境、教育方針の下に、福高は極めて平和な発足をなした。まだ社会変動の影響も直接ではなく、従来より一種の特権階級であつた学生は生活の苦しみも感ずること少なく、理想を求め純粋な思索に耽ることが許されたのであつた。

転じて寮を眺めよう。この様な校内の空気は寮内をも支配していた。六畳の小部屋は寮内を可成り静穏に保つた。

寮は最初より自治寮としての発足を見た。これは非常な利点であると同時にまた自治意識の低調をもたらした。多くの障害を打破して得られた自治は、その根底に強靭な自治意識がある。その自治意識に更

に寮生活そのものへの厳しい反省を加えられた認識、熱烈な愛寮心を持つている。自分達の寮だ、自分達が治めねばならぬ。かゝる意識が全寮生の間から盛上つて来なければ真の自治は期待することはできない。

自治とは何か、それは寮生自身に対する日毎の厳しい反省と寮生活への自覚が必要なのである。決して安易な道ではない。それどころか苦しい茨の道である。他を責むるは易く自らを律するは難い。自治による寮生活とは決して放縦な生活を意味するものではない。又単に静穏平静のみを意味するものではない。

かく考へる時、我寮の最初から確固たる自治意識を有してゐたかは甚だ疑はしいものとならざるを得ない。それに如上の如き与えられたものと自ら得たものとの価値の相違の為ばかりではない。当時の環境、寮制度、寮生自身総てがその原因となつてゐる。試みに当時の寮生々活の一端を見てみよう。

『当時の社会風潮を反映して、全体としては皆利巧な勉強型で個人生活の集団にすぎず、団体としての寮生活たる感じは殆どありませんでした。社会、思想、人生等について語り合ふグループはあつても『教養』として頭の中に納めるだけで自らの問題として深刻に探究する人は殆ど見当りませんでした。要するに真面目な秀才型が多く情熱型は居なかつたでせう。寮のあけ暮れも物静かで、品のよい人が多かつたのを感じてゐます。エゴイストではないが、共同生活にあまり関心を持たず、着実に勉強して暇々に夫々の趣味を楽しむと云つた身なりの整つた生活が一般だつたと感じます。闊達な型破りは記憶しません。当時の日本流のリベラリズムを器用に会得していた人が多く、一室一人で生活している関係もあつて互に他人の生活に干渉せず、自らはスケジュール通りに起臥していたようです。食事時間も入浴時間もキチンとしていた人が多かつたと見えて、夕食後の三十分か一時間位は此処彼処からハーモニカ、尺八、マンドリン、ギターなどの音が一斉にきこえ、それがすぎるとピタリと静かになつて皆勉強しているという風景は紳士型の冷やかな孤独を感じさせられていました。亭々舎で駄弁る連中の顔触れもきまつており、他の人はたまに来ても腹を満たすとさつさと帰つて行く有様でした。』

以上は昭和二年卒近藤寛爾氏の手紙の一節であるが、寮開設より五、六年を経た昭和の当初にしてこの様な有様であるから、最初の事は推して知るべきである。

寮生活といふより寧ろアパート的な様相を見せてゐたといふことは、甚だ遺憾なことではあるが、如上の事情を考へ合せる時又やむを得なかつたものと思へる。而もこれらの中にも情熱的な人々もあり、その後起るいろ〳〵な事件に次第に自治意識の発達をうかがふ事が出来るのである。

寮生の中には旧来の寮の伝統に附随するストームなどに対して反対する向も可成りあつた模様である。新しく生れた寮に自分達の手で他と変つた新しい伝統を創造して行かうといふ人達が殊に理科の寮生側に見受けられた。文科生は矢張り従来の風を善悪何れにせよ踏襲する傾向があつた。それは何も古人の糟粕を嘗めるのではなく、それらの風習の中に自己の若々しい情熱とピッタリとマッチするものがあつたからであらう。之に反して理科生は全般の傾向として文科生より堅実な型が多く、より理性的である為、ストームを嫌つたのである。更に一歩進めて観察すると、明治より大正の初期にかけての泰平のころより、社会的変動の激しさは増していたし、思想界においても種々の問

題が起つていた。この様な社会の動きを敏感にとらへた学生達が、剛毅木訥の風にやゝ物足りなさを感じていたと見ることもできる。そのために寮の中にも斬新なものへと動いて行く人達が生れたのである。

この人達の非難を一番受けたものはストームであつた。ストームの是非はここでは問はないが、ストームが徒に労力を費消すること、他人の安眠を妨害すること、器物を破損すること、等々の理由のために屢々非難の対象となり、あるいはブルジョア学生の遊戯とまでいはれたこともあつた程である。学校側はもちろんストーム厳禁対策をとつたが、折にふれてストームは勃発し、禁令によつて一時鎮まつてもしばらくするとまた起るといつた有様で、ストーム問題は常に寮の大問題であつた。寮にストームが起りはじめたのは大正十一年の暮ごろからであつた。これは文科生の寮より起り、理科生の反対に遭つておさまつた。その後十二年の四月にはストーム連発の為総代が生徒課に召集される程であつた。十三年四月にはストーム反対の投書があり五月には厳禁の指令が出てゐる。かくてストームは学校側の取締り及生徒の一部の反対によつて屢々中絶しながらも四月新入生の入寮を契機に往々に勃発し、当事者の頭を悩ました。その為昭和二年に至つて乱舞会なるものが設けられるに至つたが、之は後に詳述する。

次に寮の組織について述べる。六寮（十二年三月迄は西寮未完成の為に三寮）には総代一名、計六名の総代の協議制によつて万事が運営された。昭和十年全寮総代が設けられる迄、この協議制が続けられた。六名の総代の下には図書部、炊事部、運動部の三部があり、之も各寮より選出された委員によつて構成されてゐた。図書部は寮図書の整備に関する任務を有し、寮報の発刊をも行つた。しかし最初の中は図書の数も少なく、寮報も十二年の十二月に第一号を発刊した程でそれ迄は特に注目すべき活動をしてゐない。運動部も本寮が各科級別に配置されて部別でなかつたし、又グランドもやゝ後に平山威氏などによつて整備される迄は赤土の凸凹した平地だつたのでこれも特別な事はしてゐない。対寮マッチなどは行はれてゐた。炊事部は寮生の食生活に直接関与するだけに多くの活動をなしてゐる。大正十二年暮迄は請負制度が行はれてゐたので炊事部は請負者と寮生との間に立つて種々の折衝を行つた。請負者は往々にして不正をなし、食費と実際に食膳に供せられるものとが均衡を失する為、寮生間には不満が多かつた。校門前に福岡亭といつて簡単な料理屋があり、そこの食事が比較的よかつた為に寮生の中には寮の賄が悪くなると福岡亭に出掛けて食事をする者が次第に増加した。その為に大正十三年一月より自炊制度が開始され炊事部は多忙を極めた。この請負制度から自炊への移行に関しては後述するからこゝでは詳記しないが、この自炊制度の開始は又自治寮全体より眺める時一つの重大な変化といふべきである。寮生の食生活を他人の手に委ねる請負制から、寮生自身の手でそれを行ふ自炊制度へ移行したといふ事は、その原因に自治への関心の高まりを微かながらも読みとる事が出来る。大部分の寮生は単に賄が良くなればそれで良いのであるが、幹部はこの自炊制度への切替へを契機に完全なる自治への進展の度を高めようとする意嚮が見られた。

自治意識の昂揚に関して大正十二年九月十日には委員会に於て寮生と通学生との関係といふ形で討議されてゐる。吾寮の寮生は全校生徒の約半数であつたが、寮生と通学生との間には往々にして対立的な意識があつた。寮生は高校生活の真髄は飽迄寮生活にありと寮生活を称揚すれば、通学生は何も寮生ばかりが高校生であるわけではないのだと自分の立場を主張する。従つて両者の間には対立と迄は行かずとも

暗黙の中に競争意識が働いて時折それが表面化することがあつた。委員会はこの問題をとり上げて、検討したのである。完全自治への趨勢はこの様な面から推察することが出来る。

大正年間の主な行事、事件については本文に詳述してあるので生徒総務を記して概説を終了のことゝする。

生徒総務は毎年文理科より一名宛全生徒の選挙によつて選出されたが、大正年間の生徒総務は次の通りである。

	文科	理科
第一年度	倉田興人	富川梁次
〃二〃〃	浜　正雄	野坂正夫
〃三〃〃	島田光夫	福田喜一
〃四〃〃	島田光夫	谷川　誠
	松浦長彦	旭　憲次
〃五〃〃	石橋　弘	旭　憲次
	山田健児	浜　謙次

【大正十一年度】

この年の四月から新学期が開始されたのであるが、本校舎特別教室等一応授業に差し支へのない程度に完成してゐたにすぎず、講堂は勿論のこと寮も完成してゐず、生徒は木の香も新らしい新校舎に、こゝかしこからコン〳〵と響いて来る槌の音を伴奏に教授の講義に耳を傾けたのである。

一学期の間は市外の者もあちらこちらに下宿を見付けて通学してゐたのだが、二学期になり漸やく本寮のみが完成し、茲に学而寮も第一歩を踏み出したわけである。

○九月四日　開寮。西寮の建築完成せず、本寮のみを開寮し学則により自宅通学を除く外入寮せしむべき生徒を決定した。入寮者は原則として自宅通学を除いて全員であつたが、特別の事由のある者は之から除外された。完成してゐた東寮の収容人員は、六畳に二人宛で三寮合せて六十室に百二十名であつた。しかし空室もあり約百名が第一回の在寮生となつた。そして各科類毎に寮を異にし、東一及二寮に文科、東三に理科が入つた。この寮生配置、更に六畳の小部屋制度、これらは恐らく当時の校長秋吉音治氏の意図に出たものであろう。それより以前各高校の寮制度を参照し、各部別の寮生配置、又大部屋における多人数制度は生徒の人格修養の為に長もあるが、他面それによつて勉学を妨ぐる弊害も少なからず、かゝる制度はすべからく廃止すべきであるとの意嚮であつたろう。

新入寮生は先に一学期間教室において机を並べた者ばかり、殊に科別であるから、入寮早々各部屋から談笑の声が絶えず、折にふれてはストームと化さん気概があつた。

時の生徒監は小柏丑二氏で、寮主任は松岡金蔵氏であつた。小柏生徒監は頗る厳格な人柄で、豪も弛怠を許されず、新人生として意気軒昂たる生徒連を統制するのに全力を注いでおられた。

○九月六日　入寮式施行。この日寮食堂において校長始め生徒課職員列席の下に初の入寮式が行はれた。

階前の梧葉は既に秋声を告げ、一夏の休暇に日焼した生徒の頬を秋風がそよかに吹いて行く時である。食堂に集うた百余の寮生の心境は如何なるものであつたろうか。吾々は福高の第一回生である。しかも第一回の寮生でもある。福高将来の基礎を定めるのは実に吾々ではないか。かく思う時、無量の感慨が胸にあふれ建設の意気に燃え立つた事は想像に難くない。次々と行われる訓辞も新入生の喜びに満ち輝か

しい前途を祝福したことであろう。かくして学而寮はその第一歩を踏み出したのである。伝統の第一歩を飾る入寮式が終了し、生徒が部屋に戻つたころに、あたりはとつぷりと暮れてゐた。

○九月九日　寮役員決定。元来本寮に於ては、他校に於けるが如く、自治獲得の為の闘争などは全く見られず、最初から自治制がしかれてゐた。しかしこの自治とても、はつきりとした自覚はなかつた様に推察される。創立当初の事とて、学校側も生徒側も極めて建設的であり、対立的な空気は全く察せられない。又学校側も生徒に対しての取締りは比較的寛大であつた。しかも秋吉校長も寮を左程重要視してゐなかつたらしい。この様な状況から察するに、寮創立の当初に於ては、形式上より見たが、この自治も生徒の明確な自治意識に基き作られたものではなかつたといへる。換言すれば自由放任の時代ともいえるであろう。

また食事の方面から見ても請負制度をとつていた。

従つて寮役員の制度にしても学校側と生徒側とか他寮の制度を参照してその構成を決定し、生徒間の協議によつて役員が推挙され、学校側より任命の形となつてゐた。

最初の寮総務は次の通りである。

	正	副
東一寮	石井正人	鶴田千年
東二寮	浜田実郎	富永忠雄
東三寮	安永一三	福田喜一

○九月十四日　市中にコレラ病発生。たとへそれが寮外の事であるとしても、コレラの発生など真に面白からぬ事件であつた。殊に未だ水道も引かれず、井戸にて用を足してゐた寮内のことであるから、伝染の危険は甚だ多かつた。そのために対策が練られ、学校は先に授業を停止していたが、寮においては寮生の外出が禁止せられた。しばらくの間寮生は校外において威をふるふ事が出来なかつたのである。しかし寮内に患者が発生しなかつたのは幸であつた。

○十月一日　講師加川満喜氏寮務掛に任ぜらる。

○十月十二日　福岡市水道導水。前述のごとく、寮内においては水道が引かれず、寮生は甚だ不自由な生活を営んでいた。井戸といつたら炊事場に一つある丈であつたので、水道が引かれると寮内は蘇生の思いであつたと聞く。

○十一月六日　盗難予防の件告示。

○十一月十二日　食堂にコーヒー、洋食の店が開かれた。学校の門前に福岡亭なるものがあつて、善哉などを販売していた。寮生は往々にしてここに屯し、雑談に時を過した。この福岡亭が甚だ繁昌するに引きかへ、寮の食堂は請負の為にその評判芳しからず、又他寮に多くホールの設備があるのに引換へ本寮にはこの設備なく、為にこの制度を以てしばらくの間ホールに代へんとしたものである。

○開校記念式及第一回寮祭。四月開校以来八ケ月、生徒も漸く学校に慣れ、次第に落着きを見せて来たこのころ、恰も一年前の大正十年十一月八日には本校の設置が勅令を以て定められたその一周年に当る時、開校記念式と第一回の寮祭とが華やかに挙行された。寮祭は十一月十七日、開校記念は一日遅れて十八日に夫々行はれた。

第一回寮祭は、秋吉校長によつて仲々許可されず、『他校の糟粕を嘗むるが如きは本校においてはこれをとらず』とて、時の生徒総務倉田興人、富川梁次両氏も大分苦心された模様である。結局許可にはな

つたが、何しろ第一回の事とて他校の行事を参考にやるより他はなかつた。それでも前日の十六日には寮内の階下各部屋には見事な造り物が設けられた。この造り物の中には竹林の七賢をもぢつたものもあつた。更に寮の入口には本物の高下駄をぶら下げ、その上沢庵までがだらりと下つていたというから、さぞかし見物人の度肝を抜いたことであらう。その他仮装行列などの盛沢山の行事を伴つた第一回寮祭は、和気藹々たる雰囲気の中にその幕を閉ぢた。

一方開校記念式は一ケ月前の十月十一日にはすでにその協議が行はれてゐる事から推察して、非常に盛大なものであり、寮祭と共に福高の存在を市民の脳裏に焼きつけたことと想はれる。この日の式典には文部大臣はじめ福岡市長からも祝辞が寄せられた。以下秋吉校長はじめの式辞祝辞を掲げる。

高等学校開校式式辞

学校長式辞

我ガ福岡高等学校ハ光輝アル地方文化ノ発展ニ促サレテ茲ニソノ開設ヲ見ルニ至レリ。コレヲ既往ニ考フルニ大陸文化東漸ノ勢ハ遂ニ海ニ入リ北九州ニ於テ一タビ醞釀シ更ニ蓬勃トシテ東ニ向ヒテ風靡セリ。神功皇后ノ三韓ヲ征シ給フ韓人呉客ノ来リテ好ヲ修スル何レカ我ガ福岡ノ地ト深甚ノ関係ヲ有セザルモノゾ。尋デ朝廷都督ノ府ヲ此ノ地ニ置キ給フヤ楼閣舟ヲ流シ畔水碧ヲ湛ヘ制度典章ノ美正ニ九州文化ノ中枢トナリキ。乃チコノ地ガ時代ノ文化ニオイテ毎ニ一歩ヲ進メタリシコトヲ知ルベシ。且ツ夫レ管公ハ儒林ノ英ニシテ文学ノ神ナリ。ソノ廟宇ハ□〔ヨメス〕トシテ崇仰ヲ千古ニ繫ギ遺徳ノ薫染スル所碩学大儒ノコノ間ニ出デシモノ尠シトナサズ乃チコノ地ガ学芸ノ華ニ於テ特ニ煥発ノ刺戟ヲ有セシコトヲ知ルベシ。加之藤原氏ノ文吏ヲ以テシテ能ク刀伊ノ猾賊ヲ破リ北条氏ノ陪臣ヲ以テシテ能ク蒙古ノ大軍ヲ殲ス。地方人士ガ敢為邁進ノ気象ニ富メルニアラズンバ何ゾ能ク遽ニ然ルコトヲ得ンヤ。乃チコノ地ガ教育ノ実ニ於テ已ニ碩美ノ成果ヲ収メツヽアル所以ノ理ヲ知ルベシ。既往此ノ如シ現今ニ於テハ如何。之レヲ上ニシテハ夙ニ九州帝国大学ノ設置アリ規模漸ク整ヒ苑トシテ本邦文化ノ一大源泉ヲ成セリ。コレヲ下ニシテハ初等中等ノ教育并ニ其ノ盛ヲ致シ中学校ノ如キハ公私合セテ二十二校アリ。ソノ生徒数二万ノ多キニ及ビ年々ノ卒業生蓋シ一千五百ヲ下ラズ殆ド九州他県卒業生全数ノ半ヲ占ムト謂フベシ。コノ地ニモシ高等学校設立ノ要ナシトセバ何レノ地ニカソノ要ヲ見ンヤ。吾人ハ今日ニ至ルマデソノ実現ヲ見ザリシヲ異ムト共ニ今日ニオイテハ更ニ数校ヲ加設スルモ不可ナキヲ信ズルモノナリ。嗚呼ワガ福岡高等学校遂ニ開設セラレタリ。コノ地ニオケル教育ノ機関ハ是ニオイテ秩々トシテ始メテ備具セリ。ワガ校ノ開設ニツキテハ固ヨリ国家文政ノ規劃ニ依ルモノアリト雖モワレハコレニ関シテ本県ガ多大ノ支出ヲ辞セザリシコトヲ感謝セザルベカラズ。シカシテ更ニ福岡市ガソノ大部ヲ特ニ負担センコトヲ記憶セザルベカラズ。由来本県ハ教育費ノ支出ニ吝カナラザルヲモツテ称セラル。本県ノ教育ガ今日ノ盛ヲ致シテ恒ニ九州文化ノ中心ヲ成セルノハ一ハコレガタメナラズトセンヤ。今茲恰モ学制頒布五十年ニ際シワレラハ、ワガ校開校ノ式典ヲ挙グルノ運ニ会セシヲ懌ブ。庶クハ吾人ハ斯ノ年ヲ記念スルト共ニ将来永ク我ガ校学風ノ振作ト地方文化ノ涵養トニ十分ノ力ヲ致シ以テ国家ノ士ヲ養ウノ期待ニ孤負スルコトナカランコトヲ以テ式辞トナス。

生徒総代祝辞

茲ニ我ガ福岡高等学校開校ノ式典ヲ挙グルニ当リ文部大臣代理松浦

専門学務局長閣下ヲ初メ来賓諸彦ノ賁臨ヲ辱フス。生等此盛大ナル式典ニ列スルノ光栄ヲ得テ感激焉ンゾ尽キン。

夫レ福岡ノ地タル夙ニ本邦文化ノ淵叢トシテ国ノ史籍ニ顕ハレ文物東漸ノ門戸トシテ海ノ内外ニ著シ。之ヲ二千載ノ典籍ニ徴スルニ古琴ノ遺響ハコウコウトシテ耳ニ在リ。詩聖柿本人麿ハ嘗テ祇役シテココニ到リ大伴旅人山上憶良モ時ヲ同フシテココニ唱和シタリ爾後橘諸兄ノ如キ吉備真備ノ如キ菅原道真ノ如キ大江匡房ノ如キ碩学鴻儒或ハ帥トナリ或ハ権帥トナリ或ハ大弐トナリ或ハ国司トナリ前後化ヲ敷キ教ヲ垂レタリ。育英ノ跡ヲ探レバ大宰府ノ盛業時ニ已ニ学業院ノ設アリ真備ノ如キ督学最モ勉メシトイウ降リテ元亀天正ノ際小早川隆景兵馬倥偬ノ間ニ学舎ヲ名島ノ城中ニ設ケ文教ノ復興ヲ企テタリ。黒田氏封ヲ此地ニ受ケルヤ心ヲ名教ノ振興ニ致シ藩政二百七拾年郁々タル文国トシテ鎖国ノ日本ニ著聞ス。当年ノ高等学校タル東西両学館ノ感化猶オ人ニ在リ。斯ノ如キ垂範遺謨豈ニ徒爾ニシテ已マンヤ。今日コレヲ県内ニ見ルニ就学児童ノ夥キ殆ド全国ニ冠タルモノアリ中等学校ノ数ハ八十余ヲ以テ算シコレマタ他県ノ企図スベカラザルトコロナリ況ンヤ先年綜合大学ノ創設サレ今ヤソノ完成ヲ見ルニ垂ントシ本校ノ設立更ニソノ盛ヲ鳴ラスニ於テヲヤ。

生等此地ニ来リ此校ニ集リ此盛典ニ遭遇ス。生等ノ光栄何ゾ之ニ過ギン。往ヲ憶イ来ヲ考ヘ益進修業ノ要ヲ感ジ専念学生ノ本分ヲ守リ本校ノ規約ニ遵ヒ一意将来ノ大成ヲ期セント欲ス。唯恐駑鈍能ク大方ノ期待ニ副ヒ得ルヤ否ヤ。本校諸先生幸ニ生等ヲ鞭撻スルニ吝ナルコト勿レ以テ祝辞トナス。

今から見れば式辞祝辞の文言等隔世の感がある。例へ美辞麗句に色彩られた祝辞であろうとも、全員の胸には無量の感慨が流れた事であらう。この日開校記念のバッチが全員に配られた。

それからすでに二十七年の星霜が移つた。そして今や学制改革の手によつてその歴史を閉づることとなつたのである。傷ましくも悲しき現実。しかしこれは国家の定むる所である。われわれはそれに従わねばならぬ。

十一月二十日には開校記念式の跡始末が行われた。寮祭も記念式がすめば年間の主な行事も残つていない。高潮した生徒の感情もそれから次第に落着いて勉学の秋が名実共に訪れてくる。

○十一月廿一日　寮の食事は前述の如く請負制度であつた。請負制度は請負人の独占的な営業であり、また食費も甚だ低廉で一日四十銭程度であつたため、往々にして食事に対して寮生間から不満の声が洩れた。寮生は不味い賄の食事を嫌い、校門前の福岡亭において食事をするものが次第に多くなつて来た。当然の成行きとはいえ寮統制上芳しからざる事があるので、炊事委員は請負者及生徒一般に注意を与えた。しかし依然として食事状態はあまり良くなく、寮生の憤懣は転じて賄征伐となり深夜炊事場に多数襲撃をかけお櫃を引つくりかえすやら茶碗を割るやら大騒動をして賄に示圧を加える事もあつた。しかしこの賄征伐はよく行はれたが、必ずしも賄の不良にばかり原因するものではなく、稚気満々の寮生が事あれかしと手具脛引いている時、偶々契機を見付けて押し寄せたものである。

食事の制度に関して十二月一日には欠食通知の規定が成つた。これは寮生が外泊などする場合前以て賄に通知を出し、食費の払戻しを受けたのである。又外泊届の規定も同時に施行された。寮の門限は十時であり、その時刻には表玄関の大戸は閉鎖されたが、事務室側の戸口は開いていた。遊び好きの寮生にこの門限が守られ様筈がなく、門限

は有名無実の存在であつた。

かくて大正十一年度十二月廿四日の閉寮と同時に幕を閉ぢた。

（大正十二年）

○一月十四日　大正十二年は一月十四日の寮委員の改選によつてその幕を切つて落した。寮委員は向ふ一年間自治寮の全責任を負つて内外の事業に当り、寮生の規範となつて寮の推進の主導力となる重要なるポジションである。従つてその選出は非常な意義を有する。この日その重任に対し寮生の信望を担つた各寮総代は次の通りである。各部委員は不明である。

一寮　総代　中村俊一（文甲）
　　副総代　石井正人（文甲）
二寮　総代　岸田幸一（文乙）
　　副総代　浜田実郎（文丙）
三寮　総代　宇都宮　偉（理甲）
　　副総代　古賀明恭（理乙）

同日文部省書記官木村正義氏は寮内の巡視を行つた。

○一月十八日　前年度の大正十一年には寮内の諸般の規則はその大綱が定まつて居たが、寮生活の実際上の制度はこの年に多く整つて来た。

即ち生徒名札、炊事部における他校献立表の研究等等である。

委員会にて生徒名札掛の位置決定、これは生徒の在寮不在を示すものである。木札両面の赤黒二色に二名前を書き、外出の際には黒を赤に替へて出掛けた。この名札の位置は表玄関であつた。しかしこの名札は殆ど使用されなかつた。

○一月廿九日　炊事部により朝食にパンを用ひることになる。

○一月一日（マヽ）　炊事部において他校の献立表研究。

○二月一日　下駄履き上昇取締の件。

○二月二日　木炭券発案。

○二月六日　火種時間について。この制度は生徒が事務室より火種を貰つて行く時間を制限したものである。冬期には各部屋に円筒型の直径一尺程の火鉢を置いて暖房に充ててゐた。火鉢用の炭は木炭券を発行して寮より供給していた。寮生が火鉢に火を燃す時には各自の炭を寮事務室に持参し火種をもらつて帰るのであつた。所が夜更けの寮生は往々にして深夜火種をもらいに来たりするので、火種を渡す時間を決定し、その時間以外には渡さない事とした。火種時間は六時から八時までであつた。

○二月八日　郵便物についての件。この時より郵便物は食堂入口附近の卓球場に状差しを設け、五十音に依つて区別し、寮生は食事の際に受取る様になつた。また自室でのすき焼も禁ぜられた。

大体以上の様な制度が定められたのであるが、その前、一月十七日に東中洲に大火があつた。また学校においては文科甲類の級が二月四日中洲水上公園にあつた公会堂において英語劇を開いた。『シーザー』の中のアントニウスの演説などが上演された。これは当時の語学熱を物語るものとして注目に値する。

○二月十一日　自由につき校長訓話。自由なる言葉はおよそ高校生にとつてはシムボルともいうべき言葉である。青年は拘束を嫌う。青年の体内に満ちあふれる精気は常に大空へ向つて羽搏く若鳥の如くである。殊に既に一個人の自覚を持つた高校生に於てをやである。吾寮

は幸にしてその創設より自治を認められた。

吾寮は自治自由の旗印の下にしかも極めて平和裡に発足出来たのである。生徒間に自由の気が漲り毫も拘束を意としない風潮が存在したのは怪むに当らない。その風潮は自我の確立といふ方面に向けられ近代的個性の伸長を助長する一方、青年の稚気を加へて放埒な生活態度ともなりいはゆる高校の蛮カラの無軌道性をも一面現はす様にもなったのである。学生の側から見れば将来国家の大器たらんもの豈小事に拘泥せんやという様になるのであるが、学校側殊に模範教育をモットーとする秋吉校長などとは生徒が規則を蹂躙して何等省ることがないとは甚だ憂うべき風潮であった。

秋吉校長は、国家に法律あるが如く学校には校則あり、寮には寮則あり、校則寮則を侵す者に国法を侵すとその精神において何等異る所なしとの見解を抱き生徒のいう自由の解釈においてもそれは飽まで規則の範囲に止むべき事を慫慂したのである。生徒とて何もそれがわかっていないわけではないのだが、悪徳を誇り勝ちな青年の習癖もあってとかく校長の意に反する事が多かったのである。

【大正十二年度】

一月余の春休みも桜花爛漫の春風にマントの裾を飜えして野山を散策し、将又書斎の読書に果しなきロマンの夢を追ひあるひは真摯な思索にふけるうちに早くも終って、四月の声を聞けば、西寮の建築漸く完成しその全容を整へた吾寮は再び百余の紅顔の若人達を迎えその意気当に天を衝くものがあった。抑々吾寮は昨十一年の四月開校までに落成の予定であったが、前述の如く最初の基礎工事に時を費した為に東寮のみそれも九月に到って漸く開寮の運びとなっていたのである。従って寮生は連日絶間ない槌の音に悩まされねばならなかった。西寮の完成、それは寮生の久しき待望の的であった。それ故畳の香も新らしい西寮が東寮にかわってこゝにいよ〳〵創業も発展の道に就かんとしたことは旧寮生にとっては非常な喜びであったろうし、又新入生も完成された寮の真新しい部屋に入り、春風の和らかな薫りを偲びながらこれから展開される寮生活への期待に胸をふくらました事であろう。

西寮の完成によってわが寮は内外共に面目を一新し、新旧寮生の協力によって次々と将来発展の礎を築いて行ったのである。

新設の三棟の西寮に東寮を加えて計六棟の寮は計百二十室、一室一名を収容することゝなったが一部には二名の部屋もあった。各寮における寮生の配置は東一寮東二寮に理科を、東三寮及西寮全部に文科が配された。

本年一月に寮委員の改選が行はれたが、新に六寮となるに及び寮委員の改選は再び行はれることゝなった。

○四月九日　入寮式挙行。

○〃　十四日　靴下駄にて上昇する事を禁ず。自室で読書の最中に廊下を靴や下駄で踏み鳴らされるは不愉快極まることである。この禁令はまた衛生上の見地からも当然の事であった。しかしこの禁令も容易に守られず委員を悩ます問題の一つであった。

○四月十七日　オルガンの使用許可。このオルガンは亭々舎に現存するが破壊して使用に堪へなくなってゐる。

○四月廿三日　点呼後ヴァイオリン、マンドリンを奏することを禁止す。これも前掲の靴、下駄の上昇禁止と同様の趣旨であった。

○四月廿五日　ストーム連発のため総代遂に召集されるに至る。高等学校に於ける種々の行事の中ストーム程その是非を論ぜられるものはない様である。しかもいくら取締らうとしても取締まれないのがス

トームである。ストームは元来一高の寮より各地の高等学校に伝播したものだが、更に根源を尋ねれば一高とても外国より輸入したものである。しかしながら何故にかゝる慣習が高校に長く伝へられたのであろうか。高校生活華やかなりし頃すらその廃止を唱へられたことも屢々、学校側は不意に勃発するストームに対し常に警戒し極力弾圧に勉めた程でありながら依然として止まらなかつた理由は何処にあるのであろうか。或人は云ふ『ストームは意気と情熱の表現の一形式である』と。青年の血気が機を見ては烈しい衝動と共にストームと化し、力の続く限り踊りまくる。ストームは決して理由を伴ふものではない。説明し得るものではない。理論でストームを論ずるとなればその安眠を妨害すること器物を破損すること野蕃なる事等々を挙げてその無益なるを非難するか、或は寮の伝統であること青年の本質から見て避け得られない必然的なものである事を論じてその有意義なるを主張するか、いづれにしてもその解釈は何か割切れぬものを残してゐる。ストームと伝統、熱烈な青年の感情とストーム、これらの関連には理論のみでは片附け得ぬ何物かゞ存するのである。言葉には表はせない一脈の流れがそこに存するのである。高校生活においては赤裸々な生活が要求される。統ての偽善は排されねばならない。この意味においてストームの廃止論は何か偽善的な印象を与える。

社会の急激な変動によつて一時は放念状態にあつた今日のことはいうまい。尠くとも生活の脅威もなく只管自己の完成に専心出来た大正のころである。激烈なストームが不断に発生したとしても怪むに足らない。しかし結局ストームは学校側の豪も理解し寛容する所ではなかつた。総代はストームの度毎に学校と生徒の間に立つて苦むのであつた。

○五月三日　一寮生（氏名を秘す）の件に付き福岡署員来寮す。ここにかの左翼運動の萌芽が初めて寮内に表われるを見ることが出来る。詳細は不明である。十二年の七月には共産党の第一次検挙が行われている。しかし当時は運動は活発でなく、少数の者が理論研究に耽る程度であつた。思想問題に関しては別処にて詳述する。

○五月十日　総代召集され下駄箱の件に付き協議す。

○五月十三日　寮参観者来寮。

○〃　十八日　トラホーム患者続出す。

○〃　卅一日　炊事委員不信任の怨嗟の投書あり。前述の如く請負商人の利己的行為の為、寮賄は寮生の不満の的となつていたのであるが、この不満がひいては炊事委員への不信任となつて表はれて来た。請負制度の場合炊事委員の職務は食費の徴集など寮生と請負者との折衝の任にあたるものであつた。従つて常に両者の間に挟まれて苦労を重ねなければならなかつた。しかし請負者は老獪な商人である。寮生の不満を伝へても注意された当時は良くなるが、暫くすると又これに帰る有様であつた。その為その間の事情に疎い一般寮生が賄の不良を炊事委員の監督不充分の故なりとして攻撃したのである。無理からぬ事とはいひながら、委員にとつては苦しい立場であつた。大正十三年の一月自炊制度への移行の原因は既に開寮当時より萌していたのであるがこの年になつて請負制度への非難は漸く激烈となつて来ている。

○六月十日　対山口高商野球試合。

○〃廿四日　庭内生徒通行路の街灯を点灯す。

○九月二日　暑中休暇が終り二学期が開始されると同時に、講堂において寮生に対して秋吉校長及小柏生徒主事より訓話があつた。

折しも七月には共産党に対する第一回の大検挙が行はれ、また大正

六年結成された東大新人会の活潑化があり思想問題の擡頭は学校当局を憂慮せしむるものがあつた。福高内部においてはまだ何等の具体的動きは見えなかつたとはいえ、将来左翼傾向の浸透し来る事は火を見るよりも明らかであつた。また実際的行動はまだしと雖も一部の間には唯物論研究も行はれていた。かゝる趨勢は勤勉実直を旨とする秋吉校長ならずとも生徒に注意を促さんとするのは当然である。しかしこの訓話が特に寮生に向けて行われたのは、寮生が自宅通学生に比して総ての方面において自由な立場にあつて不断の監視の目がなく、また寮という自治体としての団結力を有するためであつたろう。大正十二年二学期はかくして学校側の態度の表示によつて開始された。

○九月十一日　金文堂よりの寄贈あり。図書部は開寮以来図書の購入整備に努めて来たが、寮外よりのかゝる寄贈を得て次第に充実の度を加えて行つた。読書は学生々活の主要条件であり、高校時代の読書は根本的な教養の育成に欠くべからざるものであるのみか、書籍の傾向如何によつては将来における行動を決定するものすらあり得るのである。専門的な研究は将来に俟つ所が多いが広く東西の名著を読破するのは高等学校以外にはないのである。図書の充実は本寮文化の進展に寄与する所は大なるものがある。

○九月廿一日　大学病院入院患者あり。

○十月九日　応接室の開設、盗難事件。

○〃　十日　九月廿一日の入院事件より盗難頻々として平常無頓着な寮生間に不愉快な雰囲気が醸成されていた折柄、委員会において寮生と通学生との関係に付き協議が行はれた。

福高においては寮生と自宅通学生の数は略同数であつた。これは学校の方針によるもので、一高の如き全寮制度に依る個人の練磨自治精神の涵養などがある程度学校より無視されていたことは既述の通りである。しかし事務的な学校の教育のためにわが寮に自治精神の片鱗だに見られなかつたなどといつたら、それこそ寮に対する許し難い冒瀆となるであろう。創立の当初においてこそ単なる学生集団に過ぎなかつたかもしれぬが、伝統こそなけれ寮生の自意識と寮生活に対する認識の高まりは当然寮と自己とを結びつける愛寮心発現を来し、寮生たるの誇りが各人の眉宇に判然と表はれて来た。高校生活の真髄は飽迄寮生活に存する。この様な寮生活礼賛の態度が確立されて来たのは矢張りこのころからであつた。かかる寮生一般の風潮に寮生活の経験のない自宅通学生の中に対抗意識が醸成されて来た。寮生は寮生である事を誇りに思ひその結果はやがて通学生に対する軽蔑感を抱く様になつた。一方が他方を軽蔑すれば元来対等の立場にある他方は黙つてはゐない。何も寮生ばかりが高校生であるわけではない。吾々とても高校生なのだと両者の対立が次第に顕著になつて来たのである。

こう書けば如何にもその対立が烈しく校内に二派が生じて互に争つたかの如き印象を与へるかもしれぬ。しかし実際上左程迄両者の関係が悪化したわけではない。寮生と通学生との間に対抗意識が発生したのは事実であるが、他方全般的に至つて平和な校内の雰囲気はこの対抗意識を極端に表面化するには到らしめなかつたのである。事大事にはならなかつたが、寮生と通学生との間には後々までも相反発する傾向が残存してゐる。

校内が分裂し対立抗争することの是非は問はないが、寮委員会がこの問題を採り上げ両者の融合をはかろうとした事実は、寮生の寮に対する関心の向上の一つの証左として注目すべきである。

この日開校以来寮生のみならず生徒全般の訓育補導の重任を担はれ

た小柏生徒監が退職された。

また九月一日関東に起つた大震災への義捐金募集が行はれ、貧者の一灯が真心籠めて送られたことも附記しよう。

○十月廿三日　役員札の規定成る。

○十月廿四日　新任岩口生徒監が着任された。先に退職された小柏生徒監の後任として着任された岩口石蔵氏は爾来昭和九年に至るまで本校に在職、生徒の指導に当られた。岩口生徒監は巨軀を擁して威風堂々たる秋吉校長に比べ、痩身にして甚だ見栄えのしない方であつた。しかし謹厳実直一意生徒の指導に当られた。

○十月廿九日　寮の周囲に鉄条網張り終る。

まるで動物園である。寮生の憤懣が思いやられる。これは盗難予防のためであつたが、間接的に寮生の足止めともなつたからである。

○十一月八日　記念祭挙行。

○十一月十一日　第一回運動会。

昨年十一月開校記念式を挙行してより早くも一年の星霜が流れた。寮にとつては満一歳の誕生日を迎えたのである。昨年行はれなかつた運動会も今年は万国旗も華やかに盛大に挙行された。寮祭は奇抜なデコレーションに観衆の目を見張らせ運動会はフイールドの中央に立てた柱より八方に万国旗を飾り、白旗あり黒旗あり応援の太鼓は勇壮なあゝ玄海の歌声と共に天まで届けとばかりに鳴り響いた。

生まれたての幼児でも一年経てば歯も一応生えそろう、わが寮も一年の歳月を経てその成長は日毎に著しい。

次々と繰り拡げられる多彩な行事に身も心も烈しい興奮の坩堝に投げ入れた記念祭が過ぎれば、再び着々と歩を進めて行く。

○十二月五日　宿直室移転、寮報配布。

先に金文堂より図書の寄贈を受け、寮図書の充実に努めて来た図書部は、記念祭を契機に第一回寮報を発刊した。現在残つていないためそれが如何なるものであるかはわからないが、寮の自治制完成への一段階としてこの寮報発行は意義深いものがある。

○十二月十一日　盗人捕縛さる。以前より頻々として寮内に侵入しては物品金銭を掠め、寮の治安を乱した盗賊はついに捕縛された。

○十二月十二日　役員総会にて一月より自炊制度に決定せり。

請負制度に代るものとして自炊制度の問題が以前より屢々採り上げられて来た。此度自炊制度が決定された理由は次の二つである。

第一は請負制度の弊害である。これは前に述べた事であるが請負は商人が利益を目的とする為に食事は単調粗悪であり、至つて義務的な仕事振りは寮より温い雰囲気を奪ひ去り、寮生の不満の種となつた。

第二は自治の進展に伴ふ完全自治の一段階としての炊事制度の改革である。創立当時の模糊とした状態から時の経過につれ、次第次第に自治の意識が高まつて行く、吾々の寮は吾々で統治して行かねばならぬ。他より指示される様では寮としての意義は希薄になつてしまふのである。この様な趨勢が寮生活の物質方面の主要条件である食事に向つて行くのは当然である。請負制度を廃止せよ！炊事部は何をしているか！次次と寮生は叫び続ける。

自炊制度がかくて決定された事はわが寮の進展を寮生の自覚によつて進めて行く一つの大きな基点となつたといふ事が出来る。

次にこの自炊制度について具体的に説明をする。自炊制度に決定される以前に炊事委員は他校の寮の雇員、炊事部委員の数、献立表、食糧の入手手段等を調査していた。その結果によつて炊事部の内容を決定し、役員総会の決定を待ち愈々活動を開始したのである。

請負制より自炊制への転換によつて金銭関係は勿論材料の入手献立の作製、等々炊事に関する全権は炊事委員の管轄下に移つた。材料は商人が註文を取りに来て見積書を提供したが、炊事委員自ら方々廻つて安価にして且優良な材料の入手に努めた。低廉な食費で美味な食事を提供せねばならず、従つてその献立にも細心の注意が払われた。先づ炊事委員は一週間分の献立表を前週の金曜まで作製し、これによつて所要物品の計算をなした。一人一日当りの食費を細密に計算し、一週間の全寮生の食費を総計する。商人に註文し、物品購入の伝票を寮主任生徒主事に廻送して検査捺印を願つた。（これは昭和四年になつて廃止された。）商人は入用の品々を前日までに届けた。

一週に一度は『口とり』と称して非常な豪華版の御馳走が出来たものである。

その外炊事部の下に養豚養鶏精米の三部があり、養豚部は炊夫宿舎の裏、養鶏部は風呂場の裏側と炊夫宿舎の裏側に夫々あり、精米部は精米機脱穀機を有して米を精白し鶏の飼料に充てゝゐた。養豚部は残飯で養はれた。

この利益は寮の廻転資金として色々の事に用ひられた。

（大正十三年）

○一月七日　かくて昨年来の懸案であつた自炊は遂に決行された。自炊の結果に対する批判は後に譲る。

○二月七日　盗難事件起る。

○三月二日　試験準備中朝食に献立表以外に卵一個宛加ふる事に決定。

かくして大正十二年度は、寮表玄関の大戸と共に閉ぢられた。西寮の完成によつて開始されたこの年は寮内外共に多彩な年であつた。日一日と進展の途を辿る吾寮の創生の一駒は終る。

（大正十三年）

三年目の春青陵は芝の若芽に戯れる薫風に送られた二百の新入生を迎へた。漸く三学級が勢揃ひしたわけである。

○四月十二日　役員総会。

○四月十七日　入寮歓迎会。従来においても入寮の場合何等かの形式で歓迎会が行はれたに違ひないが、記録に歓迎会として残つてゐるものはこれが最初である。この時如何なる趣向が凝らされたか明確でない。しかし極めて和気あい〳〵たる内に歓喜と情熱に包まれた宴が進んだ事は想像に難くない。上級生の奔放な姿態長髪蓬々と弊衣破帽毫も厭はざる風貌と新入生の未だ中学生気分の抜けきらぬ童顔とが、多くの余興に破顔一笑時と共に渾然と融和して行く情景を想ふと思はず頬の綻びるのを感ずる。

○四月廿三日　園芸部の件につき協議あり。

○四月廿五日　ストームに対する投書あり。この投書は新入生の手によるものであつた。過去の社会とはあまりに懸隔のある寮生活である。穏かな家庭生活と中学生活、それは常識に律せられた社会である。しかも空想的な感情に生み出された彼等の高等学校に対するイマージュは完全に理想化されている。その様な幻想的な夢を抱いて寮の扉を叩いた三四郎達にどつと押し寄せて来る現実は彼等の感情を異常な混乱に導かずにはおかない。従つて新入生徒の中のある者の感情が歓喜の他に一種の幻滅感が混入した複雑なものになることは往々にしてある事である。殊に理性的なあるいは内気な性格の者にとつて高校のいわゆるバーバリズムは到底包容し得ないものとなる場合が多い。急激な環境の変化の為極度に鋭敏になつた神経は周囲の事物に触れてそれ

が自己の性格とマッチしない場合は容赦なく反撥してしまう。
新入生を迎えて上級生のストームは烈しく行はれたであらう。このストームに対する反感ひいては廃止論の発生は毎年繰り返される事である。

○五月六日　旧役員総会。
〃　七日　種痘挙行さる。
〃　九日　新旧役員総会。
○五月十日　ストーム厳禁の掲示あり。これによって新入生歓迎のストームが如何に激越なものであつたかが窺はれる。
○五月十四日　伊藤講師寮務掛に命ぜらる。
〃　十七日　外出札の二分決定。
〃　廿六日　通学生のマンドリン会。
○六月二日　亭々舎請負人に注意を促す。寮が自炊制度に転換した事は先に述べたが、亭々舎は未だ請負であつた。元来亭々舎は外来者の宿泊、寮生のみならず生徒の集会等のために設けられたもので、その他ホールの代用となつてうどんの類を販売していたのである。がこれも矢張り独占営業のために評判が悪く一般の憤懣を買つたものと見られる。
○六月廿六日　七高書記来寮。
○六月廿七日　連隊よりポプラの木をもらう。これは伊藤寮務掛が寮内に樹木が殆どなく、ともすれば荒涼とした感じを与えるので、連隊よりポプラの苗木を分けてもらい雨の日に寮生と共に植えたものである。今に至るまで青々と寮庭に聳えている。
○七月一日　高松高商生徒監来寮。
○七月三日　文部省よりの予算委員来寮。
○七月四日　『レコード』の検閲。
○七月廿五日（ママ）　城大予科講師来寮。
○七月十五日（ママ）　対佐高戦。数多い本校の行事の中で対佐高戦程健児連の血をわかせまた種々の問題を惹起したものは尠い。これが単なる校内のみの問題ではなく福高対佐高ひいては福岡市民対佐賀市民の張り合いとなる所から相方とも負ける事は絶対に禁物である。勝つた方は実力を誇り負けた方は色々な難癖をつけて負を弁護し、とにかく対立してそれが両校の進歩に寄与する刺戟となるうちはまだしも、両市民間に種々の紛争をまき起し、ために幾度か中止の運命にあつた程であつた。
ともあれ街頭に進出するデモ行進、試合当日の応援団の無類の応援と市民の熱狂的な声援、試合後には勝つても敗けても涙に暮れる大乱舞……（力の続く限り歌い叫び踊つては）若き日の情熱を心ゆくまで発散し尽くすこの日の感激は生涯忘れ難いものであろう。ある時は青陵原頭に或時は不知火燃ゆる佐賀平野の一角に繰り展げられる意気と情熱の宴、それは野趣横溢する青春の楽しき一駒である。
記録に残るものではこの年が最初となつてゐるが、先輩の記憶によると開校の年即福高は一年のみ佐高は一年と二年で試合を行ひ名投手和田氏の活躍に依つて八対一（或は七対一）位の大差を以て勝利を得たさうであるから、非公式に十一年度から行はれたと思はれる。そして公式には十三年から開始されたのであらう。それを裏付けるものに昭和六年十一月に発刊された同窓会報第七号『母校創立十週年記念号』に平田輝氏（三回理乙）の『報告大演説会』なるユーモラスな文中に大正十五年六月十三日挙行された対佐高戦が三回目である事が述べられてある。

勝敗を見ると大正十一年は勝利十二年?十三年十四年は勝利と終り、福高の方がはるかに優勢であつた。

佐高は福高より一年早く大正十年に創立されたが、福高と相対抗し、その発展を競ひ来つた。その競争が具体的に現われたのが対佐高戦であり、途中種々問題を起したが今もつて継続せられ、勝敗に泣くはスポーツマンシップに違うとはいえ、感じ易い青年の胸底深く刻まれる年中行事である。

○九月二十八日　夏休が明けると直ぐ対熊本医大予科との陸上競技戦が行われた。既述の如く創立当初はグラウンドといつても田畑を荒つぽく均しをしたにすぎなかつたのだが、平山威、石浜氏等の努力によつてフイールドが整へられて以来、連日の練習に各部共に実力を養つていた折柄威を輝かす機会が訪れたのである。成績未詳。

○十月四　日　福岡農学校炊事長来寮。

○十月六　日　文部省祝祭委員三浦博士来寮。

○十月廿二日　市内物価調査。広島高校より来寮。

記念祭も近まる頃、頻々として吾寮を訪問する人々があつた。市内はもとより遠く広島より視察に来寮した。吾寮の声名次第に高揚されつつある証左であろう。

それと共に炊事委員による市内物価の調査が行はれたるも附記すべきである。

○十一月三日　役員総会。

○十一月八日　記念祭挙行。

秋も更けゆく青陵に、この日華やかに記念祭が挙行された。毎年の事とは言ひながら今年は対佐高戦がはじめて公式に開始され、見事な勝利を得た事とて諸種の行事も一層絢爛と行はれた事であらう。引き続いて十六日には第二回大運動会が開催せられた。

○十一月廿四日　大分高商教授来寮。

○　〃　廿六日　粟屋学務局長来寮。

○　〃　廿八日　植木の植込みあり。

索莫として数本のポプラの葡木が突立つている外僅かの緑も見えなかつた寮庭に、数本の苗が植えられた。その苗は二十数年を経た今日、多くの変転を経た吾寮の歴史を見守つて今なお緑の葉をそよがせている。

かくして大正十三年は暮れて行つた。

（大正十四年）

○一月七日　開寮。

○〃十四日　文部省監査係来寮。

○〃十五日　中村書堂書の額を亭々舎に掲ぐ。

○一月卅日　卒業生記念写真。

本校も早や三年の星霜を経て、茲に第一回の卒業生を送り出す事となつた。殊に在寮三年生は寮の開設以来、とし(マヽ)てわが寮将来の発展のため努力を続けた人々である。今や飛立たんとする若鳥達の双頬には思はず、知らず光るものが流れ落ちる。二月五日には卒業生の送別会が行はれた。卒業生は勿論の事、見送る先生在寮生の感慨は如何ばかりであつたろう。

筆を止めて遠く往時を偲べば、思はず胸中にあふるゝ感慨、と共に三年の思出多き青陵を後に立ち行く人々の心境を思つて新らしき情熱の湧き出づるを覚えるのである。

卒業生は愛する寮へと若干の寄附を残して行つた。この寄附によつ

て後に校庭に桜が植えられ、毎春青陵の門を叩く受験生へ清らかに微笑んでは力斗を励ましている。

大正十三年度は第一回生の卒業によってその幕を閉じた。

【大正十四年度】

本年三月第一回の卒業生を送り出した青陵はこゝに大正十四年の春を迎へた。

四月九日の入寮式を終り、翌々日には水道管が破裂するなどの小事件もあつたがそれも間もなく寮生の脳裏より去つて、寮内各所に移植された（四月十八日）ポプラの瑞々しい新緑と共に青陵生活の頁は開かれて行つた。

○五月三日　歓迎会。

生れてはじめてのストームの洗礼を受け、一時は興奮と歓喜の異様な混乱状態にあつた新入生が漸く落着きを取戻した頃、寮食堂に於て新入生歓迎の晩餐会が行はれた。先生方も日頃の厳めしさを去つて、余興には珍芸奇声が続出、夜は和気靄々たるうちに暮れた。

○五月廿三日　西川中将の講演。

○五月廿三日　寮外生の入浴者取調べ。

寮の浴場は毎晩六ー八時の間沸いて居り、その間に寮生は入浴を済ませ後に炊夫達が入浴したものであつた。しかし寮外生が同級の寮生の部屋に宿泊する事が往々にあつた。この頃は寮則も左程迄厳しくはなく寮外生の寮宿泊も大目に見られていたのであるが、中には入浴をして帰る不届者があつた。かゝる事は自治寮の統制上許し難い事であるので、この日寮外生入浴者の調査を行ひ厳禁した。

○六月三日　退寮を命ず。

この日記録に一寮生が退寮を命ぜられた事が載つてゐる。如何なる事由があつたか判然としない。又投書事件、無断退寮事件などが対佐高戦（六月六、七日）を中心として起つている。

吾寮も創設以来四年目である。創業の意気崩壊するは尚早にすぎる。恐らくは一時の怠慢によるものであろう。寒心すべき事である。

○六月六、七日　対佐高戦。

翩翩と大空にはためく十数条の大旆、直径六尺余の大太鼓、シャツが見え透く程に破れた服に蓬髪を黒鉢巻で締め手に手に旗を持つた応援団、小使室の屋根にも鈴鳴りの観衆、三脚備えた新聞社の写真班、汚い応援団に引きかえ純白のユニフォームＦＮ・Ｓのマークも鮮やかな選手達ＥＴＣ……

この年行なはれた対佐高戦の写真（上掲）〔写真省略〕である。何とも形容し難い壮観である。

ナインの一挙手一投足に固唾をのみ手に汗を握り声を渇らして声援するうち、今年も本校の勝利に帰する。

○六月廿三日　松山高校校長来寮。

○七月二日　盗難莫大な金額。

この日の盗難をはじめとして頻々として盗難事件が発生している。寮内の盗難事件は主として記念祭前夜の様な市民が寮内に多数入る場合に起るのだが、普通の場合は授業時間がよくねらはれる。従つて犯人は殆ど寮外よりの侵入者であるのが普通である。この頃の盗難も盗賊の侵入によつて発生したものであり、寮生に直接の責任はないとしても、盗賊の侵入し得る様な隙を見せたのは事実であろう。自治寮として真に遺憾な事というべきである。先には数名の退寮者を出し、今また盗難事件の発生を見た。遅怠の風潮が漸く表はれる。

○七月十日　この日には覆面の一盗賊が侵入。

○九月九日　九大大火す。
一学期の終りころ、盗難頻々の声があつたが、二学期は九大の大火によつて開始された。面白からぬ傾向である。この大火のため、夜警が甚だ厳重となつた。
（九月十日）
○十月四日　先般来の数々の不祥事件に続いて、又々病魔の襲来があつた。一体何の病気であつたのかは判らないが、連続的な発病状態から見ると伝染性のものであることが想像される。チフスの様な悪性のものではなかつたにせよ次々と発生する病人は寮生の心境を寒からしめずにはおかなかつたであろう。
寮生の衛生観念の欠如も原因の一つであつた事と思われる。
十一月半ばより翌年三月に至る間資料なく、不明である。その為遺憾乍ら行事事件を列挙するに留める。
○十一月十六日　大阪高校生徒監来寮。
○十一月十七日　松高寮委員来寮。
○十一月廿七日　挙動不審の二名。
（大正十五年）
○一月十日　鞍手郡農会長来る。
○一月十八日　投書あり。
○一月廿日　六高生徒課書記来る。
○一月廿一日　チフス予防注射。
○二月三日　送別会。
○二月四日　盗難事件二つ。
【大正十五年度】
○四月十五日　委員懇談会。
盗難と病気と投書　記録に残るこれらの事件に満ちた大正十四年度の愚を再び繰返さない為、この年より生徒課員と寮委員との懇談会が設けられることゝなつた。以前にもかゝる目的で会合が行はれたのではあらうが、公式に決定を見て定期的に諸般の事項を協議する様になつたのはこれが最初である。後述するが寮生親睦会も持たれる様になり、一時の弛怠を見せた寮も再び立ち直つて行く姿が偲ばれる。この懇談会に依つてともすれば対立し勝ちな学校当局と生徒を和解の方向に導かうとする目的であつたのだが、又当時の諸問題に常にその底流をなしてゐた思想問題に対する警戒の意味も含まれてゐた事はその当時の状勢から見れば否めない事である。
○四月十七日　入寮式と歓迎会。
○五月十一日　錠前の貸与。
盗難予防のため自室に錠を掛ける、良い意味で一つのユートピアであるべき寮内、学寮全体が渾然と融和して大ホームを形成すべき寮に錠をかけねばならなかつたという事実は（たとえ犯人は寮外よりの侵入者であり、また錠も外出の際などのみに用いられたといえ）実に悲しむべき事であつた。
○六月十二日　寮生親睦会開催。
自治寮の本質、それはいうまでもなく寮生自体の手による自律の生活である。他言に従うは易く自ら律することは難い。それは放縦な生活を意味しないばかりか、厳しい反省と不断の自己陶冶に見定められた冷たい程の厳しさを必要とする。赤裸々な魂と魂とが絶えず触れ合つては火花を生じ、その火花の中から磨かれた魂が成長して行く。しかしながらその様な厳しさの中にも心暖る友情の絆のある事を忘れてはならぬ。夜を徹しての討論に目を赤く腫らすその翌日には、また罪

のない駄弁にすごす一夜がある。この両者が相交錯して自治寮のアトモスフエアが醸成されて行くのである。

○六月十三日　対佐高戦。

寮生親睦会の翌日、佐賀に於て第三回目の対佐高戦が行われた。毎年交替でグランドを受け持つことに決定されてゐたので、今年は佐賀に遠征する年に当つてゐたのである。

この日、二年来勝ち続けていた福岡は敗れた。それに関するユーモラスな一文がある。それは十三年度の対佐高戦の折にも触れた事があるが、それによつて一時廃止になつた理由や当時の状況を書き綴つてみよう。

（前略）前日（十二日）は暑い日であつたが午すぎから淡青い空が見えてF城跡の松が殊に美しく思われた。大濠から広い練兵場を渡つて来る類も爽快に感じられた。ハタ〳〵と紋章を白抜きにした赤い旗がいやが上にも若人の顔に出陣の感激を湧かせる。連日の怒号でいくらか図太くなつたじやら声で団長は激励演説を始めた。

アイン、ツバイ、ドライ、金紋入りの朱の采配と共に十幾個の大太鼓は一斉にヅドンと鳴出して隊伍堂々校門を出づる。

あゝ血燃ゆるや狂乱の
戦ひの日の門出かな
利剣をとりて今四年
図南の翼鼓するとき
磅礴の志気野に満てば
永劫の覇者と我を呼ぶ

シヤツ一枚に鉢巻をしたリーダーの旗に合せし五百の健児は意気揚々と征途に上つたのである。風になびく長さ二十、幅二間三十尺の大旗は長蛇のごとく健児に守られた。驚き呆れている都人士を退い散らしながら自動車も電車もオールバックさせるやうな、どえらい声で。蛮風堂々と停車場に到着、リングになつて原始的な円舞曲をやつている時都の優男達は余りにも殺風景な光景にあきれかえつていた……。』

かくして選手と先発隊を送つて街頭ストームをやり、翌朝応援団が出かけることゝなつていた。所が十二日夜半より沛然たる雨となつてしまつたのである。雨ならば試合は中止するのが本来であるが、降雨に不拘試合を行つた所から問題が発生する。

『……雨の為に応援団は一応解散した、出発は花火で合図することにしてS市に電話した。S市には先発隊としてリーダーの中四五名ばかり選手と一緒に昨日行つて居つた。電話の報告によればS市も目下盛んに降雨中とある。決定したらすぐ報告する様に命じておいたが何の事もない。二時になつても返事がないので試合中止の電報を打つと共に幹部だけS市に向つた。S駅についてみると自動車が迎へに出てゐる。様子がおかしいと思つてゐると試合は始まつてシートノックを終らんとしてゐる所であつた。敵前に野球部長と押問答をしても始らないので涙をのんで応援団なしで試合を始めた。敵校の応援団はずらりと勢揃ひをなしおまけに三万の市民は十重二十重に囲んで威圧してゐる。もちろん敵校応援団の旗も太鼓も撤回せしめS市民団の団扇も取上げたが、安全弁に許した拍手の威力も仲々悔るべからざる威力があつた。雨はしよぼ〳〵降る、まるで水野十郎左衛門の屋敷に飛込んだ幡随院長兵衛の様に切りさいなまれるのを見物してゐる。試合は四時から始まつた。

糠の様な雨が思ひ出した様に降つてゐるが時には淡く日が照つてゐた。団長はメガホンを引寄せて数名の幹部と声援してゐた。三十人前

位の声を出さなければ相手の声援に負ける。五対四で四回まで来た時市民幹部がかけつけて、応援団来ると報せた。試合開始と同時に電話でこれを寮に通知した。寮に残つて馬鹿話をしてゐた連中がそれつと云ふのであるだけの手旗をかき集め野球戦はあるんだぞ皆来いと窓から飛出し途中から合せ合せて百九名といふ人数が停車場に集つた。特別団体切符を作つて貰つてS駅から更に長駆して走つて来たのである。愛校心と母校の為に奮戦してゐる親友に対する友情で運動会のマラソンより長い距離を駿馬の様に宙を飛んではせ参じたのである。団長は笑ひ乍ら立ち上つた。然し本当は喜ぶべき事であつたかどうか知らない。さつと人垣の一角を破つて赤い炎が場内に流れこんだ。応援団を見て選手は上つた。若しくは気がゆるんだ。其方をふりむいた時ボールがヘッドオーバーして観衆の中に転げこんだ。あつちでも、こつちでも、ミスだらけ。これに乗じて敵校の応援団はたけり立つて喧噪を極める。ランナーは後も見ずに一目散にホームにかけこんだ。全く混乱状態の中に敵は早くも三点をせしめた。その上味方の捕手がスパイクが立たないので残念な位転ぶ。

それでも選手が気を引立て、声援しているが、ふえるのは敵の点数ばかりである。

選手はやけになつているかもしれんと思つた。人の顔も見分けのつかない夕闇の中を怪しげなボールだけが白くあつちへ飛んだりこつちへはねかえつたりしている中刻々十二対四あはれな惨敗でとゞめをさゝれた。』

以上の様な事で試合は福高の敗北に帰したのである。結果として見れば試合当日の雨と応援団の途中からの来援による選手の気のゆるみによる敗北であつたのだが、雨の日なのにも拘はらず試合を行はねばならなくなつたその裏には佐高及佐賀市民の非紳士的な態度があつたらしい。

福高及佐高両校の試合がひいては福岡市民及佐賀市民の張り合いとなりつゝあつたことは前述した。元来は両校の競争意識による精神、肉体両方面の健全な発達を目的としたものが市民間の感情的な紛争迄に方向が外れた事は本来の意義を全く違えたものといはねばならぬ。しかもこの年は二年来佐高の敗北に終つた後なので福岡三連覇への意気もさることながら二年来の雪辱を取返さんとする佐高及佐賀市民のファイトは天を衝くものであつた。従つて試合の中止などは彼等にとつては論外であつた。雨の為グランドで協議会中佐賀市民は決行を迫つた。又会議室では酔漢が盛んに大言壮語して脅迫さえもした。兎角グラウンドの模様では試合は、無理であつたけれどもS高では若しこのまゝ引上げるに於ては棄権と認めて九対〇の敗北とするという暴言をはいたので少しは専断ではあつたがキャツプテンは応援団なしで試合をやる腹を決めた。そこに野球部長が激昂せる市民をおそれて承諾を与えた。

簡単な文面ではあるが、当時の逼迫した状態を察することが出来る。佐高は試合中止を棄権と見做すというし、市民は激昂して脅迫するといつた事柄になつて無理に試合が行はれたわけなのである。

福高は敗れた。しかしこの勝負が明朗な若々しい雰囲気の中に決せられず、極めて不愉快な感情の対立のままに終つたため、本来の目的には全く副はないものとなつてしまつたのである。

このため対佐高戦は一時中止となつたのである。後昭和三年に復活されたが再び昭和五年に中止され以来絶えて行はれなかつた。終戦後に到つて復活を見た。

この日の試合を検討せんがため報告演説会が開かれ、試合日の決定者である総務攻撃が行はれた。これが同窓会誌所掲の『報告大演説会』である。長文のためこれは割愛する。

○六月廿二日　寮役員臨時総会。
ストーム対策が協議された。

○六月廿九日　蓄音器購入。
澄みきつた智性と共に、美しいメロデイを愛する豊かなカルチユアも近代人として欠くべからざる条件であろう。寮と電蓄、それは何等矛盾するものではない。それどころか極端にいえば是非必要なものである。諸般の規約が次第に整備されるにつれて、娯楽方面の充実はat homeな雰囲気で寮を満たして行つた。

○九月十六日　追加予算総会、衛生部新設の件。
夏休みが明けての追加予算総会では、衛生部新設の件が討議された。衛生部新設に関する委員の意向を考察してみると、大体次の様な状勢が判明する。

高校生のいわゆるバーバリズムの欠点に頗る非衛生的な事が挙げられる。弊衣破帽蓬髪肩に及び首筋が垢にまみれても毫も考慮せぬ（やゝ誇張にすぎるかもしれぬが）風はともすれば甚だ不潔な生活を送る様になつた。また服装のみならず部屋などにしても万年床によつて代表される不整頓で、煙草の灰に布団がまみれまた寮雨は『月が照るのに雨が降る』と歌にまでうたはれる程である。普通の人が見れば不潔の極みである。これもいはゆる虚飾を嫌ふ心が根底となつてゐるのではあるが、そればかりではなく自惰落放縦な性癖と結び付いたが為、かゝる事態に立ち到るのである。その為、高校の風俗が表面のみを観察せられて往々にして非難の対象となる。

元来虚飾を嫌ふ心と清潔とは一見相容れぬが如く見えながら、決して融和出来ぬものではないが、それには俗にいつて『几帳面』な努力を要する所から容易に行はれないのである。

この不潔な状態はいくら頑健な青年といへども往々にして病魔の侵入を許す原因となる。昨十四年の再三にわたる病人の発生は衛生に無頓着であつた寮生に漸くその必要を自覚せしめたといへやう。それと共に前述の如く衛生観念を高校精神に加える事は何等咎むべきものでないばかりか、近代的な生活には不可欠な要件であることの自覚が生れたのであらう。

前車の轍を踏まざる為、衛生部の設置が盗難の予防と共に委員の間に問題となつたのは当然のことゝいへる。

かくて衛生部の設置が審議されたが、新設部として独立せしめず炊事部員を増員し、その一部を以て任に当らしめることゝとなつた。

○十一月八日　創立五週年記念祭。

○十一月廿八日　生徒娯楽室の設備成る。
先に購入した電蓄を最大限度に利用すると共に、また寮生一般の娯楽のために娯楽室が事務室階下に設けられた。娯楽室は蓄音機室の向側にあり入口の板間より一段高い畳敷の部屋で、新聞雑誌の外に碁将棋なども備えられた。

○十二月七日　新旧総代会。
かくて大正十五年は暮れんとしていたのであるが、以前より御不例なりし大正天皇は十二月二十五日崩御、直ちに摂政宮は御践祚遊ばされ年号は昭和と改つた。昭和元年は数日にて終り昭和二年に入る。

（昭和二年）

○一月廿四日　役員総会。

○二月四日　ポプラ移植。
○二月十三日　送別会。
諒闇の中にも第三回卒業寮生の送別会が挙行された。時節柄甚だ簡素に行はれた。
○三月二日　第一回卒業生寄贈金にて桜樹を買う。
先に触れた事があるが、第一回卒業生は卒業の際若干の寄附をなして学校を去つた。その寄贈金の使途については相当意見が出てこの時に至るまで決定されていなかつた。しかし卒業生を後々までに記念する為、且荒涼とした校内を美化せんが為、桜樹を買つて学校の周囲に植えたのであつた。爾来二十数星霜成長した桜は春ともなれば爛漫と咲き乱れ風に吹れては青陵の門を訪れる若人達の頬に舞ひかかり、共に育つた松の緑に映えて極りない美観を呈している。

第四章　昭和前期

【昭和二年度】
大正期において略々完成された自治制度の下に着々新興福高の名も高まつて行つた。昭和のかゝる時に我が学而寮は自治制度確立のためひたむきの前進を続けて行つた。
新興青陵の意気まさに天を衝くの気あるも、現実社会は決して安閑とした高校生活のいはば『末は博士か大臣か』の未来の国家の重鎮を夢みて往昔の高校生の英雄崇拝邪気満々たる粗暴な浪漫主義唯美的人生観等かゝる感激を許しはしなかつた。大正末期からこの期の初代にかけての社会的混沌、就中経済界の変動は、学園にも大きな影響を及ぼしたのであつた。社会的客観状勢は、その感激の裏に冷い幻滅をかくしていた。思想の変遷、赤色恐怖病は、増々寮生々活の自由と発展を束縛し始めたのであつた。いわゆる他の高校に比較して、幾分デモクラートな気風の存する福高とはいえ、やはり現実社会の厳しい実想に、空虚な若き感激に夢中になつて腕白三昧の学而寮の三四郎も自己の思想的支柱、生活の根柢なるものを失うに至つたのであつた。
明治大正時代のあの滔々として若き学生の心を惹いた、ロマンテイックな人格主義も、もはや彼らが大きな関心をもつて眺め彼らのヒューマニズムを刺戟した大きな社会的矛盾を解決するには、あまりにも無力であつた。第一次世界大戦当時急激に膨張した日本の産業界も戦後の相次ぐ不景気、中小工業の没落等の経済界の変動により必然的にブルジョアジーとプロレタリヤの対立を惹起した。悲惨と悽愴を極めたこれらの現実、それを眺めた彼らの瞳はいかに輝きいかに感じたかは思うにも明らかであろう。
かくて思想的に彼らは自分達の抱きし最高のもの最高善とよばれるペルソニリヒカイトのあまりにも無力なるを知るや、彼らの眼には新鮮なしかも力強い実践とをもつて迫り来るものがあつた。それが唯物論哲学であり、赤化思想であつた。
かゝる時代が昭和の初期であつた。
寮は漸く固定して秩序も確立されて来たが、やがて沈滞と嫌うべき固化への傾向が表はれて来た。
当時の社会風潮を反映して一般に時代迎合的な利口な、スケールの小さな勉強家型の学生多く寮生活とはいへ個人生活の集団にすぎず、団体としての寮生活たる感じは殆どなかつた。社会とか人生とかについて友と火鉢をかこんで、語り合ふグループはあつても、『教養』と

して頭の中に収めるだけで、自己の問題として徹底的に自己沈潜しその問題の解決に没頭するといふ様なタイプの学生は殆んど皆無に等しく、要するに真面目な秀才型が多く稚気あい〳〵たる、情熱家といふものは段々減少して行つた。寮の明け暮れも、物静かに何の変化珍事件も起らず、品のよい所謂ボッチャン型の者が多くなつて行つた。

当時の寮生の日常生活を近藤完爾氏に聞かう。

当時の日本流のリベラリズムを器用に会得してゐた者が多く、一室一人主義でその関係が、お互に他人の生活と自己の生活とに歴然とした境界線を設け、自らは自らのスケジュールに従つて起臥してゐた。食事時間も入浴時間もキチンとしてゐた者が多く夕食後三十分乃至一時間は、此処彼処から、ハーモニカ、マンドリン、ギター等の音が一斉に聞かれ、それが過ぎると、ピタリとそれらの音も静かになつて、皆勉強してゐるといふ風景は紳士型の冷やかな孤独感があつた。亭々舎で駄弁る連中の顔触も殆んど一定してゐて、他の者はたまに来ても腹を満たすとさつさつと帰つて行く有様であつた。―近藤氏より―

要するに、当時の寮生の気風は、寮規も、前述の如く一応の完成を見て寮制度の整つた影響もあり、一般に寮生活は沈滞の気に満ち、エゴイズムとは言はないが、共同生活にあまり大きな関心をもたず、着実に勉強して暇々には、夫々の趣味を楽しむといつたチャッカリした生活が一般だといふ感じがある。闊達な他の高校に見られる型破りの三四郎等は少なかつたと思はれる。

前学年度一月改選の結果、寮役員は次の如くであつた。

寮総代

東一寮総代　理一甲　安尾　裕
東二寮　同　文一甲　廉隅　伝次
東三寮　同　文二甲　矢野　範二
西一寮　同　文一丙　富安卯八郎
西二寮　同　文二丙　正木　忍
西三寮　同　文二乙　百束　賞

会計部委員
同　文二甲　岩吉松之助
同　理二甲　福富　孝治

図書部委員
同　文二乙　川原　権司
同　理二甲　岡橋作太郎
同　文二丙　湯下　浄美

運動部委員
同　文二丙　正木　忍
同　理二甲　坂尾　三吾

炊事部委員
同　文二甲　川上　繁雄
同　文一甲　青木　重保
同　文二乙　斉藤　金弥
同　文一乙　野口　俊一
同　文二丙　西村　春樹
同　文一丙　富安卯八郎
同　理二甲　根本　敏雄
同　理一甲　服部　進一
同　理二乙　末松　肇
同　理一乙　東野　致明

○四月九日　第一学期開始、春の桜と共に学校も始つた。

○四月十六日(マヽ)　新入生の入学式が行れ、この日の午後三時より入寮式、六時より定例により歓迎大晩餐会が行はれる。この時の晩餐会は特に異色を極め、式場、新入生の余興が行はれ、秋吉校長自ら笑ひ興じられ、上級生もその場で新入生の度胆を抜くような蛮声を張り上げる者もあれば、また博多ニワカをやつた者もあつた。

○四月十六日(マヽ)　新入生歓迎大晩餐会は、夕刻六時より開始され岩口生徒主事の堅い訓辞の後を受けて、中学時代の優等生らは凡そ心胆を寒からしめる様な演芸の続出に全く度胆を抜かれた後、宵の間も程良い九時ごろ一同運動場に退ひ立てられ、運動場の中央に山をなす松割木は石油をかけられて火の河となり裸一貫の三四郎達は、この時とばかり正門前福岡亭に用意の酒の勢をかりて荒れ狂ふ。折も折サイレンのすざまじき音と共に消防自動車は校門を這入らんとす。ここにおいて之を入れまいとする裸像の群と火消しの乱闘、数十分、漸くその筋の出動により事なきを得たるも新入生の興奮弥が上にも重なり、余勢をかりて一陣のストームと化して終つた。蓋し当時の珍事件の一つなるか。

乱舞会についての二十三日の掲示をみれば

○五月二十八日（土）の午後より二十九日（日）に挙行する。

新鮮に充実し官能に輝く五月、寮生挙つて楽しい一日を享けんとするのが私等の目的であります。

あの前面に海をひかえ白砂の志賀島へ私共百五十の者は船で行くのです。罪のない話に慰みながら涼しい夕方目的地へ着くのです。この処で晩餐を共にし愈々私共若き未来に光る意気の奔流に棹をさした若人の熱の噴出が私共をして乱舞の人と化せしめるのです。

鬼火の様に海と空とに映じては、燃え上る火焔を囲んで踊つては、狂い、狂つては踊り楽しい楽しい夢を砂上に描くのです。かうした乱舞の翌日、水面より上り出る太陽の微光にうたれながら私共のピクニックの半ばをなす網引をなします。あるいは海士と共に舟に乗りあるいは網を陸上にて引く算楽(マヽ)しく面白くそれを終えてこの収穫された魚で中食をなすのです。網引は前後三回、こうして再びヂンアイの福岡へと凱歌を奏じて帰つて来るのです。これが私共の為さんとするいわゆる乱舞の概略です。

（注　意）

一、寮生全部参加する事。なぜかなれば寮生すべてのための乱舞なる故。

二、但しどうしても参加されない故障あれば、その理由を水曜日朝まで総代へ申し出ずる事。

三、雨天なれば延期す。

四、汽車の時間等詳しき事は、追つて示す。

五月二十三日　総　代

○五月四日　予算会行はれる。

○五月二十八日、全校の乱舞会初めて行はれた。この時は我が青陵も、漸く第一第二回と二回の先輩を大学へ送り出し、新興の意気一入高揚されたものであつていはゞ、未だ寮は創造の進行過程にあつた。前年度の頃、自治の殿堂をして下部構造の確固たる建築たらしめよ！といふ叫声が寮生間に起つた。この気風ははからずも前述の沈滞と固化への反逆となつてあらはれた、それがストームであつた。

総代会議で常に定例の如く議題として提出されるのはストームの一件であつた。一方所謂高校生型の自治を云々する連中は、そんなもの

はやりたいまゝにやらしておくがよいといふし、他方もう一つのグループは、在来の高校の旧弊を今更真似る必要が何処にあるかといひ、そんなものは禁じて終へといひ、両論是非決せず、総代会は更けて行くのであつた。

ストームをして、ガラス廊下を破る位の事は必然の結果であつた。勿論ストームに意義なんてそんな野暮なものはないのである。意義なんて名からして野暮くさい。

かく数度の会議の結果、幾度もの会議の結果次の決定をみる事となつた。もちろん我々は若き情熱の子なる故、元気もあり意気もある。これを小さい部屋の中閉ぢ込めて置くのにはあまりに沸騰してゐる。然しながら『ストーム』なんてやらなくてもよいのだ。我らは学而寮独特のものを作ればよい。我々のアイゲンのものを我らの誇りとなるものを創るべきだ。これが六人の総代の意見であり、引いては、寮生一同の趨勢であつた。かくして決定されたのがこの年初めて行はれた『乱舞会』であつた。

かくて乱舞なる名の下に、二百の健児は、志賀島を撰んだ。

この時の記録をたどつてみよう。

総代の幾人かゞ実地視察と漁夫への前交渉に出かけた。寮生のための船の予約もやつて置かなくてはならない。新入生の歓迎の意味が主であつたから、五月の初めであつたと思ふ、土曜日の午後から出かけて月曜日までやる。然し総代の一部と小使は土曜日の朝から出かけて、現地に天幕を数個円形に放射眼(マヽ)に張つた。波打際の近くに浜の白砂の上に建てた。当日は風がかなり強かつたので僕等四五人の力では仲々天幕が旨く立たない。幾回も吹き倒されて、とう〳〵一同へたばつて終つた。寮生の乗つた船もその内に到着する、早く張つて置かなければならない。随分困窮して気を揉みながら午後になり風が少しやわらいだのを見て、やつと張り上げた。それから附近の部落から薪を集めて荷車で運ばして天幕の車座の中心に堆高く積み上げた。夜具の事など、どの程度に整備したのか記憶しない。万端の準備終りしころ寮生満載の船が到着した。夕暮れ近く、寮生一同は天幕の内外にあふれ、気の早い男はもう躍り出す。その日の夕食は何処でどうしてやつたかは記憶にない。いよ〳〵夜となつた。本格的の『乱舞』が始まる。山と積みあげられた薪は、石油にのつて盛んに燃上する。そのまわりに踊り狂う若人の群、裸像のギリシヤ彫刻は踊る。右手に酒徳利を左手は友の肩に『あゝ血もゆるや狂乱の……』薪が一段と燃えさかれば、若人の顔は真赤に輝く、狂踏乱舞の姿は投影されて遠く玄海の波濤に砕くる。歌い舞い、而して飲む。何たる痛快事であろう。若人の気は玄海を覆い、台洽にわたる。人生の憂いも俗人の不平もない。たゞ狂乱あるのみ、玉杯を傾けるなんてなまぬるゐ。徳利をかざして乱れ舞ゐ、友と肩を組んで踊る。力余つて走り飛ぶ。声はかれても咽は破れても意気で歌い、血で叫ぶ。あゝこのひと時の思い出は、今なお脳裡に若々と生きている。思い出すだけでも愉快でたまらない。八年の星霜を経てもちつとも尽きない思い出の泉である。百名に余る若人は、力のあらん限り歌い足の耐ゆる限り舞つて『乱舞』の夜はふけた。燃え残る薪のみになお幾時間か余燼の煙を立てゝいた。

部落の鶏が東天紅を告ぐるころ、天幕の一人、二人が眼をさました。すでに夜はあけそめている。見れば天幕の外に疲れ果てゝ、三々五々深き睡りを続けている。右手にまた左手に漏杯を握りしめたまゝ、徳利を枕のまゝ。

博多湾の朝は実に静かにあける。やがて、朝の浜辺に立つて大空を

踏み張って深呼吸を始めているものもある。ゆうべの狂乱に比し今朝の静さは何と形容すべきであろうか。自分も起き出て渚近く、心ゆくまで澄切った空気を吸うてみた。一同起き揃うたころ、予定のコースとしてすぐ近くの浜で網引きをやった。『いか』や『黒鯛』やら予測以上の収獲であった。特に大きい『水いか』が十数匹一度にとれた時は実にうれしかった。兼ねて、漁夫の家族に頼んで準備してあったので獲れた魚を大至急に料理した。飯も炊いてもらった。朝の食事は一同沙浜でやった。紺碧の空を仰いで女のような嬉しさを感じながら、さっきまで生々と跳ねていた魚である。漁夫の下手な料理であるが実に美味かった。これもまた今に忘れられないその日の印象である。

――井上数雄氏――

昭和九年六月　第十号　同窓会報

前述の如く一応の青陵独自の立場に立つ寮規約も略々完成したりと思はれるので此処に於て一応寮制度の内容を述べん。

先づ東寮には理科生、西寮には文科生住みたるものの様である。

東一　理甲
東二　理乙
東三　文丙
西一　文甲
西二　文乙
西三　三年

寮各部の状況を示せば、二年一月の寮委員改選により寮各部は斬新なる気風に満ち、寮制度の完成のため努力を重ねて行った。

○炊事部

新学期を迎へて若干の委員変動を来し員数の多きよりは徹底した活動を重んじて次の如く新編成された。

文二甲　塩見徹堂
〃二乙　岡素夫
〃二丙　徳永良知
理二甲　服部進一
〃二乙　東野致明

大正十三年一月自炊制度の設立より、既往四ケ年目の時、委員一同は次の事項を決して寮とはかり議決した。

嗜好調査表毎週土曜日昼食時炊事部委員の手によって集められた。この時の調査表は次の如し。

嗜好調査表

左表副食物中好みのものは○印を附し然らざるものは×印を附されたし、十四日（土）昼食後炊事委員にて集めます。

サツマ汁　関東煮　イカスミソ　叩カキ　テリヤキ　肉ゴマヤキ
親子丼　コロッケ　スコッチ　ポークカツ　デビルトボウ　粕汁
クズ汁　吸物　煮魚　刺身　テンプラ　叩ノツユ　鶏飯　茶ワンム
シ　テキ　口取（小豆メシ）　ミソヅケヤキ　フライ　鯛茶漬　盛
ズシ　焼魚　オムレツ　巻ズシ　煮豆　ライスカレー　チキンライ
ス　アンカケ　シチユー　ヌタアエ

備考　特に好まれるものあるいは炊事に関する感想

○献立表の作成、委員はこれにより土曜日夜、次の一週間の献立表を作成し、食堂に掲示する。

○食料購入の確実性をもたせる事。委員の手により全食料品は購入されたが、その野菜、肉、燃料等は、全てその購入先が定まっていたものと思はれ、支出に後払制をとった。

○会計部　この部は最初炊事部と一体であったが、今年度から新し

く発足したものであつて、寮費関係の会計を主に掌つていた。炊事委員といはば一体の部であつて、炊事部の支出は全てこの部が、支払つていた。

会計部委員　岩吉松之助　文二甲
同　福富　孝治　理一甲

○六月五日　寮生対博多郵便局員の卓球試合が行われた。食堂横ピンポン室にて行われ、大勝博す。
○七月十日　試験終了。
○七月十一日　閉寮、夏休み開始。
○九月十日　第二学期開始。
○九月十一日　第二学期定例の役員会議、二学期の予算が組まれる。
○九月十五日　退寮せる寮役員のため補欠選挙行う。
寮委員補欠選挙の結果は左の通りであつた。

		得票数
図書委員	竹内　孝	二三
	1貝田　勝美	四〇　理乙
	2安田　薫	三九　文甲
運動委員	氏原　健二	二二
	2井上　俊次	三九　理乙
	1安川　紀	四〇　文丙
	林　恭平	一
園芸委員	1吉田　祐保	四〇　理甲
	藤原　正治	二〇
	2福井　亘	三八　文甲

○九月十九日　ストーム規制の声明書が総代部より発表された。近藤完爾氏の談を載すれば、

ストームが週に二三度重り、理科生の勉強家から苦情が出て寮監からストーム差止の命令が出て、議論紛糾した事がありました。その後少時下火であつたがまた復活しました。当時総代連中寮監の下に呼ばれて、注意された事あり、大人しい理科生がストームに代え、志賀の島の近辺で大火を燃して踊り且飲むの行事を企てこれを『乱舞』と言つてゐたのですが、文科生はこれに反感をもつてゐて参加しませんでした。

これが近藤氏の思ひ出の一節であるが、ストームは相当猛烈なものだつたらしい。

先づ学而寮のストームはこの時期に一つの転廻期に立つてゐたと思はれる、創造期のストームは、足音を立て、立てた騒音の強弱により成功の正否を論じた。しかしながらこの頃には、破壊物の多少によつて、値がきまるものの如き感あつた。敢て進歩でもあるまい。一晩に硝子三十枚破る位の事は朝飯前の事だ。

総代部の声明書の一部をのせれば、

何をかさして必然性といふ。曰く受験苦と。曰く生理的調節がその一と。少しくは自己反省のメスを準備してゐるものならば、容易に之等は理解されよう。個人において然り。いはんや団体生活においては一種の群衆心理作用するがため、尚然りといはざるを得ない。然しながら必然性ある故にそこは正しいといふのではない。正しくはないが、今少し静かに反省して同情を注げといふのだ。

○九月二十二日　役員総会。於校庭乱舞会。

この日の乱舞会は校庭で行はれたものであるが、文理科の寮生側にストームをめぐりて険悪な空気をかもし出し、舎監の仲裁によりやつと収つて、これが校庭において行はれたのであつた。

○十月十五日　盗難甚大。

盗　難　始　末　書

一、現金参拾五円

一、銀製懐中時計参個（一個時価五円位）

一、ニッケル大型懐中時計一個時価五円位

一、冬物紋袷一枚　紋羽織一枚

右、昭和二年十月十五日午前八時より同十一時までの間に、寄宿寮西一寮西三寮東三寮において、授業中盗難にかゝり居候処これが届出を怠り居り候に付き右この処に始末を御届候也

昭和二年十二月十九日

○十一月三日　第五回運動会挙行。

○同　八日　第五回創立記念日、寮祭施行せず。

○十二月二十一日　試験終了。

○同　二十二日　正午寮閉鎖。

園芸部、昭和二年度になつて、寮庭に樹木も多くなり、年々卒業生の記念樹木も増加し、寮生の心を柔はらげてくれた。更に寮の裏の庭には池も作られ、水辺には水仙も花を開き、寮生の眼を休ませてくれた。故にこの度に園芸部が創生した。

園芸部委員　文二甲　畑間孝之助

文二乙　高橋周一郎

空地を利用して花壇を設け春秋は寮の周辺、殊に東側の寮庭には見事に花畑が出来上り、女学生等には殊に惜しみなく分けてやつたそうだ。委員は同好の士多く創設時代なる故皆で、荷車を引き、樋井川より州砂を運んだものであつた。

○一月七日　開寮。

○同　八日　第三学期開始。

○同　十日　六時より役員会議。

決議事項左の如し

一、委員改選日の件、一月二十三日。

一、卒業生送別会、期日二月六日。

一、記念撮影期日、一月二十四日。

一、盗難防止の件、便所は内部より錠を下し、学校授業時間中における小使巡視、門限の厳守。

一、入試受験生の便宜をはかる件、具体的事項は図書部一任の事。

かくて意見百出、漸く十一時近く閉会す。送別大晩餐会は炊事委員に一任される。

娯楽施設の管理及びそれに関するあらゆるものについては、主に図書部が行つていた。図書部は、主に新聞購入、娯楽室の設備等に主に力を注ぎ、寮歌集の刊行も行つた。寮報も現在は一も残つていないが相当徹底して、発刊、原稿募集等行つていた様である。

卒業生の寄附、昭和三年二月十日、卒業生正木忍君は、寄宿寮に一金壱円を寄附ありて、総代より感謝状が下された。

【昭和三年度】

○四月九日（月）新入生入学式挙行さる。（本日雨天）

午後三時より入寮式挙行さる。（新入寮生六十二名）

○四月十日　第一学期授業開始、講堂に於て全校生徒に対する訓示あり、その要点次の如し。

一、今度教室廊下にて禁煙を犯すものは処罪することあるべし。
一、悪思想、反国家的思想を抱くものは極力排除すべし。
一、出欠席は身上調査上重大なる関係あり、且大学入学、学力に大影響を及ぼす故注意すべし。
一、クラス会費の倹約、禁酒喫煙等命令法規に違反なき様注意すべし。
一、過去の言動に付きあるいは学資問題等にて苦悶する者は来れ。
一、出欠席の成績は知的、経済的、道徳的、生理的、生活等に密接なる関係を有する故注意せよ。
一、衛生的施設運用上の注意。休学の注意。
一、各種学生生活問題は生活によって解決され得るものなり。

訓示後生徒教官全員講堂に残り生徒総務本年度の抱負を声(マヽ)す。然後校歌応援歌を合唱し無事解散。

この訓示によりても明らかなる如く飲酒、喫煙及出席状況等風紀問題に関しては厳格にして且思想問題に関しては全く一方的で当時の社会状勢をよく現はしており、時局の波は垣を破つて学園の中にも押寄せて来た。（詳細は思想史参照）

○四月十日　炊事委員会開かる。

炊事部は各寮から一名宛委員が選ばれ毎週の献立の作成から料理内容の監督等を任務とした。当時は献立表によって大体問題なく料理が出来て二四〇〇カロリーははるかにオーバーしていた。

○四月十二日　新入寮生歓迎会常例の如く寮食堂において開催。各教官を招待し会食、一年生の自己紹介等はその例にもれざる盛況であつた。

○四月十三日より同十八日に至る間、各寮歓迎会が開かれた。

○四月十九日　寮役員総会を開き今年の年中の行事に付き相談あり。（新寮役員氏名は不明）

○四月二十四日　寮の音楽趣味団体として左の者が生徒課より許可された。

理三甲　鈴木幸雄
理二甲　野口豊
理二乙　中村威彦
文二丙　松原宏遠
文二丙　大藪邦雄
文二甲　平尾小三郎

○四月二十七日　放課後役員総会、予算会開催され同時に来月十二日志賀島においての鯛網挙行が決定された。

○五月二十一日　生徒監室にて総代会が開かれ、寮統一の件。各寮間の連絡を密にする事に努力する様意見一致した。

○五月二十三日　本館において生徒課員懇談会開催され、寮生監督上の事務として次の如き諸項が定められた。

一、外泊届宿所を明確にし総代にもよく通達する事。然らざる場合は退寮せしむ。
一、ストーム禁止は以前通り。
一、門限問題は実施困難、総代会の問題として解決すること。
一、学書ノートの紛失及び草履下駄等の紛失多きにつけ警告す。等々。

○五月二十八日　本日日本晴の好天候、寮生一同志賀島に遠行し海浜の砂上にテントを張り一泊。翌二十九日鯛網引きをなし一行愉快に一日の交歓をなす。

○六月二日　寮役員総会（詳細不明）。

○六月三日　対佐高戦。福高対佐高の対抗競技大会は文部省の指令と九州高等学校長会の申し合せで一時中止してゐたが本年に復活することとなり六月三日に復活戦を開催することとなつたのである。元来この問題は本年三月下旬頃から両校総務の折衝を重ね委員会協議会等を経て五月六日両校総務の覚書手交となつて解決したものである。本年度から行ふ競技中従来と変つている事は単に野球ばかりでなく種々の競技を加へた事と応援方法を変えた事である。応援協定の事項によると市民応援団及び寄附金を絶対に謝絶する事、鳴物を許さない事、風変りな服装を許さぬ事等で従来の応援団の盛況は見られぬ様になつたわけである。福岡市民の血を湧かせたこの福高対佐高の試合を前に両軍必勝を期して猛練習を重ね、福高選手は五月二十九日櫛田神社にて必勝の祈願をこめた。当日午前中は一般人の入場を禁じ且団体行動、示威行動は一切禁止された。かくして青陵原頭において華々しく福高対佐高復活戦が行はれたのであるが、その試合の戦況の詳細の不明なる事が残念である。

○六月二十三日　山高校長来寮。

○八月一日　暑中休暇に入る。

○九月五日　第二学期授業開始。

このころに至り教官の訓育は一層徹底し、特に左傾思想の共同研究はもち論、その個人的研究をも一切禁止され、左傾思想の宣伝、実際行動に対しては厳重なる態度を以て処すべく学校の方針は立てられ、従つて寮内の気風生活も必然的にある一定の方向を持つて来たのは明らかである。

○九月十八日　日本卓球協会理事来寮（詳細不明）。

○十月二十五日　寮役員総会を開き寮祭打合せ会を挙行。

○十月二十七日　この日は運動会準備のため学校は休業となり委員は多忙を極め、一方寮に於ても数日来、寮祭準備のため大童であつたが特に各寮役員は大多忙であつた。尚この日は各寮の飾付の検閲等が行はれた。

○十月二十八日　天気晴涼、高校生活の中で最も大規模で盛大なる大運動会開催。各種目遺憾なく進行し見物人多数の中無事終了した。午後は飛行機も悠々二回運動場上空に低空飛行をなし一段の興を添へた。寮に於ても寮祭見物の来客多く午後五時半とどこほりなく終り午後七時寮生一同食堂に会して慰労晩餐をなし十時頃無事解散した。尚当日の寮祭について福岡日日新聞に次の如き記事が載せられた。

『秋晴れの好天気に恵まれて陸上運動会を兼ねて挙行された寮祭特有の福高生独特の飾物に人気を呼んで朝から婦人子供等の観覧者多く先づ寮の入口に作られたアーチをくぐつて文科甲類の西一寮に足を運ぶと『世界の三哲』と題して孔子、仏陀、耶蘇をもぢつて真実の生きた小牛、豚、野菜を部屋の中に置いているのに先づ観覧者を驚かせた。『魚の進化論』は鯉（恋）の過程より考ふれば一匹の鰌（同情）変じて遂に真珠（心中）になる事を書いて魚の書や心中に利用せられる刃物等を並べ其の他の寮に飾つた八つの飾り物を見て独法科の西二寮に足を運ぶと其の途中の廊下には人の頭にとどく程度に破れ下駄、草履、空缶、塵取り、桶、沢庵等の異臭するものを天上から一面ぶら下げて婦人連をびつくりさせ同寮には学生二人が男女の服装して仮面をかぶり一日中人形となつて『異風館』と名付けているのが一等人の目を惹き、続いて理科甲類の東三寮に進むと『蒙古探検』と題してゴビの沙漠を意味して部屋中一面ゴミにして埋めたのも学生らしき飾物、『大震災』は部屋中に新鮮な野菜を積上げて観覧者を笑はせ、文仏科の東

三寮では『松に鶴』で松の木に人が縊死してブラ下つた所を示して、人は死しても名は（縄）残すと書き添えている所も面白く、理科乙類の『御免御免』は不器用者の部屋なり装飾何も出来ずと前書をして面（免）一つを部屋の中に飾つているのは他の飾り物のゴテゴテと複雑した中に瀟洒な所に却つて人目を惹きその他各寮を通じて四十四五の飾物が部屋々々に作られ何れも学生が苦心して現代社会を風刺した所に高校の気分を十分に漂はせ、寮の食堂では学生のしるこ、すし、コーヒー、菓子等のバザーを開いていたがこの処の大入満員の盛況である、云々。』

○十一月二十六日　明年度寮総代六名左の如く選挙決定された。

文二甲　竹下文雄
文二乙　神宮司豊
理二乙　井上俊次
文一乙　北原晴光
文一丙　中野貞男
理一乙　金子清

○十二月十三日　休中滞寮生の件相談あり。三年生約十名入学試験準備のため休中滞寮したしとの希望があつたため三十日迄は可とされ、以後は亭々舎に移り寮は全然閉鎖する事となつた。

○十二月十四日　寮報発行につき点検のため原稿を生徒課に提出した。

○一月一日　四方拝賀式には寮生は参加せず但在市生徒は参加。

○一月八日　第三学期授業開始。

三学期は寮行事とて特記すべき事は無く沈滞した生活が続いた。

○一月三十一日　在寮生卒業生送別会。

吉村教頭、主事全員、寮務係全員出席、寮校医も出席し、六時より晩餐開始、主事所感、寮生総代、卒業生総代各々別離の挨拶を述べ続いて余興等あり、和気堂に満ち、ハーモニカ合奏等実に愉快な晩餐であつた。

福高今年度の卒業生は百八十二名で、その希望大学は依然として東大全盛で八十八名、九大六十四名、京大二十四名、東北大一名、長崎医大二名であつた。それを科別に見ると法科全盛で七十二名、次は医学部三十一名、経済十八名、文科十七名、農科七名、理科三名の順であつた。医学部全盛の往年に比し此処にも世相の変化が見られる。

【昭和四年度】

○四月八日（火）第一学期開始。午後一時入学式、午後三時半入寮式挙行。

○四月十二日（金）新入生歓迎大晩餐会開催。後校庭にて乱舞をなし十一時無事終了す。

○四月十五日より四月の十九日まで。各クラス毎新入寮生を生徒主事室に召喚して懇談がある。

今年度の新入寮生の氏名をあげれば

理一英　石井正一　井上健一　岩本正之　久保潔
柴田元良　高木武一郎　土屋猛　松本辰雄
原田一寿　沼田長久　中島和夫　戸崎昭
豊島十郎
理一独　伊藤健次　今井正登　梅本三之助　衛本忠
大平健　金森政雄　佃靖夫　田中桂一
長沢正憲　広瀬正年　福田仁右衛門　松尾小太郎
松永栄治　武藤倞　山口陽

文一英　青木　米之　井坂　居貞　木原　通正　白土　八郎
　　菅　正敏　長岡　清　中川伝之輔　野田　孝
　　橋本　巌　原　勝雄　吉田　武男
文一独　有吉　杏祐　有吉昇一郎　石橋　茂　茨木　恒寛
　　入矢　義高　城戸　清明　児玉　昌作　関　嘉彦
　　武田　文男　為藤　隆弘　中鉢　稔　南里　孝
　　東　晴夫　船津　武彦　蓑毛　長幹　吉田　康雄
　　力丸　典之　若林　孝一
文一仏　森田　栄　伊東　節生　片山　一男　勝浦　利男
　　加藤　郷一　木村　演雄　後藤　学　斉藤　正人
　　太田　弘　辻　賢一　都築　秀夫　中川　政人
　　久野　正紀　深田邦太郎　松尾　康躬　古川　哲史
　　松田　正巳　丸田　東郷

総務補欠選挙　前学年度、三学期総務選挙によりて当選した文科総代菊竹貞吉は都合ありて辞したるにつき、四月二十三日補欠選挙の結果新文科総代を選出した。

当選　一一六票　文三仏　山津　善衛
次点　一一五票　文三英　山下　琢二

○四月二十五日　役員総会開催。

今学年度最初の役員総会が寮会議室にて開催された。

協議事項

一、寮役員補欠選挙の件
一、新入寮生各寮歓迎コンパの件
一、今年度予算案の件
一、炊事部委員の増員の件

○四月二十七日　新入生歓迎乱舞会行はる。

午後一時、放課昼食後直ちに準備して校庭に集合。汽車にて柳河へ出発。先発の寮総代等は寝具、食事等の全部の準備を終へている。翌日潮の具合により午後潮干狩りを行ひ一同無事夕刻六時帰寮す。

寮総代旭寛良君、福井亘君等の努力により全員自治的正善なる行動をなし、大いに学而寮の意気を高めた。

○四月三十日　福高生のストーム。

この日は博多ドンタクの日である。桜花も今はその影とてなく、緑の若葉初夏の風にゆらぐ時、この博多伝統のドンタクが行はれる。この日は寮生の一団折から雑踏の東中洲の目抜街を校歌、蛮歌踊り狂つて、街頭人の眼をみはらせたのであるが、翌日五月一日の九州日報に早速左の如き一文が掲載された。

曰く。『制服制帽の七八十人からなる福高生の一団、雑踏の東中洲を団体的に踊り狂つての示威行列、かゝる事はあの際、慎しむべき事、多くの人達が眉をひそめていたのを君達は知るまい。』と。

岩口生徒課長はこの新聞記事をみて、実相を探り、遂に寮生の行為たる事判明、寮幹事、生徒課に召出され、厳重なる反省を求むべき事を注意された。

○五月六日　寮役員総会、寮会議室において施行さる。各主事列席、会食をなして、寮に関する各種懇談をなす。

先づ先徒主事岩口教授より、先般柳河方面の新入生歓迎の主旨(マヽ)が行はれた。潮干狩り、乱舞会が寮総代の努力により非常に自治的にスムースに行はれた事に感謝と称讃の言葉がおくられた。次いで亭々舎使用の件について協議あり。

亭々舎は元来、寮学校関係の来訪者の宿泊に当てられる外、寮生の

コンパ茶話会等に使用されてゐたのであつたが、その使用度数も増加するにつれて、その使用方法も乱雑になり、使用規約も、無視される様になつて来たのであつた。亭々舎は寮直轄の建築物である以上、その管理は寮総代これを徹底すべしという寮生間の声により、この時再びその使用規約が改正補訂せられたのであつた。

亭々舎使用規約

一、寮生集会及娯楽場として使用し寮専用とする事。
一、校友会合宿に提供する事。
一、この場合、東半分を寮生の使用に供し、西半分を校友会に供するものとす。
一、使用の際は学校会計に使用の目的、使用期間、部屋数を責任者を定めて使用願を呈出する事。
一、寮生の娯楽場としては、常に開放し置きその戸締まり掃除等は寮小使これに当る事。
一、寮学校関係来訪者の宿泊の件。

尚この協議に於て亭々舎に関し次の事が審議された。

一、亭々舎仮増築の食堂を西側に移転し、その経営を寮直営とする事。
一、亭々舎西側の大池の周辺の整理。

更にその他の事では

一、炊事部の手で食堂に額をかける事。
一、寮炊事場附属精米機据え付けのため、静岡、七高寮役員、実状調査のために寮会費を計上。

○五月八日　放課後寮役員総会を開き、併せて晩餐会をなす。各主事寮務係列席す。

『河内蜜柑畑』五月十一日牧川教授の快心の作〝河内蜜柑畑〟なる油絵が食堂に掲げられた。

学生思想の諸問題。大正末期以来、数々の学生思想の赤化事件、それらは昭和に入るや彼らの思想運動は、社会一般に浸潤せんとする左傾思想の猖獗に伴つて愈々熾烈となる。その運動の根拠たる理論と実践との一致をとくマルキシズムが生む必然の結果として、学生が実際的な運動にはしり小作争議、労働争議に参加する形勢をも生じた。大正十四年末より、十五年初めにかけて起つた所謂『京大事件』は学生社会運動史上の一大事件であるが、この頃から学生の思想運動も次第に非合法化への傾向を示すに至つた。更に昭和三年三月十五日の所謂三・一五事件によつてこの事が確認されるに至り、内務省に於ては、特別高等課警察の大拡張、文部省に於ては、各学校に学生主事、生徒主事を置き、又省内に学生課を設け、思想対策に遺漏なきを期する事とした。同時に東大新人会を始め各大学の社会科学研究会は強制的に解散せしめられた。

次いで四・一六事件起るや、文部省には、昭和四年七月に学生部（後に思想局となり更に教育局となる）と称する学生思想運動に対する施設が設けられた。このころとなると学生思想運動は、一応非合法的組織の団結を固めると共にいわゆる左翼の戦いを体得して、従来賄征伐や不人気教授の排斥や青年血気の致す所として諒とすべきものありと半ば容認せられた様な事件ばかりを取り扱い、頗るその手段が合理的であり、且巧妙を極めた為、常に当局をして唖然たらしめ、奔走につかれしめたのであつた。斯様な事態に対して、政府は遂に文部省に昭和六年七月、学生思想問題調査委員会を設ける事となり、単なる警察問題とする事をもつとめて避けるに至らしめ、その根本的解決に

腐心する様になるのであつた。

かくして思想運動取締りと当局の徹底的弾圧及び時勢の推移、即ち満州事変の勃発を契機とする客観情勢の展開によつて、さしも根強かつた左翼勢力も全面的凋落となり、学生思想問題も昭和七年に最高潮期として漸次跡を絶つ事となつたのである。

五月十五日の新聞をみると、一号活字の大きな見出し『学生思想の取締り』と大々的に報道している。その内容をあげれば、

『文部省内における学生の思想善導につき、各学校の連絡や、統一をはかつて居る学生課では、現在専門学務局内の一課となつているのであるが、来る六月から之を大臣官房に移し、勅任官の課長を置いて、大規模に各学校の学生思想を調査し、その対策を講ずることとなつたが、之を機会に、今後は学生の思想問題に関しては、飽まで、徹底的に峻烈に取締る方針である』と言つている。

しかしながら何はともあれ、当代に生活した者、特に高校生にとつては、彼らが社会の現実に対して正義感の何らかを感じ、社会の改造を意欲する時、最も手近に存在したのはマルキシズムであつた。科学的社会主義と自誇するとのその精細な透徹せる理論は、あるいは真に理解し得たとはいえないかも知れないが、その新奇さ、その運動がもつ煽動的な性格は確かに魅力的であり、誘惑であつたに相違ない。極めて、急進的な一部の学生がそこへ吸引せられたのは、容易に理解出来る事であろう。実際当時、未だマルキシズムを破壊し、これに代つて学生に訴うべき思想体系はなかつたのであつた。マルキシズムへの主張も存在したけれども、それは余りに幼く、満足な理論を与えるものではなかつた。あるいはかえつて左翼的立場への同情を唆したやうな趣もないではない。マルキシズムに対するジヤーナリズム一般の論調、学者思想家の思想傾向等が皆ある程度その主張を承認していたのがその時代であり、教育者たる学校ももちろん思想に対する思想を以つて生徒を導く事が困難な実状であつた。完全に左傾はしなくても、大部分の生徒は多少ともマルキシズムに関心をもち、不知不識の間にその影響を受けていた事も否めない事実であつた。

対佐高戦日取り決定さる。五月十六日、草場山津両生徒総務は佐高側尼子池田両総務及び藤松応援総監会合の上、六月二日佐高運動場にて開かれる対佐高戦の日取り決定を行つた。草場山津両総務は特に前例によつて、この復活三年目の対佐高戦を中止したりする事のなき様特に佐高側市民応援団の自重を求めたのであつた。決定した日取りは次の通りである。

△六月一日　午後七時　弁論大会　於市新公会堂
△六月二日　午前八時半　柔剣弓道　於佐高道場
　　午前十時　バスケットボール
　　午後一時　野球練習開始　二時　野球戦開始　於佐高球場

○五月十七日　西二寮コンパ。高柴、浦瀬両教授出席され、両教授の講演あり。

高柴教授　国家教育及ローマ字について
浦瀬教授　洋行土産感想談

西二寮三十名大いに謹聴し、有益なりと記録あり。

○五月二十二日　東二寮生懇談会あり。出席教授左の通りにして有意義に時を過す。於亭々舎。

牧川教授　果実の変態について
鶴　教授　英国パブリックスクール、カレッヂ等の寄宿制度

岩口教授　感情の淘汰について
木村教授　文明人の表情の変化

○五月二十九日　東三寮々生の懇談会秋山教授等出席さる、於亭々舎奥の間。

放課後校庭にて対佐高戦戦勝祈願式を挙行す。昨年より復活第二回目の今度、昨年の汚辱を雪ぐべく、我が遠征軍にとつては必ず勝たねばならぬ戦であり、総務部主催校長各部長、会長副会長後援生徒一般各部選手参列し必勝を祈願した。尚附け加へれば、この祈願式は、従来、櫛田神社、箱崎神社等に参拝祈願する恒例なりしも本年度に至りその予算節約のため廃止せんとの総務の意向ありたるにつき、本昭和四年度より、箱崎神宮の神官を招いて行ふ事に決定したのであつた。

本年度予算会　五月三十日、放課後役員総会が寮会議室にて開かれ、岩口生徒課長寮関係職員出席、寮会費本年度予算を審議決定する。

対佐高戦　六月二日、肥筑の両雄雌雄を決するの日来れり。佐高に覇権止まるか、青陵の雪辱なるか、両市民注視の中に二日日曜日、初夏の朝は、さわやかな薫風吹き渡つて一点の雲もなき、絶好のスポーツ日和、純白と真紅の応援旗幾流若草燃ゆる十五畷原頭高く飜るもと、佐高健児の意気高く、青陵健児の雪辱の血は湧く。予定通り午前八時半柔道、剣道、弓道、十時よりバスケットボール、午後二時より野球仕合に入り、両校応援団の物凄い声援裡に戦の幕は切つて落された。

宿敵破邪の青陵健児大いに士気あがれども、遂に雪辱ならずして、各部とも惜敗し、遠征の肚途も空しく同日八時二十六分博多へ帰つた。

	福高		佐高
野球	九		十一
籠球	一四		二二
剣道	一四		一五
柔道	三		四
弓道	九五		九八

再び亭々舎問題　先に亭々舎使用の件に関して寮役員との協議によりその使用規約を設けしも、校友会よりそれに対して異議が提出され、当時亭々舎内にあつた『アズマ屋』の件にまで及んだ。即ち、前の規約に従へば東半分と西半分とに亭々舎を二分してその使用に供するとあるが、寮生用としては、半分は部屋数が広すぎる。故に寮専用の部屋としては、奥二間とし、他の八間は校友会の方に開放せよといふのが一であり、他の一は、亭々舎内の売店に対する利用者範囲の問題であり、それは寮賄ひの自営であり、通学生には利用せしめなかつた。この点に校友会側は稍々反感を表したのであつた。よつて六月六日放課後、総務、同補佐、各部委員等学校側のみ（寮側一名も出席せず）岩口生徒課長の下に集合してこの問題を審議した。何分寮側の意志の全然疎通しなかつた事なれば、この会議は校友会側の一方的議決がなされ、その議決は翌日七日寮総代の下にもたらされた。その議決は、

一、奥二間のみを寮生娯楽並びに会合の使用に供せしめ、後の残りの部屋全部を校友会に開放する事

一、寮炊事直営の亭々舎の『アズマ屋』を通学生にも利用せしむる事

といふ二事項であつた。寮総代は早速総代会議を開催この決議を再審議したが寮には、他に寮生専用の『アズマ屋』を設ける事によりこの案を認めたのであつた。尚亭々舎の部屋の使用範囲は全く問題とする事なく校友会側の意見を通過せしめた。

五月十二日　西三寮生懇談会。井上教授、秋吉校長出席さる。

五月十四日　理科総務補欠選挙。
開票の結果次の如し。

平山一泰	百五十三票	当選
小野侃	四票	
棄権	三四票	

六月十九日　寮歌放送。熊本放送局より寮歌放送の件を交渉があったので、直ちに歌手選定を行ひ、熊本放送局に通知した。放送日は、七月十日であつた。

盗賊の捕獲。六月廿一日、遂に盗賊を捕へた。この日松岡教官教練指導中、見知らぬ男が、寮正門玄関より侵入せんとするを発見、之を捕へ訊問せし所どうも不審なので、寮小使大隈に命じて六本松駐在所に突き出さしめた。途中盗賊隙を見て逃亡を企図したが大隈小使勇敢に追撃折から練兵場にて教練実施中の中学生の応援を得て捕伏せ再び盗賊は典獄行きをする事となつた。この盗賊は佐高、七高、五高と次々に高校寮を専門とするもので、我が寮には被害を未然に防ぎ得た事を喜んだ。

亭々舎合宿調　六月二十八日

期間	人員	宿割	部名
七月七日－二四日	二〇	一間	水泳部
六日－十七日	三〇	三間	柔道部
七日－十四日	一〇	一間	陸上部
七日－二二日	一〇	〃	籠球部
八月二十三日－九月一日	三〇	三間	ラグビー部

○七月一日　第一学期試験開始。
○七月六日　第一学期試験終了。
閉寮　一学期の試験終了後正午閉寮したり。
○七月二十三日　東亜同文書院水江満訪寮、岩口生徒監面談さる。
○九月一日　開寮。
○九月二日　授業開始。

青陵亭の誕生。寮内売店については開寮当時即ち遠く遡って大正十一年十月、未だ開寮して間もなくの事とて寮の設備も不完全であつたが当時の寮生の希望を入れて、十月十五日、寮役員会議を開き、寮内売店の件に就き、協議した。その結果、色々の腹案も各委員から呈出されたのであつたが、何分、種々の方面に予算多きため、経済的に新しい売店専用の建築物を建てる事等は許されなかつた。故に当時の委員より食堂の利用が唱へられ、これが最も当時の寮には適当した案であつた為、十一月十二日には、食堂に於て、コーヒー、洋食等の店が開かれた。しかしながら、この売店が炊事の請負であり、且、学校正門前に『福岡亭』なるものあつて、寮生の人気を博してゐたので、この売店も一時的なものとしかならなかつた。

更に、何時の頃か、亭々舎に於て、再び、寮炊事の直営になる『アズマ屋』が生れたが、これもさきに校友会より物議がかもし出されて、寮生以外の通学生の占領する所となり、今までの亭々舎でウドン一杯で駄弁る常連も不便と暇つぶしに困つた。

兎に角、学校としても、未だ亦楽斉建たず、かゝる校内売店の設置に頭を悩ましてゐたのであつた。

かかる経緯の下に、青陵亭が誕生したのである。九月十六日、午後二時より、寮会議室において、役員総会を開き、その開始を決定した。午後六時より、売店開き祝賀会を食堂で挙行。寮生全員と校長、岩口

生徒課長、生徒課寮務係り等出席す。

先づ祝賀会は、秋吉校長以下、全寮生晩餐を共にし、秋吉校長に予め募集していた売店の命名をお願し『青陵亭』の名を選定して戴いた。

青陵亭はその夜早速店を開き、寮生に、その味を教へたのであつた。

次期生徒総代改選、愈々記念祭も目睫の間、生徒総代の任期も満了に近くなつたので、九月十七日生徒総代の改選があつた。開票の結果は次の如し。

文科	文二乙	高橋　弥左右門	一六二票　当選
	文二甲	護　山　英　夫	八六〃　次点
	文二丙	諏　訪　隆　二	七五〃
理科	理二甲	白　髭　宗　雄	一四四〃　当選

○九月十八日　生徒課より寮総代へ運動会の期日につき連絡があつた。

役員の他校出張、金子、堀田、武内、福田四名、九州、関西方面の高校寮の状況視察に出張した。要件の主なるものは、売店精米事業、炊事部等であつた。

○九月十九日　炊事部の改則。本寮は大正十一年開寮して間もなく自炊制度を実施して以来、物品購入に関しては、物品購入伝票を寮務主任、生徒主事に廻送して検閲捺印を願ひそれによつて、購入先に行つたのであるが、炊事委員福田、岡両君より、前項の制度は実質上無意味なるにより、その旨を松岡主任に伝へ、中止す。よつて、物品受け取り方についても、炊事委員より依頼なき限り、受け取らない様に決定した。

対寮マッチ。運動会を前に、秋気爽快なる空の下、各寮生は、各々寮の名にかけて、勝敗を争つた。競技種目は、野球、排球、籠球、サッカー、ラグビー、卓球等であつた。最高点は西三寮であつた。

○九月廿四日　総務部は対佐高仕合の件、及運動会の件について談合す。

対佐高運動競技　先に対佐高対抗競技の日取選手等が決定、新聞紙上に発表されたのであつたが、九月廿八日、零時四十四分博多着直ちに驟雨を冒して着校した。水泳、陸上両部長以下五十三名は、夕刻食堂に集合して、歓迎茶話会を開催（人員十五名）した。吉村教頭先づ立ちて歓迎の辞を述べ、次いで佐高教官、山崎教授答辞をのべられ、一同なごやかな歓談の内に、約三十分愉快な時を過して解散した。本校側教官列席者各部長全員。尚当時を偲べば、茶菓料一名十五銭であつたとの事。

文部省の学生思想取締り要項発表。左傾学生の思想の取締り法について、文部省学生部では、同部組織以来着々調査研究の歩を進めて来たが、去る十月二十八日の全国高等学校長会議における意見の大要を学生部において左の如く発表した即ち、

思想的理由に因る生徒の処分に就いては、先般開かれたる高等学校長会議において校長より夫々意見の開陳はあつたが、別に纏つた決議はなさざりしも、その意見の要旨は、各学校において生徒思想の善導に最善の努力を致すべきはいうまでもなく、如何なる努力もその効なく到底、改悛の見込なき者に対しては、本人並びに父兄に対しては、まことに気の毒に堪えざるも退学せしめざるを得ずと言うにありたり。しかして宣伝勧誘をなす程度に達したるものは従来の経験に徴し到底改悛の見込みなきを以てなり。未だその程度に達せざるものは改悛の見込あるを以て、此等の生徒は、父兄に渡して家庭において反省せしめ、その改悛するを待つて登校せしむべしとの意見の開陳あり。又陸

軍に於ける教化隊の組織にならひ、文部省主管の下に教化学校を設置し思想的理由に因り退学せられたるものを収容してその教化法の研究をなさしむべしとの意見を述べたる者もあり。要するに、各学校長は何れも思想的理由による生徒の処罰に就いては、その影響の及ぶ所多きを慮り、特に慎重なる態度を以て善処せんといふにあり。

かく文部省学生部では発表したが、幾度と筆を重ねし如く、我が青陵にも昭和に入りて左傾思想多数浸透し来り、彼ら左翼学生は、所謂アヂプロに専心する他に、校内に於ても、徐々にその勢力を拡張し来り、弁論部、文芸部等を占拠せんとする傾向が濃厚となつて来た。かくの如き傾向は何れの学校に於てもいへる事だらうと思うが、文部省学生部に於ても、かゝる左翼思想抑圧のため、屢々全国高等学校長会議を開催その思想善導に邁進、前記声明は、かゝる学生思想界の状勢の下に発せられたものであり、思想断圧もこの頃より徐々に組織化され、具体化されて来たのであつた。

○十月七日　午前十一時半授業終了し、直ちに全校生徒運動場に集合。市内中等学校の生徒等と共に閑院宮殿下御親閲の予行練習を行ふ。

○十月十五日　臨時試験第一日。

岩口主事佐高に出張さる。

○十月十七日　閑院宮殿下御親閲。

○十月廿一日　午前七時生徒登校。午前八時、城外練兵城集合。午前十時より閑院宮殿下の御親閲を拝す。十一時半終了。午後休業す。

○十月廿六日　運動会準備のため休業す。この日、学校生徒課に於ては、寮祭のための造り物の点検を行ふ。先般役員総会の席上通達せし教育、学校行政、教官、風紀等に一切触れざる様注意すべしとの方針に基き夕刻六時、岩口生徒主事寮務係等点検された。

第八回記念祭　十月二十七日　前夜来の雨もすつかり晴れ渡つて、晩秋の小春日和といふべく、早朝から絶好の運動会日和であつた。天高く馬肥ゆる秋の陽の下健児六百はここ青陵原に集ひて、その情熱を湧かしめる。三々五々油嶽の端にかかる月に友情あつき盞をくみ、あるいは、大濠の水辺にそよぐ松風に耳を傾ける。時到りなば、この心発して記念祭の心ともなるのであつた。午前八時開会の予定なりしも、前日の降雨のため準備遅延し八時半開会。先づ全員集合、秋吉校長の開会の辞ある時には、既に『仁輪加』をもつ福博の善男善女、城南の地にあふれていた。各競技種目は二三を除外する外、無事終了し、全校生徒夕陽をあびて各自が手にする応援旗を打ち振り大太鼓の轟きと共に大乱舞をなし、若人の旺盛なる意気と情熱のシンボルを現出したる後、校長の閉会の辞と共に散会した。夕の帷今日の感激を包みて静かに青陵に降りる時、折からの月の光に淡く照る寮は、またその灯こそ深き憧憬の象徴であつた。後刻、寮炊事より炊き出される福高名物『豚汁』に舌鼓を打つた。

寮祭も同様に盛大にして、昨年諒闇のため中止されたので本年度は二年目の事だつたので寮生一同大車輪で造り物等準備し、二十七日夕刻までには、その準備も終り、岩口生徒監の検閲も終つた。二十七日夕刻六時より、寮生一同食堂に会し、第七回創立記念大晩餐会が開催され、会後乱舞を行つた。

出席者

秋吉校長

岩口生徒主事

秋山教授　井奥教授　牧川教授　玉泉教授　その他、生徒課寮務係等であつた。

飾り物、当時、生徒課は寮祭の飾り物については、前述の如く、前もつて記念祭役員会議に於て寮総代を通して、教育、学校行政、教授、その他思想問題等に一切触れざる旨厳重なる方針を伝へ、前以て一応の検閲を行い、注意すべき点は悉く訂正せしめるのであつたが、これでも、矢張り、時局問題を取るアイロニーの骨を刺すものがあつた。

各部屋の飾り物でも全部は、不明であるが、当日の新聞に掲載せるものをあげると、

『昔は保元の乱、今は俸減の乱』
『禁皆禁』
『内閣掃除大臣蟇口遊興』
『高校マネキン』
『ステッキがある』
『校前の木を養ふ』
『月光の曲』
『髪をもたぬ（モダン）林平子女史』
『ゴミの砂漠』
『大震災来る』
『ドブの中』

以上東寮

以上西寮

尚この日寮ではバザーを開催。

○十月廿八日　休校。

寮視察報告。十一月二日、先般寮総代六名は、九州関西の各高校寮視察のため出張してゐたが、去月二十五日無事大任を終へ帰寮した。記念祭直前の事とて寮務多忙を極めたゝめその報告会は、本十一月二日に延期された。

第七回創立記念日。十一月八日。

創立記念日は一同大遠足会を催し、創立を祝すと共に、その情熱を湧しめた。先日来の寒冷にして雨の日は、幸にも本八日朝から晴れ渡り教授職員、生徒一同粕屋郡新宮湊浜に集つて一日を愉快に過した。この佳地は、右方にはるか白砂長汀の新宮松原につゞく津屋崎に望み、左は、磯崎の岬に砕くる玄海の怒濤を見る風景絶佳の勝地であり、若人青陵人の心血を湧かしむるに、又勉強につかれた頭を休むるに充分である。

電車賃往復十五銭、舞台仕掛けの博多二輪加、隠し芸に打ち興じ、レコードコンサート、芋掘り会、タラフクパーテイー（寿司、柿、ウドン、そば、志るこ、豚汁その他）等もよほして、大いに騒ぎ、飲み食いして、夕刻五時半帰校した。

○井蛙の片言（ストームの害）

ストームの是非は、多年懸案にて候へば、ここでは言はぬが花にて候へ共、やるなら今少し青陵人らしくやつては如何に候哉。愚輩この点につき疑惑を抱く一人にて御座候。間（マヽ）には蚊帳を破り、階段から水を撒くが如きは、平生剛毅木訥を標榜せらるる諸兄の所為としては、頗る矛盾せるものにては候はずや。由来『剛毅木訥は仁に近し。』とは、中古の大聖人孔子の言にて候。剛毅といひ木訥といふは、破帽弊誇のバンカラをのみ謂ふに非ずして、精神的な誠実、不屈不撓『自ら省りみて疚しからずんば、千万人と雖も、我往かん』流の気魄をこそ、真のこゝろかと思ひ致さるべく候。愚輩はストームの無趣味と、有害無益とを痛感する一人にて御座候。されど、諸兄等は、日々理想の高遠を説かるゝもの、先輩が残せし遺風か、もしくは、他より感染せしものかは姑く置き、之を要するに、糟粕たることは確実に候はば、賢明なる諸兄青陵人にして、是非善悪の識別なく徒らに他人の糟粕をな

むるのみならず、却ってこれを得意とせらるるは、抜々痛嘆の極みにて候。この際、今少し熟慮下され候はゞ愚輩の欣快之に過ぎず。万一諸兄にして、これをしも、剛毅木訥なりと主張せられ候はゞ吾人又何をか説かんや。にて御座候。

（人B生）

在寮生名簿（昭和四年十一月十二日現在）

文三甲　旭　寛良　高江　浩　竹下　文雄　白水　勤
文三乙　秋吉　春生　氏原　健二　喜多　良夫　神宮　司豊
　　深田　正吉　藤原　正治
文三丙　大藪　邦雄　大木　六雄
理三甲　野口　豊　中森　栄
理三乙　井上　俊次　井上　無限
文二甲　上野幸一朗　岡　直遙　瀬口　章一　田中　俊彦
　　野守　久雄　藤崎　一郎　安永　栄　綿貫　吉勝
文二乙　飯野英三郎　福田　繁　雪山　俊之　卜部金一郎
　　北原　晴光
文二丙　河野　内記　熊懐　嘉文　栗田　辛　武内　慎一
　　時津　秀男　新妻　浩　水田　三郎　村上　済州
　　蜷川　浩
理二甲　近藤　繁人　斉藤　光　高橋　光雄　早川　幾男
　　堀田　広誉　森　悦太郎　武藤　延雄
理二乙　大宜見朝計　岡　保　金子　靖　川関　等基
　　河野　政徳　鍋島　種基　橋本　善人　福原覚太郎
文一甲　青木　米之　井坂　居貞　新谷保次郎　菅　正敏
　　長岡　清　野田　孝　原　勝男　古田　武男
　　木原　通正
文一乙　石橋　茂　入矢　義高　有吉昇一郎　城戸　清明
　　児玉　昌作　関　菫蔵　武田　文男　為藤　隆弘
　　中鉢　稔　南里　孝　林　晴夫　力丸　典之
　　船津　武彦
文一丙　伊藤　節生　淡河　正　片山　一男　木村　演雄
　　辻　賢一　都築　秀夫　中川　政人　久野　正紀
　　深田邦太郎　丸田　東郷　斉藤　正人
理一甲　石井　正一　井上　健一　岩本　正之　久保　潔
　　柴田　元良　高木武一郎　土屋　猛　戸崎　昭
　　中島　和夫　沼田　長久　原田　一寿　松本　辰雄
理一乙　梅本三之助　衛本　忠　大平　健　金森　政雄
　　佃　靖夫　田中　桂一　長沢　正憲　福田仁右衛門
　　松尾　安郎　松永　栄治　山口　陽　今田　一男
文一丙　森田　栄　太田　弘　松尾　康躬
文三丙　安川　糺
　　合　計　一一八名

○十一月十七日　対佐高ラグビー戦午後二時より校庭に於て試合開始。終了後寮食堂に於て両校選手及関係者の懇談会あり。吉村教授挨拶される。

○十一月十八日　浦和高校寮総代三名、学而寮視察に来るべしとの通達あり。

○十一月二十一日　浦和高校寮総代三名午後六時来寮。本学而寮視察のため。白紋付、白袴りゆうとした出立ちの浦高生三名、果して我が学而寮より何を学びしか。

これより共済部事件が発生するが、これに関しては思想史に詳しい。

○十一月廿八日　役員総会。青陵亭附近に植樹する件につき、松岡主事より意見あり、許可された。これで新しく建てられた青陵亭にも木影が出来、オアシスの感一入深きものとなつた。更に二十五日、岩口主事より福田総代に話のあつた寮食費値下げの方針を討議し、且生徒主事よりその指導を仰ぐ事とした。

○十一月三十日　生徒課寮務係松尾氏静岡高等学校その他関東方面諸高校寮視察のため出張す。

校長出張。十二月一日文部省に於て開かれる全国高校長会議出席のため。

○十二月九日　松尾寮務係の視察報告あり。役員会開催。

寮総代会議。十二月十日、寮生規約細則内規改正案を審議する。

一、総代六名の選出方法を各類より一名として、その中二名を三年生より以下は二年生より選出せしめる事、なお各寮の総代事務を取り扱う事は従来と何ら変更なし。

一、青陵亭の事務は総代中より三名これに当るものとする事。

一、炊事部委員は五名を各類より各々一名宛互選する事。

一、図書部に園芸部を含める事。

一、運動部は娯楽部を含めしめる事。

かく決議、改正案は許可されたが、但し従来の規約には何ら変更はなかつた。

○十二月十六日　第二学期試験開始。

○十二月二十二日　冬期休業、午後一時閉寮。

（三学期）

開寮一月七日午後一時

○一月十日　第三学期第一回寮役員会。卒業生送別コンパ等、日割決定。

新寮総代決定をみる、一月十三日選挙の結果左の如し。

文二英　上野　幸一朗
文二仏　熊懐　嘉文
文一独　有吉　昇一郎
文一仏　辻　賢一
理一英　土屋　猛
理一独　梅本　三之助

○一月十五日　寮役員交替、事務引き継ぎを亭々舎にて行ふ。

寮専用自転車購入、一月二十一日

○一月二十四日　青陵亭委員を新総代の中より三名選出す。

梅本　三之助
有吉　昇一郎
土屋　猛

卒業生送別大晩餐会、一月三十日、夕刻午後五時半より開かれ、吉村、岩口、玉泉、松岡諸教授列席の下に、先づ、吉村教授立ちて、送別涙もあふるるばかりの熱弁をふるはれ、後新寮総代の送辞あり、卒業生も三年の春の夢を今一度この宴に想ひ出して、残寮する後輩にこの学而寮を守つて呉れと叫び、盛大に且、静かに十時半終了した。

卒業生送別弁論大会、二月一日、午後七時より本校記念館において、玉泉部長、岩口、斎藤教授出席され、いずれも、当時の現実の姿を熟視しつつ、送る者、去り行く者の悲哀を超えて熱弁聞く人を泣かしむるものがあつた。プログラムを示せば、

一、底の人格　文科　松尾信義

一、人道徳光教より見たる学校教育の問題　文科　古賀文次

一、哀れ色彩りの家　文科　前原正義
一、自己に与ふ　文科　坂本　稔
一、社会に訴ふ　文科　武藤正行
一、須く李下に冠を正すべし　文科　上村　章
一、未　定　理科　白髭宗雄
一、現代青年の悲愁　文科　護山英夫

であつた。

○一月二十九日　教練査閲。
○二月四日　校長帰任。全国高校長会議出席のため上京中であつた。
○二月十一日　卒業生記念撮影。
○二月十二日　新総代の初の総代会。青陵亭の件、協議。
○二月十三日　記念メダル贈呈。尚この日炊事委員より旧委員に対して記念品を贈りたき旨を生徒課に伝へしも許可されず。
○三月四日　三年試験終了。
○三月八日　一、二年試験終了午後一時閉寮。

【昭和五年度】

入学式。四月九日、午後一時入学式挙行、秋吉校長、岩口生徒課長等の訓話ありし後、総代の挨拶ありて式を閉ぢた。

新入寮生歓迎大晩餐会。四月十四日、午後五時半開会。総代の開会の辞ありて後、秋吉校長の入寮喜びの言葉あり。新入寮生六十六人にして、皆紅顔の三四郎とて一同、総代の喜びの意味と共に、学而寮の寮風振興せんという獅子吼に深く感激した。楽しい団欒の中に漸く余興も油に乗り始めた。弦月淡く春の夜を照らして感激一夜は更け行く。式後運動場でファイヤーストームを行ひ、十二時解散した。

校歌制定。四月二十三日、北原白秋作詩、山田耕作作曲『澎湃として新しき』が我が青陵校歌として発表された。校歌『治安にふける巷には』に代へてこの時如何なる故に新校歌制定が行はれたのであろうか。従來までは『治安にふける巷には』を校歌として合唱し來つたのであつた。しかしこれは暫定のものである。権威ある新校歌制定の希望は当時の生徒総務の抱けるものであり、開校以来未だ十年を経ざる青陵の事であつてみれば、生徒間にも何かそこに他校を凌駕する伝統、歴史を望むのも当然の事であろう。新校歌制定は即ちこの意味において漸く青陵人の自覚を一歩進めたのであろう。

当学校に於ては、四月二十九日に天長節の佳節を卜し、校友会主催を以て、新校歌制定記念宴会、又文芸部主催にて音楽会を開き盛会裡に一日の歓を尽した。

総代会議。四月廿六日、園遊会と炊事部の件につき各部総代集合、合議す。新入生歓迎大乱舞会は、日程二日で五月九日、十日となし、会場は志賀島に決定す。炊事部の件は後記す。

今年度の対佐高戦（各運動部全般）を中止する事に、五月二日の校友会役員総会で決定した。理由は、校友会会則の変更からその予算が出ないが故であつたといはれる。

山崎寮務主任着任、五月五日。

予算会、五月五日。

寮生の自覚に訴ふ。

三年間の在寮中、余が最も遺憾にたへなかつたのは、寮の行事に対する寮生多数の余りにも無関心過ぎる態度である。一例をあぐれば、新入生の歓迎大晩餐会などである。当事者が如何にこれ勧誘につとめても、会場に出席するものは僅かにして、例へ最初出席したとしても、少時経てば殆んど外出して仕舞ふ事である。しかも残るは当事者と応

援団位のもので、外出する者はあたかも、その日当事者と奔走するものを冷眼視し、思ひ思ひの行動をとる事である。今少しの自覚が欲しい。もちろんこれ等の現象には当事者の不届きな点もあるであろうが、新入生歓迎大晩餐会は、新たに我らが探究者の同胞となつた人達ではないか。更に上下足の乱用、悪戯、子供にも等しき喧噪等々、その枚挙するに労を要する程である。高校生としてあるまじき幾多の無意識的無自覚的行為が平然として行はれてゐる。諸兄等よ。是ら弊風を掃し、以て我が自治の殿堂の精髄を発揮せん。総代福井亘

○五月七日（マヽ）　寮歌練習停止。高校の寮歌といふものは、何もそれが、美声であるとか、音楽的美学的に如何といふのではない。唯若き三四郎の純粋な心情といふものを表はせばそれで全てなのだ。時到れば狂ひ、時到ればロマンの夢を謳ふ心情の発露こそ寮歌のこころなのだ。

○五月五日　第四高等学校寮役員、文二小林武夫、同上蘆田正子七日学而寮視察のため来寮の由、先方主事より通知ありたり。

○五月七日　前記第四高等学校寮役員二名来寮。主に精米機据え附けの件につき会談す。

○五月八日　新入生歓迎大乱舞会会場視察のため志賀島へ寮総代出張す。

大乱舞会。五月十日、放課後直ちに寮生全員集合、二時先発隊の待つ志賀島へ出発した。千歳町の博多港から船にゆられて約一時間、玄海の遠き水を望みつつ船にゆられて四時志賀島着、先発隊の準備も完了して五時ごろ一同夕食を取る。騒音と混雑と焦心との生存競争の俗界をはなれて、夕陽に紅く染む玄海の彼方を望みつつとる夕食はまた格別の味がする。酒も漸く三四郎の顔をあかく染むるころ、夕べの帷は降りて来る。七時半、機熟せり、白砂の海浜に炎炎と燃ゆる情熱の炎。そこに踊り狂う百余の若さ。飲んでは踊り、狂っては食い、蛮声をあげては乱舞する。翌朝、新鮮な海の気と共に空を仰げば天空一如、ひたり〳〵と寄する波の音も静かだ。朝食後十時より第一回網引を西戸崎附近で行い、附近の魚夫の手になる獲物の料理に舌鼓みを打つて昼食をすまし、午後一時サゞエ採取、更に午後二時第二回の網引をやつて一同盛会裡に五時半帰寮した。参加寮生九十八名、先発十二名、小使大隈、古賀、炊夫阿部、飯東参加す。

○五月二十二日　寮役員懇談会開催。岩口生徒主事、寮務係出席し晩餐を共にす。なおこの日は乱舞会委員慰労会をも兼ぬ。

○六月五日　寮消防隊編成に関し、役員總会開催。

○六月七日　夕刻六時第五高等学校総代二名寮視察に来寮す。

○六月九日　総代会議。翌日夜間寮防空演習の打ち合せあり、寮務係出席。

○六月十日　夜十二時より午前一時の間に防空演習実施。市の常設消防隊参加、蒸気ポンプの操作を習ふ。岩口、木村、松岡以下寮務係も加はる。尚、消防演習は創立以来最初のものであつた。

○六月十二日　総代会議。先日の消防演習の批判あり。

○七月一日　第一学期試験開始。

○七月七日　第一学期試験終了。

第二学期

○九月一日　開寮。始業式あり。

○九月四日　七高寮総代来寮す。しかしながら総代の寮視察は相互の校長間の承認を要するにもかゝはらず、その手続を取らずに来れば、校長会議申し合せに反するにより視察を拒絶す。

○九月五日　総代会議あり。主事、寮務係出席。

一、休暇中の暴風雨被害の事。

一、楽書をする者は同室居住者連帯で修繕費を出さしむ。なお廊下の楽書は寮会費より支出する。

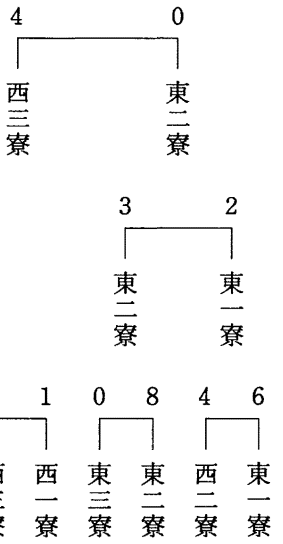
一、青陵亭経営改善案。

一、亭々舎使用禁止の件。

一、精米機設置の件。

等につき協議す。

○九月九日　野球対寮マッチ開催。午後三時半、組合せは次の通りであつた。



西三寮優勝す。

寮生服装に関する注意。昭和五年九月

休暇中家庭にありし習慣のためか未だ着袴もせず着流しにて本館に出入し、或は門外に散策するものを認む。是は寮生の品位を保つ上に於て甚だ遺憾とする。是非とも制服、制帽、或は着袴して出入する様励行されたし。

学　校

愛寮の精神、今年度の夏休暇中、九州、四国、中国、近畿一帯を襲へる暴風雨のため、学而寮の一部に被害ありしため、文部省にその旨伝へ、修理費の請求をなし、九月修理を終へたのであるが、寮生の施設に対する認識不足は寮破壊に大いに影響するので、左の如き文書が発表された。

『室を綺麗にしませう』是が本寮のモットーです。けれども今迄は楽書があつて汚したり、ストームで毀したりしても修繕費がなかつたので、乍遺憾其儘になつてゐたのが、今回の暴風雨のため、大修繕費を文部省に請求して、辛ふじて修繕が出来たのであります。若し今後楽書をしたり、毀したりすると又修繕費に行詰る事は勿論後進入寮者も亦不快に思ふ事でせう。本寮は修養の殿堂であり、又勉学の室として大切な所ですから、どうか気持良く住める所として行きたいと思ひます。

若し楽書したり、毀したりした者は、前申した通り修繕費不足のため、止むを得ないから、其の室居住者を責任者として修繕費を弁償せしむる事に定まりました。壁に絵画等を貼付する時は糊はせずに必ず『ピン』を使用して下さい。どうか右主旨を了してお互に『室を綺麗に致しませう。』

福岡高等学校寄宿寮

昭和五年九月

総　代
寮　務
主　事

一見、女学校の作文みたいなこの声明文も、かなりの効果を示し、寮の内部は綺麗になつた。

○九月十二日　寮裏庭の作り池の工事をなすため、前日池を干す。幾多の魚類を捕獲す。十二日はこの池の拡張工事をなす。

○九月十六日　生徒総務立候補者五名、愈々選挙戦激化す。

○九月十七日　五高総務より九州四高校野球リーグ戦開催の主旨の封書来る。

総代立候補者の演説会。九月十七日、中食時間を用ひて講堂にて行はれた。立候補者の抱負を発表し、後各候補者の応援弁士壇上に上りて応援演説をなす。各主事、生徒課員厳重に監視し、各人三分間内、個人攻撃及一切の質問は禁ぜられた。

この頃の学校内の風潮。昭和以降激しく学生思想界にクローズアップされて来たマルキシズムは、至る所に学校騒動を惹起し、浦高、五高、佐高、六高、松江、台北等の諸高校、同盟休校をなさざりし所ない位にそれは大きな波紋を投出したのであつた。右翼は社会的に見れば所謂優性であり、左翼は劣性とでもいはれよう。劣性であればこそ、彼らは、あれ程の組織的勢力を以て優性に対して反抗的態度を取つたのであつた。青陵においても、あの大正十四年の蜷川事件以来、昭和四年の校友会の共済部の問題、それらは全て左派の勢力がその背後に存在していた事を示すものであつた。彼らはヒューマニズムの立場より発した。またそれには一面の真理が存するといへよう。併しながら、それが如何なる形となりて表面化され、具体化されたかは、誠に学生思想史を繙くに当つて慎重なる考究、態度を必要とするものである。一般学生の左派学生に対する思想態度は、一般にそのヒューマニズムに対する批評から始るものである。彼らがヒューマニズムを楯に戦を挑むならば、我らもそれを楯に彼らに対するんだといふが如き考へ方であつた。

総務立候補者

文二　独　松尾信義

文二　英　武田文男

理二　独　青木宣明

文二　仏　後藤学

理二　英　浜勝生

○九月十八日　総務選挙、中食時間に講堂に於いて施行。開票の結果

文科総務　武田文男　一一〇票

理科〃　青木宣明　一三五票

○九月十九日　総代会議。

○理二甲今田昇退寮許可の件

○記念祭の期日十一月二日の件

○電球紛失の件及その対策

○便所清掃の件

寮精米機撰穀機取付け及び事業発足。十月二日、前年度より懸案となつてゐた精米機据付けは寮総代等の他校視察や、その他生徒課寮務係の努力により、芽出度くその取り付けを終り、本十月二日よりその運転を開始した。精米機、撰穀機の取付け場所は現在の炊夫の住居と同じ家屋内にあり、炊夫がその運転に当つた。

第八週年記念祭　明後日五日の記念祭に際して十月三日より寮祭飾物の準備に取りかゝつた。明十月四日は五日の運動会準備のため授業休業、総務部は準備のため早朝より忙殺され、会場その他夕刻にまでは終了した。文芸部の美術部は五日六日の両日に亘つて市内玉屋で作品展覧会を行つた。寮においては、飾物バザー等に忙がしく、亭々舎では劇作研究会の準備をなし終えた。各寮各部屋の飾物は、いわゆる奇想天外のもの多く、主に政治思想をもぢつたもの多く、その一例をあげれば、

東二寮六室　ロンドン会議
西三寮七室　金解禁
西一寮十室　浜口内閣対枢府
東一寮十室　老を得て職を望む

等があり、又高校特有のエログロナンセンスが盛んに飛ばされ、年に一度の女人禁制の解かれたこの時こそと訪れた美はしき乙女の顔赤らむるが如きものもあつた。

この第八回記念祭の時の寮祭役員は次の如くであつた。

一、バザー委員（白菊花）
会計係　上野幸一郎　土屋猛　梅本三之助
外交及庶務係　熊懐　嘉文
〃　有吉昇一郎
〃　辻　賢一

一、炊事係（赤腕章）
A　青木（文二甲）　主任　菓　子
B　古田（〃）　〃　コーヒー
C　入矢（文二乙）　〃　果　物
D　中鉢（文二乙）　〃　福高土産
E　太田（文二丙）　〃　ウドン、ソバ
F　深田（〃）　〃　しるこ
G　岩本（理二甲）　〃　す　し
H　久保（〃）　〃　福高ポンチ
I　福田（理二乙）　〃　だんご

一、接待係（桃色腕章）
（A）文一甲　山崎、石橋、三浦、那須、加藤
（B）文一甲　広中、高宮、沢西、篠崎、佐々木
（C）文一乙　藤島、末松、福地、平田、福井
（D）文一丙　宮崎、西原、成瀬、長浜、中尾
（E）文一丙　鶴田、長、橋本、寺田、光野

一、警備係（紫腕章）
主任　新谷、船津、伊東、戸崎、長沢

一、バザー券及手拭販売係（青腕章）
主任　佃（理二乙）
（係）文甲　古賀、岡村
文乙　石井、福沢、原
文丙　江浦、大湯、目加田、高橋
理甲　矢動丸、大林
理乙　光井

一、レコード係（緑腕章）
関　董蔵　文二乙
淡河　正　文二丙

昭和五年十月五日

○十月五日　創立記念運動会。福岡市秋の呼物の一つ、青陵の記念祭は運動会と共に、五日早朝より行はれた。例によつて寮生一同の頭をひねつて作つた奇想天外の飾物は、時節柄、本年は倫敦会議、浜口内閣対枢府、金解禁から支那政局等政治問題を取り扱つたものが多く、中でも『老（隴）を得て職（蜀）を望む』犬養政友会総裁を批評したものなど傑作と見えた。更に又訪れた美しい乙女の顔赤らむるが如くエロチイツクなもの、高校特有のグロテスクなもの等のナンセンスが盛んに飛ばされ、次々に来る人を喜ばせしめた。なお亭々舎では劇研

究会の人々の劇、バザー等も賑い、運動会はタイムやレコード抜きの砕けた競技に平素はしかつめらしい教授達も飛び出して樽ころがしをする等の面白い一日を過した。

○十月六日　休業、寮祭の後始末完了。人夫寮階下廊下を清掃す。

○十月七日　精米部活動実施の状況調査会開催。寮関係役員全部出席す。一俵の玄米を白米にする時間約三十分であった。なお精米部の事に就いては、何らの文献も存せず、ここに記録されざりしを残念に思う。

○十月十日　寮祭役員慰労会。於亭々舎。

亭々舎使用許可。

○十一月四日　寮祭収支報告。バザー、純益百弐拾円六拾九銭也。

○十一月五日　盗難事件。今朝午前八時五十分より九時迄の間に盗難あり。

○十一月八日　創立記念日（第八週年）。この日総務部において大遠足会（津屋崎海浜）を催す予定なりしも雨天のため中止さる。

○十一月十四日　新寮役員選挙の件につき役員会議。

○十一月十五日　寮報原稿について役員会開催。思想的方面を特に注意さる。岩口生徒主事出席。尚この日食堂にて先般寮バザーの決算報告ありたり。

○十一月二十日　寮役員会。

○寮報原稿検閲の件。

○総代選挙の件。新役員について、総代は明年度の三年生中より二名立候補せしむべしとの生徒課よりの通達ありしも、明年度の三年生中より立候補する者なし。

○十一月二十八日　マージャンをなすものあり。

同日、校長、寮関係の事務員、炊夫、亭々舎番人等召集されて訓示ありたり。

○十二月二十五日　対寮庭球戦行はれる。

第一回戦　○東一　5―3　西二
　　東二　1―2　東三○
　　○西一　5―3　西三
第二回戦　○東一　5―3　西一
第三回戦　東一　3―4　東三○

かくて遂に東三寮優勝す。

○十二月九日　寮総代選挙。

文二仏　淡河　正
文一英　那須　規亮
文一仏　成良　一郎
理一英　品川　洗
文一独　万足　卓
理一英　則松　正二

○十二月十三日　明専寮務係来寮視察す。

寮役員選挙　十二月十六日

昭和六年度図書園芸部、運動娯楽委員選挙結果

図書園芸部委員　文一仏　橋本芳一郎　三一票
〃　理一独　千田　千寿　二七票
〃　文一独　岸　秀一　二四票
〃　文一英　岡村　富弘　一八票
運動娯楽委員　文一仏　江浦　正彦　三七票
〃　文一独　平田　美光　二八票

〃　理一英　村山　潔　二七票

昭和五年十二月十五日

これによれば運動娯楽委員に当選せしは、江浦正彦君と平田美光両君なれど、自治の立場から見て各類一名宛が適当なる故に、平田君は遠慮せしめられ、村山潔君当選す。

○十二月十七日　新旧役員会議。於会議室。前記役員選挙に於て各類平均して委員を選出する事が、寮自治に対して妥当なりとの生徒課側の意向により、運動娯楽委員に当選せし平田君はそれを次点の村山君に譲つたのであるが、平田君はあくまで役員を希望し、それを新総代万足君に伝へたので、万足君はその夜、至急新旧役員会議を開きその問題を討議した。種々議論の結果、明年度に限り、運動娯楽委員は三名とし、平田君の希望通りとなつた。該委員を二名とする事は寮の暫定的規約であつて、その裏面には生徒課の意向として文独の生徒を敬遠せし事が判明してゐる。

○十二月二十二日　第二学期試験終了。正午閉寮。

（昭和六年）

○一月七日　開寮。六高総代寮視察のため来寮、青陵亭開亭に就いて。

昭和六年の新春を御祝ひ申し上げます。

久しく閉亭して居りました吾等の青陵亭も新春を迎へると共に、華々しく開亭致すこととなりました。

我々寮生の親睦を計るため以前同様奮つて御来亭下さい。

猶、吾等の唯一の歓楽境であるこの青陵亭をお互に永続させるため吾等の自治心を重んじて、面倒ではあるが、確実に食券と引換へに料理を受け取つて下さい。又何なりとも御気付きの点は、亭内に備へつけの投書箱を利用して下さい。

開亭期日　一月十三日火曜

営業時間　午前十一時――午後十二時迄

食券　十二日委員よりお渡しします。

猶旧委員捺印の食券は本月中有効とします。

昭和六年一月十日

青陵亭委員

東二寮十六室　品川　洗

東三寮十三室　成良一郎

西三寮十六室　那須規亮

青陵亭は、開亭後約一年を経過したのであつたが、その経営方法に大きな困難があり、昭和五年十月より暫く閉亭していたのであつたが、新総代の改選後、委員、品川洗君ら三名はその開亭に努力し、漸くその開亭を見るに至つたものである。青陵亭は、その経営方法はもち論の事であつたが寮生の人気もさしてなく、寮生の多くは、学校前のテイールームに入る事が多く、又その秩序も寮生によつて乱される事が多かつたのが主なる閉亭の原因であつた。

○一月十二日　新旧役員会。事務の引継ぎをなす。

○一月十四日　東一寮生徒懇談会。出席者、生徒課長岩口主事以下八名、野村教授、生徒梅本総代外十四名。

場所、寄宿寮娯楽室。

寮生の希望及感想

1、寄宿寮の便所の掃除を早く行はれたい、理二乙佃君より

2、寮内にて口笛を少くして貰ひたい、理一乙田中君より

3、寮歌集を発行されたき事、文乙（マヽ）小池君より

4、ピンポン外の運動具を設備されたき事、文一乙福井君より
5、寮生一室に多数集りて雑談する事は、声が太くて隣室の者が困る故、慎まれたき事、文一乙福井君より

自　午　後　四　時
至　午　後　六　時

同日、西一寮生徒懇談会明年度十一月迄の前期炊事委員の選挙あり

理一英　福　田　重　華
理一独　安　藤　　享
理一英　小　川　吉　雄　　以上三名

○一月十六日　東二寮生徒懇談会開催。午後四時十分より寮娯楽室に於て行ふ。夕食時刻なので、先づ四人一組となり、スキヤキ鍋をつつきながら、牛肉六十匁に舌鼓を打つて懇談をなす。終つて懇談会の主旨及寮生活に対する御話ありて寮生の自己紹介及感想に移る。その主なるもの次の如し。

一、中学時代の寮生活と高校の寮生活の相違する所は、高校の寮生活は自由に過ぎる。隣室にて友達の騒ぐ時も之を気にする事なく、勉強する事の出来る迄修養したい。寮生活には適する者と適せざる者あり。自分としては寮生活は意義あるものと思ふ。　理二英　原田君

一、過去二十ケ月の寮生活、中学時代より運動不足。ストームの種類等。　理二英　久保

一、土曜日、日曜日は騒いでも差仕へなし。寮生活は楽しい。永き後深い思出となつて残るであろう。　理一英　力丸

一、高校に入りて、中学時代よりの母の恋しさ薄ぎ精神的に強くなつた。高校生活の期待は少し外れた。自分はニイチェの超人に憧れる。在寮の関係か本校の諸先生にあまり会はないのが物足りない。　理一英　川口

一、寮雨殊に二階よりやるのは不潔極まる。病気中友人の介抱が非常に有難かつた。　文一仏　寺田

一、食事をもう少し良くしたい。ラジオが欲しい。　理一英　大森

一、入寮当時は淋しかつたが、今はよくなつた。寮に図書の設備、ラジオの開放、寮生や他のクラスの者とも話してみたい。　理一英　矢動丸

一、運動の設備がも少し欲しい。一年生を多く寮に収容せられたい。　理一英　福田

一、寮が自由過ぎて寮生間に雑談多く、勉強不足勝。自治観念少く自由主義的傾向濃厚だ。何故寮生の拡大をしないか。　理一英　品川

一、親許を離れて他郷に苦労をなめるのは大いに修養になると思つて、大阪より福高に入つた。娯楽室をもつと有効にし、ラジオ、雑誌、音楽等設備してもらいたい。　理一英　村上

一、下宿より寮生活が意義ある。他人に多く接するという事は大いに自己の人格の修養に通ずる。寮の庭球コートを寮外生が使用するのは禁じたい。　理一英　関

これが終つて、岩口主事より、寮の誇りを建設する事に努力する事を希望され閉会七時過ぎであつた。

来会者、岩口、玉泉、木村生徒主事、松岡、伊藤補佐、加川主事補、小林、松尾寮務、総代土屋猛外十六名。

寮生文一仏成瀬君死去につき、前例によりて総代会を開き香奠拾円を寮生より贈る。

東三寮生徒懇談会。一月二十一日午後四時より寮娯楽室にて開催、出席者、岩口、玉泉、木村三生徒主事、以下寮務員一同。寮生熊懐総代以下十六名。

先づ岩口主事より開会の辞及寮生活に対する訓示希望等の講話ありて後、生徒の自己紹介感想談ありたり。その主なるものを挙げれば、

一、東三寮々生は仲よく、融和して寮風の発展のために尽そう。　文二独　岡

一、先日亭々舎で行われた文甲の送別会が午前一時過ぎまでもあつて困つた。時間の制限が欲しい。　文三仏　水田

一、大学の入学準備のため勉強しているから静かにして貰いたい。　理三英　高橋

一、青陵亭に行く途中を最少し静かにして欲しい。　文一仏　長濃

一、一年生を全部寮に収容しては如何。寮の中庭を最少し綺麗にして欲しい。　文一仏　成良

一、土曜日に一週間の勉強慰安のため映画を見物に行くと帰寮がどうしても門限に遅れる。土曜日だけ門限を十二時までに延して欲しい。　文一仏　西原

一、寮歌集を発行して貰いたい。外出の時玄関の名札を裏にせざる者あり。やるべきものはやるがよいと思う。　文一仏　大場

一、感想はあるが、あまりスキヤキを食い過ぎて何もいえない。　文一仏　高橋

終わつて後、岩口主事よりマージヤンに対する注意ありて午後六時半散会す。

マージヤンをするもの、熊懐、水田、光野、関、菅。

煙草をのむ者、関、菅、松尾、熊懐、水田、成良、目加田。

酒を飲むもの、松尾、熊懐、水田。

西一寮生徒懇談会。一月二十三日、午後四時十分より寮娯楽室にて開催。出席者岩口、玉泉、木村生徒主事及寮務員一同、寮生有吉総代以下十八名。岩口主事より懇談会の主旨及寮生活に対する訓示、寮の誇とする気風建設の希望ありて後、寮生の自己紹介感想談等ありて午後六時五十五分閉会す。

寮生の感想談左の通り。

一、寮生の意気消沈せるが如く思われる。　文二独　児玉

一、青陵亭の傭人を月に一回休ませたい。また新聞配達人の押売りを取締つて貰いたい。　文二独　入矢

一、三年間愉快に過した。朝夕寮生が互に挨拶し交する事に温みが生じ、一層愉快に過す事が出来ると思う。寮生活に惹き附けられて下宿する気がなかつた。　文三独　福本

一、寮生は静かである。騒ぐ者はあまりない様に思う。総代として一ケ年間務めたのであるが取締る事の出来なかつたのを遺憾とする。　文二独　有吉

一、火種採りに行つて上級生が起しているのを下級生が遠慮なく持つて行くのは、少し礼儀がないと思う。寮の規則が時々変更されるのは、何とかしたいと思う。　文二独　有吉

一、毎日、面白おかしく暮しているから感想はない。　文一独　福沢

一、懇談会の開かれる事を大いに悦ぶ、懇談会の機会に寮生は大いに意見を述べるがよい。また寮歌募集は大いにやるべきだと思う。　文二独　有吉

一、寮に入つて悪い事ばかりして来ました。今は少しは分つて来ま

した。　　文一独　石井

一、私も石井君以上に悪い事を覚え、且行つて来ました。　　文一独　佐々木

一、寮の新聞をもう少し整理したい。　　文一独　万足

一、懇談会は心がゆるやかになつて大いによいものだと思う。　　文一独　万足

一、寮生は個人々々に対すると非常に良いが、大勢になると自然悪くなる。こんな機会を度々設けて他人の感想をきゝ、自分の意見も述べたら良くはないかと思ふ。簡単な寮報を月二回位発行して貰ひたい。　　文一独　万足

一、室に集つて猥談が多い。猥談するよりも他の話をして常識を養はう。　　文一独　末松

一、寮内であばれて窓硝子を破るよりは寮にフットボールを備へ運動したがよい。

一、青陵亭が出来たから毎晩買ひに行く。　　文一独　篠崎

○一月二十八日　西二寮生徒懇談会。

○一月三十日　西三寮生徒懇談会。

西三寮は、三年生の寮であり、いはば、学而寮古参の寮生の寮であるからその感想の主なるものを拾つて掲げるのもまた意義あるものであろう。幸いにその内容が残つている。

一、入寮当時は同類の者が十七八名いたが、今はもう大部分寮を出て下宿して終つた。寮を出た者の感想をきくとやはり寮がよかつたという。寮生と通学生と比較すると、寮生の方がやはり人間が出来ている。そこにやはり何物かゞあるのだと思う。上級生は、新入生の処へ行つてやるがよく入寮当時はよくホームシックにかゝるものだ。　　文三仏　武内

一、一年生は上級生に対して愛嬌がない様である。一年生の方より都合よくして欲しい。クラス会の時いつも通学生と寮生とが自然区別の出来る様に感ずるから寮生をもつと多く収容せられたらよいと思う。　　文三仏　時津

一、一年生は強制的でも全部入寮させた方がよい。火災の場合のため十畳位の室にしたがよい。又一室に五六人一緒に居ればホームシックもないと思ふ。寮に図書室が欲しい。

一、卒業生不用の書籍を寄附してもらつて之を一室に集めたらよい。

一、一年生に勇気がない。昔は上級生が下駄履きで廊下を通つてゐると下級生が上級生を叱りつけたものだつた。以上　　文三仏　村上君

一、一室一人がよいと思ふ。　　文三仏　栗田君

一、寮歌のさびれたのが悲しい。何とかしたいものだ。

一、一年は勉強してゐるか遊んでゐるか判らない、もつと元気を出せ。　　文三仏　蜷川君

一、総代の力が少し足りない様に思ふ。以上　　文三仏　村上君

一、総代選挙が以前の様に権威がない。

一、炊事委員の悪口は口にすべからず。　　文三仏　蜷川　武内　村上君

一、一年生二年生の間は夢中で寮生活を送つて来たが、三年生になり卒業も近まつて過去の寮生活を反省してみて、一年生の時が最も愉快であるべきだ。　　文三英　安永君

一、中途で退寮せんと思つたが、今となつては、寮は確かに良かつたと思う。　　同じく同君

一、三年間寮にガンバリ通したが、今考えてみると良い事から悪い事から皆覚えたが、確かに寮生活三年は無駄ではなかつた。
文三英　岡君

一、役員の権威云々については、寮生諸君が選挙に対する理解がないからだ思う。
文三独　北原

一、他校の寮にいる者と語る時、本校寮は他校寮より非常に恵まれていると思う。
文三独　飯野

等が後僅かで本寮を去る人々の言葉であるが、そこには寮の精神と真理への憧憬とがあふれ、後進をして泣かしむるものがある。

○一月卅一日　盗難あり。被害甚大なり。盗人捕獲不成功。

○二月二日　第七回卒業生送別会。

○二月三日　昭和六年福高送別予餞弁論大会開催。於県公会堂。

○二月九日　新寮役員会議開催。

新役員氏名

一総　代　文二仏　淡河　正　兼会計
文一英　那須規亮　〃　青陵亭
文一仏　成良一郎　〃　〃
理一英　品川　洗　〃　〃
理一独　則松正二　〃　衛生
文一独　万足　卓　〃　記録

一図書園芸部委員
理一独　千田千寿
文一仏　橋本芳一郎
文一独　岸　秀一
文一英　岡村富弘
文一仏　江浦正彦
文一独　平田美光
理一英　村山　潔

一運動娯楽委員

一炊事委員
文二英　青木米之
文二独　入矢義高
文二仏　太田　弘
理一英　福田重華
理一独　安藤　享

昭和六年二月九日

決議事項

一、新入寮生（明年度）は、一年生を出来るだけ多数入寮せしめる事

一、食堂にラジオ設備の事

○二月二十三日　姫高書記大橋定次氏寮視察のため来寮。

○三月一日　左の通り掲示あり。

一、本学年度及来年度、閉、開寮及び食事準備左の如し

（イ）閉寮　三月十日正午、食事準備は三月十日朝食まで。

（ロ）開寮、四月八日午前九時、食事準備は四月八日夕食より。

一、本年度本校受験生の便宜をはかり、三月十六日より三月二十一日まで寄宿舎を開放し、これ等を寄宿せしむるに付、荷物は一纏にして寮会議室に搬入し置くを可とす。

一、室内には一切私物品を残し置かざる事。若し止むを得ず残置するものは押入に入れ、必ず鍵をかけ置くべし。但し私物品保管の

責は負はず。
一、机を受験生に貸与するに依り引出に物品を入れ置かざる事。
一、来学期は三年生卒業のため室替及移動あるべし。

昭和六年三月一日　福高寄宿寮

○三月十日　正午、閉寮。総代のみ、三月十六日より在寮する事となる。

【昭和六年度】

○四月八日　午前九時開寮。

○四月九日　入学式に引続いて三時半より寮食堂において入寮式挙行。旧寮生中入寮する者五十六名、新入寮生五十四名。

秋吉校長　岩口生徒主事の入寮に関する訓示ありて後、総代淡河正君の祝辞を兼ねた、新入寮生に対する挨拶ありて後、一応閉式す。その後、新入寮生父兄と共に茶菓を呈して校長、生徒主事懇談ありたり。五時半終了す。

○四月十三日　新入寮生歓迎大晩餐会。

午後六時より寮食堂において挙行。秋吉校長、岩口生徒主事、玉泉生徒主事、森生徒主事、寮務係出席、校長、三生徒主事の歓迎の辞ありて後、寮総代淡河君の挨拶あり。更に新入生の自己紹介あり。終つて余興に移り、詩吟あり、流行歌あり、即興あり、寸劇あり、一同新入生歓迎の意を充分に発揮して最後に寮歌合唱して散会。それより校庭にてストームに移り、十一時半終了す。

亭々舎の庭園設備完了す。会合等遠慮なくなされたしとの掲示ありたり。

○四月十五日　新入寮生懇談茶話会。

午後三時半より寮娯楽室に於て文一英及文一仏の新入生懇談茶話会を開催。出席者岩口、玉泉、森三生徒主事、寮務員一同、寮生、木梨恒彦君以下十六名であつた。岩口生徒主事より茶話会の主旨、寮生活等について訓話ありし後、寮生の希望感想談等ありたり。午後五時半、夕食を共にして閉会す。

新入寮生の希望感想次の通り。

一、寮に入りて今までと全く異つた生活をする事は、自分の将来のため大いに参考になると思う。　文一英　木梨君

一、入寮して未だ日も浅く大した感想もないが上級生の元気ある日常生活をみて自分もあんなに元気に希望に生きたいと思う。　文一英　溝口君

一、日曜日の晩は文一英の歓迎会でのぼせ上つて騒ぎました。　文一英　占部君

一、騒がしくて勉強が出来ぬ。下宿生活より寮は簡単でよい。　文一英　明石君

一、高校の寮生活を希望して入寮した。意外なのは、中学時代の友人が頭髪を大変延してゐるのには驚いた。麦飯が欲しい。　文一英　有光君

一、私は淋しくて寮生活は好みません。　文一英　安達君

一、周囲の人が勉強してゐるので自然勉強する様になりました。　文一英　松浦君

一、今後男らしく高校生活の三年を有意義に送りたい。　文一英　畠中君

一、浴場の感じがよい。　文一仏　白仁君

一、寮に入つて団体生活の精神が少し養はれて来ました。　文一仏　臼杵君

一、ストームは戸を打たず、硝子を破らず唯歌位で止めたいと思ふ。

文一仏　福山君

後岩口生徒主事注意ありたり。

一、正しき事は共に実行し、愛寮心を培ふ事。

一、団体生活は或る程度までは忍耐する事。神経過敏になつては悪い。太い心をもて。

一、外出、外泊の心得及届方。

一、金銭出納及金銭貸借に関する注意。

一、身体を大切にする事。

一、友人関係に充分注意する事。

一、頭髪に関する注意。

○四月十六日　新入寮生懇談茶話会。文一独、理一独の新入寮生十四名出席す。於寮娯楽室。

○四月十七日　新入寮生懇談茶話会　理一英新入寮生出席。

○四月廿四日　炊夫採用。

○四月廿七日　前日、西二寮、東三寮生のストームに類する行為をなしたるため、総代生徒係岩口生徒主事の許に召喚され、寮自治の精神を破壊する事のなき様厳重に注意され、且総代、ストーム禁止の声明書を発す。

告　　グ

本寮に於ては、ストーム及び之に類する行為は絶対に行はざる事に役員総会に於て決議し、是を堅く実施し来れり、此の間の消息は屢々生徒主事より訓話したるにも不拘、最近、往々此の禁を犯す者あり。ここに至つては寮生自治の面目上誠に遺憾とする所なり。

爾後左の諸項を厳守し善美なる寮風の発揚に一層の努力を求む。

一、ストームは絶対禁止す。

一、ストームに類するが如き、数人会合して大声放歌し、あるいは廊下を練るが如き事を禁ず。

一、一室に数多集合して、高声談論放歌高吟する等、苟も他処の勉強安眠を妨害する事あるべからず。

以上各項を犯すものは寮生自治の破壊者と認め退寮せしむ。

昭和六年四月二十八日　　総代一同

生徒主事

○四月二十九日　天長節式後、西公園において新入生歓迎遠足会を総務部で挙行の予定なりしも、雨天のため変更して、式後赤飯を各人に渡し九時より音楽部開催の音楽会、レコードコンサート等寮食堂において行いこれに代えた。

○五月二日　乱舞会準備。放課後則松総代外一名津屋崎に寮生遠足会の下調べに出張す。

○五月六日　新入寮生歓迎大乱舞会の下調べのため、岩口生徒主事以下二名、深江方面に放課後出張さる。

○五月八日　役員会及び本年度寮会費予算会。

○五月九日　新入生歓迎大乱舞会開催。寮生百名、寮務係四名、玉泉生徒主事参加さる。糸島郡深江海岸に遊び、白砂青松の間に野営、夜は乱舞会を行い、翌日網引、船遊をなして、翌日曜日、五月十日午後二時帰校す。

○五月十六日　寮総代、生徒主事寮務係と中食を共にして懇談す。主に盗賊防止の件について話す。

○五月十八日　東一寮生徒懇談会。各主事、寮務係出席。

○五月廿二日　東二寮生徒懇談会。於亭々舎。

創立十週年記念事業の企画。五月二十二日の生徒課日誌を見れば、『文科総務武田君外二幹事、プールあるいはホール何れかを創立十週年記念事業として建設したしと部長まで申し出でしが、部長先づ資金の問題が先決問題である故、未だ表面化せざる様注意して帰らしむ。』とある。

○五月廿四日　ストーム問題。

廿三日夜十二時過ぎて、文二甲古賀稔ストームに参加しガラス数十枚破壊、また文二甲加藤保雄午前一時半ころ、白衣、白袴、黒羽織紋付姿にて単身全寮を襲つた。この事が生徒課に判明し、翌廿四日、生徒課に呼ばれ、ガラス代弁償、且退寮処分となつた。

かゝる事は現在の我らの眼から見れば、日常茶飯事の事なれども、ストーム禁止の厳令を犯した事は、本寮自治の精神を体得せざるものといえども、彼らの情熱意気、若さは共にその当時の本寮には必要なものではなかつたろうかと思はれる。新入生の感想の中にも、案外高等学校の寮は大人しい所だと思つたというものが大部分であり、自治、自由といえども、その実権は生徒課が握りしを見ても、彼ら当時の高校生の苦悩の一部を察し得る事と思う。

翌二十五日、西一寮の懇談会を中止寮総代会が開かれ、生徒課員全員出席す。審議は前日のストーム事件に就いてであつて、総代、生徒課員談会の上、破損ガラスを弁償せしめ、左の者四名を退寮処分とした。

文二甲、加藤保雄君　文二甲、古賀稔君　文二甲、広中愛三君
文二甲、山口好郎君

○六月八日　寮報原稿の検閲行はる。不合格、記載禁止のもの三あり。

○六月十五日　寮図書委員、岸秀一君生徒課に召ばれ、寮報発刊に注意を与えられる。

○六月十八日（ママ）　頭髪に注意されし者あり。

○六月十八日（ママ）　寮生感冒に襲はる。患者十八名に及ぶ。

○六月二十三日　寮報発刊さる。

○六月二十七日　寮総代会、灯火管制実施の件。来る七月一日灯火自由管制に関し、その実施方法等を協議し、各寮総代に於てその責任を持ち処置する事とした。寮報二部内務大臣に届出発送。

○六月二十八日　寮学芸雑誌を寮図書部に於て企画、内務大臣に手続きを取る。

○七月一日　第一学期試験開始。灯火管制予行。流行性感冒のため寮生七名試験を休業せし者あり。

○七月六日　第一学期試験終了。寮報第七号原稿募集掲示。

（第二学期）

○九月一日　午前九時開寮。

○九月九日　総代会議。寮務係、生徒主事岩口教授出席の下に会議室にて開催。

○寮生激減の原因如何。先学期より在寮生二十四名退寮せし事は、寮風の発揚に大いなる影響を及ぼす事である。寮生生活の発展のため寮生全員反省すべき事。

○創立十週年記念寮報発刊に対する件。

○青陵亭寮生の利用者半減せし事などの原因のため、その経営困難となりしため、請負制度となす。

○食費値下げの件。

○九月二十一日　総務選挙。

文二甲　白土八郎　一一九票　当選
文二乙　広安春三　一一二票　落選
文二丙　鵬田清　八九票　〃
理二甲　鬼木喬　無投票　当選

○九月二十二日　役員総会。於寮会議室、決議事項左の如し。
○食費は一日当り五十銭を十月より四十五銭とす。
○十一月八日　寮祭の飾物をなす事。
○十一月八日　寮バザーは反対意見あり。この件は後刻に廻し審議する事とす。
○理科総代則松君、病気のため代理総代を設ける事とす。　以上

なお図書部は次の事を会議において発表した。

寮祭装飾係　橋本君　岡村君
寮報係　岸君
賞品係　千田君

○九月廿九日　電灯の件。
従来までは、寮生使用の電灯は、一部生徒間に於て高燭電光を使用するものありて、そのため電力の使用量不公平となる故、寮務係は、これを一室一灯に限定し、一六燭光となす。

○九月卅日　寮歌募集を締切る。応募者左の如し。

静寂にねむる　原十三日
寮創立十周年を祝して　山口友治
福高防人の歌　万足卓
玄洋溢れて　平田美光
人生旅路遠けれど　千々松清
寮歌習作　那須規亮

○十月一日　寮歌入選者発表。浦瀬教授に橋本君を介して選択を依頼し此の日食堂に発表した。

入選歌発表

一等賞　創立十周年を祝して　岸秀一（文二乙）
二等賞　一席　玄洋溢れて　平田美光（文二乙）
　　二席　静寂にねむる　原十三日（文二乙）
三等賞　人生旅路遠けれど　千々松清（文一丙）

○十月十日　広島高等学校寮視察のため、寮総代成良一郎君（文二丙）、炊事委員石橋始君（文二甲）、同長信彦君（文二丙）以上三名広島高校創立記念祭（十月十一日）視察のため出張す。

○十月十五日　広高視察報告会。先日広島高校へ出張視察を終へた寮役員三名の報告会を開催した。それによれば、広高では、父兄及卒業生の宿泊所があり、学校側と父兄、卒業生との連絡を綿密にしている。又寮室内において寮生の消費する木炭費は全額学校より支給する。又校長、主事等が寮生数名を順次召喚して食事を共にしながら親しく膝を突き合はせて懇談会を催ほす等々である。この最後の事項は、出張寮役員の希望として是非本校でも実施して貰ひたいとの意向であつた。

○十月十六日　五高、七高へ寮視察のため寮総務万足卓、那須規亮出張す。

○十月廿一日　青陵亭の件。生徒課員中食懇談会に於て最後に寮売店青陵亭の経営困難打開の件提出され、その結果、青陵亭経営者水上閣主人に依頼し、家賃十円、水道料、電気料は寮で支払ふ様契約して、開店の努力を願ふ様にする可く可決され、早速先方に問ひ合はせた。翌十月廿一日水上閣主人、矢鳴和夫氏来寮種々の打ち合せをなす。

寮報。寮図書部では、今年度初頭、寮報第六号を発刊したのであったが、今年度記念祭は丁度本校創立十週年記念に当るので予て計画中の十週年記念号（第七号）の発刊の準備をなしていた。九月十日には卒業生への原稿依頼の書状も発送を終り、寮生には、一学期末に既にその掲示をなしていたのであった。十月廿日には既に先輩応募者十三名あり。十月末日にはその検閲も終了した。

○十一月二日　寮役員総会。記念祭の飾物及バザー等の準備の打合せを行う。

創立十週年記念祭。

大正十年十一月八日、勅令第四百三十二号を以て文部省直轄諸学校官制中改制福岡高等学校を設置せられてより、満十年の星霜を経過した。十年必ずしも長きに非ざるも、創業の十年は、その意義大である。他の先進高校と比肩すべくその創業の努力は、実に並々ならぬ程であつた。秋吉音治校長の下に、その融和正に一家族の如く、その薫陶実に全校生徒の良導となり、新進福高の意気をみせたのであつた。高等学校というものが、如何なるものであり、又如何なるものであつたかは、賢明なる先輩諸氏に対して我らが云々する事は許されざる事であろう。ともあれ、我が青陵は地方文化の発展と共に、その開設をみたのであるが、この十年間、秋吉校長の学問研究と地方文化の涵養とに十分の力を致すべき教育によりその創業の期も過ぎた。

創立十周年記念行事一覧

記念式並慰霊祭、十一月八日、午前八時――午前十時　本校講堂

考古資料展覧会、十一月七・八・九日、本校標本館（玉泉館）

近世法制経済社会史料展覧会、十一月七・八・九日、本校教室

古版本展覧会、十一月七・八・九日、本校図書館

物理化学動物植物鉱物図学展覧会、十一月七・八日、本校特別教室

美術展覧会、十一月七・八・九日、本校剣道場

浮世絵展覧会、十一月七・八・九日、本校休憩室

記念音楽会、十一月八日、講堂

記念大運動会、十一月八日、運動場

記念寮祭、十一月八日、寄宿寮

記念講演会、十一月七日、市記念館

淡路及文楽を中心とした人形芝居　安田教授

科学の発達と思想の動き　浜田講師

総務部を中心とする全校一体の記念祭事業も七日よりその幕を切つて落された。

一、記念式。本校創立記念日、即ち十一月八日午前八時より十週年記念式を講堂においてあげる。幾多先輩の度々列席せられた、あの荘厳なる講堂において、創立以来、青陵の発展を双肩に担はれた秋吉校長先生を始め教職員並に卒業生在校生一同、光輝ある校旗の下にわが青陵の十週年記念を満腔の喜悦を以つて祝賀した。校長秋吉先生の式辞、卒業生在校生の祝辞、此の喜は筆に絶する。当時の社会状勢に鑑みて来賓の招待の如きは形式主義を排したが故に一層家族的団欒の雰囲気の中に此の芽出度き式を畢へたに相違ない。記念式次第の一項に同窓諸兄の美はしき情誼の結晶としての十年勤続教官に対する謝恩記念品贈呈式が加はる。幹事の一人が諸兄を代表して恭しく記念品を呈上する。記念品は恩師各位の御意志を尊重し物質的なものを排し、十年勤続記念写真を清楚なる額面にしつらへて差上る事とした。その時の満堂の拍手は此の情景を今に尚つぶさに伝へる事であろう。十年勤続の諸先生は左記の通であつた。

秋吉校長、吉村教授、岡田教授、宮永教授、玉泉教授、樋田教授、不破教授、米山教授、松岡講師、秋山（教）教授、加川主事補、藤田講師

二、展覧会。十週年記念計画中、学校側の計画は主として展覧会に集中された徒に御祭騒よりは遙かに有意義のものだとの学校の方針に基く。

（一）考古資料展覧会。玉泉教授が十年来苦心蒐集され、又篤志の方々が寄贈された考古資料数十点を所蔵せる玉泉館を七、八、九の三日間公開する。玉泉館の建物は直轄学校中、稀に見る設備であり、玉泉館の所蔵は全国に誇るべき内容をもつものであつた。

（二）近世法制経済社会史料展覧会。これまた、玉泉教授の蒐集せられし史料を中心に、県下旧藩時代の史料を所蔵せる旧大名家、その他の旧家の好意に係る出品を加へ、本校三教室に陳列し七、八、九の三日間公開する。その数量の豊富と内容の精撰とは相俟つて県下近世史料の完全なる集成と称し得べく、同好の士にとつては再び得難き研究の好機となるであろう。

（三）古版本展覧会。玉泉、田村両教授の協力に成る企劃に依り、田村教授珍蔵の古書籍に、九州各県及山口県下図書館、学校並に県下社寺等の蔵書の出品を加へ、印刷文化の発達系統を示せる展覧会で、これまた学界の計画、一般に裨益する事甚大なるものであつた。於図書館

（四）浮世絵展覧会。田村教授秘蔵の逸品百点余を中心として、本校休憩室に於て七、八、九の三日間公開、固有美術の粋、来館者を魅したものであつた。

（五）物理化学動植鉱物学展覧会。理科系各科の展覧会は物理実験室を開放して七、八の両日之を開く。X線の実験、五官に訴える化学、顕微鏡写真、郷土中心の地質標本、製図成績品等は最も参観者を啓発したものであつた。

（六）絵画展覧会。牧川教授、藤田講師の傑作を始め、生徒の作品を本校雨天体操場に於て、七、八、九の三日間公開する。芸術精進の跡は、年々の展覧会にこれを窺ふ事の出来るものであつたが、本年度は特に記念展覧会の事故、観衆の目を驚かすべき力作が多数出品される。

三、講演会。記念講演会として七日午後六時半より市記念館に於てこれを催す。

淡路及文楽を中心とした人形芝居　安田教授

科学の発達と思想の動き　浜田講師

四、音楽会。記念日当日、正午より午後二時まで、卒業生及在学生の演奏を公開する。

五、運動会。校友会の重大行事たる運動会は、今年は記念大運動会として一段の力瘤を入れ、記念日当日に挙行した。各種目の文理科対抗戦は蓋し当日の呼物なりしとか。

六、寮祭。これもまた、年中行事の一つなるが、十週年記念の事として格別の趣向が凝らされた。飾物に、バザーに、寮生の意気と熱を傾け尽したのであつた。

七、園遊会。卒業生諸氏の多数が青陵在校中楽しんだ、あの遠足会、タラフクパーテイー、乱舞会を九日、校内において挙行した。余興に音楽部も参加してこれに一興を添えたのだつた。

これで大体創立十週年記念祭は略述したのであるが、一方寮においては、我が青陵の創立十週年に当るので一つ最も盛大にやろうといふ

事になり、寮祭委員の組織されたのが十月中旬、それから寮では総代以下約三週間、大騒ぎでそのスケジュールを組み上げた。寮祭前日の忙がしい事、全く言外であつて、やつと時間までに出来上つた程だつた。

先づ玄関入口は市内装飾屋に依頼したアーチでかざられ、中央には、総代淡河氏の筆になる『創立十週年記念寮祭』と墨痕淋漓たる額が掲げられ、それをくぐると、菊モール、三色モール、万国旗、造花で美く装はれた、玄関、両側には万国旗、造花、漫画で飾られた廊下が展開し、ほがらかな寮祭気分に恍惚となる。応接室は来賓室に早変り、先輩の顔もほころびる。食堂入口に設けられたのがこれ又、眼もまばゆいばかりの美しきアーチ、ウエルカムの額をくゞれば寮バザー会場、早朝より、善男善女集ひ来り、接待係の寮生、不馴れな手つきに危なくこぼれそうになる飲物にも愛嬌たつぷりだ。階下各室は、青陵名物デコレーション、奇才天を抜く寮生の頭がひねり出した代物である。華やかな旗、美しい金モール、眩ゆい電灯、参観人のさゞめき、寮生の忙がしそうな姿、それらが混然として弥が上にも寮祭気分をそゝる。

愉快にそして美しき青春の感激を湧かせた創立十周年記念祭も果しなき秋の憩の中にあはたゞしく過ぎ去つた。寮生の瞳も、深くすむ蒼穹の紺碧の中に溶け込む時、あの華けくも又美しき青春の姿はその後に何を残し、何を追つて去つたであろうか。

○十一月十三日　寮役員総会、記念祭の件。

先づバザー委員よりバザーの決算報告あり、後記念祭の経過につき種々批評意見を交換した。それから寮運営の問題に移り記念祭前より懸議されてゐた、各寮部屋の電球統一を審議し、一室一灯、一六燭光とする事となつた。

寮生に創立十週年記念品を贈る件、文献なきため、その時何を配せしかは不明なれども寮積立金中弐百円を支出する事に決議した。

中食会の誕生。先般、広島高校寮視察のため出張した寮総代成良一郎君、炊事委員石橋始君、同長信彦君の視察報告会が催されし時、彼等の報告談中、広高では校長、主事等と寮生数名とが膝をつき合はせて云々という談話があつたが、この制度は当時の社会的客観情勢に鑑みて当局の最も恐るゝ所の、しかして最も力瘤を入れた所の思想善導という意味において最大の効果をあげ得るものであつたろう。その点において生徒課と生徒というものは常にその接触を保つ事は必要であつた。また寮生の一部には、この談話によつて、是非寮にもこういう制度が欲しいという要望もあつたので、この中食会の誕生が見られた。それは毎週月曜金曜の中食時、各生徒主事、生徒課寮務員と寮生役員との中食をかこんでの懇談会であり、来週よりこれを実施する事となつた。ここに千々松清氏の中食会の話を引用してみよう。

『寮の役員をやる様になつてから、毎週月曜金曜の昼食は舎監と委員が全部事務室の横の畳敷の部屋でスキヤキ鍋をつつきながら、色々と懇談する慣しであつたから、私は自ら焼手を買つて出て、色々とスキヤキの方法を研究してみた。肉、砂糖、野菜、しらたき、焼豆腐、醤油などの入れ具合、煮る順序などに一応の心得を得たのであるが、爾来、会合の席でスキヤキが出ると我流を通して他人様の賞味に預かる事が多いのも『学び而うして時にスキヤキを食ふ。また楽しからずや』の賜物であろう。』

○十一月十四日　学而寮命名式。

秋も愈々その深みをまし、至る所、美しく紅葉の美はしく映ゆるとき、未だ記念祭の感激から抜け切らない寮に又一つ喜ばしき事が起つ

た。それは寮の命名式である。

寮名命名は、我が寮においては、既に昭和初期にその気運表はれ、且一部少数の寮生には強硬にとなへられたものであつた。寮名命名と今にして思へば、何らの意義も、そこには存しないかの如く思はれるのであるが、そこに一度深く眼を致せば、寮生全体における寮意識、換言すれば寮の自治といふ問題に彼らが再びその眼を向けた事である。昭和初期の創業完成期以来、福高寄宿寮といふものは常に学校当局の手が入つてゐた。特に左傾思想の学園浸透以来、その力は非常に大きく寮自治といふものを弱少化して終つた。一例を挙げれば、寮祭デコレーションの検閲であり、文芸雑誌の原稿の検閲であつた。また他の一例には、寮規約の決定改正等には、全て生徒主事がその決定権を掌握してゐたのであつた。昭和四年以来六年学期間に起れる官立諸学校の大小紛擾事件の数のみでも百五十、その間青陵にもその思想は滔々として流れ入つたのであつた。相次いで惹起される学校争議、思想的混沌、更に続いて自由主義思想、炎々と燃ゆる坩堝と熱し切つた学生思想界、その中にあつて、彼ら学生は、何か自己の支柱となるもの、自己を支へて呉れるものを焦心をもつて求めて行つたのであつた。静かな学生々活、月光にそびえて立つ象牙の塔、彼らは如何に限りない憧憬をもつてこれに進んで行つたであろうか。伝統、もはや、彼らはそれに生きて行くより他に手段はなかつた。そしてその静まるを待つより他に自己のなす事を知らなかつたのであつた。

かゝる時、我が学而寮の命名は行はれたのであつた。学而寮の命名が具体化されたのは、五月十八日、寮総代六名は寮生の意とする所を生徒主事に伝へたのであつたが、その翌々日、即ち二十日に至りて、岩口生徒主事より寮名命名の件、学校校友会役員総会に於て寮生間より募集の承認を得た旨伝へられた。十七日食堂の黒板に左の如き落書が大書？してあつた。

我等の寮が校長より命名されるのがよいか、又は我等自らが名乗るがよいか。

自治の真髄は如何？

断然我ら自治を名乗るべし

同感！

この落書からも判断され得ると思うが、所謂寮の守成期において沈滞した自治思想を振起せしめんとしたものであつた。

それ以後、早速寮食堂にその旨掲示し、その名を募集したのであつたが、それが具体化したのは、二学期記念祭前の事であつた。即ち、九月末日締切として一般寮生よりその名称を募集し、且秋吉学校長にもその旨伝へ、考慮下さる様お願ひしてゐたのであつたが、寮生の応募名を秋吉校長自ら撰考の結果、当時理二甲に居た佐藤健児君の『学而寮』が当選し、これをもつて寮名とする事となり、寮生一同も満足したのだつた。先輩の話をかりれば、漢学者であつた秋吉校長は大御満悦の体なりしとか。

十月八日には、寮名掲示が総代の手を通じて生徒課に申し込まれ『学而寮』の名前が生徒控室に掲示された。

かくて記念祭前に寮は『学而寮』と命名されたのであるが、記念祭も終つて一通り落ついた時、記念祭後の寮生一同の慰労会を兼ねて、学而寮命名祝賀式が食堂において盛大に挙行された。先づ総代淡河君、立ちて開会の辞を述ぶれば、吉村校長代理の挨拶あり、次に三生徒主事、岩口、玉泉、木村三教授の祝辞をかねた言葉があつて、寮総代淡河君、挨拶、しかして後新十週年記念祭寮歌、創立十週年を祝して

『黎明の筑紫に……』を合唱、直ちに余興に移り、果しなき秋の夜の歓楽も盛況裡に幕を閉ぢたのは、十一時過ぎであつた。

○寮関係十年勤続者表彰式。先の学而寮命名式と共に寮関係勤続者表彰式を挙行した。

表彰者　松岡、加川両寮務係、原田校医、炊夫阿部及大神

○十一月二十日　中食会。

学資不足者の家庭教師その他の原因のため学期中途にても退寮を許可する事は止むを得ない。

次年度寮総代選挙の下相談等をなす。

次年度総代立候補者発表さる。

文二乙　岸　秀一　文一甲　立石任夫
文一乙　安原健夫　文一丙　福山正美
理一甲　安田寅四郎　理一乙　中西　通

十一月二十六日発表

中食会

○バザー売上金決算を急ぐ事。

○学期途中退寮生は、寮会費、電灯料を学期末まで納入する事。

○寮会費は各学期初頭に納入し、且途中退寮生には返金せざる事。

○十一月廿八日（ママ）　総代選挙。

次年度総代当選者

文二独　岸　秀一　理一独　中西　通
理一英　安田寅四郎　文一仏　福山正美
文一独　安原健夫　文一英　立石任夫

○十一月二十六日（ママ）　昭和七年度炊事委員選挙。

その結果、次の如く定まる。

文一英　坪内　肇　文一独　川原規矩夫
文一仏　淡輪憲二　理一英　白川　弘
理一独　石原　直

○十一月卅日　満州出征軍人慰問金拠出。

中食会に於て、寮バザー実収入の一割、三十一円十銭を九州日報新聞社に依頼して満州出征軍人慰問金として送附した。

○十二月二日　記念撮影。寮図書部はその後、創立記念十週年号として寮報第七号を出版準備中であつたが、原稿も十一月末日には全部揃い、且印刷の依頼も終つた。故に寮報口絵として校長、生徒主事、寮務係、全寮生、炊夫、小使全員寮玄関に於て写真を撮影した。

○十二月四日　中食会開催。放課後、夕食を囲んで、新旧総代事務引継ぎ、並びに懇談会を行ふ。尚、バザー収支決算表作成され、寮生一般に発表す。

バザー収支決算表

一、収入之部

(イ) バザー券前売現金収入高	五〇五円三二〇
(ロ) バザー券当日売上高	五三八・七〇〇
(ハ) バザー券前売分未納高	一五五・四三〇
合計	一一九九・四五〇

一、支出之部

(イ) 販売代台湾物産外九名に支払高	八四五・三五〇
(ロ) 案内状其の他印刷物人夫賃雑費支払高	五五・四六〇
(ハ) 記念品代支払高	三〇・〇〇〇
(ニ) バザー慰労会兼十週年記念祝賀会費支払高	五三・八〇〇
(ホ) バザー券販売者への報酬支払高	三三・二〇〇

合　計　一〇一七・八一〇
一、差引利益金　一八一・六四〇
一、満州守備兵慰問金贈呈高　三一・四〇〇
一、両差引利益金残高　一五〇・二四〇

○十二月十四日　寮報第七号発刊す。
○十二月廿三日　正午閉寮。

（昭和七年）

○一月七日　午前九時開寮。
役員選挙　一月二十一日、昭和七年度の図書園芸部及運動娯楽部の委員選挙行はれる。

図書園芸部委員
文甲　富永誠一
文乙　野口倉次
文丙　千々松清
理甲　高木豊

運動娯楽委員
理乙　大塚二彦
文甲　渋谷良太郎

以上は昭和七年度の図書園芸部及運動娯楽部の委員である。
○一月二十五日　新役員総会。
○二月五日　寮第八回卒業生送別。
○二月十二日　寮役員総会。寮内の土足問題、及東一寮、西一寮の階下窓に格子を備へる件談合す。
学而寮改善案、二月二十三日開催の評議員会において秋吉校長は次の如く言明された。即ち、

1、南窓（東一寮、西一寮廊下側窓）に格子取付けの件承認
2、各寮務係を増員し寮生指導に当るの件
3、会議室を畳敷きとなしより有意義に利用する事
4、寮生訓育の徹底を期するため学校としても時には適当の制裁を加へる必要ある事

等であつたが格子の問題は早速実施される事となつた。
亦楽斉落成式　三月一日
新入生寮収容方法正案
○二月二十八日　秋吉校長は、来年度より新入生入寮方法改正について見解を発表された。従来我が青陵では、学則第六十四条に基き、新入生は自宅通学生以外は全員寮に収容し教育の徹底を期すべく寮則が存在していたのであつたが、実際面に於てはこの条項は空文に等しく適用されなかつたものであつた。しかしながら相次いで起る学生紛擾事件等は学生生活の暗黒化を意味し、思想的混沌は益々度を加へるばかりであつた。右翼と左翼の思想的対立、それらは、引いては、彼ら当時の学生間にあつて互に反目し合ふが如き不穏な感情がただよふ事も何となく感ぜられるものであつた。そういふ風雲急を告ぐるといふが如きものから脱する事、到底それは歴史的必然とでもいはねばならぬ事から脱する所に当時の学生思想界の悩みがあつたのだつた。かかる立場より秋吉校長はこの学則第六十四条を新らしく適用する事にしたのであつた。秋吉校長は次の如く言明した。『福岡高等学校では、昭和七年度の入学者から第一学年生は全部学寮に収容する事にする。最も自宅通学のものには適用しないが当地に下宿するものは全部入寮を強制する事にした。思想上経済上教育上の諸方面から多年の経験に徴して従来励行を差し控えていた学則第六十四条を実行する事にした

のみで別段新制度を敷いたわけではない。学寮はあくまでも重要な教育の道場であると考える。』と言明されこれによって学寮も又一大変革を来し、新年度にそなえて新しい息吹が漲った。

○三月九日　昭和六年度最終の寮役員総会開催。中食を共にし新学年度よりの寮生々活の方針等協議懇談す。

議決事項

一、昭和六年度バザー利益金使途について提案、ラジオを寮食堂に設置する事

二、土足混同の件

（イ）一般的警告を発し、全体に徹底せしむる事。それはすでに前に発し成績良好なりと認む。

（ロ）個人的注意を発する事。

（ハ）その他の対案を認めず。

三、門限外帰寮者出入に関する件

（イ）日曜日の門限を十一時とす。

（ロ）校門の傍門を寮門限と同時に閉鎖ありたし。

（ハ）寮生は正門より小使室の横を通るべし。但しこのため下駄にて廊下を通行するものの増加を懼る。

風雲急なる昭和六年度も終り、また再び春めぐり来らんとする。

【昭和七年度】

○四月八日　開寮。午前九時。

○四月九日　午後四時より入寮式を寮食堂において挙行す。

○四月十日　寮歌練習始まる。

学而会の誕生、前学年度までは、寮生及生徒課員（各生徒主事、及寮務係）との懇談会として行はれてゐたものが、昭和七年度より新しい名称すなわち『学而会』なる名称に変つたに過ぎないものであつて、思想善導の意味においても、また生徒と教職員との融和をはかるためにも非常に有意義なものであり、時には、教授を招いて種々の講演等も聞いたものである。

昭和七年度第一学期初頭の学而会日割は左の通りであった。

四月十二日（火）西一寮　会議室　午後五時

西二寮　娯楽室　同　〃

四月十三日（水）西三寮　会議室　同　〃

東一寮　娯楽室　同　〃

四月十四日（木）東二寮　会議室　同　〃

東三寮　娯楽室　同　〃

四月十五日（金）全　寮　会議室　同　〃

この大学而会において、秋吉校長の訓示、岩口生徒主事の訓示ありて後散会す。

校長の演題、富士山　　主事の演題、自治の本領

○四月廿一日　新入寮生歓迎大晩餐会開催。吉村教授その他寮関係者全員出席され、意義深く時を過した。式後ファイヤーストームあり。十一時半散会す。

○黄金文学　落書、昔から高校の便所内の落書は有名なものだが、これを禁止すればする程益々それは激化するばかり。而して理科の寮生には、黄金文学の士も少なかつたらしいが文科の寮生には、また多くあり、殆んど読んでナンセンスに近いものが織り込まれている。権威への反逆、痛烈な時代諷刺、偶感？　疑惑、盲目的意志。そしてあらゆる自己への命題、警句等々。

一例をあげれば

文仏（東三寮）の便所では、

いそぐとも西や東にひかりけん　桜の花も散ればきたなし。

人生恋が死か　さもなくば死を選ぶべきなり。

学而時飲酒不亦楽哉矣。

西一寮、西二寮の中には、

ストーム恋しや岩口にくや、月に向つて俄雨　ホイ〳〵。

人生とは憂鬱でつくられたる殿堂ではないか？　答を望む。

我ら六百の自由は自治ばかり。

等々であるが、これが生徒課員の目に入りて直ちに寮総代召集され、その対策を講じた。即ち全部消さしめる事であつた。その後、寮総代より落書に対して一般的注意が与へられる事となつたのであるが、今からして思へば何か不思議な気持である。

○五月六日　『上海事変に就いて』という講題で会議室にて講演会開催される。講演者泉氏は、長崎高商を卒へ多年上海にて実業界に雄飛せし人物なりとか。

○ドンタクと寮生　博多名物の一つにドンタクなるものがある。これを語源的にたどれば、オランダ語のゾンターク（日曜日の意味）から来たものであるといはれるのであるが、この日こそは、年に一度の博多ッ子の意気を湧かす日なのだ。『ボンチ可愛い、ねんねしな……』博多の町々には、仮装に身をまかせた連中がうねりあふれる。この日こそは、博多の謝肉祭であると共に又、福高生のそれでもある。

踊る阿呆に、見る阿呆、そして又踊る連中の正体を見届けんと虎視タン〳〵たる一団は又これこそ阿呆の骨頂ならんか。福高生も又それ〳〵阿呆が多かつたらしい。或る時は、ドンタクとて生徒課員の眼を光らせた事もあり、中洲あたりの縄ノレン街を飲み歩いた事も又この日の事であつた。

○五月十四日　乱舞会。於志賀島。

○五月二十日　総代中食会。定例中食会開催され、次の事を協議する。即ち、

一、六月上旬頃、寮防火演習の実施の件

一、各寮遠足会の件

一、寮内履物の件、其の他の件

尚この日、午後六時役員会議あり、寮内履物の件につき討議する。従来、上草履の使用については、絶対厳守の事として、定められてあつたが、やはりうまく行かず、直に上下兼用となるので、この件については、常に総代の頭を悩ます事であつた。故にこの時、役員会議に於て、上草履は、赤色のものを使用する事に定め、その厳守を声明したのであつた。

○五月二十七日　総代中食会。防火演習、六月二日（木）に決定す。

○六月十三日　防火演習。六月二日の予定なりし防火演習は、雨天のため延期、本十三日行はれる。

寮格子設置の件。格子設置に関しては、前にも一度述べたのであるが、何んとこれこそ、我が学而寮の動物園化である。格子の設置は当時、頻々として寮を襲ひ来る盗難防止のためであつたが、実にこれこそ寮自治の冒瀆だつたのだ。寮において東一寮西一寮の運動場側の窓には、今でもその格子が、所々折れ曲り、あるひは朽ち落ちているのが見られる。六月二十七日、放課後寮役員総会が開かれたのである。生徒課長岩口教授より、この際寮には格子作製が当然なりとその理由を説明され、一部寮生の不心得？をいましめられたのであつたが、そんな事で大人しくなる様な寮生ではなかつた。総代は主事より、之ら

同僚の取締りを要請されたのであつたが、怒号と喧噪の自治の子等に如何とも為す能はず、今暫し時期を見る事とした。緊急委員会は、絶対多数をもつて反対の意を表し、痛烈なる反駁論は次から次へと絶叫されたのであつた。而して遂に校長の許までその問題がもち出され、格子設置は暫時見合される事となり一応の結末はついた。

○七月七日　第一学期終了。正午閉寮。

（第二学期）

○九月一日　午前九時開寮。

○九月二日　二学期初の総代会議開催される。寮炊事員生徒課各世話係、寮務等出席し、種々懇談あり。炊夫使用法、並びに手続き等に関し改正案提出され、先づ阿部（謂はば炊夫長の如きもの）に雇人の請負をなさしめる事に決定する。炊夫大神十年勤続、辞任帰宅のため、生徒課より十円、寮積立金中より五十円謝礼として与へる事とす。

寮史跡研究会の誕生。寮内には種々文化的な趣味団体、研究会等設置されてゐたのであつたが、今回玉泉教授の下に数名の者集まり、史跡研究会が生れた。会員は次の如し。

岸　秀一、阿曇磯興、岩野　徹、吉武孝樹、菊地徹之、金子正義、林田守助

尚この会は、学校附近の史跡、名所、旧跡等の研究をなし、日曜祭日等寮生遠足散歩の目的地に便するを目的とし、且、それらを学的に研究するにあつた。

○十月九日　第十一週年創立記念祭。

寮祭。大運動会に青陵人の意気を高鳴らしめる記念祭がめぐつて来た。この年の記念祭の催し物の特徴としては、次の如きものを挙げる事が出来る。飾り物、運動会である。

飾り物に於ては、

寮祭（良妻）の始り、リットン報告書、日満提携、自力更生、不景木

等であり、特に時局柄、時代諷刺が多かつた。当日の人気の焦点は『モダン人相見』であつた。ボタンを押すと幻灯仕掛でスクリーンに文字が表はれる。『高校生に恋してますね』が当つて悲鳴をあげて駆け出す女学生『お母さんのいふ事をききなさいね』が当つてはにかむ小学生『真面目だから成功します』で悦に入る中学生『何とよい夫をおもちですこと』が当つて、恥かしい様な、嬉しい様なにたりと笑つて俯向いて去るよその若い奥さん。その度毎に、スクリーン前の観衆の黒山から歓声と笑声が起る。

また更に『真理の部屋』といふのがこれに劣らず人気を博した。真理を求める者は、この小径より来れ、と大書してあるのだが、いぶかりながら覗きこんだまではよい。『汝何ぞ醜悪なる』と大書されその横に大鏡一張が置いてあるのであつた。真理とは外ならぬ『汝の顔』だつたのだ。

運動会においては、文理科対抗競技とし、山笠などが担ぎ出されて来る仕末であつた。

○十月十六日　五高、七高寮視察に出張。総代理二独　中西通、理二英　安田寅四郎、文二独　安原健夫の三総代であつた。

○十月二十二日　秋吉校長渡欧さる。

門司出帆の箱崎丸で欧州視察のために旅に上られる秋吉校長は、廿一日午後三時二十八分博多発門司へ向はれた。全校生一同、校長の長途の旅を祝して見送りに行つた。

○十月二十四日　次年度寮総代立候補者決定。

文一甲　常岡寿一　文一乙　菊地徹之
文一丙　高田金三郎　理一甲　近見始
理一乙　真辺武利　理二乙　中西通

○十一月四日　総代と寮務係との連絡会開催。
一、五高、七高への先般の寮視察報告
一、ストームによる廊下破損の賠償をなす、東三寮、参円四十銭、西二寮、参円八十銭である
一、寮で計画中の阿蘇登山計画の経過を報告す
一、次年度寮総代選挙は臨時試験終了後になる事に決定す
○十一月七日　総代中食懇談会。
一、遠足会の件
一、バザー売上金、並びに会計決算報告
○十一月十八日　役員中食懇談会。
一、阿蘇登山の人員その他日程の件
一、本館防火演習準備状況
一、次年度寮総代決定
昭和八年度総代左の如し
文一甲　佐々木正実　文一乙　菊池徹之
文一丙　安川泰　理一甲　近見始
理一乙　真辺武利　理二乙　中西通

阿蘇登山　今学期初頭より計画されて来た阿蘇登山は、十一月十九日、二十日の両日に亘って行はれた。この日寮生参加人員九十二名であった。今は、彼ら九十余の寮生の阿蘇登山の姿をしのぶ由もないが、しかし、彼ら九十余の青陵人が、大自然に接して感じたものはまた我ら現在の青陵人にも解る様である。

十有余里、巍々蛇々として天にそそり立つ大阿蘇の群山は、あたかも天地の間に黙々として伏す巨人の如く、時到りてか噴煙空に冲し、天柱揺ぎ、地軸折れんとするのである。『雲耶山耶呉耶越耶』と吟ぜしめたる天草灘、誰か悠久の自然に吾人の前途を祝せざるものがあろうか。

勉学と修養とに疲れた彼らを休め、また世俗的思念から離脱してしばし一泊の浩然の気を養ふのもまた意義ある事であったろう。

○十一月廿九日　新旧総代会。昭和八年度新総代の選挙後、事務引継ぎのため開催。
○十二月廿三日　閉寮。
（昭和八年）
○一月八日　開寮。
○一月十三日　中食時、寮役員の懇談会あり。
一、新役員としての注意事項
一、毎週金曜日、定例会食懇談会を開催の事、細事に渡るまでも希望意見等を開陳する事
一、草履及下駄の使用規定厳守、其他寮生に事故起らざる様注意す可し
○一月廿二日　七高寮総代三名我が寮視察のため来寮、見学す。彼ら頻りに感嘆の声を発し、又我が学而寮生の気分を讃美していた。
○一月廿六日　卒業生送別会行はる。今年は校医も出席され、卒業生の惜別の念溢るる演説を聴き、残寮生一同大いに感激す。夜九時半余興も終り、青陵原にて乱舞。

退職者に記念品贈呈。昭和七年十二月一日附退職松尾広二寮務員に対し先般来、中西総代等中心となり寮生一同より記念品贈呈のため、

醵金中の所、十五円五十銭集まり、これで置時計一個を求め進呈する事となり、本日、元松尾寮務員に贈つた。

○二月六日　月曜定例中食会。三学期も半ば過ぎ、そろ〳〵梅の話題も出る頃となつた。

決議事項

一、一月二十六日の卒業生送別晩餐会の時の不足額、三十円の塡補方法は寮会残額より支出する事とする

一、卒業生在寮記念メダル並びに役員記念メダルの支出は、前者は寮会費、後者は、養豚部より支出せしめる件

一、寮費滞納者の件、本人に総代より注意を促すと共に、本人の父兄に通知する事としたり

一、青陵亭の処分方法

一、炊事事務室改造の件、寮積立金中より二十円を支出す

一、木炭支給改正のため、欠損三十円四十銭を出す。この件、松岡寮務係に報告す。その支給方法については、種火専用を一俵となし、寮生に配給せしむる事となす

○二月七日　寮役員総会。協議左の如し。

○青陵亭処分方法名案なし

○寮事務室二階建を寮玄関の所に移転する方法なきか。盗難予防のためにも、また寮事務遂行のためにも、事務室は、寮玄関の方が便利なる件審議さる。

○寮玄関より本館通路の修繕を急ぐべき件、生徒課へ依頼の事

○上草履は昨年と同様、一年に二回支給する事とする

○寮生の品性と気風の浄化高揚のため、著名の士の講演会を開催する件

○役員中食会を毎週月曜日一回とし、更に徹底せしむる件

○寮会費を一円とし、電灯料は、八十銭と決定す

○史跡研究会員は、図書園芸委員とし、且これを一名増加せしめ、且寮史編纂委員をも兼任する事

等々である。

寮史編纂について。寮史編纂部小史として詳述するが、この時の役員会議で、始めてそれの話が公けにされたのである。当時は、高等学校なるものも、一高を始めとし、全国において官立高校は二十五校設置され、その制度も種々時代の変遷により変化して来たのだが、一応、その独特な教育の新天地を創造し来たつたのであつた。古きは、伝統六十余年を経過し、また新しきは、十余年のものもあつたが、皆夫々その伝統と歴史の名に於て、隆盛の一路を辿つて来たものである。歴史こそは常にその革新発展の基調たるべきものである。その中に流れる生命といふものを得て、その本に還る事こそ、発展の契機であろう。この意味においてその歴史を顧りみる事は大いに我々の生活に重大な意味をもつものであり、かゝる意味において、それは、認識されねばならない。蓋し、当時、多くの高校が寮史編纂を企画した事はもとより、我が学寮においても計画され、実行されたといふことは、祝すべき、また我らの喜びに堪へざるものである。

○二月十日　チブス予防注射。開校当時の止むを得ず閉寮の憂目を見たあのチブス事件を二度と重ねぬ様、市内発生のチブス患者多き故、予防注射を行う。

○二月十七日　盗難多し。浴室にて腕時計二個紛失す。

○二月十五日　総代より来年度一学期残寮希望調査の掲示あり。尚閉寮は三月十日、開寮は四月九日となる。

尚この日、午後一時寮玄関に於て記念撮影をなし、記念メダル贈呈さる。

時計盗難頻発す。

○三月十日　閉寮。寮の庭にもやがて楽しい春と共に新入生が入寮して来る。

【昭和八年度】

○四月九日　開寮を前に総代役員会議。新鮮な春の薫風と共に、学寮にも再び春の訪れが来た。役員らは新入生の受入れ態勢万全を期し、又今年度我が学寮の自治と自由のため、種々協議し、新入生歓迎会、大乱舞会、吟涼会等の計画、予算の編成等なした。

○四月十日　正午開寮。午後三時より入寮式挙行、式後健康診断あり。

○四月十一日　文甲、文乙寮生茶話会あり。松岡寮務係出席、寮生自治の手引を説明、新入寮生の寮自治への注意を中西総代与へ、もつて、自治自由への関心を促す。

『寮の気風といふものは、ともすれば世間の影響を受けて、面白からぬ方向へ流れんとするのは事実である。殊に礼儀、矜持等に於て然りである。要は、新入生入寮当時、うんと引締めねばならない。人間の印象といふものは、よかれ悪しかれ強いものである。総代を中心とする委員の気持が一致して、明るい、気持のよい、颯爽たる寮風を形成せねばならない。福高はあくまでも天下の独尊たるべきだ。近来、流行歌が寮生の口にのせられる。その理由は何とでもつく事だろう。しかし、青陵には青陵の歌がある。心の叫びだ。寮精神の把持こそ最も大切だ。』

（中西総代）

寮収容人員百三十五名、炊夫一名増員の要あり。

○四月十二日　文仏、理英、理独茶話会。寮総代寮自治の具体的指導をなす。

今学期の小学而会は次の如く行はれる予定となる。

四月十四日	東一寮	二十五名
四月十七日	東二寮	二十三名
四月十八日	東三寮	二十八名
四月十九日	西一寮	二十一名
四月二十日	西二寮	二十一名
四月二十一日	西三寮	二十一名

○四月二十四日　昭和八年度寮会予算会行はる。今年度は寮史編纂事業のため、図書部の予算百五十円増加す。

尚、編纂のため毎月養豚部より三十円支出する事を決定す。

○四月二十六日　新入寮生歓迎晩餐会挙行。新入寮生合計七十三名、秋吉校長渡欧のため吉村校長代理出席。六時開会。

一、歓迎の辞　中西総代

一、校長挨拶　吉村校長代理　岩口主事

一、食　事

一、余興大会

一、青陵原に於て乱舞

○五月五日　断髪令下る。昭和七年度初頭生徒課より出された頭髪に関する条項が、八年度に至り、生徒心得中に『第四条、頭髪は五分刈りとす』の条項が加へられ、具体化された。この結果、一二年生は殆んど、丸坊主となり、三年の一部のみが長髪族として残存し、青陵に於ては、この後、肩を蔽ふ長髪の生徒はあまり見られなくなつた。

○四月六日、七日　大乱舞会。

『九十の春光徐ろに光る処、見よ、玄海の浪華は
砕け、筑紫路の新緑蒼穹に映ず。
天地は正に若人の熱き血潮に波を打つ。
今や青陵の意気高く、あゝ狂乱の日は来る。
昭和八年五月六日を卜し、吾等は共に舞ひつゝ踊りの人生の哀を逃れて純なる感激に叫ばんとするのだ。
来れ、青陵の健児等よ！、六畳の小天地に跼蹐せずして天空馳る地球の野辺に走り、大宇宙を仰ぎて、その若き初夏のリズムに合はせながら煙波けむる深江海岸に二日の行楽を楽まうではないか。』総　代

この檄にはじまる深江海岸の大乱舞会は、六日午後より全員百三名の寮生により、元気よく愉快に行はれたのであつた。宝探し、和船漕ぎ、網引き等がこの時の呼び物であり、余興も面白かつたとの事。

定例役員中食会。乱舞の批判、及び青陵亭につき協議す。

青陵亭は、開店後、六年を経しが、その運営常に困難をきはめ、八年度初頭、屢々その処分に頭をなやましたが、遂に、青陵亭は、再開の不可能なる事とし解散する事に決定。よつて備品を売却、寮積立金中に加へ、建物は、寮生の遊歩の休息所となす事に決定す。（青陵亭の永遠の滅亡）五月八日

○五月二十二日　定例役員中食会。

一、青陵亭備品の椅子ストーブ机等は、総代会に於て相談の上、売却始末する事とす。

一、木村主事より、講演者二名の推選相談の上可決す。

一、岩口主事より、県社会教育課長、山口半之丞氏に吟詠講演依頼する件、可決。

○五月二十六日　吟詠会、講師社会教育課長山口半之丞氏来る。六時半開会、寮生約四十五名集り、熱心に聴く。尚合唱練習もなした。

長髪族勢力挽回す。先般、断髪会により、頭部線々に異状を来した青陵では、再び、学校に反抗気勢をあげ『ナトルリツヒ』の本性を表はして来た。

○五月卅一日　神風学会生る。

○六月一日　講演会開催。学寮、及弁論部合流と題する講演会開催。講演者、江原亮男氏。

寮報名決定、五月中旬以来、寮生間に募集中の寮報名は次の如く六月三日決定す。

玄洋（30）青陵（18）筑紫路（10）薫梅（9）雄叫び（9）学而（7）

よつて玄洋に決定す。

○六月三日　寮生五十名、太刀洗飛行場見学。

○六月九日　青陵亭備品を寮生間に売却。

○六月十六日　昨年来渡欧中の秋吉校長、帰博す。

○七月六日　寮の裏池に鯉子百四十匹を放魚せり。この裏池は、水仙の花等咲き、寮生の散歩に眼を楽ませたものであつたが、魚類も多数放ち餌いをなし、時には寮生釣糸を垂らし、太公望を夢見る時もあつた。この時の鯉子は、寮会費より約九円を支出して購せしものである。

○七月七日　一学期試験終了。夏休みを控えて、役員総会開催。格子の件、協議す。格子設置の件は、昭和六年度より屢々学校生徒課と意見を異にし、寮自治擁護のため、という寮生の意嚮で今日まで延ばされて来たのであつたが、夏休み中にその設置をなさんとする生徒課は、斯かる問題で、学生が騒ぐ等理由なき事であり、且又それは寮自治を決して阻害すべきものにあらず、寧ろ自治のため必要なものであ

る事を力説し、寮生を説き伏せんとした。寮生も此処に至りてはそれを認むるの外なく現在の東一、西一寮の格子は、その時設けられたものである。

尚格子の取付けは、第一の目的は深夜の泥酔侵入寮生に備へる目的であつたのだが、総代はこれを寮自治に訴へて自粛を誓つてゐたのであつたがその実績なく違反多きため遂に止むを得なかつたのであつた。更にこの格子は鉄格子であり、寮生もハーゲンベックの猛獣と何ら変ねえとこぼしたそうである。

○八月卅一日　楽しい夏休みも今日で終りを告げ、九月一日から二学期が始まる。二学期開始を前に、八月卅一日午後五時、役員総会を開催した。二学期行事予定決定す。

○九月一日　二学期開始。岩口生徒主事より、寮生一般に対して、格子取付けにつき訓示あり。

○九月九日　昭和八年十二月二十五日迄の契約の下に炊婦一名臨時雇入れす。寮生増加のため。尚養豚部は、豚六頭購入し、且豚舎改築を行ふ。

○九月二十五日　総代中食会、寮祭バザーの件につき協議す。

○十月八日　寮祭。

○十月十二日　役員中食会。決議事項次の如し。

一、寮裏門は十二時に閉ずる

一、吟涼会の件、山高総代来寮す

○十月十四日　断髪令問題起る。

○十月十九日　ストームあり、文二丙古賀保雄君、文二甲武田正義君、生徒課へよばれしぼらる。ストームは破壊思想に基づくものにあらず。

○十一月二日　対抗卓球戦、東二寮優勝す。

○十一月二十日　役員会。

決議事項

一、東一、西一寮下側廊下両端に非常出口を設けたしとの希望出ず、生徒主事考慮するとの事

一、寮備品検査につき注意する事

○十一月二十八日　寮生全員写真撮影を学寮玄関にて行ふ。寮報に載せるためである。

○一月二十九日　卒業送別晩餐会。

○一月三十一日　寮総代川本博嗣君、岩口主事を病床に見舞ふ。

○三月六日　生徒課より来年度残寮希望者の件につき掲示あり。

○三月九日　来年度残寮者決定さる。五十五名なり。且午後、寮会議室に於て寮自治に関し残寮者懇談会あり。

○三月十日　閉寮。

昭和八年度は、京大滝川事件のあつた年であり、さしもの左傾的思想も当局の間断なき強圧と、思想善導とにより下火となつた年である。満州事変以来、徐々にしかも目に見えて明確となつて行つた時潮をめぐり、これに対しては当時の高校生としては、内に如何なる思想をもつてそれを乗り越え、真理の道にいそしむかゞ大きな彼自身の内的問題であつたのだつた。読書傾向にしても、ニイチエ等最も多く読まれる趨勢にあつたもので、又内においては、河合栄治郎、野上弥生子、横光利一、志賀直哉等が多くよまれたのであつた。

華かなりし高校の寮生活、それはもはや、追憶のもの、過去のものとならんとしてゐた。自由主義的な空気、これこそその基底を構成して来たのであつた。生々たる生活信条としての『自由』は、当時に到

れば、既に『個人の自由』にすりかへられて終つたのである。

マルキシズムにしても、彼ら当時の高校生が研究の道に進む時、そこに見出されるのは、理論の透徹さと、旺盛なる実行力とをもつて迫り来ることであつた。福高においても、満州事変を契機として、国家主義的、右翼的気運に満ちた団体が表われ、京大事件、更に昭和九年秋の北陸地方一斉検挙は彼らマルキストの地下運動を絶滅せしめて終つたのである。かゝる時彼ら当時の高校生が那辺に自己の思想的支柱を見出したか、沈滞せる校風、歪められたる伝統、懐疑と虚無、享楽と頽廃、この中にあつて、表皮的には、華やかな、若さと喜びに満ちたものの如きにあつたか、恐らく我らには理解されぬ何物かがあつたであろう。

昭和八年度二学期、頭髪問題にからみ、教練の時間、福高生の一部が紛擾を起した。学校側の天下り的命令、空虚と形式とに満ちた教育、かゝるものに、反逆の狼火を挙げるのも、また彼らにしてみれば、当然の結果であつたろう。『自由』と彼らの理性は常に呼び続けていたのであつた。

寮自治擁護。自治の確立と常に彼らの周辺には、寮自治の成立のためになす事が多くあつたのである。しかしこの七年八年は、寮自治の崩壊が次第にその濃度を加えて行つた頃である。自治の危機は略この頃であつた。全てがそれに関与する、協同的精神というものは、個人主義、功利主義的思想に浸蝕され且『自治は委員だけのもの』という観念も生じて来たのである。

寮祭デコレーションも例年に比すれば見るものがなくなり、一路沈滞の路をたどつて行つた。実にこの年こそは高校の危機であつたのである。

かくて梅薫る二月も終れば、やがて桜、そして昭和九年度が廻つて来た。

【昭和九年度】

格子問題。断髪問題によつて示される末期的自由主義の乱脈さと全体主義的傾向の出現は、日本の国家主義転換がなした社会の全体主義的統一の一つのテイピカルな影響である。自由自治の輝かしい旗印の下に理想を追ひ真理を求め続けた高校も幾多の変遷を経つゝ、遂に全体主義、国家主義の力強い統制によつてその旗を奪はれざるを得なくなる。昭和八年度に起つた諸問題は畢竟この様な流れの起した小波なのである。しかし満州事変の勃発は昭和七年であり。マルキシズムは社会の表面より完全に抹殺されたとはいへ、社会全般は『時局柄』といふ言葉によつて一応自粛を要請され乍ら未だ池塘春草の夢を追ひ、国民生活も豊かであつたし、殊に伝統性の強靭な高校では過去と同様な理想主義的な伝統精神が根強く支配し、その高踏的な性格は容易に浸蝕さるべきもなかつた。もち論高校とても現実社会に存在する以上社会全般の趨勢の影響を多少なりとも受けないわけに行かない。

事実、このマルキシズム全盛時代に於けるが如く、鋭敏に感覚を有する青年は社会の現実に対して果敢な戦ひを挑んだものであつた。その後徹底的な思想取り締りは学生層の社会からの遊離的傾向を生み出したが、矢張り社会と自己の生活とを切り離して考へることの出来ない以上、社会が大きく転換を示すならば必然的に何等かの形でその影響が見られるのである。軍国主義への変移のそれに対する批判は別として祖国が同胞が満蒙の広野に戦ひを続けてゐるのを見て、学生層にもそれに関連した動きがあつた。学内に於ける右翼団体の発生もさること乍ら一般的に学生が自己の高踏的遊離的立場を反省し、如何にし

て社会と不離不即の関係を有すかを考へねばならなかつたのも当然のことであつた。

寮に於ても六年の学而寮命名によつて一応エポックを劃した後、昭和十年の全寮総代の設置によつて自治体として完成の域に達するのであるが、その間に於ける様々の事件は二つの時代の過渡期の様相をよく示し、変動期のやゝ落着かぬ気分を察することが出来る。しかし七年より十五年までの寮を観察してみると、一概に過渡期といつても、時の進むにつれて全体主義の色彩は濃厚であり決して一様ではない。昭和九年度は前半の未だ自由な、可成り自由な時代に属し、翌年の十年に至る準備期を形成している。

九年度の状況を略述してみると、一般的にいつて文化、運動両方面とも非常な盛況である。校友会は予算の縮少にも不拘、運動部は活発な活動ぶりであり、雑誌に対する投稿も例年に見ない多量の投稿があつている。寮も例年通りの行事が行われたが、なお対寮マッチも盛んであり、寮生も多く、上村氏等総代の下に次第に往年の生気を取り戻しつつある。立場をかえて見ればこのような運動の活況は思想取締りの一方策として行われたものであるに違いないのであるが、思想問題よりすでに可成り年のへだたつた当時ではそれを通りこした。すなわち思想取締りによる沈滞から脱出した生気に溢れた興隆であつた。社会に於ても文芸復興の叫び声が聞かれてゐた。たとへその様な活況が戦時中といふ環境に於けるものであり、戦争が何等かの役割を果したとしてもそこにはすでに数年前の沈滞や衰微はなく、緊張した空気の中ですべてが行はれてゐたのであつた。

○四月十七日　一年生の入寮を前に休暇を終へた役員は続々と懐かしの母校に戻つて来た。休暇中閉されてゐた表門も開かれて、三々伍々帰寮する寮生の目に映る黒づんだ柱も楽書だらけの壁もすり切れた畳もたまらない懐かしさを覚えさせるのであつた。この日臨時役員総会が開催され、新入寮生の歓迎対策が審議された。幼い憧憬に満ちて青陵の門を潜る彼等を如何にして迎へるべきか。各役員の面持ちに緊張を示してゐた。歓迎会、各寮コンパ、自己紹介、試胆会などの手筈も万端整へられた。

青陵の門は大きく開かれた。いざ来れ、若人よ。如何なる時でも新入生を迎へる四月は活気に満ちあふれている。多くの期待をはらんで学而寮は新入寮生を待つている。

○四月十九日　食堂にて新入寮生歓迎会。

スツルムウントドランゲによる価値転換は早くも開始された。この日ばかりはと炊事部苦心の献立に舌鼓をうち、形通りの先生方の御挨拶がすめば、上級生は次々と立つて高校生活の真髄を説くのであつた。リベラリズムの色彩は未だ濃厚である。この日の上級生の語る言葉も激しい理想と真実への憧憬に満ちたものであつた。次いで紹介、恒例のこの行事も滞りなくすみ、全く度胆を抜かれた新入寮生は遠く故郷に思いを馳せ乍ら、仮寝の夢を結ぶのであつた。

○四月二十八日　寮会費編成準備打合せ会。

○五月十九日　全寮乱舞会。

白線もまだ板につかぬ一年生が漸く寮に馴れて来た頃、全寮乱舞会が深江海岸にて挙行された。海岸にキャンプが張られる。砂浜には鏡を抜いた四斗樽に柄杓が突込んである。山と積まれた薪には石油がかけられ、沖天をつく炎と共に玄海の波音も消ゆるかと思はれる大乱舞がはじまる。褌一つの裸体群像、渇すれば四斗樽に首を突つこみ、踊つては呑み、呑んでは踊つて炎漸く衰へんとするも尚乱舞はやまなか

つた。この時の酒のうまさ、忘れられないものゝ一つだとある先輩は語つてゐる。明くれば近隣の漁師等と共に網引きが行はれた。魚の外に珍妙な獲物もあり、子供にかへつた様なさはぎである。網引きも終ると今度は宝探しである。砂浜のあちこちには委員がうめた紙切れが隠してある。それを発見すれば賞品がもらへるわけなので、一同必死である。紙を探し出してみれば何と『日本軍』何だらうと思ふと時計である。その心は？『いつもカテ〳〵げな』と笑つてゐる寮生の喜しさうな顔、すべてを忘れ去つて青春の饗宴であつた。

昭和二年乱舞会がはじめられてから十五年に至る乱舞会の状況を見ると、酒だけは大抵あつた模様であるが、油が次第々々に少なくなつてゐる。油の一滴は血の一滴と叫ばれたのはやゝ下つて支那事変以降で、この頃まではさして不自由を喞つ程ではなかつた。まだ〳〵楽であつたのだ。

○六月一日　各寮コンパ。

○五月八日　小学而会。

四月入寮以来一ヵ月、次々に展開される盛沢山な行事の連続に揉みたくられた新入寮生も、この頃になると漸く落着いて来た。中学生的常識の価値転換、拘束と統制の生活から自由の生活へ、大きく動いた環境の変化はいかなる影響を与へたであろうか。コンパの席上、語り出される感想は素直にその印象を表現してゐた。全面的に融和して行く生徒もゐれば、何かわだかまりのある生徒も居た。学生の観念的立場に対する批判も出た。

しかしながら、伝統の力は矢張り強かつた。そしてまだ完全にファッショ化しない社会に育つた新入寮生の訓育も比較的容易であつた。来るべき自治の完成の途上にあつて、寮の内状は生気にあふれ、極めて力強い動きがすべてを支配した。資料の不足の為、九年度は詳細を明らかにし得ないが、諸般の事情から推して、この年度の盛況を察するのである。

九月五日の各寮コンパにより二学期は開始された。天高く馬肥ゆる、秋は福高生にとつて最も楽しいシーズンである。寮祭、運動会も間近い。残念な事にはこの度の寮祭及運動会については何等の記録も残つておらず、従つてデコレーションの模様なども知るすべもない。

この間に於て、八年度より始められた寮史編纂及寮図書部の活動について触れてみることゝする。

八年二月、従前玉泉教授を中心として同好会である史跡研究会が寮図書部に移管され、始に学校近郊の史跡研究と共に寮史編纂が企図された事は前述の通りであるが、八年度には結局さしたる活動もなく九年になり、実行に移されることとなつた。即ち、

――前年度寮史編纂の案ありしも之の実行を見ざりし為、今年新に之に着手の決議成る。委員の意気込み強きものあり。先づ最初に広く他校の様子を研究しこれを倣つて事務を進めんとする。（図書部記録）

実際的活動といつても未だ準備の域を出でざる事遠く、図書部の全般的活動の上より見ても主力は寮報、青陵、その他に向けられていた。恐らくは資料の蒐集も格別の努力も払はれなかつたものと思われる。予算を見るも名所旧跡探訪調査費はあつても寮史編纂費というものは見当らないのである。

図書部は六月一日青陵原稿募集を行つた。暑中休暇を中にはさんで原稿の応募を企画したのだが、原稿の集り具合は頗る悪く、九月二十日の締切りが十月五日まで延びた程であつた。この度の青陵には従前と異つた試みとして一年に対しては質問を発して解答を求め、二、三

年に対しては委員が個人月旦を作製発表した。
九月二十四日の役員会においては五高、七高等の寮の状況に関して種々の談話批判があり、七高の寮誌の豪華さに比べ、青陵の原稿のわびしいのを嘆じ、一年生の愛寮心の欠乏を難じてゐる。
○十一月八日　文甲コンパ（六日）の後をうけて寮園遊会が開かれた。
○十一月十四日　対寮マッチ、蹴球。
○十一月十六日　寮祭慰労会。
○十一月二十三日　宝満山登山。
○十一月二十六日　炊事出産（ママ）にて赤飯を作る。
○十一月二十九日　役員総会、運動娯楽委員増加す。
○十二月三日　新旧役員事務引継ぎ。
○十二月五日　赤緒の草履を徹底させ、下駄にて廊下通行を禁ず。
これは毎年の事であつて、いつも役員の悩みの種であつた。戦争中とはいへ、まだ物資豊かなこのころ、中洲で一杯傾けて門限すぎて帰る寮生も決して少ないものではなく、帰つては大声、叱咤、ストームの嵐をまき起し、下駄のまゝ就寝中の部屋の扉を蹴ちらして舞ひ踊つたものであつた。それでなくとも無精者の多い寮の事故目と鼻の間の学校へ行くのに一々草履と下駄とをはきかへるのは面倒くさい者も多かつたのであらう。いくら禁止されてもなほらなかつたものである。
○十二月六日　新役員推戴式。
○十二月八日　サッカー対寮マッチ、理独優勝。
（昭和十年）
○一月五日　各寮三年送別会順次挙行。
○一月二十五日　全寮送別会及乱舞会。
同時に対寮マッチ優勝理独に優勝楯を授与せり。
この頃の校内の特徴として挙げらるべきものはスポーツが非常に盛であつた事である。スポーツ奨励の学校の方針もさることながら、対寮マッチに優勝楯が授与される様になつたのもこの年がはじめてゞあるし、寮にも運動娯楽委員が増加せられるなど一寸類例を見ない盛況であろう。
○二月八日　ホール設置に関し役員会。
【昭和十年度】
折悪しく小雨の降りしきる四月八日、本日は開寮日である。入寮式を明日にひかえ新入寮生は希望に輝き父兄に見送られて続々入寮し夕方までには四十六名に及んだ。
○四月九日　昨日に続いて続く小雨の中に入学式後午後三時半より校長吉村教頭出席の下に入寮式挙行。式後父兄との懇談会開かれ五時半無事散会した。本年度新入寮生は七十八名で二年生四十四名三年生十二名合計百三十四名であつた。
○四月十日　午後五時より亭々舎において本年度役員打合せ会を開催。生徒主事より役員が中心となつて健全なる寮風作興に尽す様注意あり、役員の意欲旺盛お互いに活潑なる意見の交換を行い八時散会した。（役員名は不明）
○四月十一日　午後三時半より東二、三寮の小学而会が開催され寮生の作用（ママ）、学而寮の伝統等につき教官よりの訓示があつた。
○四月十六日　東一寮小学而会寮娯楽室にて開催。一方西一寮コンパ亭々舎にて開かる。
○四月廿日　新入寮生歓迎会開催。午後五時より佐野主事の訓示に始まり、総代の挨拶次いで常例の新入生の自己紹介等にて十時まで極

めて愉快に進行し、十時半より運動場に於て乱舞会を催せり。此日の生徒の空気は真に微笑ましく健全なる寮生活樹立を目指して起つ寮生の態度なりと当時の教官は語つてゐる。而るに此頃各寮に盗難多く全く不愉快であつたが如何とも為難く唯寮生各自の注意に俟つより方法がなかつた。

○五月四日　深江に於て新入寮生歓迎乱舞会を開催。寮生百四十名生徒課員一同の引率の下に深江に向つた。天気快晴で玄海の波に洗はれた砂浜の中にある松林中に夫々天幕を張り夜営をする事となつた。その夜炎々たるたきびを取りまいて乱舞が行はれたのであるが、当日は町の漁祭りで芝居等があり或は村の青年等と福高生の衝突が起りはしないかと心配されてゐたが幸に何等の異事もなく病人も出ず無事一夜を明かす事が出来た。（明五日の宝探し網引きについては不明）

寮制度に関してこれまでは各寮に総代が各々一名居て会議は合議制であつたが本年度より全寮総代一名が選挙により選出せられて、その下に委員なるものが置かれたのである。尚委員は全て二年であつたが三年生相談役なるものがあり色々の寮の行政、炊事方面について相談の相手となつてゐた。当時の寮の分配は次の如くであつた。

東一　理甲　西一　文甲
東二　理乙　西二　文乙
東三　文丙　西三　三年生

（当時は三年生が非常に多く残寮してゐた）

寮生の生活をみるに、点呼無く門限は有つたけれどもそれには無頓着であり、夜おそくまで中洲あたりを彷徨して帰寮しても差仕へ無かつた。寮内のストームも相当活発であつて酒池の巷に入りては帰つて下駄の儘各寮をストームして廻つた。さながら嵐が寮の一角に起り、騒音蛮声寮に満ち戸を蹴破つて廻つた。（十三回文甲壱岐俊彦談）飲酒についても学校では厳重に戒めたが、禁酒する筈は無かつた。

寮内に下駄のまゝ入る勿れ、とは教官連の当時の口ぐせであつた。五月十三日に寮役員と生徒課員との会食のときにも佐野主事より厳に戒められた。そのとき総代は寮内刷新については総代が責任を以て当る故、これらの事の処置については総代に一任してほしいと主事に申出た所『あくまで自治的に適当な制裁によつて改善せんと言うならば一任しても良いが、主事は全般的に寮の責任を負うものであるから……』との返事があり、どうやら総代の意見は完全には通らなかつた模様であつた。

この頃に至つては赤化学生の実践運動は全く不活潑で唯非表面的に研究する学生はあつた。一方学園の中にも時代の流れの為か全体主義的色彩が相当侵入し福高にも神風学会なる右翼団体が組織され、五月十八日箱崎神社前にて命名式が挙行され、佐野、加川両教授も参会された。

○五月卅一日　その前日卅日、生徒課員の臨時召集が行はれ何事か秘密に相談会が開かれた。これは明卅一日午前一時に行はれる消火演習の打合せ会である。何も知らない寮生はどんな夢を見て居ただろう。突如夜半の召集にあわてふためいたがどうやら正気を取りもどして比較的秩序正しい行動をとつた。現代の高校生とは大分違つたものである。この時の有様を福岡日々新聞は次の如く語つてゐる。

五月三十一日午前一時、福岡高等学校寄宿舎では寮生百三十五名の夢を破つて突如物凄く鳴りひびくサイレン、警鐘乱打を合図に、不意打に消防演習を挙行した。即ち同校松岡舎監の発表で警察当局の応援を得、最も効果的な防火宣伝の意味で全寮生に予告無しに行はれたも

ので、午前一時寄宿舎物置小屋から発火した仮想の下に大がかりに煙幕赤電球等をしかけると共に、サイレンを鳴らすや、常備消防組、六本松自警団等馳せつけ本場の火事同様に消防作業を行へば、寝ぼけざまに飛び出して度胆を抜かれた寮生及び母校危ふしと馳せつけた附近通学生等を松岡舎監一率指揮の下に集合せしめ、日頃の団体訓練による消火作業病人搬出等を行つた。

○六月十八日　寮内売店設置を許可さる。この件については五月二十七日の定例寮役員会に於て上村総代及び炊事委員植木君より許可願ひを申出て居つたものでその間に色々の障害があつたが、本日寮売店を設置して菓子果物の販売を許可されたのである。

○七月七日　夏季休暇に入る。

○九月二日　第二学期開始。

高校生活を通じて最も高校生活らしい雰囲気にひたる事の出来るのは第二学期しかも記念祭前後である。二学期が始まると寮に於ては早々に寮祭が話題の中心となる。九月十二日には早くも運動会準備の打合せをなし亭々舎では寮役員総会が開かれた。以後は役員は全く勉強する暇が無い程仕事に忙殺されるのである。寮生はデコレーションの工夫に頭を悩ます。

○十月二日　上村寮総代は生徒課に招かれて、記念祭飾物についての計画を詳細に説明した。飾物の内容について、学校側ではある程度の制約を要望し、風紀上思想上の種々の注意を寮生に促した。

○十月五日　夕刻より飾物の検閲が行われ、一ケ所修正を命ぜられる所があつた。

○十月六日　第十三回運動会開催。

後日新聞紙上に左の如く運動会当夜の福高生の事を書いてあつたが、これはいさゝか針小棒大に書きたてたものらしい。曰く、

『中洲に恐怖相を描いた福高生群の蛮行、運動会当夜の血迷い沙汰、秋吉校長以て如何となす。』

なお当時の寮制度については全寮総代の制度は確立していなかつたが、始めて上村虔太郎氏が全寮総代に就任され、その制度が確立されたのである。昭和十年度の組織は次の如くであつた。

全寮総代　上村虔太郎

各寮総代　東一寮　中村良一郎

東二寮　二日市定昌

東三寮　滝口守義

西一寮　新川幸生

西二寮　鮎川幸雄

西三寮　（三年生のみ）

此頃寮内に無断で宿泊する者が居たので生徒課より此事を厳に戒められた。

○十一月九日　寮生秋季旅行を英彦山に於て開催された。これは寮祭慰労の意味で先月末来計劃されたもので総員一二一名参加の下に行はれた。

十二月に全寮総代及び各寮総代の改選が行はれた結果、十一年度の総代は左の如く決定した。

全寮総代　鮎川幸雄

各寮総代　東一寮　堀本日出男

東二寮　山田幸平

東三寮　吉永直

西一寮　磯好達

西二寮　巻幡静彦
西三寮　鮎川幸雄

○十二月二十二日より冬期休暇。

（昭和十一年）

○一月八日　平静にして何等変る事無く新学期の授業が開始された。

○一月二十四日　寮食堂において卒業生送別コンパが生徒課員出席の下に開催された。

一月に入つてより数回の学校火災があつたので学校においても寮においても厳重な警戒をなし、非常警戒をおこたらなかつたが一月二十九日、所謂放火魔が逮捕されたのでやつと一安心した。

○三月九日　昭和十年度授業終了。

【昭和十一年度】

○四月九日　第一学期開始。

偉大なるものへの希望を白線に託し、喜びに頬をふくらませた新入寮生を笑顔で迎え入れた学而寮は再び春となり、パット明るくなつた。入寮式の夜はヒゲだらけの上級生の顔も何となく嬉しそうであつた。

○四月十八日　新入寮生歓迎会の開催。例年通りのプログラムを午後五時より深夜に至るまで、和気藹々の中に行はれた。

今年度は創立十五週年に当るので、学年始早々記念式行事、その他の計劃について論議されていた。十八日の放課後総務部役員会が開かれ種々の問題について協議された。此の問題は先年度末から議題となつていたもので学校側に於ては、既に十周年記念式を開き又時局にてらしてお祭騒ぎを為すべきでないとの見解を持ち続けていたが生徒としては絶対に行うべしとの意志が強くこれを見通した学校は内々準備はしていたのである。

○四月二十五日　午後六時より松本、大串、河原の三先生を迎へて『名士座談会』を開き夕食を共にして座談会が開かれた。

○五月二、三日　乱舞会。

二日午後より小雨が降り止まず、判断に迷はされたが断然決行する事に定まつた。人家部落より十町程離れた今宿の海岸に天幕を張り回らし、その夜は天の恵みか一点の雲も無く晴れわたり、夜空に輝く星雲を仰いで感激の大乱舞が行はれた。翌三日は呼び物の、各寮対抗の和船漕ぎ競争である。選手が五、六人乗り込んで櫓櫂に腕の覚えのある者が二、三人交代しては櫓を漕ぐのである。五艘の和船の競争の情景は全く抱腹の余興であつた。当時の、生徒課の寮の係りは剣道及び軍事教練の山崎助教授で、大きな巨軀で達磨さんの風貌であり乍ら仲々愛嬌のある老爺であつた。

かゝる中にも本年最大の行事である十五周年記念祭の準備は着々と進められて行つた。五月八日には中食会を開き、寮生熱烈な願によつて生徒課を動かし記念祭を一日増して貰ふ事に決定。また、同十三日は寮役員が放送局へ行き十五周年記念祭寮歌放送の件につき相談する等寮生の熱情により活潑な行動がとられた。こんなに張切つてる時はどうやらデタラメな事も多いらしい。寮生の飲酒は全くしばしばで九日夜ある寮生が中洲の支那料理屋で硝子を破壊したとやら、全く頼母しい限りであると、現在の高校生は感激する。この頃は門限も無く、寮生にして夜遅く帰寮する者は非常に多かつた。

○五月二十日　亭々舎において生徒課の先生と寮役員のスキ焼会が開かれ、防火演習、寮祭についての打合せが行はれた。

この頃生徒が元気に余るせいか、それを心配した学校では生徒一般に対して学校長の名を以て次の様な掲示が出された。

『今年度における諸子の行動はこれを既往に徴して頗る粛正を要するものあるを認む。例へば平素出席率において、其の夜間外出の状況においてあるいは校外諸種の集会において動もすれば風紀弛緩し、校規頽廃の傾向を生ぜんとするものあり。世辞既に喧しく事実又之を証明するもの多し、今にして改めずんば意に習性となり近くは校規の紊乱を来し遠くは諸子の進路を過たしめんことを恐る、因て余は諸教官と熟議し之れが払粛の策を講究したり、不日教官各位より親しく諸子に訓諭する所あるべし。諸子須くその教悔に聴従して大いに修養に努力せんことを望む。若し尚自奮自制すること無くんば、仮令犠牲を払ふも余は断乎として革新の手段を取らんことを期す、斯は固より余の本意に非ず、速かに反省自戒して正道に邁進せんことを力めよ』と。

この掲示を見た生徒は『オンチらしい事を言ふわい』と云つたそうである。当時は徐々に国内政治経済の戦時体制化への移行が具体化し始めたころであつたので次第に諸般に亘ってこの傾向が強く現はれ始めた。軍事教練の強化、配属将校の学校内政に対する発言権の強化を始として、思想問題に対する当局の警戒は当時赤化思想こそ根絶されていたが、各種の文化的研究に対する過敏な神経が集中され始め、また、学生の行動や風紀に対する学校当局の監督も神経過敏になりつつあつた。当時の文部当局の学校教育内政の方針が次第に全体主義的、軍国主義的方向に転換し始めたのであつた。この時代の寮生活はあたかもこの様な、自由主義時代から統制乃至全体主義的時代への過渡期にまたがつて送られたのであつた。従つて、思想的にも行動的にもこの両極の間にあつて絶へず煩悶や動揺があつた事は否めない。この新しい時代への転換は、当時の知識青年層の自然な自由な思想なり、文化的欲求なり、あるひはまた日常生活行動なりに対して、上からの抑圧的態度によつて次第に窮屈化し、統制化せしめられ知識青年層の不満や反抗や懐疑を惹起させた。それが、後に至つての戦時体制の如き情勢にまで熱し切れば兎も角、未だそこまでに立到つてゐない謂はば過渡的情勢下にあつたので吾々の懐疑や動揺は特に深く、また劇しかつたのである。この意味において当時の学生は古いもの、新しいものの味を味はい、良いもの悪いものの嗅をかいで生活したのである。かくして次第に時代の波は客観的事実として強力に知識青年層の上にのしかぶさつて来たのであつた。

○五月二十九日　寮防火演習。今年の防火演習は従来とは異つた型式において行われたが、不意打にも拘らず大体において成功した。

○六月一日　寮役員と生徒課との中食会において生徒主事より生活態度風紀問題その他について種々の小言があり、同時に寮祭についての協議がなされた。そのとき、劇禁止の旨はいはれなかつたけれども女装白粉等は禁ずる旨を伝えられた。

○六月十三日　寮祭に関する各係りの割当が行われた。

○七月八日　暑中休暇に入る。

○九月一日　第二学期授業開始。

第二学期の始まる前日即ち八月三十一日中先輩（九大医学部）を招き寮役員と寮祭について協議し更に九月八日真鍋先輩（九大医学部）も加わつて種々の打合せが行はれた。

○九月十一日　綱領制定につき協議。

鮎川総代より（国家と個人）（個人と社会）（自己）の三項を提出され役員がこれを検討したが意見はまとまらず翌十二日再び討議されたが結局決定しなかつた。

さて二学期になつてからは永らく問題の中心であつた記念祭の行事

に関して具体的に仕事は進められて行った。

○九月十二日　寮歌放送に関して放送局との打合せが行はれた。

○九月二十一日　十五周年記念祭寮歌が出来上がった。

〃燦爛夢の淡くして〃

〃あゝ若き日の純情〃

○九月二十六日　寮生一般の外出を禁じ飾り付けの準備に取りかゝつた。また寮歌放送を許可された。

○十月二日　各寮の飾り付け、その他の準備すべて出来上り、午後五時生徒課の検閲を受けた。次第に雨模様となり明日の天気が心配されて来た。

○十月三日　昨日に比して快晴、寮生一同歓呼す。十二時より十五周年記念式が食堂で行はれた。多数の先輩の参列者があり二時半に終つた。既に群衆が参列し直ちに演奏大会に移り一般観衆を驚嘆せしめた。又飾り付け投票を行つた結果一等東三寮、二等西二寮となつた。

又本日各寮に左の如き名称が附せられた。

東一寮　辰寮　　西一寮　翹寮

東二寮　叡寮　　西二寮　鴻寮

東三寮　朋寮　　西三寮　玄寮

この寮名命名については、その内容について生徒課と対立、正面衝突して全役員総辞職の決意を為したが、寮祭二日前に解決され寮生の希望が入れられたのである。爾来各寮はそれ〴〵現在の棟舎に固定して異動せざることと決定した。朋寮では早速『朋寮』という題字を板に書いて廊下の入口に掲げ、ついで他の各寮も同じ様に板額を作つて入口に掲げた。

○十月四日　空には一点の雲も無く、群衆は前日にも増し、苦心努力の結晶である飾り物を始め、手拭展、マッチ展等を見んとして続々つめかけ、整備のものは交通整理に目がまわり、バザー会場にては寮生のサーヴイスボーイが不慣れな手附きで給仕に忙殺され、見物の市民の興味と喝采の対象となつた。五時に閉寮され七時ころより焼却祭が行はれた。多年苦心惨憺した飾物も一瞬にして焼きつくされるかと思ふと寮生は感慨無量だつた。全寮生に見守られてこの飾物は灰と化して行つたのである。その夜は中洲の繁華街は福高生で埋められた。

○十一月七日　雲仙・長崎方面視察。

○十一月二十一日　雲仙・長崎旅行出発。佐野、高橋、山崎、平山、小林、米田教官引率の下に午後一時四十分博多駅発列車に乗車、長崎着六時、夕食後は自由行動を許され寮生は三々伍々長崎の街を徘徊し、十分に夜の情趣を味はつた。この旅行はバザーの純益五百円を基礎として寮生慰安のために決行されたものである。

○十一月二十二日　午前中、長崎三菱造船所を見学して後、雲仙に向い、小浜より自動車にて午後五時半雲仙温泉場に到着、宿に着いて各寮コンパが開かれた。夜九時より大乱舞が行われ、霜月二十日あまりの、しかも七〇〇米の高地における裸体の大乱舞は、天衝く雲仙岳を揺がせ眠れる町民を唖然たらしめた。

○十一月二十三日　八時半雲仙町を出発、普賢岳に向う。途中ゴルフ場にて記念写真撮影、昨日の疲れも何のその元気一杯で十一時までに全員登山、十二時より下山、一時ごろより地獄巡り、懐かしの雲仙をあとに二時半帰途につく。博多駅着午後八時十八分、駅頭にて大乱舞、内藤教授のリードにて万才三唱、思い出深き雲仙長崎旅行を終つてこゝに解散した。

○十二月一日　寮役員推戴式挙行。

新役員名左の如し。

全寮総代　文甲　巻幡静彦

役員名	寮区分	科類	氏名
総代	東一寮	理乙	鶴敬二
同	東二〃	理甲	四ノ宮豊平
同	東三〃	文丙	鈴木珊吉
同	西一〃	文乙	厨四郎
同	西二〃	文甲	柳井秀太郎
炊事	東一〃	理乙	井上忠士
同	東二〃	理甲	堀場道高
同	東三〃	文丙	勝野正一
同	西一〃	文乙	蓮尾速雄
同	西二〃	文甲	熊田富貴雄
図書	東一〃	理乙	楠賢三
同	東二〃	理甲	長谷川太郎
同	東三〃	文丙	小山金次
同	西一〃	文乙	坂山年男
同	西二〃	文甲	西田利八郎
運動娯楽	東一〃	理乙	徳富良二
同	東二〃	理甲	佐久間敬三
同	東三〃	文丙	三根谷武夫
同	西一〃	文乙	青山公
同	西寮	文甲	橋本敬之

○十二月三日　寮総代事務引継会を内藤主事出席の下に福新楼に於て開かる。

三学期になつて、寮運動委員の計劃による各寮対抗運動競技の最後の競技であるサッカーを終了して、過去一ケ年間に於ける総採点結果発表並びに賞状授与式が行はれた。種目は、ピンポン、バスケット、テニス、バレー、野球等で採点の結果文仏の朋が優勝し、二月廿日に対寮マッチ優勝カップを授与され、その夜朋寮生はこのカップに生ビールの口移し飲みでお祝ひの気焔を上げた。

○一月二十日　寮卒業生送別会を午後三時より開催、学校長の出張につき吉村教頭の訓示に始まつた。

○一月二十九日　全校査閲施行。小雨であつたが後晴れ、寒気が厳しかつたが真面目な成果を挙げた。ついで査閲官の視察が行はれた。

【昭和十二年度】

例年の如く四月九日入学式後寮食堂において入寮式が挙行され、その夜各寮にはさながら嵐の如き乱舞が行はれた。歓迎ストームである。乱暴この上なく器物を破壊するやらガラスをわるやら新入寮生はスッカリおじけづいてしまつた。その明日各寮総代は生徒主事にお目玉を頂戴！十二日に今後ストームは絶対禁止する旨生徒主事よりの要望があつたが乱暴さへしなければ良いものと寮生は解釈してさして気にとめなかつた。

本年度の新寮生は七十三名で旧寮生七十名を合せて百五十三名であつた。東一理乙、東二理甲、東三文丙、西一文乙、西二文甲で、三年はすべて西三に固まつてゐた。一年生が階下二年生が階上に一人一室であつた。

○四月十六日　午後五時より全寮新入生歓迎会開催され吉村教頭、牧川、永井両教授、原田校医、内藤主事及び生徒課員全部出席。教頭、主事の訓示に始まり例年通りの名物行事後校庭において乱舞が行われ、

その後午前一時頃散歩と称して外出せんとせし寮生数名があつた。いち早く之を見つけた教官厳重なる説教をされ中止させられたと言ふ事である。教官にして帰宅されたのは午前二時過ぎとやら。

○四月十四日　生徒課の希望により当時の全寮総代と古賀、長谷川両総務との懇談があつた。これは通学生と寮生の融和をはかるためと云ふ名目のために開かれたのであつたが当時は何等寮生と通学生との対立関係等は別に見られなかつた模様である。

○四月二十四日　寮図書室を娯楽室と分離して休養室をこれに当てる事を許可された。図書室は前十一年に図書部が各人より寄附を募つて本館階下の娯楽室に置いたのである。当時娯楽室は将棋碁盤が二個づつあつたのみだつたが他人の勉強を妨害しないために役員会、コンパ、雑談等に極めて利用度高く図書室として不適当であつたので、西三寮と東三寮との間に一棟あつた病室の一室を図書室にし若干の図書を置くと共に静かに勉強できる様にした。これは一つは『寮はうるさくて勉強出来ない』といふ人のために不可侵の領域を作る意味もあつたのである。

○五月八日　大乱舞会。折悪くしかも朝雨が続き寮生を心配させたが後晴れとなり、午後一時五十六分鳥飼発より今宿に向つて出発した。幸にその夜は快晴となり夜空に瞬く星を仰ぎ涼々たる潮風に吹かれてすべてを忘れすべてを流し去つた高校生のたゞ情熱のみ火ともゆる大乱舞にて一夜が明かされた。余興として和船競争宝探し等が行はれ間食として菓子うどん夏みかん等の御馳走があつた。一夜の饗宴につかれきつた寮生を乗せた汽車は九日午後鳥飼駅につき万才三唱を以て無事解散した。

この頃起つた満州行事件のために鈴木朋寮総代と四宮叡寮総代及び坂山叡寮図書委員が退寮した。（詳細不明）また厨翹寮総代は六月廿一日辞職後任には村上元信氏が推された。

○七月一日　秋吉校長逝去。秋吉校長は福高創立以来ずつと校長として在職された。名前の音治を以て『オンチ』とあだ名され、あまりにも剛毅で厳格であつたので『オンチ、コレラで死ぬがよい』などとデカンショに唱はれていた。とまれ創立以来護り立てゝこられた功績は高く買はれ、葬儀は一個中隊の儀仗兵が参列し、使(マヽ)使の派遣もあつて盛大に挙行された。こゝに秋吉先生について『故秋吉校長追悼録』より拾い書きをして見よう。

『前略。先生は（教育は指導なり）というモットーを掲げて子弟の教育に終始せられたのであるが、その子弟を指導せらるるや常に至誠通天の信念と、自ら省みて直くんば千万人と雖も我往かん、の勇気と胆力とを以て邁進せられた。従つて子弟の為に利福なりと信ずる時は毀誉褒貶を一切眼中に置くことなく、如何なる反抗にも屈せず、飽くまでも所信を断行せざれば止まざる結果、往々にしてあるいは無理解なり、あるいは頑固なり、あるいは暴君なりと称して非難する声を聞いたことがある。これは先生の人となりを熟知する者の、頗る遺憾とする所であつた。後略』（吉村教授）

『大正末期の福高共産党事件のあつた頃、関係の教授はキリキリ舞いをされていました。秋吉校長も大分心労されたことと思います。魁偉の容貌の中にも思ひなしか、心労の皺が増された様でした。学内の事情を文部省に報告に行つて帰られた時に

わが心厳の如し何者か　砕くるならば砕きて見よ

と襟懐をもらされたと聞いています。悲壮な決心で、事件の処理に当られたのです。云々』（第三回卒、灘岡秀親氏）

法学博士蜷川新氏が思想善導の講演のため来校され、講演当日左翼学生が極力講演の妨害せんとして盛にヤヂを飛ばした時の秋吉先生の顔容について次の如き一文がある。

『前略。其の顔容たるや何年か経った今日、尚脳裏を離れない僕は一年生でズーッと前方に座っていたので秋吉さんの顔を眼のあたり眺める事が出来た。あの爛々たる眼を眼鏡越しにギラギラと光らせ、仁王様の様な赫顔をテラテラとほてらせ、幅広い大きな口を真一文字にギユーッと引きしめて弥次る一連の学生達をハッタとネメッケて居られた。高校生活三年間今尚生々しく甦って来るものは此の折の情景及び此の時の秋吉さんの顔容だ。今から考へると此の顔容が亦豪気果断そのものの如き風貌だった。』（第四回卒、谷憲利氏）

○九月一日　堀校長新任式。午前八時、生徒は教室にて出席点呼を受け講堂に入場。教頭を先頭に校旗入場。次いで新校長の入場に及び新任式が開催された。堀先生紹介の代りに昭和十二年校友会雑誌の『堀先生を迎ふるの辞』の一文を引かう。

『今回第七高等学校造士館長堀重里先生を我が福岡高等学校長として迎ふる事を得たのは、吾等の等しく、最も喜とする所である。

先生は松江、静岡の両高等学校に於て、又内国高等学校の老舗級、第五高等学校及び第七高等学校に於て、生徒監、学校長として、或は、訓育方面に於て、或は国語国文学の授業に、或は学校管理者として、尊い生きた経験を、極めて豊富に持って居られると云ふ事は、吾々をして、又と得難い、良い理解者に対する、最も深い親しみと、同時に又、学校に対する、最も高い尊敬と信頼との念を抱かしめるものである。

――云々――。』

当時はすでに支那事変に突入し日本軍は支那の広野に進撃の一途を辿っておった。その国家の要望に応へて寮に於ても灯火管制の設備が完了された。

本年度第二学期はとかく問題が起り、寮生の生活も中々落着けなかった。支那事変は政府は不拡大方針を採ったにも拘らず益々深入りして行き戦線は延長する一方であった。かゝる状勢の中に国民は相当の緊張の色を呈してゐた。時局の波は学園にも押寄せざるを得ず、学内の緊張も漸次濃くなって来た。第二学期は寮最大の行事のある秋である。例年ならば寮祭が近づけば寮生もお祭り気分にひたって来るのであるが、今年度はどうも気が重苦しかった。二学期開始早々から寮祭の開否について論議され、九月三日、六日と役員会は引続き行はれたが採決を得ず結局時局の推移を待って寮生大会を開く事に決った。

○九月八日　山崎教官は召集により来る十日久留米に入隊される事に決ったので、亭々舎において全寮生の送別コンパが開かれた。

○九月九日　寮祭に関し寮生大会開催。寮祭開否に関しての各寮生の気持を見るに、二年は強硬に開催を主張し今度の一年生にもあの楽しい寮祭の味を味わせたいと述べたが肝心の一年生はむしろそうした空気の中に高等学校だけのお祭騒ぎには批判的であった。三年生の中には両論あったが大勢は中止すべきだとしていた。そこで本館二階に全寮生が集まり、両派の代表者は各々その主張を述べ議論沸とうしたが結局一般投票によって今年限り中止する事に決定した。その後生徒課の先生と寮祭に関しての論争も行われ、九月十五日の役員会が開かれ従来の形式による寮祭即ちデコレーション、バザー等は一切取止める事に決定した。

この間の寮祭開否の問題をめぐって学校当局は中止する事を希望してゐたようであるが、問題はすべて寮生の総意によって全く自治的に

解決された。その後戦争の激化に伴って生徒の自由は失はれて行つたが当時までは、自治の灯未だ消えてゐなかつたのである。

かゝる中に突如魔の如く寮を襲ひ来つたのがあの赤痢事件である。九月十八日腹痛下痢を訴へる寮生数名があつた。十九日二名入院し赤痢なる事が判明した。あわてたのは学校である。たゞちに校医県市の衛生課の助力を得て消毒防疫に努め、一方寮生全部の健康診断を行ひ、その結果約二十名の寮生が入院せしめられ残つた寮生は禁足を命じられた。学校では十九日より三日間臨時休業となつた。二十一日に至つて亦も数名入院を余儀なくされた。患者の父兄には学校より電報が飛ぶという騒ぎであつた。さて憂うつなのは病気に患らなかつた寮生である。出入厳禁となり、退屈この上もなし、こつそりとしのび出る者もおるしまつ、級友が塀の外から菓子を差入れするという有難い悪事が行われた。全く押し込められた寮生は、天空高く晴れてのんびり公休で遊び廻つている通学生がうらやましくてたまらなかつた。以来毎日検便が行われ新患者は次々と荒津病院へ送り込まれ合計三十余名にのぼつたが、一方退院して寮へ帰つて来る生徒もボツボツ現われて来た。最も多く患者が続出したのは九月廿三日でこれより五日間の休業が続けられた。寮がかゝる状態にあつたので九月卅日記念式が延期になる事となつた。

十月十三日より十月十九日までは全国民挙つての国民精神総動員強調週間に当り文部省視学官の来校とか神社参拝等種々の行事が行われ寮生の甚だ好まざる所であつた。

十月十八日を以て赤痢患者一人残らず全快した。

○十一月三日　運動会。高校運動会の呼び物である団体遊技は取り止めでありしかもこの日は朝から雲つて居た。途中から降り出した雨は遂に豪雨となつたけれど、強行突破午後五時に終了する事が出来た。その後握飯豚汁の夕食に舌つづみをうち大乱舞を以て解散した。

○十一月六日　寮に蓄音機を購入した。

○十一月二十九日　寮の十六週年記念式。役員推戴、赤痢全快祝賀の意味で食堂に於て晩餐会が開催され、新校長全生徒課員の出席を仰いだ。

○十二月二日　午後五時半より亭々舎に於て寮の新旧両役員の事務引継会を生徒課員出席の下に開催。ついでコンパが開かれた。

此頃に至つて亦寮内にストームが流行り出し、寮生はしばしば生徒課へ呼び出されてお目玉を頂戴した。しかれども焼石に水。

○十二月十二日　南京攻略祝賀のため職員生徒一同提灯行列を為す。此の日午後六時校庭に集合。日が全く暮れ寒さが身にしみるのを物ともせず出発、城内練兵場を経て市役所に至り万歳を唱へて福日新聞社前で解散した。

○十二月十三日　午前九時、職員生徒一同校庭に集合。東方遙拝の後堅忍持久長期戦に堪ふるの校長の訓示があつて、校旗を先頭に住吉神社に参拝。皇軍の武運長久を祈願、十一時帰校。日の丸弁当に豚汁の饗宴に一同舌鼓を打ち、十二時散会した。

○十二月二十二日　最後の試験が終り、昼食時寮食堂に於て生徒課員出席の下に光安主事の送別会が催された。

○一月十四日　石炭代を節する為に入浴時間を制限する事になつた。

○一月十七日　食費五銭値上。それまでは食費は四十五銭で、朝は味噌汁、昼と夜は一菜だつたが量もカロリーもたつぷりであつた。当時は中洲の三流料理屋ではスキ焼が一人前三十銭（飯つき）、酒は一本大体十八銭から二十五銭程度であつた。食費四十五銭を三十五銭程

度で残りは何かの催物のときに猛烈な御馳走をするのが炊事部員の腕であつた。無論絶対的自治制でメニューから買入れすべて委員がやつた。所が日本が次第に戦時体制を整へるにつれて、物価が次第に上り、食費の値上げも止むを得ぬ事であつた。そしてこの食費五銭値上げの事は学校より寮生各父兄に通知された。

○二月十二日　寮買店を廃して神棚を祀り郷土研究の部屋を為す事に決定した。

第五章　昭和後期

【昭和十三年度】

昭和十二年に勃発した支那事変は全中国を戦火に包み、五月には徐州陥落。十月には広東漢口陥落と次々に快報の齎らされる折、緊張の波は学而寮にも漲り来つたのである。

全体主義的な傾向、又報国なる言葉にすべての思想を同化させようとするいはば国家集中的傾向が強まつた事は歴史の示す如く明らかである。これと共に個人の自由なるものはかゝる荒波の中にあつては微々たるもので、国家主義なる理念の下に支配された。

然し乍ら大正昭和にかけて見られた思想即ちリベラリズムの思想から一夕一朝にして前述の体系が生まれて来たのでは絶対なく、この期は丁度思想的にいつてその変遷期と見る事が出来よう。

要するに超国家主義、帝国主義はあらゆる権力と正義の名において塗抹され、統制ある勢力を有して居たのである。

高校は特に反国家思想強しとして非難された。即ち高校のリベラリズムに対する弾圧である。

また一方人間性、及び人格主義が尊ばれ、こゝにヒユーマニズムの風潮も擡頭して来ている。

今までは全く孤立的に社会のいはば特権的な存在として存立していた学園が、いかなる目で社会から見られた事だろう。かくして弾圧に対する反動が過ぎて、頽廃的な享楽的な傾向が生れ出たのも止むを得ない事実である。

かくしてこれに対する革新または弾圧は当然上より加えられるのは当然の理である。かくして屢々衝突事件があり、この打開策は極めて混乱を極めたのである。

かくしてこの時にも学生の社会性の限界が討議の焦点となり冷静な批判検討が必要とされた。しかし時局の流れに逆う事は出来ず、結果は余りにも高踏的立場を去つて、現実面に正しく生きる事を欲し始めた。即ち寮の変遷期という所以は実はこゝに存する。

○四月一日　新学期開始。日支事変の非常時局に際し新学年を迎へ、寮生は一段と緊張努力以て事に当る覚悟と意志の肝要が要望される。

○四月八日　午後五時半より亭々舎において、寮役員と生徒課員との会食があり、新寮生の規律指導及び新学年の寮生活一般に亘つての注意伝達等があつた。昭和十三年度の寮総代の氏名は次の如くである。

全寮総代　村上元信（文乙）

各寮総代　東一寮　内田　正（理乙）
東二寮　園田成伊（理甲）
東三寮　宇都宮忠夫（文丙）
西一寮　加来　清（文乙）
西二寮　古野盛人（文甲）

西三寮は三年生の隠退所であり、最も威厳のある寮となつて居た。

○四月九日　昭和十三年度始業式挙行。

堀重里新校長訓辞内容。

一、新旧学校の対蹠比較。古き学校の糟粕を模倣し、新時局に反するが如き雷同を慎む。

二、本校教育方針。教育勅語の御主旨に基き、知体徳育三方面共に円満の遺憾なきを期する。

三、高校生活は一つの橋梁の如きもので、一方に校友会あり、一方に寄宿舎という欄干を設け、学校と三位一体となりて完全を期す事。

四、各人生長の時期がある。新入生は、今丁度該時期にあり、又一方後に延びる人なるが為に落第せし人もあれば、全く自己を偉きものに思ふべからず。

五、学校は無力なるものにして、父兄の助力を仰がざれば完全に教育の目的は達成し難し。

六、上級生の中にもよからぬ感化を及ぼさんとするものあれば此輩に対しては注意するを要す。

七、学校は時には強制してうるさがられる事もあり得る事を承知し置くを要す。

午後三時半より入寮式挙行。

校長生徒主事挨拶。寮役員紹介、生徒役員紹介。（村上総代より）

○四月十一日　始業式。始業式に当り学校長は新旧両生徒への辞を述べ、非常時局の現下の一戸緊張努力を要望し、次に文部省令に基き四月三日になすべき筈の八紘一宇の精神につきて一時間に亘り詳述し、国体の本義を明らかにし生徒に大なる感銘を及ぼした。

午前九時半より北支事変の際宋哲元の顧問として活躍せし桜井徳太郎中佐の時局に関する講演があり、二時間に亘りての体験談は異常の感動を与へた。

○四月十三日　入寮者数百六十一名。

新入生　九十二名（文甲二十二名、文乙二十名、文丙十八名、理甲十四名、理乙十八名）

第二学年　四十九名

第三学年　十七名、尚原級生　三名

○四月十四日　東一寮コンパ。

○四月十五日　西一寮コンパ。

○四月十六日　午後五時半より寮食堂にて新入寮生歓迎会開催。校長及び教頭欠席、各一年組主任出席。盛大裡に十二時過終了。

それより乱舞をなし二時過ぎ寮生一行寝に着く。現実の社会を反抗的に超越する風は特に強く、この一つの表はれとも見られるバーバリズムは厳存する。乱舞による寮生の感情は一時的に於ても同一化し、統一されるのである。

○四月十九日　東二歓迎コンパ。

○四月二十一日　東三歓迎コンパ。

○四月二十五日　定例寮役員との会食。炊事委員より昼食麦飯にする事を告示した。村上総代の提議により草履は外ばきのまゝにて上る弊あれば之を禁じ、スリッパか跣足かにして昇降する事にし、清潔を保つた。

この頃の寮は清潔で整頓は割によく行はれて居た。中にはバーバリズム謳歌により、旧来の伝統を誇るものは居たのであるが、とにかくこの頃の寮生はファイト満々であつて、物価は上り出したとはいへ、

まだ〳〵一般に安易な夢を追っての生活態度であったといへる。

○四月二十六日　五月七、八日両日寮の乱舞会を深江海岸にて挙行する為に、実地視察の為村上総代、堀越相談役が当地に赴き視察した。かゝる統一的な催し物に対する寮生の意識なるものは強靭であり、寮生活は張合のある心の故郷であった。

○五月七日　深江海岸にて、定例大乱舞会挙行さる。

○乱舞会日程は左の如くである。

▲五月七日

（一）朝食の時弁当（昼食）配布

（二）十一時四十一分先発隊鳥飼駅発

（堀越、友永、福島）

（三）放課後直に鳥飼駅に（荷物は寮に持ち帰る事）

（十二時十五分点呼）

（四）十二時三十分発臨時列車乗車（車中にて昼食）

（五）深江着後直に設営

（六）四　時　うどん、ぜんざい

（七）五時三十分　晩　食

（八）七時―十一時　乱　舞

▲五月八日（日）

（一）八　時　起　床

（二）九　時　朝　食

（三）十時―十一時　和船競争

（四）正　午　昼食　みかん

（五）一　時　宝探し

（六）引続き　ラムネ配布

（七）二　時　天幕取除

（八）深江発三時二十四分　四時着寮

（九）乱舞解散

（十）入浴時間　四時半―六時半

糸島郡深江村の海岸にて、天幕を連ね、一泊して寮生百五十三名時恰も雨後斉晴の濡れたる砂浜にて舞い狂う姿は、非常時局下における寮生に漲る、いはゞ反動の叫喚がないでもなかった。

とにかく乱舞に酔う一瞬に、寮生はすべての憂を打ち捨てるのである。

○五月九日　本校キリスト教青年会の主催にて放課後禁酒座談を会議室にて開く。出席者四十余名。イー・シー・ヘニカー氏、大平得三氏のアルコールに関する熱心なる講演あり。この時代は戦時中の自治体であるから、団体主義的な色彩が強く、外面上はその飾りを実質的につけていた。我が学而寮も上よりの弾圧が日増しに強くなって行く。防火演習、頭髪、欠席等に関連する取締りは何れも厳格に監視され、規律正しい寮生活が営まれていた。しかし、自治と自由を誇る吾が寮生は、その陰にあっては、これに反動するリベラリズムを謳歌していた事を忘れてはならない。

○五月十三日　弓道部道場落成式（三時半より）。

○五月二十一日　健康週間として寮生全部朝七時よりラジオ体操をなす。

○五月二十六日　赤痢予防薬寮生全部に服用せしめる。

○六月一日　寮生室にラジオ購入。

○六月二日　娯楽室にナショナール受話機購入。

寮内の娯楽情操設備も着々と整へられ、非常時局下における寮生の

文化への愛好も一段とその効力を増した模様である。

このころの文化活動は、割合に活潑な方で、河合栄治郎、阿部次郎を始め殆んど全般に亘って読まれたのである。このころ店頭には左翼思想の書物も散在したが、上よりの監視的な思想に関連して殆んど読まれなかったといへる。文化設備の購入は、寮生活を潤し、一方情操教育を施すのに充分であった。

○六月十三日　寮会議室にて夜七時より一時間半レコードコンサートを催す。静寂なリズムの中に超越して居る寮生の影が偲ばれる。

このころ戦時態勢に備ふるが為に、野外演習勤労集団作業等が行はれ戦争に対する意識を高めたが未だ過去の範疇を脱せずとはいへ中々活潑に行はれた。

○六月二十五日　秋吉校長薨去されて早一年、成道寺の墓参に村上総代等生徒一同を代表して供花せり。

○七月一日　第一学期試験開始。

○七月八日　夏季休暇始め。

○八月二十七、二十八、二十九、三十、三十一の五日間

『集団勤労作業趣旨』

集団勤労作業は実践的精神教育の具体的実施として生徒をして勤労作業の体験を通じて団体的訓練を積ましめ、依って以て心身を鍛練し国民的性格を練成するを以て趣旨となす。主として陸軍墓地の整理作業校内外清掃。

夏休みも終りに近い、第二学期の授業に先立って、この集団勤労作業が営まれた。この事は、未だ曾って無かった事であり、烈日赫々たる下に、汗と土に塗れ働く姿は実に崇高なものがあった。

こゝで全国高等学校寄宿寮一覧（成蹊高等学校調）の調査表を見れば大体昭和十二年現在の福高の学而寮の諸制度を推察し得るからこゝにそれに関する大要を掲げておく。

自修室　一二〇　　娯楽室　三　　病室　二　　会議室　一

生徒主事　二　　生徒主事補　一

生徒課員　四　　事務員（書記）　二

寮生の自治組織

総代　六名　任期一ケ年

炊事委員　五名　任期一ケ年

図書園芸部委員　五名
運動娯楽委員　五名　　任期一ケ年

行事

旅行　秋（年に一回）　記念祭十月（一回）

大乱舞会（五月）　一泊二日

新入生歓迎会（四月）

卒業生送別会（二月）

自炊制度　有　食費（一ケ月）十三円五十銭

ホール　無　但し簡単なる菓子パン等の販売を炊事部にてなす。

人員点呼　無

門限　有　時刻午後十一時（休日の前後は、午後十一時半）

寮誌　有　寮報を年一回

休暇中寮を使用せず。

この当時の寮炊事の費用は、炊事部の八月の決算統計表よりその一端を伺ひ得る。これを示せば、

食料品代其の他　七七〇円

炊事給料代　九八円二十五銭

瓦斯代　一〇円四銭
水道代　一七円八八銭
合計　八九六円一七銭

長い夏季休暇も終り寮生浩然の意気揚々二学期の生活が始まる。時局は増々急を告げる時に、寮生活なるものの意義は意味深長である。

○九月一日　始業式挙行さる。

○九月六日　来る運動会についての学校教官会議の結果、左の条件附で許可さる。

一、手拭、メタルは作らせぬ事。

二、予算二百十円の三分の一は節約して献金する事。

三、興味本位の競技は一切とりやめる事、等々。

従来の方式に則ってやるのでは、時局の線に沿はない嫌ひがあるので、こゝにかゝる強制をなしたのであろうが、寮生自体は何も形式的に改める必要はなく、かゝる弾圧によって、我々寮生がその束縛の中にあって、潑剌明朗さを失ってはならぬと云ふ反撃の声も強く聞かれて居た。

○九月二十七日　初めて亭々舎にてクラス会を開催する事が許可され爾後活用が頻繁となった。

○十月七日　文部省教育局思想課長より全国的に学生生徒の生活に関し、その動向を知る基礎的資料を得る目的を以て左の調査票を配付さる。

即次の問題について簡単に答へて下さい。

一、事変下の日本にとって最も重要な問題は何であると思ひますか。

それは何故ですか。

二、時局に際して学生はどうすればよいと思ひますか。

三、あなたは学業の余暇をどう利用することが学生として最も有意義であると思ひますか。

この時代には、未だ長髪、ストーム等が緊迫感に伴って実施され、乱発する状態であった。

一方飲酒夜間外出し、街中を練り歩いて高吟するものもないではなかった。これは思想的に拘束されんとして時に起る反動か、あるいは自己享楽的傾向の強化を物語るものとされる。

しかし想うに当時の寮生はさほど無茶に時局の認識を弁へていないものはない筈であって、いはれないでも自立し得る実践行動を積極的に行っていた。この事実は、近来の学生と比して対蹠的に差のあるものである。

時局に対しては同質的になってもこれに異質的になってもいけない。寮生の心中奥深く、見えざる所に時局の波はやはり高鳴っていた。かくして、生活、現実の生活向上もしくは一大飛躍が目されるようになる。

より深い豊かな生活、しかも緊迫した真摯な態度でなすべき生活、これであってこそ始めて真の高校生としての要求は満足されるのである。外面的なものは殆んど影響が現われなかった。

○十月九日　第十六周年大運動会開催さる。午前九時半国旗掲揚君が代斉唱、ラヂオ体操の後マラソンに入る。夕食後大乱舞。

この頃の運動会は定まった国家主義的構図の種目の中に嵌め込められたもので規律厳正、唯単に軍国的風潮に則るに汲々として居て真の高校生の自由や潑剌、剛毅朴訥の風潮は否応なしにその姿を潜めねばならなかった。然し高校生の祝宴に酔ひ、つどいて狂ふ歓宴の乱舞などに於ては、涯てしない自由の雄叫びに満ちたものがあった。

○十月十三日　寮新役員決定。（昭和十三年十一月一日附）

全寮総代　加来　清（文乙）

各寮総代　東一寮（理乙）　武谷　健二

東二寮（理甲）　土肥　達一

東三寮（文丙）　村谷　正隆

西一寮（文乙）　岩猿　敏生

西二寮（文甲）　増田　五郎

西三寮（全三）

○十月三十一日　放課後新役員推戴式挙行さる。

この外寮史編纂委員氏名は左の如くである。

東一寮　内田　信夫　東二寮　田上　之也

東三寮　柏木　武続　西一寮　越智　恒夫

西二寮　井上　謹次郎

過渡期に立つ吾が学而寮の覚醒及び、伝統の記載によつて得られる高校生活の真髄を書き留める事は最も必要な事とされ、右に選ばれた委員達は、悠久の責務を背負つてその筆を走らせたのである。いはゞ、懐古的な企図、高校生の進むべき方向を示す事に汲々として努めたのである。

右記の委員連により学而寮史の資料は大分募集されて居たものと思はれるが、残念な事に戦災により焼失してしまひ、何らその痕跡を留めて居ない事は惜しむべきである。

このころ野外演習が頻繁として実施された。寮内にもひし〳〵と戦局の余波が崩れ込んで来た。

○十一月八日　本校記念日。

○十一月二十一日　午後七時より講堂において、中野正剛氏の演説会あり。聴衆講堂に満つ。

○十一月二十二日　十時半より日本文化講義あり。

演題　文学史上に現はれたる筑紫。

講師　文学博士　佐々木信綱氏。

○十二月十六日　第二学期試験開始。

○十二月二十三日　冬期休暇開始。

（昭和十四年）

○一月九日　始業式に代り、全生徒職員校庭に集合。東方遙拝、校長訓辞後陸軍墓地に参拝。

一段と戦局は重大化し、一方ヨーロッパにても砲煙起り寮生も恒に緊張せる規律体の下に行動せざるを得ない状勢であつた。すべてが一方的潮流の上を流れて行く感がある。

○一月十八日　今年度より新しい試みとして、校長先生を中心として、生徒主事、組主任、その他主なる教官が列席されて、こゝに第三学年生徒との座談会を開催する事となり、よつて親睦を計ると共に、民主的に意見の交換をなし、以て福高の面目、名誉の向上に資したのは注目すべきである。

この時代は緊迫感が強く生徒の態度も純真明朗でその一例を一月三十日の文化講義出席率にとつて見ても、九十五パーセントを上廻る程の好成績であつた事から見ても、当時の学生がすべてを規律正しく、しかも自覚、覚醒して自己の進むべき道を進んでいた事が知られる。かゝる態度で日支事変なるものに対してもあくまで客観的な、批判的な態度をとつていたのである。

○二月十日　午後六時より寮食堂にて卒業寮在住三年生十三名の送別会あり。惜別いと深し。

国家多難を叫ばれている最近、かゝる寮内で鍛へた人格を持つて巣立つ卒業生は、寮生活で得たあらゆる体験を持して、雄々しく万錯を打ち破つて行つた事だろう。

このころ寮の開閉規則を見る為に、一例としてこの十三年度の三学期にとつて見よう。

注　意

一、閉寮三月三日午後三時。三月八日昼食まで。

二、開寮四月九日午前九時。四月九日夕食より。

三、室入口の戸の錠前を掛ける事。

四、休暇中に室内及貸与物品の検査をなすに付、机、窓日覆、火鉢、塵箱、什能等を押入に入るるべからず。

五、盗難その他の憂あるに付閉寮後は絶対に寮への出入を許さず。

等々。

○三月二日　学年末試験開始。

○三月三日　十一時より講堂において三年生送別式挙行さる。

頓に高まつて行く軍国主義は、益々その色彩を強め、団体主義的生活の中に追ひ込まれたとはいふものの寮の統制は充実せるバンドを有して居て、たとへ自由は束縛され勝ちであつたとはいへ、この時代相から超越した夢多い揺籃の中に育成する寮生の前途には、益々募り行く社会の不安動揺の渦巻の最中にあつても、各自の進むべき、生きるべき方向を有して意気を高め、その光明なるもの、即高校生活において得たあらゆる思想、心身の糧を以て雄々しく羽搏く事であろう。この時代の学生には、道徳観念あるいは礼儀なるものは厳しく存し、純高校生の典型として見做す事が出来よう。

戦雲急を告げる学而寮は今から十年の間、めまぐるしい動乱の中にその身を没し、寮生の変転もまた著しいものがある。

【昭和十四年度】

昭和十四年、西暦一九三九年、ヴェルサイユの宮殿に於て、惨憺たる戦火を除き、以て永久の平和を確立せんと要望、条約を結んだヴェルサイユ条約の夢破れ再びヨーロッパは戦火にて包まれる現状となる。一方日支事変はアジアに於て、これ又悲惨なる殺戮と破壊を続け、こゝに既に満二年の年月を閲して、未だその止む所を知らず、一方汪兆銘の組織する新中華民国政府が樹立し、日本との提携をなしたけれども、蔣介石は重慶の果に逃げ込み、広辺なる中国に於て長期的抗戦を挑み来り、日本も遂に長期戦の止むなきに至り、こゝに光明は又その光を暗くし始めたのである。

更にこの年北方にてはノモンハン事件があり、日ソの衝突は異常な険悪感を伴ひ、幸にして一時的抗戦にて終わつたのではあるが、やがては全世界が再び戦火に捲き込まれる運命を蔵す暗黒の巷には、寮生の胸もときめきがないではなかつた。かくして日本は、超国家主義的一方向を強力に進み始めたのである。

この年も前の時代を引きついで、次第に寮の変貌が来される過渡期といふ事が出来よう。寮の外形的変革に伴ひ、寮内の性格も漸次変転して行き、醒めぬ日本への冷着なる批判の態度はいつ迄も続いたのである。

さあれ国家は寮の如き団体生活なる場所を目当てにその政策を実施しようとする。長期戦に伴つて生ずる経済戦、政治戦は、日本の内部にも必然的に団結、結集を強ひ、建設一点張りの気運が津々浦々迄響き渡つたのである。

こゝ学而寮にも、時局に対する覚醒の鐘、はた自治の鐘は鳴り響い

て居た。寮内の雰囲気もこれを弾圧的に方向づける事は出来ず、従つてあらゆる難苦と矛盾を孕んで居た事は事実であつた。

時局の変動により寮の内部の変動は又さくべからざる必然の運命である。然し強いてこの流れに妥協すれば、又学而寮の伝統は覆没される。されど国家の権力は強大であり、反抗する寮生も、如何ともし難い運命の波瀾なのである。

かゝる情勢下にあつて静かに歴史は流れて行く。

○四月十日　午後一時より入学式。四時より食堂にて入寮式行はる。新入生の入寮者数は、一一〇名の多数で、新しい指導層の下にあつて、懐しい寮生活が始まる。この日東二寮の総代土肥達一君辞して木村道臣君に変つた。

○四月十一日　始業式挙行さる。

前夜生徒歓迎ストームを行へるを以て永井、鶴、久永教官出席の上寮会議室に総代武谷、木村、村谷、岩猿、増田等呼び出され叱責さる。

新入生は、遠く故郷への哀愁も増しては行くものの、魂の故郷としての又、常に憧るべき夢の国と吾が学而寮はなつて行く。若き日の感激こそは終生消えやらぬ生活の源泉となるを想へば、寮生活の意義も自ら判るのである。

紅顔百余名の少年を迎へて学而寮の春正に爛漫、歓迎茶話会も小学而寮会の名の下に行はれ、新旧寮生の意気投合が行はれたのである。かくして友垣は強く築かれて行く。

寮の構成を見ると、東一、二、三と西一、二、三の六棟の中、東一が理乙、東二が理甲、東三が文丙、西一が文乙、西二が文甲、西三は三年生各科の混合で、いはば寮のセナートスであり、厳然たる権力を有して居た。かゝる各科別の寮の区分に関しては色々と論争が行はれ、中には全体として有機的結合が旨く行かずに、セクショナリズム、パテイキユラリズムに陥るとの声もあつたが、大部分のものは、クラスメートの親睦の上からもこの制度には賛成の声が多かつたのである。

○四月十三日　放課後西一寮の小学而会を催す。

○四月十四日　放課後西二寮、東三寮の小学而会を催す。

○四月十八日　放課後理科甲、乙の小学而会を行ふ。西一寮歓迎コンパあり。深夜新入生返礼ストームをなせり。

歓迎、返礼ストームは寮生の意気投合、感激の発露となつてこれにより寮の意識も高まり、益々統制のある寮制度を築き上げるに与つて力ある事は、古今を通じて同じである。この感激の日こそ、入寮して始めて印象深い事件なのである。先に前年度に寮役員のリストを書いたがこゝでは改めて全寮総代の名のみを挙げて置く。

全寮総代　文乙　加　来　清　君

○四月二十日　加来総代の申出に依り、昼食時を利用して、全寮役員を会議室に集め会食し、生徒課と、ストームその他に関する意見を吐露し合ひ、自由の叫びをあげたけれども、教官連は強硬にその反省を促された。

このころは各棟二十室、階下は一年生が一室六畳の部屋に二人宛。二階は二年が一室を一人で占領し、寮雨を一年に頻々と見舞つた。

寮の組織は、全寮総代一名（三年生）その下に各寮総代（二年生）その他の委員は二年生が牛耳り、実際の運営は二年生で構成されていた。委員は、運動、娯楽、図書、寮史編纂、炊事に分れ、学而寮は完全に自治体を構成していた。炊事委員は、一週間分の献立を作り、毎日一人当り六合宛寮生は食つていたらしい。他の高専などに比べても比べものにならない程の御馳走を食つていたようである。

入寮第一夜。この印象深い一夜は高校生活をしたものには一生忘れ得ぬ、またファイトの源泉になるシーンなのである。

新入生がそゞろ淡い寮の夢を結ぶころ、顔を朱にして、何処へ行ったのか上級生は突然蛮声の喚き声と共に、下駄の音高らかに、歓迎ストームが開始されたのである。

〝あゝ玄海の浪の華
銀蛇の舞に似たる哉
今神風に旗高く
莫邪の剣手に執れば〟

新入生は呆気にとられて、たゞうろ〳〵するばかり、酒臭い息吹の下にあえぎながら、上級生の下駄にふまれながら、フォームも解らずにたゞ無理無体に踊らされるのであつた。

かくしてストームの波が静まり返ると、今度は各室に飛び込んでの説教ストーム、こゝで支離滅裂なる高校生の本領なるものを叩き込むのであり、これは全くコメジーの如くして、その意義は正に深長なるものがある。

この歓迎ストームに応へて新入生の返礼ストームが行はれる。かくしてストームに始まり、ストームに終る高校生活は、価値観の転換には一役を担ふものであり、如何なる学校側の弾圧もこの寮生のファイトなるものには屈し去らずには置かず、このファイトあつて始めて、高校生活の思索はなされるとしても過言ではない。

○四月二十二日　学而寮新入生歓迎会を行ふ。校長始め多数の来臨あり、熱気火を吐く加来総代の挨拶に一同感嘆した。その後一年の自己紹介、余興等何れも自由主義的色彩の濃い、潑剌とした催しであった。

この頃は、文化活動が盛んで、文化的発展の気運は益々大きかった。即、従来のリベラリズムにまたエゴイズムを脱却せざる限り、時局に順応する事は出来ずその思想沈滞、混沌の中にあって、福高生は自らのイデアを見出さんとした。かゝる探究欲がなかったならば、寮内の堕落は必然である。

一、文　芸　部　　二、弁　論　部　　三、跋　渉　会
四、美術音楽部　　五、速　記　会　　六、独文研究会
七、仏教青年会　　八、文化研究会　　九、俳　句　会
十、参　禅　会　　十一、S・E・S　　十二、短　歌　会
十三、ローマ字会　　十四、Y・M・C・A　十五、映画研究会

○四月二十九日　新入生歓迎園遊会催さる。午後二時会長の挨拶に始まり、文理科対抗の相撲、余興、宝探しあり。七時より大乱舞。何処にても寮生の意気はすさまじく、すべての感情を出し尽して踊る姿は、大層思い出深いものがある。時に小雨あれども、園遊に支障なく帰寮せり。

○五月三日　玄寮十一室（増田、木村君）に漏電あり。寮生に対して左記の如き警告あり。

昨夜深更漏電ノ為大事ニ至ラントセリ。其原因ハ電気スタンド不完全ナ為裸線ガ畳ニ接触シ、燃エ移レルモノ也。幸ニ未然ニ防ギ得タルモ各自一層スタンド其他火気ニ注意シテ災禍ノオコラザルヤウ自戒スベシ。

五月三日　生　徒　主　事

○五月四日　理科甲織田貞四郎君総代補佐を辞す。

○五月八日　寮生会食。寄宿生の朝の行事に遅れしもの多し。

前年度からの思想方面を一寸覗いて見よう。前述の如き情勢にあつて、資本主義なるもの危局に際し、こゝに新たに国内的にファシズムが擡頭して居り一方国外的には帝国主義的侵略が行はれつゝあつた。

寮生のかゝる事態への批判も賛否交々で、反対論を持ち出すものは、高校生の純客観的、批判的態度をもつて、これを冷静に分析批判するのであり、それに対し、同胞の流血を見て国家の大事をかく見る事は出来ないとし、自ら現実面に突入せんとする実践的な傾向が増加して居た。この当時は学而寮内においてはマルキシズムは殆んどその痕跡を留めず、リベラリズムがその最後の尾を引いて居たにすぎない状態であつた。当時の寮生間に人気を博して居た書物は、河合栄治郎の『学生シリーズ』、阿部次郎の『人格主義』や『三太郎の日記』、倉田百三等であつたらしい。

前述したリベラリズムの最後の思想的雰囲気を作つたのが、玄寮の三年生であり、本年度の二年は思想的にインデイフアレンツであり、次に来るファシズムとの間に、思想的な過渡期が見られるのである。かくして寮外の情勢は大きく右翼的傾向を示して来たのである。

かくして前年度の全寮総代村上元信君を始め、自由の波が打つて居た玄寮は活発な議論が自由や、自我について行はれて居た。かくてこゝに自由主義的生活の雰囲気は、これらのグループが卒業すると共に消え去つて居つた。即ち村上君を始め、文甲西田利八郎、入江、文乙矢野吉利、青山公、文丙森一君等々、寮内に於ける最後のファシズム防波堤は潰れ去り、ここに滔々として流れ込んで来たのがファッショ的傾向である。本年度の一年は特にこのファッショ的臭気が強く、寮外の情勢と相俟つて次々に右傾して行つた。かゝる傾向に対する幹部の対策も苦慮を極めたのである。かくして、この頃より徹底した高校生の自己批判が生れ、寮生の関心は次第に歴史哲学へと向けられ、歴史的主体としての個々の研究が活潑に行はれて居た。

○五月十三日　此の日寮の乱舞会が催され、寮生は放課後直ちに鳥飼駅に集合し、今宿駅に向け列車に乗り込み、勇躍意気を燃え上らせて、今津海岸に向ふ。寿司、うどん、ぜんざい等の御馳走を配布、団欒しばし続き、テントを海岸の砂浜に面して設置、夕食後八時頃よりかゞり火をたいて、その周囲に裸の若人集ひ大乱舞に移る。これは恰も勝利感に酔ふ野蛮人の仕業である。されども足並乱れて、調和が足りなかつた。十時過迄行ひ、疲れては樽の酒にのどを医し、又群中になだれ込むなど紅に染まる寮生火に映え狂ひ舞ふ姿は、たのもしく、寮生ならでは見られざる情熱の発揮振りであつた。

○五月十四日　朝食後和船競争宝探しの催しがあり。ラムネ、みかんにてのどを医す。酔まだ醒めざる顔で昼食後テントを撤去し、三々五々名残り惜しい思い出の地を後に帰宿の途についた。

この頃の読書傾向は、歴史的関心が強くなり、日本的なものの追求が行はれて居た。河合栄治郎、阿部次郎などに代つて和辻哲郎の著書が広く読まれ、従つて京都哲学派の歴史哲学関係の書が多かつた。

かくして自由主義的個人主義に対する冷静なる批判は、これがすぐさま高校生活そのものに向けられて来た。酒と女、放歌高吟とストーム、かゝる従来の高校生活の形体の是非が論ぜられ、中には禁欲主義を以て之を刷新せんとする運動が擡頭して来た。ストームの是非は論争の焦点となつて来た。

○五月二十二日　寺崎幸広（文一独）に来た次子なるメッチエンの手紙が発見され、生徒課の注意を受けた。

この当時擡頭し始めたファッショ傾向に同調せざるを得ない学校側

も、反動分子たる不謹慎者に対する訓戒に急がしく当時代の弾圧統制策の強硬なるを思はせる。と共に次第につのる戦局の重大化に伴ひ野外演習や時局講演など頻繁に行はれて益々右傾へと走らせたのである。

○六月七日　第二時間終了後西園鶴を呼び出し青陵附録発行の中止を命ず。常に新しき発展を求めざる所に伝統なるものは生じない。安息なる高校生も遂に自己を自覚し始め、こゝに時局に対する認識を深め、その裏を流れる寮則外の行動をも屢情熱に任せて強行して行つた。

○六月二十七日　西一寮（翹寮）に於て校規を犯して手拭を造れるをもつて総代岩猿敏生氏生徒課にて訓戒さる。

○六月二十八日　第七時限校長の訓話あり。

一、勤労作業の趣旨を徹底する事。

二、興亜青年勤労報国隊満州派遣生徒五名のものは本校代表者たる観念を強調さる。

三、夏季休暇に対する過去の観念を払拭して心身の鍛錬に充て用ふべき事。

○七月三日　西三寮文一独増田梅三郎君土曜日に写真機（価格百円）及金拾円（共に机の引出の中に入れ置く）盗難にかゝる。

○七月四日　八月一日より一週間夏季心身鍛錬（学科運動）を行ふにつき生徒一般に注意書を配布す。

○八月一日　夏季心身鍛錬週間開始さる。

百道海岸における海水浴。生の松原にテントを設備して、麦湯を準備し、年科別に訓練。初日には利用するものが甚だ多かつた。この外運動、教練等も行はれ寮生を主体として大いに試煉を克服したのであつた。寮に宿泊せるもの総数七十四名。内二名は通学生であつた。

文部省令に基き戦時中の学生の心身鍛錬、質実剛健の気風高揚の目的に沿つて学科及び各運動部の活躍は目覚ましく、各若人の全力を尽しての奮励振りはこれを眼前に彷彿する事が出来る。

○九月三日　この日第二次ヨーロッパ大戦が火蓋を切つた。ドイツのポーランド進撃がその端緒である。寮生は、ラヂオに新聞に耳を傾け、ヨーロッパの戦雲に思ひを馳せて、国界の混乱を前にして感慨一入深かつた。戦雲急迫す。

○九月六日　かゝる情勢緊迫の中にあつて、第二学期始業式挙行。この日学生の心身鍛錬及び国策に順応する目的を以て、体育館建設の議上る。

○九月九日　西園鶴図書委員を呼び出して、図書室建設計画を内示し、尽力を求める。

此日放課後来る十月寮記念祭に於ける寮祭の飾付及び寮内のバザー開催の件につき寮役員及び玄寮生十四名（三年有志）その趣意書を携へて生徒課に出頭し、代表之を読み、許可を請ふ。而るに、その行動は唐突にして、而も深慮の気あり、若しこの目的を貫徹する事が出来なかつた場合は全員退寮する事を強引にいひ張つた。

○九月十二日　教官会議中に寮生の代表が血判連署の議決書を携へ、机上にそれを置き去り、会議終了後寮生一同生徒課に乗りこんだ。休憩室にて内藤教授以下生徒課教官一同が出席、諄々と説伏したるも聞き入れず遂に衝突した。議決書は之を受付けずとの返答あり。

二学期に入つて各地の高等学校に共通の右翼団体が組織され始め、九州では佐高が最も盛であつた。我が寮にも一高の昭信会が遊説に迄やつて来た。かゝる気運は、支那事変の困難化、及び世界情勢の悪化に伴つて益々拍車がかけられるやうになり、九大内の右翼団体も寮に策動（マヽ）も又著しくなつて来て、従来批判的であつた寮内の気風にも多大

の変動を齎して来たのである。

かゝる寮内の飽くまでも批判的な気風の中には過渡期的な一種のデイレッタンテイズムに陥る危険性が多分に濃厚であり、学制改革により一組四十名の人員増加による寮の人員増加と共に、これに加へ寮組織のインデイフアンテリズムが相俟って、統一的気運を欠き、しつくりと纏まらない風潮は、寮生に不安な気持を抱かせるに充分であった。

かゝる気分がたま〳〵寮祭の問題を契機として、生徒課との衝突事件を起すに至ったのである。かくして大量の退寮者を数へるやうになった。考へて見るに寮にとって寮生が退寮する事程淋しい事はないのである。今日も一人、明日も一人と退寮者の木札が裏返されて、退寮者は僅かばかりの荷物を車に積んで車輪の音も淋しく寮の門より去って行った。

かゝる学校内の弾圧等に対抗し、反旗を飜す寮生の自治自由の姿は、あわれな外観を残して強引に消え去ってしまふ。あゝ、吾が学而寮は如何なる眼でこれ等退寮者を見送った事だろう。

○九月十三日　この日衝突事件にからんだ問題を解決する為に朝より夕方七時に至る間に、清水、加来、織田、小島、荘氏等生徒課に召喚され、内藤、永井、鶴教官等が、熱心に個人々々の説得に努められたが、容易にその志を飜さず、事態は暗黒に突き進んで行った。

○九月十四日　昼食時板尾氏生徒課に呼ばれ、また放課後馬場、安藤、木本、福島氏等呼ばれて、時局下の寮生としての反省を促さる。

○九月十五日　放課後岩猿、増田、木村氏等は生徒課にて時局に即した正しい反省考慮を促された。みな熟慮、反省を約して帰った。

○九月十六日　午前九時－十時の間、本館側面の体育館の地鎮祭行わる。

生徒課との寮祭に関する衝突事件は、清水、小島、木本、荘、安藤、馬場、織田氏等の自発的退寮を生徒課が許可した事により、一応今回の不詳事件は円満にて解決した。寮生また涙を呑むのシーンである。

このころの世界の情勢を述べると、ドイツはポーランド進撃の準備工作としてこゝにソビエートとの不可侵条約を締結、防共協定の盟邦日本を裏切り、また日本はその時折も折、満ソ国境において、ノモンハン事件を続け、苦戦しつゝある時で、これに対する憤懣の声は寮内に漲った。

○九月二十一日　昼食時寮に於て生徒の討議に基いて臨時役員会を開き寮記念祭に於ける催ほし物について相談せるも、生徒の意見は容易に纏まらず、意見対立の儘散会となる。

○九月二十三日　午後二時より運動会準備の打合はせ会のため新旧総務、幹事を集め、相談会を開く。寮生徒側よりの建議による各寮単位のマスーゲーム（多分に遊戯的色彩あり）の出場を強望したけれども、時局柄とて生徒課は之を拒絶した。又この日ラグビー、バスケット選手九州四高校連合試合に出場の為七高に遠征。

○九月二十五日　寮役員と会食。生徒希望の寮生劇を演ずる事の時局上不適当なる事を種々の方面より説得さる。

昭和十四年度は戦雲急を告げ、戦火正に世界を呑まんとし、吾々が学而寮にも此戦乱の気運漲り、種々の時局対処上の問題が生じ、その中殊に福高の華とも言ふべき記念祭行事に就いては、一つ一つ生徒課の指導権力が強かったが、寮生一般は学校の抑圧策が激しければ激しい丈、益々自治の網を以て迫り種々の衝突事件を惹起し、新しい伝統への気迫を示した。

○九月三十日　文一丙、田、尾郷、小杉、夜八時過ぎ中洲の縄ノレ

ン街にて飲酒して居るのを発見され、以て注意さる。かゝる裏の事件は脈々として消えない。

○十月二日　寮祭附属の行事として行はれる旅行乱舞は、物資の騰貴による旅費の関係上、それを中止する事になつた。この頃物価一時高騰し、一例をあげれば、ガラス一枚八銭であつたのが一挙にして十八銭にはね上がり、ストームの禁止令もこの点特に著しかつたのである。其の代りに寮生劇をなすことを申出たので生徒課慎慮の結果、昨年伊達の行ひし程度のものなれば、黙認せんと応へ之を暗々裡に許可した所が、十月一日に至り、四囲の情況により、其程度を越えたる事を察知せるを以て、十月二日校長に話せし所、校長は以ての外拒絶せよとの事なりしかば、昼食会時を利用して中止の事を説明せしも納得せず、是において放課後内藤先生以下生徒課教官全部出席、会議室に総代役員を集めて諄々と諭せしも遂に納得せず午後六時解散。寮役員岩猿氏、夜官舎にこの件に関して来る。

生徒は劇をなす理由として寮生活がアパート化し、一年生の生活態度が面白からざるを以て演劇をなして融和をはかりこれを契機として、一年生を覚醒、指導するものなりと。

○十月三日　午後七時より一度禁止せる全寮大会を生徒の真面目なる懇望により、これを許さるも、生徒は約束通り静粛裡に加来、及岩猿両氏の談を傾聴し四十分後にして会を閉づ。其態度には感心すべきものありたり。

○十月六日　全寮総代以下役員二十五名辞職届を提出、学校側受理。

寮内はかくして紛乱し、緊張の度を強めた。

福高秋の最大記念日たる記念祭が近づくにつれ、より高く、より自由な情熱の奔放として流出し意気正に沖天の感があつたにも拘らず、生徒課の方ではこれを時局柄とて極度に抑圧し、遂に寮生大会の寮生の意志の反映たる決定事項をも否定し、この衝突事件によつて醸し出された寮生のファイト、自由の叫び声は正に高校生の真摯な生活態度の一端を示すに足るものである。

○十月七日　第十七回寮記念祭を行ふ事とし、午後一時より、寮会議室において、校長の出席を始め、生徒課関係の教官、寮生出席。先づ故田中登氏以下二十名の慰霊祭を行ふ。また午後五時半より食堂にて大晩餐会を催す。出席者は校長生徒課員また組主任、秋山、野村、越山、信定、三上、平山、大塚教官、夜十一時まで余興あり。また午後十一時より一時まで卒業生と歓談す。

かくして青陵健児の軒昂たる意気は示された。

○十月八日　第十七回運動会開催。天気晴朗秋晴の好運に恵まれ、午前九時より国旗掲揚、君が代斉唱、宮城遙拝、校長始め生徒主事の挨拶あり、福高体操の後に、マラソン（福高―六本松―赤坂門―保険局―福高）に入る。東海道五十三次、百足競争、水球、野試合等戦時色華かなりし模様なり。盛大裡に午後六時終了。豚汁にて終幕。七時十五分より乱舞。烽火烱々として感無量なり。

○十月十日　午後五時より校長、生徒主事、生徒課員、寮生、寮会議室に集合し寮新役員の推戴式を行ひ、六時より亭々舎にて会食。新旧役員の事務引継ぎをなし各自意見を吐露し十時解散。

新寮役員氏名。昭和十四年十月十日。日附

全寮総代　文乙　岩　猿　敏　生

各寮総代　東一寮（理乙）　原　　俊　夫

東二寮（理甲）　柴　田　明　賢

東三寮（文丙）　尾　郷　　清

西一寮（文乙）　倉員栄穂
西二寮（文甲）　藤田幸一

この頃灯火管制等の演習厳格なり。

○十月十六日　福岡工業学校教諭、高木六三郎氏に寮の図書館の設計を依頼す。

○十月二十日　理一甲吉田正起赤痢の疑あり。吉田の居室、便所消毒。全寮総代に注意あり。

○十月二十一日　防空演習開始。

○十一月一日　寮において自粛の為昼食に日の丸弁当を使ひ感激を新にす。

○十一月六日　今日より寮において国策に沿ひ昼食のみ麦飯とす。野外演習、防火訓練等緊張の状態を続け寮内の軍備化の前衛として、規律厳正であつた事が右の諸事項にて首肯出来る。

○十一月二十七日　文部省教育局企画部長より次の事項に対する生徒への影響及び生徒の現下国際情勢に対する態度を至急調査報告する事を命じ来る。

一、独ソ不可侵条約締結に対する感想

一、現下国際情勢に対する感想

▽　これに対する寮生の態度は正しく、中にはドイツの不信を暴き、敗北を希ふものもないではなかつた。

○十二月十二日　高木福工教諭より寮図書室設計図及見積書を作製して送らる。

○十二月二十一日　寮誌青陵分配を許可さる。

青陵内容は軍国主義、ファシズム傾向の縮図ともいふべきものが多く、内容は頓に増大する右翼的色彩が燦然として居る。然るに自由を我がものとして誇る寮生の意気も多分にその中に折り込まれて居る。

かくして学而寮は次第次第に時流に歩を合せ始めたかの感がある。されど吾人の伝統なるものは、自治と自由、剛毅朴訥の精神である。

〃戦の譜は聞え来ぬ、
祖国よ待てよ吾が姿……〃

このころ一部の寮生の中に、巷間の青年と何ら異なる事なき軟弱浮華の風潮をなすものもあり。これらに対しては、学而寮の名において、伝統の名において叱責さるべきである。これは強度の束縛感に対する反動の行き過ぎであらうか。

○昭和十五年一月一日　九時より四方遙拝拝賀式。日支事変第四年を迎へ、一段と国際情勢に対する認識を昇揚一層精神を緊張し、長期建設の覚悟を新にした。皇紀二千六百年当時の日本は一大飛躍の時期であり、その反面多端の暗黒を孕み寮生の自覚意識精神緊張の度は一段と深化して行つた。

○一月十日　午後一時四十分より元首相広田弘毅氏の講演あり。演説は首相の高等学校時代回顧談であつて、生徒に厳粛多大の肝銘を与へたり。

○一月十五日　会食。諸先生に差上げつつある昼食の値上げをしたしと岩猿総代より申し出ず。

○一月二十二日　会食。弁当の値上げ青陵附録などにつきて話出る。

○一月二十三日　青陵附録再発行につき校長に相談許可を得。過渡期の空白にあがきつかれ、寮内の沈滞の恢復には多大の苦慮が取られたのである。

○一月二十四日　文部省より寄宿舎図書室建築の許可来る。図書委員兼重信を呼び出し、青陵附録再発行の許可を与え注意事項

を促す。
一、青陵附録。
一、年二回第一、三学期。（四頁？）
一、時事問題、学校行政問題及卑猥なる記事の禁止。
一、原稿は生徒主事検閲す。
一、配布前に再検閲す。
一、青陵附録なるを以て、国策に順応し用紙節約なるため、それ丈頁数を青陵本誌の頁数より減ずる事。

○一月二十九日　午前十時三十分より日本文化講義行はる。
一、講師　京都帝国大学教授　農学博士　橋本　伝左衛門氏
一、演題　東亜新秩序の建設と満州開拓

○一月三十一日　大陸研究会発会式行はる。

○二月六日　会食。
亭々舎にて校長主催の下に寮総代役員と懇談。

○二月九日　午後六時より弁論部主催の弁論大会を西中洲公会堂にて開く。
演題及弁士左の如し。
一、蜘蛛の糸　文一乙　高川次通
一、第一義の通　〃　倉員栄穂
一、相剋より生れ出づるもの　〃　佐藤信良
一、人間の発見　文二丙　村谷正隆
一、知性と信仰　理二甲　木村道臣
一、人生観上の浪漫主義を論ず　文二乙　岩猿敏生
一、苦悩の肯定　〃　伊達得夫
一、人間の課題　文二丙　小島直記

○二月十日　午後五時半より学而寮卒業送別会を開く。

○二月十二日　午前九時体育館落成式挙行さる。国際情勢は頓に悪化し、学而寮内にもその影響が潜入し来り、『学生よ何処へ行く』との世上の眼も漸次冷たくなって行き、こゝに寮生の奮発が要望された。
寮生は紀元二千六百年を迎え、心構えも一段と緊張し、共同体的に実践行動をなし、以て双肩の強さを培って居た。
吾が学而寮を愛するが故に、何らの苦痛を寮の為に惜しまざる寮生の献身努力は以て多とすべきでありその団結意識の強さを物語って居る。
午後五時半食堂にて寮生土木作業慰労スキ焼会を催す。校長外、永井、鶴両教授出席。

○二月二十六日　昨日曜日午後四時頃寄宿舎朋寮（文丙）階下において壁に立てかけた洋傘を焼き、柱壁を燻らせる事件あり。数名の生徒を調査せるも原因不明。

○三月二日　第一、二学年試験開始。卒業生送別会。
目まぐるしき世情の変転、又一方日本の飛躍に伴ひ軍国主義も華やかならんとした時に、吾が学而寮も日進月歩頓に新しき伝統の基盤を築き、偶々記念祭等においても、真の高校生の特権を誇り強圧されゝばされる丈益々情熱を燃えたゝせ上部に対して衝突し、大いに学而寮の名の下伝統の保持に一大寄与を成して呉れて居る。されど日と共に玄濤の高鳴りは、何時か寮生の耳には殉国の精力をにじませて居た事であろう。

【昭和十五年度】
動乱と戦火は遂に全世界を蓋ひ、平和なる一つの秩序を求めて、世界は暗黒と苦悩の中に叩き込まれ、歴史は時々刻々あわたゞしい回転

を示し、吾が学而寮においても、右翼的ファシズムが頓に頭を擡げた一方、高校生の特権たるバーバリズムなるものも強く出た年として、昭和十五年、日本紀元二千六百年、西暦一九四〇年は特色異彩を放つて居る。

二六〇〇年、祖国の津々浦々まで、この歴史の神秘的な新しい歓喜に満ちて愈々軍国主義日本としてその奸才をもてあそぶに至つた。一般的風潮からいつて、この年はあらゆる方面に、感情の方面から特に新しいエポックを招来したやうに見えるのである。これと共に、国家主義、民族主義なるものに全国民は既に陶酔しつゝあつた。特に紀元二千六百年奉祝の祝典は、この一個の方向性を有する国民的感情を象徴して居たと思はれる。

次に国際情勢を見て見ると、前年度世界の暗黙を破つて起つた第二次ヨーロッパ戦争も、この年に入つて急激な展開を見せ、ドイツは、スカンヂナビヤ半島、デンマルクの征服についで西部フランスへの進撃、マジノラインを突破して、首都パリを占領掌中に入れ、一方盟邦イタリヤも立ち上り、ドイツイタリヤの連合軍の迅速なる電撃作戦に世界は驚愕の目をみはつたのである。かくして戦局は進展し、フランスの屈服、バルカンに迄戦火が及び、こゝにイギリス全土も震動し始めたのであつた。

東方アジアに於ても、日支事変は勃発後四周年を迎へ、軍部は武力のみを以て全中国を征服せんとしたが、一向にその解決の曙光は仰がれなかつた。かくして、インテリゲンチヤの反問及び疑問の声高く、寮内に於てもかゝる傾向は多分に存し、軍部の抑圧は益々昂じて来た。

かくして新体制の名の下に学而寮は大きく転回せんとして居る。かくして自治自由に飾られた高校生活は、今やその影を没し去り、変貌の時期に入らんとして居るのであつた。

戦雲急をつげる昭和十五年度には、寮制度が一応整然となり、外観上の自治体の成立を見るに至り、寮史委員の断片的記録もあり、爾後詳細に披瀝して見ようと思う。

○四月八日　五時半より寮委員会開催。
　　全寮総代　岩猿敏生（文二乙）
消灯（十二時）、門限（十一時）、落第生の自発的退寮ストーム等に関し討議。

○四月九日　新入生入寮開始。午後四時より入寮式。暗黒面累積する中にあつて、新入生を迎えて、自ら寮は活気を取りもどすし、四月と共に、寮は再び若返つた。国情の逼迫化は町からネオンサインを一つ一つ吹き消して行き、寮生は歓楽街から徐々に閉め出されて行つた。世上では『学生よ何処へ行く』として批判が高まり、『学生論』の汎濫を見、警察の手では『学生狩り』なるものまでが横行していた。

○四月十日　午前八時十分より始業式。

○四月十五日　放課後生徒文化部紹介を行う。

弁論部（校友）	仏教青年会
文芸部（校友）	Y・M・C・A
カント研究会	ローマ字会
短歌会	美術部
俳句会	音楽部
史学会	速記会
E・S・S	映画研究会
清仏会	大陸研究会

寮役員と会食　寮新入生歓迎会を二十日午後五時半より行ふ事を話

合ふ。歓迎ストーム行はる。

○四月十六日　放課後寮に於て文科の小学而会を開く。改訂せる『自治の手引』左の如し。

○昭和十五年四月

『自治の手引』

火の用心

一、煙草の吸殻は如何なる場合にも必ず火気のなくなるのを確めて火鉢の中に棄る事。

一、吸ひ掛けの巻煙草を机の上や窓縁等に置いたまゝ立去らぬ事。

一、便所の内にて喫煙せぬ事。

一、寝るときは必ず火鉢の蓋をして置く事。

火　災

一、火災と見たら警鐘を乱打せよ。

一、宿直室や小使室、炊事室に知らせる事。

一、警鐘を聞いたら、服と帽子と靴を抱えて外に出る事。

一、任務ある者は直ぐ現場へつく事。

一、如何に混雑する場合でも統制ある行動をする事。

一、防火隊編成表を熟読し置く事。

家庭へは

一、家との通信を怠らぬ事。

一、些細のことがらを誇大に知らさぬ事。

一、余分な金を請求しない事。

一、外泊の場合は必ず外泊簿に記載して各総代に届け出る事。

玄　関

一、外出する時は姓名札を裏返して赤の方を出し帰ったらまた返して黒の方とする事。

一、下駄は自分の室号と同じ番号の箱に入れ置く事。

一、靴は自室の入口棚上に置く事。

一、雨傘は自室の入口棚下に懸ける事。

一、靴下駄及外用の草履はスリッパと換える事。

一、門限時刻を厳守する事。（午後十一時）

廊　下

一、静かに歩く事。

一、痰や唾は痰壺に吐く事。

一、紙屑や煙草の吸殻等を廊下や窓外に棄てぬ事。

一、下駄や靴のまゝ廊下を通る事を絶対に禁ず。

室　内

一、室は綺麗にカーテン等を汚さぬ事。

一、外に出る時は室の入口に鍵をかけ、窓には差込み鍵を差して置く事。

一、寝る時は内側から外金をかける事。

一、楽書をせぬ事。

一、多数の者が一室に集り大声で雑談などせぬ事。

一、自習時間を厳守する事。（午後七時から同十一時）

一、音読を禁ず。

一、机、火鉢、什能、炭箱、五徳、塵箱、蚊帳は各人に貸与せらるゝものに付退寮、室替等の場合は必ず揃えて返納する事。

一、万年床を廃止する事。

電　灯

一、寝るとき外出するとき其他不要のときは消灯する事。

一、室円灯は三十六燭光である、勝手にこれを変更したり電気コタツ等を使用せぬ事。
一、電灯の故障には自分で触らぬ事。
一、電灯の線切れは直ちに小使室に到り取換える事。
一、電球は各個人購入する事。（小使室にあり）
一、午後十二時消灯厳守する事。

点　呼

一、午後十一時鐘を合図に総代の点呼を受ける事。

病　気

一、病気其の他の事故は成るべく早く宿直教官及び総代に報告する事。

食　堂

一、和服の時は袴を着用せよ。
一、三食以上の欠食は欠食届簿に記入前日までに炊事委員に届出る事。

洗面所、浴場

一、清潔にする事。
一、湯水の使用を節約する事。
一、水の使用後は水栓を完全に締めて置く事。
一、入浴時間は午後四時半より七時まで。

雑　件

一、ストームを厳禁する事。
一、寮の器物破損の場合は自弁する事。
一、蓄音機及びピンポンの使用は午後十時限りの事。
一、寮内に於て集会をなす時には予め宿直教官に届ける事。　以上

以上の記載により当時の寮規を大体推察し得るがミリタリズムに富む事は勿論兎角バーバリズムの厳禁は格別なれども寮生は長き伝統の因習により種々興味深い新面を維持して居たようである。即、四月の生気を利用して、過渡期的な蒼白な知的デイレッタンテイズムを脱却する立場として、選ばれた道が高校生的バーバリズムの復活である。これはヒットラー的なバーバリズムとは異質のものであつた。

○四月二十日　寮新入生歓迎会開催。

深夜零時半頃余興を終へ其の後校庭に於て深更の静寂を破り、雨後濡れたる校庭の若草をふみながら乱舞をなし、午前二時ころ終了。バーバリズムの復活の一例であり、ナイーブな生への超越を意味するこの乱舞こそは、高校生的なバーバリズムとして注意される。このころ寮生は歴史的なものに関心を持ち、現実面に対する社会科学的批判は全くこれを欠き、超俗的色調が多分に残存して居たやうに見える。

○四月二十七日　寄宿舎に盗難あり。その状況左の如し。午前授業中に東第一寮において盗難被害あり。二階のみ被害あり。主に金なるもその外制服、ズボン等あり。盗難事件は毎年、殊に記念祭前後に屢々発生するものであり、この予防策には毎年幹部の汲々たる煩悶の種となつて居るのであるが、寮生に一応の疑ひをかける事は出来るとしても、往々にして外来者の事が多く、一番総代の頭を悩ますする事項であり、寮の緊張を要望される事件なのである。

○五月四日　放課後零時半、電車借切にて全校姪浜小戸海岸に至り新入生歓迎会を催し、文理科対抗の角力（文科勝）に始まり余興に移り、乱舞へと順調に進む。乱舞は六時半より七時半の一時間行われた。たゞ余興において文二仏のモリエール作『気で病む人』に遺憾なる点あつたので注意された。

○五月十七日　寮の乱舞会を行う。寮生百八十有余各志賀島丸に乗船し、午後一時博多港出帆。

志賀島勝子に行き海岸の松林にテントを張り連ね、午後九時より十一時まで乱舞を行う。一夜を明かし二時半志賀島出帆の船にて帰寮。日曜日（十八日）の午前中は対寮角力マッチを行い好首尾に終る。

年中行事の一つとして寮新入生歓迎の乱舞会が本年度は北筑の果大陸の風吹き荒ぶ志賀島において挙行された。夜を徹して寮生一同の乱舞は正に学而寮生のみに許された特権であり、寮の意気はいやが上にも昂つたのである。

○五月三十一日　午後六時より亭々舎にて玄寮生（全部にあらず）及び各寮総代とスキ焼を共にし談論中岩猿総代より消灯時間を午前一時にしたしとの案を出だし数名の熱烈なる賛成者もありしが之に反対し、現在通りにすべしと学校側は主張せり。

一定の思想的な雰囲気を欠いて居る寮生活はかうした高校生活の出発点にしか過ぎない所の高校生的バーバリズムなるものでは到底その寮生活の維持は困難であつた。

○六月五日　寮会費値上げ相談。

○六月二十四日　朝の行事の時校長より禁酒の事言及さる。

この頃、無断にてクラス会を行ひ、寮生も歓楽街にて飲酒せる痕跡があり、バーバリズムの強圧は烈しかつた。

午後三時半より図書室落成式を行ふ。先づ図書室において祭典を行ひ後食堂にて校長、主事、寮総代旧図書委員の挨拶あり、雑煮を祝ひて解散。爾後書籍整ひ自由に貸与活潑となり、寮生の文化思想方面に大貢献をなせり。

○七月一日　第一学期試験開始。

○七月六日　寮の豚を殺し百目四十五銭にて分配す。

○七月八日　午前限りにて閉寮。

夏季休暇中勤労作業、頻繁に行はる。新体制下の学校組織に基き非常時局に即応し修錬本位の組織及び戦時学生としての生活刷新を本体として寮生も大いに気力を涵養し意気揚々二学期の寮生活が始まる。二学期こそは大きな変動期である。

○九月六日　始業式。

○九月九日　昼食時会食をなし、新体制に対する心構えを強調す。

夏休以来叫ばれた近衛内閣の新体制運動が青少年学徒に賜りたる勅語に沿ふて行はれるやうになつてこゝに寮は軍隊生活的な波紋が及んで来た。

○九月十日　文部次官より紙節約の通牒あり。校内発行の雑誌その他の用紙及び廃品等につき命ありたる為、放課後寮図書委員を生徒課に集め春夏二回発行の附録を廃止、青陵頁数三割節約の事を申し渡し実行する事になる。

○九月十四日　里見平君朋寮総代に任命。理二甲　園本厚君を図書委員に命ぜらる。朋寮生が若松山迄剛健旅行をなし大いに気勢をあぐ。

○九月十六日　会食。左の事項を討議。

一、寮生が団体行動をなす時は必ず届出る事。

一、図書室及び便所の屋根破損に就いて注意する事。

一、原岡、五高の寮の視察の報告をなす。

一、岩猿総代より食費値上を問題とす。

○九月二十六日　午後六時半より亭々舎にて玄寮生と教官会合。食事の後生徒より寮祭に関し話を持ち出し、写真、絵画、短歌展を寮内にて開きたしと希望せるも時局柄の事とて許可下らず。

寮祭が近づくにつれて、寮生の団結意識は新体制の名の下に出て来る情熱の赴く所、出来る丈寮の面目を高め光輝あらしめんとするも、

時勢『自治』を抹殺し寮生の意の如くならなかつた事は、寮生憤慨の種となつた事だらう。かくして寮内の自治とか自由とかいふ文字は全く削除されたのである。

○十月一日　岩猿君以下寮総代六名運動会における寮生主催の展覧会につき学校と打合を開く。

○十月二日　来る十一日寮歌放送につき岩猿総代注意さる。

寮歌すらもかうした言葉即『自治自由』の溢れたるものは厳しく禁じられて居て、かくしてかゝる体制の下に又寮内の変動が生じこゝに大量の退寮者を惹起する事となつたのである。

○十月七日　運動会当日寮生主催の体育館に於ける展覧会出品物について一部分の下検分をなせるが期待に反せるもの多く叱責注意さる。

○十月十二日　午後六時頃迄に展覧会の飾付を大体終る。

○十月十三日　午前九時より第十八回運動会及び学而寮記念展覧会を行ふ。

戦時中、相応はしい運動会であり大いに寮生の情熱を燃やし、内面的な自由の鐘を鳴らし、怫然たる意気を示し豚汁にして夕食。

なお学而寮においては昭和十五年度より、本来のデコレーション＝時局関係上暫く中止せる寮祭飾付＝の代りに趣向を変更して、寮の文化展を行ひ時局下祖国日本の発揚光輝並びに文化の多彩なるを示し寮生の奮起敢闘を寮生に呼び掛け体育館において開催し寮生の努力の結晶燦然として光り、大体成績良好にして好首尾に終了した。寮生の奮闘は以て多とすべきである。内容不詳。

○十月十六日　寮則制定の為平山、鶴教官宅にて九時半頃までその原案を作製す。（総代六名出席す）

○十月十八日　右原案を中心に『報国学而寮々則』を制定する為会議開かる。

時恰も日独伊三国同盟調印の際で、世界情勢の多事多難を思はせる中、その余波は遂に学而寮を変動し、こゝに新体制の線に沿つたミリタリズムなる立前の下に、学而寮は変名され、こゝに『報国学而寮』として出発したのである。

変動期と呼ばれる所以は実はこゝにある。

○十一月一日　農村収穫援助勤労作業の掲示あり。

『来る十一月五日農村労力を補い、生産を助け、銃後奉公の誠を捧げる目的を立て近郷の稲作収穫を援助する事とせり。生徒各自は高校生の面目を発揮するよう努力すべし』。

○十一月五日　金武、田隈、壱岐、残島班に分れて、農村稲作収穫援助勤労作業。

学而寮の伝統を恢復せんとして、岩猿総代始め、寮内の意を飽くまで押し通す事に努めたが、時局の波に逆らう事は出来なかつた。

○十一月八日　創立記念日。

○十一月十日　午前十時半より二千六百年奉祝式典を講堂において挙行。終つて紅白祝餅配布。運動場にて豚汁。今にして見れば一場の夢にすぎないが、飲酒も許可され、鬱憤たる寮生のフアイトが一時に燃え上つた。

○十一月十九日　岩猿君に報国学而寮を渡す。また食堂に公示す。

こゝで学而寮は『報国学而寮』と命名され、その内容組織並びに寮則が成文化し、一応まとまりのある戦時態勢組織が出来た。この要綱を左に示すが、これにより当時の寮制度の細部を知る事が出来よう。

『福岡高等学校報国学而寮』

職　員

教授兼生徒主事　内藤　匡
生徒主事兼教授　永井重義
教授兼生徒主事　鶴　猛
助教授　柔道　久永貞男
講師　教練　伊藤鉄蔵
同　剣道　山崎卯一郎
同　教練　井上弥
同　同　米田栄
寮務員事務嘱託　一名
各部指導教官
文化部　生徒主事　永井重義
生活部　助教授　久永貞男
国防鍛錬部　講師　井上弥

寮生

総人員百五十二名（文科八十四名、理科六十八名）
三年生　八名（文科四名、理科四名）
二年生　三十三名（文科十一名、理科二十二名）
一年生　百十一名（文科六十八名、理科四十三名）
事故二名（入院一名文科一年、病気帰省一名文科一年）

傭人

小使　三名
炊夫　炊夫長一名、六名（男一名女五名）

福岡高等学校報国学而寮々則

第一章　総則

第一条　本寄宿寮ハ福岡高等学校報国学而寮ト称ス。
第二条　本寮ハ本校教育ノ本旨ト相俟チ集団生活ニ依リテ心身ヲ鍛錬シ報国精神ニ一貫スル校風ヲ発揚スル修練道場タリ。
第三条　本寮ハ学校長統轄ノ下生徒主事及生徒課教官ソノ指導ノ任ニ当ルモノトス。
第四条　第一学年生徒ハ凡テ本寮ニ入ルコトヲ要ス。
但シ学校長ニ於テ已ムコトヲ得ザル事由アリト認メタル者ニ限リ通学ヲ許可スルコトアルベシ。
第五条　学校長ハ学年末ニ於テ第一学年及第二学年ノ生徒中ヨリ優秀ニシテ指導力アル者ニ残寮ヲ命ズ。
但シ残寮ヲ命セラレタルモノハ之ヲ辞スルコトヲ得ズ。

第二章　細則

第六条　本寮ニ入ルベキ生徒ニシテ已ムヲ得ザル事由ニ依リ通学セントスル者又ハ在寮生徒ニシテ退寮セントスル者ハ共ニ事情ヲ詳記シ保証人連署ヲ以テ生徒主事ヲ経テ学校長ノ許可ヲ受クベシ。
但シ病気ニ依リ通学セントスルモノハ校医ヲシテ診断セシム。
第七条　各寮及各室ノ人員配置ハ生徒主事之ヲ定ム。
第八条　起床、朝礼、自習、食事、外出、門限、点呼、消灯其他ノ時限ハ生徒主事之ヲ定ム。
第九条　外出、旅行、帰省、外泊等ニ関シテハ左ノ手続ヲ取ルベシ。
一、外出ノ際門限時刻ニ遅ルベキ事情アル者ハ予メソノ事由ヲ届出テ許可ヲ受クベシ。
一、已ムコトヲ得ザル事故ノタメ門限時刻後ニ帰寮シタル者ハ直チニ遅刻ノ事由ヲ届出ヅベシ。
一、已ムコトヲ得ザル事故ノタメ門限時刻後ニ特ニ外出セントスル者ハソノ事由ヲ述ベ許可ヲ受クベシ。

一、外泊帰省マタハ旅行セントスル者ハ予メ届出テ許可ヲ受クベシ。

第十条　病気マタハ事故ノタメニ欠席セントスル者ハ予メ宿直教官ニ届出ヅベシ。

第十一条　疾病ニ罹ルモノアルトキハソノ病状ニ依リテハ保証人ニ通知シ外泊セシムルコトアルベシ。

第十二条　寮内備付ノ物品ヲ破損若クハ紛失シタルトキハ直チニ届出テソノ責ニ任ズベシ。

第十三条　寮生ニシテソノ本分ニ反スル行為アリト認ムルトキハ処罰ス。

第三章　幹　事

第十四条　本寮ニハ学校長ノ任命シタル左ノ幹事ヲ置ク。

幹事ハ生徒主事及生徒課教官指導ノ下ニ各分掌事務ニ従事ス。

一、寮幹事　六名（各寮一名）

各寮ノ取締及寮間ノ連絡ニ当ルモノトス。

二、国防鍛錬幹事　若干名

勤労作業、剛健旅行、防火訓練、運動競技等ノ事務ニ従事ス。

三、文化幹事　若干名

雑誌、図書、修養、研究等ノ事務ニ従事ス。

四、生活幹事　若干名

健康、衛生、清掃、娯楽、炊事等ノ事務ニ従事ス。

第四章　会　計

第十五条　本寮ノ会計ハ生徒主事之ヲ管理ス。

第十六条　本寮ニ寄宿スル者ハ入寮ノ際入舎料金弐円ヲ生徒課ニ収ムベシ。

但シ入舎料ハ基金トシテ特別事業ニ充ツルモノトス。

第十七条　寮生ハ一ケ月食費拾五円及寮費弐円拾銭ヲ収ムベシ。

但シ食費ハ時価ニヨリ増減スルコトアルベシ。

第十八条　食費及寮費ハ一ケ月分ヲ該月一日ヨリ七日マデニ生徒課ニ納入スベシ。

但シ既納ノ寮費ハ返付スルコトナシ。

右寮則において知らるゝ如く、当時は生徒主事教官の権力が強固で、寮生々活の全般に亘る統率権を有し、寮生のリベラリズムも一時消え去つたとはいえ脈々と高等学校の伝統の血潮を胸に宿し、汪溢せるフアイトの下に報国、尽忠、至誠質実の寮風の確立に寄与する所は大きかつた。

○十一月二十六日　八時四十分講堂にて結団式あり。終了後住吉神社参拝、正午校庭にて昼食（豚汁）、一時より文・理科の対抗棒倒し（理勝つ）及組対抗マラソン競争あり、マラソンは理二乙優勝せり。

○十一月二十九日　午後六時より寮会議室において新幹事と懇話し、報国学而寮の日課、消防演習、その他の協議あり。

○十一月三十日　四高校のラグビーのインターハイあり。

午前九時より挙式。九時半より本校対佐高の試合あり。本校の勝。

十二時より本校対七高の仕合あり。本校惜敗。七高優勝す。五高は不参加。

○十二月三日　放課後三時半より報国学而寮結成式を行ふ。

戦時下の学而寮が報国の誠に即応してこゝに非常態勢を整へ、こゝに戦時学生としての重大なる職務を背負ふ精神涵養に努めて居たのである。昭和十六年三月八日発行の学而寮文化部発行の『学而』創刊号の中より当時の状勢を探知し得る。

『宣　誓』

興亜ノ聖業日ニ進ミ時局益々重大ヲ加フルノ秋茲ニ福岡高等学校報

国学而寮ノ結成ヲ見ル我等ハ日夜肇国ノ精神ヲ体シ青年学徒トシテノ重大ナル責務ヲ自覚シ和合協力集団生活ニ依リ心身ノ鍛錬ヲ図リ滅私奉公以テ臣道ヲ実践シ皇運ヲ扶翼シ奉ランコトヲ期ス

右宣誓ス

昭和十五年十二月三日

福岡高等学校報国学而寮

寮生代表

幹事白川七郎

報国学而寮結成式所感

遂に夜は明けたり。吾等大日本の正面にさしのぼる朝の光を迎へむとす。清く神々しきさては又薔薇色に澄み渡れる朝の光を、日本は此の日を迎ふるためにのみ生きて来れり。天空の花、太陽はすべての地上の悲しき豊葦原に還り、美の創造者たらむとす。

新体制！新体制！昨年黄塵の南風海辺を吹き、東亜の空に黒雲を吹き寄せぬ。重苦しき息吹のため、吾等の生活は沙漠に於ける夏の一夜の如くなりき。然るを今荘厳なる光、大地の柔き掌の上に輝けり。新体制！新体制！一億の声揃へ唱ふ叫び八紘の野に谺す。うるはしき我日本。偉いなるかな大和島根。

鐘は響けり新らしき営みは始められぬ。行かんかな明日の新しき日本を創造せんとする者よ。

顧れば今ははや五ケ月前となりし昭和十五年八月末、国内新体制要綱の発表されるや、教育界も活潑にこれに向ひて動き始め、文部省当局は先づ高校を俎上にのせ、下旬に至り全国高等学校会議を開催し、学校校友会、寮を以て一元化せる修練組織の確立を決議せり。かくして銘記すべし。皇紀二千六百年は当に明治以来の高校史に一の区切りを劃したり。自由を叫び自治を愛するの伝統はこゝに一段落をつげぬ。吾が学而寮二十年の歴史、これ尽く若人の熱き血潮もてなれるなり。これを思ひ、かれを思へばうたゝ感慨無量なり。然れども、日本の現実の姿きびしく流るゝ時に眼を転ぜよ。正に当にこれ歴史的必然なり。かくて開寮以来城南の野に謳ひ呆けし自治自由の旗幟は下ろされぬ。されど、徒らに憂ふる勿れ徒らなる懐疑と批判はこれを避け、新しき指導者としての自覚に立ち日本の目指す人類への貢献に邁進するは吾等が貴き使命なり。

さて吾が福高においても、二学期に入るや鋭意修練組織の体制整理に腐心し、十一月二十六日先づ校友会の解散ありて、新しく報国団の結成を見、越えて十二月三日吾等が学而寮亦発展的解消をなして報国学而寮誕生を見たり。

この日、校長、生徒主事を始めとし、諸教授の来席を辱うす。午後三時半、生徒主事開式を宣し、宮城遙拝黙禱の後校長登壇し、自治自由の問題を持ち来りて諒々と自由の誤解、自治の堕落せる様を述べ、此処に寮新体制の意義を明らかにし、以て寮生の奮起を希望せり。代りて永井生徒主事挨拶す。校長と略々同様にして校長の足らざるを補ふ。一家の如く明るく朗らかにとは同教授の常に口にする処なり。次いで寮幹事六名、文化、生活、鍛錬部幹事各々一名を任命し、終りて白川幹事、寮生を代表して宣誓文朗読す。かくて式は終了せり。新しき寮は生れたり。報国学而寮これなり。

寮生諸君。まなこを開け、頭を振上げよ。祖国日本は今何をなしつゝあるか。昨日悠久二千六百年の歴史を寿ぎ、今日東亜共栄圏は即ち日本の生命線なるを忘るべからず。戦は西の方、支那大陸に今尚やむ事なし。然も思はざらめや、戦雲しきりに太平洋に動きて、戦火地球を

包まむとす。

寮生諸君よ。諸君の血は二千六百年偉大なる大和民族の胸に流れし、真紅の血潮、諸君の踏む土はこれ大日本の土、而して吾等は日本人なり。さらば。諸君、日本民族という大いなる自覚の上に立つべし。日本の知識階級として、哲学する最高の叡智と旺盛なる気力とを以て寮という心身の修練道場において相共に切磋琢磨して負荷の大任に堪う人物とならん。

戦いつゝある祖国、一度想うて此処に到れば、豈悠々して時を過すに忍びむや。今の日本の要求するは最大の創造の精神と最高の肯定の精神。時は来れり。偉大なるものは漸くにして生れ出でむとす、日本の偉大なる建設よ！

さらば友よ！　朝は来れり。新しき旗の下に、いざ創造の鍬を打振はむ。

其の他『学而』創刊号には論説、詩歌十篇程あり。凡て高校生の有する知能の精粋にして、国難に処しての気力と叡智に汪溢せるものばかり、こゝに於て報国学而寮は一応の段落を劃した事になる。

○十二月五日　西園寺公望公爵国葬。

○十二月六日　午後十時半福岡市警防団及び十七分団の援助にて報国学而寮第一回の防火演習を行ふ。寮生緊張して各部署にて活動し好成績をあぐ。

○十二月十三日　歓送会を行ふ。（楢崎にて）

○十二月十六日　第二学期本試験開始。

○十二月二十三日　午前中に閉寮、冬季休暇に入る。

この間国際情勢は頓に急迫、日本的全体主義も益々深まつて行く。又学而寮もその本質ならざる新体系の下に包蔵され、それと共に寮生の愛寮精神も著実に起つて居た。

（昭和十六年）

○一月八日　始業式。

帰寮人員百三十一名、新体制により生活を始む。

○一月二十三日　朝の点呼に出なかつた文一甲中村邦春を当直の山崎教官が呼出され尋ねられたるに『七時にや起きりません』と云つたために放課後寮務室にて訓戒された事あり。

○一月二十四日　寮図書室の書棚にあつた河合栄治郎の著述十冊と大杉栄著一冊とを取上げて寮務室に保管す。

○一月二十三日（マヽ）　明後二十五日、文部省綜合学事視察あり。

一、視察員

教育調査部長　安達　禎
督学官　坂井喚三
同　山桝忠好
同　宇野喜代之介
社会教育官　伊東正勝
教学官　小川義章
視学委員海軍大佐　島峰次
〃　陸軍中佐　中島嘉樹

二、視察方法

十時二十分―十一時五十分　授業視察
十二時より　閲兵分列
一時より　報国団の修練実況及諸施設視察。

○一月二十五日　綜合学事視察の講評は随分峻烈なものであつた。

一、教室内にてマントを尻に敷くものあり。内藤生徒主事がマントを教室内に持込むことになつた理由を述べられたのに対し、坂井視学

官は九州の様に暖い所は用いせしめないでよいだろうと答えた。
一、市中にてカツフエーに行くものあり。女給をからかうものあり。
一、脱いだ服の整理がしてない、靴が乱雑である。
一、寮は昔を思ふと誠によく行つた。隔世の感あり。一つ二つ注意として神殿に破れた仕切戸があるのはよくない。職員便所が不潔（山桝督学官より個人的に聞いたもの）である。
一、集団勤労作業はよくやつて下さつて有難い。しかしもつと拡大強化したい。精神訓練のみならず日本の現状からして食糧増産の意味で従事されたい。
一、分列式はなつとらん。
一、教学刷新の書物を全教官が読んで頂きたい。
○二月六日　朝礼の際全寮生に対しマントの登校着用を禁止、及乗車禁止につき通知命令す。
○二月十一日　組対抗駅伝競争。
校門―九日社前―竜頭崎―筥崎鳥居往復。
○二月十二日　西二寮階上にて楽書せる六名の寮生を謹慎処分に処す。

○時に死なんとする鴻寮を愛する者よ熱情を絶やすな鴻寮の諸君
信念をもて。　森
○幾山河越え去り行けば淋しさの果てなん国ぞ今日も旅行く。
ガンバリヤイ
自由主義の崩壊　吉田
○愛は普ヘンなりとは何ぞや、優しい心がほしいもの　矢野
○真実一路の旅なれど真実鈴振り思ひ出す（天井）　吉田
○魂の流れに乗つて何処行くみなわ　中村
○エノケンの高校生姿漫画　岩田
○真理を愛する心国家の為に死なん　綾野

○二月十八日　昼食時寮食堂に生徒を残し今回の不祥事を説明注意し一段の奮起緊張を促せり。
○三月三日　三学年試験終了。一、二年試験開始。
○三年生送別式挙行。式後うどん、豚汁、握飯にて別宴をなす。
昭和十五年度になると寮内の諸改革、制度の充実化を見、戦時下学生として充分の規律ある生活を送つて居たが、若人の意気必ずしもその範囲内に逼塞せずして、往々にしてその柵を越え、奔放なる生活、青年のみの浸り得る和気靄々の環境をかもし、自由を尊び、渦中を傍視し、別天上の白馬に乗れるが如き勇躍たる雰囲気を現出す。されど戦火世界を包まんとし、未来の指導層となれるを期す寮生の意気は白熱せるものがあつた。
この時代は所謂過渡期の空白状態であり、祖国は破滅への変動の中にその身を没して居た。
かくしてかゝる寮生活の中にあつて、寮生活なるものを一つの楽しい夢となし又イデアの国とも思はせるやうな美しいものにする原動力はとりもなほさず、自由と友情があろう。
友情に結ばれた寮生活の美しさは、新古を通じて不変の原理であり、この友なくしては生活は欲しない現状がこの時代は特に強かつたと見てよいのである。

【昭和十六年度】

動乱の歴史はその流転の限りを知らず、時潮の流れに自ら誇つた自由自治の旗幟にも朝に翩翻と飜る日章旗に夜粛々と響く軍靴の音に革新の一頁は開かれたのである。昨年暮の報国団結成により全体主義的

一元性統一性を与へられた高等学校、而し当然寮もその渦中に投げ込まれたのは当然の事である。報国学而寮の結成に始まる新体制に即応した寮生活はそこには不安な重苦しき息吹の漂ふ生活であり、やがてそれが謬着した昭和十六年は何等かの形で新しきものを自らの手で創造すべく陣痛の苦しみにあらゆる努力を実行に移すべく寮を推進して来た年である。緊迫した時局、それより必然的に自己と国家、自己と社会に目を転じ、一個人の生活は狭隘なる学而寮内に止まらず、国家、社会、学校、寮のあらゆる生活を包括した立場より個人生活と国家とを何らかの形で結びつけるべく千載一遇の好機至れりと進んで改革せんとする気運に充ちて居たのである。高等学校而も寮におけるシンボルである自由の精神は、歴史的必然により無意識の内に全体主義に右旋回したのであるが、なお寮生の自治観念は厳として存在するものとして自主的改革の着手は行われようとしたのであるが、自由と自治の離反は改革上の多くの点において学校との衝突を誘発し、意気と熱に燃え大局の流れに棹をさす能はざる寮生は、憤然寮を去ったのである。これは歴史的必然にして伝統の然らしむる所のもので血気に早るとはいえ当時の旺盛なる自治意欲を窺い知る事の出来るものである。

かくて自治の理論と行動に矛盾を生じた寮は、こゝに『愛寮』なるテーマのもと運営は行われた。勤労作業が頻発し、軍事教練も強化された。全てが愛国に通ずる愛寮なる言葉の下、これらは黙々と自己の本分として即ち個人の訓練よりまず第一に団体訓練を必要として行われたのである。観念的思索、抽象的理論は極力これを排撃し、実践という現実を強調し書物を読むにしろ何かしら生命の包といったものを感ずる傾向に進んで来たのである。客観より主観へ、そして思索という言葉は修養という語に置き換えられ、それにより個々ばら〳〵の自省のみに走った寮は、団体生活の統一上実践という事により統一せられて来たのはいうを待たず、当然の結果である。以上その実践の行動を、断片的ではあるが生徒課日誌により辿って見る事にする。

○四月八日　寮幹事白川七郎及各部幹事五時半より教官と会食し、昭和十六年度の指導及打合を行へり。寮の方針として左記事項を決定す。

一、報国学而寮生としての新なる自覚と修練に邁進する事
一、独自的個性の伸張を計る事
一、二十年の伝統の敬愛とその発展に努力する事　　以上

新役員新なる抱負に時の経過するのを忘れつつ十時解散す。

○四月九日　入学式に次いで午後三時半より食堂に於て新入生の入寮式を行った。

式　次　第

一、生徒入場　二、父兄入場　三、職員入場　四、宮城遙拝
五、黙禱　六、校長訓示　七、生徒主事訓示　八、寮幹事挨拶　九、生徒退場　十、父兄との懇談

校長、内藤先生、寮教官、野村、牧川両教官出席される。

校長先生よりは新体制下の寮生として栄ある一五九名の新入寮生を迎へた事につき懇々報国学而寮の発展と使命の重大さを訓話された。生徒主事の訓辞の後、寮幹事白川七郎氏立ち、廿年の伝統は我々の生命力であり、この中より新なる歴史を創造すべく目前の形や文字に囚れず、自己の国家、社会、学校、寮、個人の統合した大きな生活の中に真剣にぶつかつて自らその中に真理を見出すべく新体制下第一年目として旧い物に培はれた力を飛躍せしめんと力強く激励の辞を送る。

新入生　一九五名

○四月十日　新入生入寮と共に、暗雲漂ふ世情を外に若々しき爽快さを加へた寮は、慣例の説教ストーム、名も変つた『激励』を、血沸肉躍る上級生で行つた。しかしこのストームも巡視の教官の注意を喚起する程寮に対する学校当局の干渉が高かつた。

○四月十二日、十三日　左記の過程にて寮の修練を行つた。

日／時間	四月十二日 土曜日		四月十三日 日曜日
6：30	行事		行事
7：00	清掃及食事		清掃及食事
8：00	授業		楠本教官講義 王陽明の生涯
9：00			
10：00			謹写
11：00			体操
12：00	中食及休憩		中食及休憩
13：00	寮生心得		越山先生講義 新体制下に於る科学の任務
14：00	（永井主事）		
15：00	勤労作業（寮果樹園）	謹写 東一 西二	静坐（講義と静坐）穴山先生
17：00		福高体操 東一 西一	
18：00	食事及入浴		
19：00	新開先生講義 歴史の転換 と学生生活		
20：00			
21：00	坐禅		

前述したる如く昭和十六年度は革新の実行期であり学問以外の方法で国家への奉仕を現す事即ち団体訓練が強調せられたのである。修練も時潮に流れた一つの団体行為であり復古思想に基く日本精神の唱道と相まつて実は増々国家主義的彩色を帯びるに至つたのである。修練を為せる寮生も為さしむる教官も無意識の内に国家と云ふ大なる河の中に投げ込まれ戦争へ戦争へと流されて只その流れ方に秩序整然と流れるという事に修練の意義があつたのである。

○四月十九日　例年の如く新入寮生歓迎会を午後五時より食堂に於て挙行した。新一年生組主任の各先生出席せられ童顔に頬を赤めつつ福高名物の自己紹介有り。始めて学而寮の高校生らしき環境に浸り驚きと喜びのまにまに十一時過ぎ終る。尚当日大フアイヤーストーム行はれる予定なりしも学校当局の許可なく次の如き経過を経たのである。

既に思想的弾圧に成功したミリタリズムの旋風はその形式的寮生活の干渉にまで向つて来た。そして本質的な純粋さを無視し単に時代を考へざる『児戯的徒労』の名称のもと服装に態度に果はその行動にへと禁圧の態度を取つて来たのである。四月十六日寮幹事との会食において歓迎大フアイヤーストームの許可を願ひたるに『伝統を愛する意気と熱とは良く分かるが十年前の今日とは時代も異り今日では既に報国学而寮の名称の下、諸君は国家の一推進力である。大いに自粛自戒し、その情熱を自己の学問に修錬にまた勤労に向けよ』の理由の下その中止を命ぜられた。そこで幹事側はそれが永久的なものか一時的のものかを質したるに学校当局側は夜は静粛を旨とする意味において禁止するのであつて決して永久的のものに有らずの意なるを以つて、現状勢下止む得ずとして歓迎会のフアイヤーストームは遂に中止せられた。何か物足りなさを感じたのは事実であつた。しかし未だストームはやれるという、消極的な希望が全てを支配した。そしてこの事は寮というよりも寧ろ積極的なる国家意識が盛んであつた事を意味するものである。

○四月二十八日　翹寮生会議室で鷗外の『雁』の読書会を開いた。当時既にマルクスの左翼的思想書は漸次姿を消しフイテ等の愛国的な物へと移行した。一般的に、革新に伴う復古の思想と共に『日本的なるもの』の探究に力を注ぎ河合栄治郎阿部次郎のものより京都派の民族哲学書等が良く読まれる様になつた。読書会は比較的多くの者に読まれているという意味に於て文学書がその大部分を占めていた。新一

年生は上級生より内容を全て人間的なものに還元し作者の人生観社会観に在来の読方と違った深みを感じ高校生活の一端に触れつつ午後九時半解散した。

○四月二十九日　天長節式後新宮浜まで剛健旅行を行った。

一、午前九時校庭集合

一、午前九時十分新宮浜へ剛健旅行出発、途中昼食（香椎浜）

一、午後三時到着

一、午後三時弁当分配宝探し等

一、午後四時半乱舞会

一、午後四時半終了

一、解　散

一、博多湾鉄電車にて帰校

従来の園遊会式のものであるが時潮の流れは剛健旅行と名附け心身鍛錬の意味より片道は行軍となった。此処にも団体訓錬の強調を見る事が出来るのである。新宮浜に到着後は玄海の荒波を聞きつつ真白き砂浜の上、なごやかなる一日を送った。又久方振りの乱舞にて大いにファイトを燃し浩然の気を大いに養ひつつ帰路についた。

○五月十日　報国学而寮合宿訓練。『あゝ玄海の波の華……』と何十回か歌った応援歌が白い頭を振りかざす玄海の巨濤に響いては消され、消されては響きしっつして黒い巌と白い泡沫の中、昼も夜も絶ゆる事なく聞えくるのである。深江が浜の乱舞会これは福高の伝統であり象徴であり新入寮生の甘美な憧憬でもあった。時局の緊迫は形式的に名称を変へ戦時に即応した如き訓練なるものが一、二施行されたが寮生の胸の中には又そして教官の胸の中にも恋人の瞳の如く輝く玄海波頭の音を聞き白金の如く光る小さな帆影を眺めては美酒に酔ひつつ白浜の上を躍り狂った昔の夢の国へと誘ひ込まれるのである。

名称の変化と共に合宿地も変へて今津の浜とした。零時四十三分発の列車で今宿に下車、今津の元寇防塁跡に行き直ちに『テント』を張って訓練を開始した。午後五時毘沙門山に登る。南に筑紫の連峰を青緑の間に眺め北に白砂連なる博多湾頭に接し山水の絶景を観賞しつつ赤い梅干のニギリ飯の味も可く心惜げに七時に下山した。愈々夕闇迫る頃待望の大ファイヤーストームは開始された。満潮の水は洋々として白砂の浜を洗ひ幽けき残照は波に入って暗らき紫にゆれる。至純なる心の絶叫は次第に燃え易い若人の魂を男性的な熱狂の渦巻の中に引きづって行くのである。十時廿分就寝、翌日八時頃全員起床し各寮対抗角力競技を為し、爆笑の内に十二時終り二時十分今宿発の汽車にて帰寮す。出席教官、永井、鶴、大塚、中原、久永、米田、伊藤各教官。

○五月二十七日　集団勤労作業。作業の種類は農村の麦収穫への援助であるがかゝる集団勤労が学生生活の中に入れられ知育の是正が始められたのは昭和十三年ころよりである。即ち従来の目と耳を通じ頭脳にのみ与へられ貯蔵され時に応じて口から出て行くもののみの教育を補って全身から得て全身に漲らし全身によって外に発顕して行くものの教育を為さんとするもので、更に集団生活における自己犠牲の意義を自覚せしめ困苦難を通じて極限における自己性能の認識と向上とを促さんとするものである。時局の悪化は多数の農村青年の召集とそれより生ずる労働力の不足への補充と併せて生徒の時局認識を高め僅かながらも身を以って東亜新秩序運動に参加する事にあった。斯様な生徒の勤労を通じて学生の意識を国家主義の方向へ誘導する事が試みられたが、生徒の気持は直ちにそれへは行かず異常なる生活体験が彼等の人生観に何ものを与へるかを実験する如き気分で参加するものが

相当あつた。

○六月十二日　寮幹事会を開き学而寮二十周年の記念事業につき打合せ会を開催した。白川幹事より各部の準備計画の説明後二十年の伝統の上に一層の栄誉を飾るべく寮生各自の自覚を促す。生徒課長より更にデコレーションの思想傾向につき注意された。

○九月六日　報国隊結成式挙行。欧州の戦乱と支那における暗雲には必然な連関が予想せられ凡てが戦争へ〳〵と一歩一歩と前進を進めていた。報国隊とは時潮の流れに即応した報国団の出動隊形である。特技隊特別警備隊等の物々しい名称に自己の任務とそれより生ずる不安に恐く者或は単に学校を国家に結びつける形式的な結成のみと見て申訳的に出る楽観論者また自由を捨てる事により時代へ生きる道を考え信仰的皇国中心主義に目覚める者等色々の感情に興奮が高まつていつたが何れも知識と国家への二つの愛の共に全からん事を一応念願し日を経るに従つてその棄てる物への覚悟は固められて来た。自己の身辺にとりとめもなく描かれた様々のロマンテイシズムは次第に影を消し今度は国民的生命の発展にかかわる自己の使命についての空想が新しいロマンテイシズムを漲らせつつあつた。斯くして一時上からの強圧的な声に反抗した寮生も次第に時代への順応を自己の内部より示す様になつたのである。

○九月二十三日　午前一時寮を出発して太宰府に夜行軍を行つた。軍事教練、野外演習と行軍には慣れた寮生であつたが夜行軍はさすがに参つた者多く教官の叱咤も馬耳東風で居眠り乍ら歩く者多く行軍は遅々として進まず初秋の冷々とした空の下五時頃漸く目的地に到着した。

○九月三十日　夜九時半より全寮灯下管制予行実施。直接敵機の空襲と云う現実面よりも国防国家への役割を果す意味に於て実施されたが寮生は始めての事とて熱心に行動し成績は頗る良好であつた。この頃より盛に『待つあるを頼む』とか『周到なる準備』なる語、慣用的に使われだした事は時代の風雲が如何にあつたかを見る事が出来るのである。

○十月二日　昨日より猛威を振つた暴風の為寮の被害多く午前九時より寮幹事白川及学校より当直の教官と共に学而寮を巡視した。その結果東一寮、西一寮の廊下の壁十数ケ所が破壊し又硝子の破損等被害は多大にのぼり夜八時より会議を開きその善後策について協議された。寮祭も愈々目前に迫り寮生の意識も大分高まつて来たのでその旨永井生徒課長に報告しデコレーションの出品の検査を始めた。不適当なもの無し。

○十月十日　学而寮二十週年記念祭。

弦月淡く天に倚り　寮史燦たる二十年
松籟低く囁けば　今こそうたへ天地の
元軍呑みし玄海の　栄ゆる時に生れ来て
波は黙示の華と散り　創造の道と真理に
強虜のあげし喚叫に　尽ぬ生命をそゝぎつつ
答ふ九洲男子の鯨波は　理想の光求め行く
若人の胸に尚迫る　寮生我等二百名

新入の秋はこと毎に心さびしむ。夢みながらに咲ける月見草の花かず、いつしかまばらになりゆけば、風情のいよ〳〵、うら若き尼のさびしさをしのばするを見ても、いわれなき涙の頬を濡らすを覚える。まゝよと入り日の寮庭の草に身をなげて瞳をとざし、客愁を一睡の夢に消さんとすれど、欲つする夢きたらで松林の葉づれの響にまじりて

蟬の声いと、かしゞくも啼きいづる。『筑紫こひしゝ』と虫の唄にも、筑紫を恋ひ、われを慕へる夜毎の夢に、親しき郷国の人の心の声と思はれて、孤愁またひしひしとして身に泌みわたる。さればなり、今宵も新しき制服のカラーを雪と闇に浮ばせて、カフエーのほかげの下に杯をあげ、美酒の陶酔に限りなきわが身の秋のあわれを消さん……日記より』。悲しき九月は過ぎ去つてあわたゞしくも雄々しき十月は来た。舞鶴城の紅葉映ゆる頃、緑酒溢るゝ双手の杯に浮かぶその若々しき面影に、二十年の幸福を祝ふ饗宴のあかりは赤々と輝き出すのである。時局下の名の前に種々制約された寮生の行動も此処だけは昔乍らに創造の世界に真実の道を歩いて来たのである。前夜油嶽の空に星のまたたくころより『デコレーション』『運動会準備』『全寮コンパ』等童顔を晴々とした寮生の徹夜の用意が為された。大なるものを生まんとする寮生の意欲は強かつた。

寮記念祭式次第

一、慰　霊　祭（零時半）

一、記念全寮コンパ（午後六時）

1、国民儀礼

2、開会の辞

3、会　食

4、校長訓示

5、教頭訓話

6、生徒主事訓話

7、来賓教官訓話

8、先輩挨拶

9、全寮総代挨拶

10、余　興

11、閉会の辞

全寮赤々と輝く光の下、明日の大運動会、デコレーションの飾付け等に忙しく駆廻る寮の入口に、先輩、教授陣は続々とつめかけ準備全くなされた全寮コンパは午後六時より開始された。『学而寮廿年の時の流れは設立以来の先輩の真摯な生活により意義づけられて来た。時の流れに形を変えられつゝしかも時の流れを変え、時の流れがぶつかる勢で流れの中に水泡を浮べては消え、浮べては消して行く有様の中に、人間と時との関係が――廿年の歴史が示されている。言葉を変えれば廿年の年月は寮にとつては生命であり、廿年の流れを瞬間々々真摯な態度で持続してくれた先輩の生活こそ、ある意味で時の流れを作つてくれた生命力である。吾々は先輩諸兄の時に対する真摯な生活の意義づけあつて、廿年を寿ぐ事が出来るのである。……全寮総代白川氏記』。廿年の歴史……寮それを愛しそれを祝う者の心は皆同じである。それは過去において義務を果した者であり、現在においては真に義務を果さんとする者の集りである。そこには必然的に生命力の通じあつた和気靄々さが、漲ぎつていた。最後に出席者一同で学而寮歌を歌いつゝ歴史的式典を終つた。

○十月十一日　寮デコレーション、大運動会。

朗らかなる秋空は処女の瞳の様に晴れ〳〵しく輝き上つている。昨日の喜びも消えぬ間に、いよ〳〵待ち焦れた運動会は開かれたのである。血は湧き、肉は躍る。白赤幾百千本の彩旗長幟は物々しく金風に飜り奏楽は劉喨と人の心を煽りたてる。今日の一日を待ち侘びた市民の老若男女、なだれをうつて集り、さしも広々たる青陵も忽ちにして黒山を築く。職員、生徒対抗のボール蹴りに、又クラス対抗のリレー

に、法螺貝と空鑵と蛮声との激しき交錯音の中にプログラムは移つて行った。かくて多事多彩な式典も油山が淡い入日に薄れる頃寮生を中心に『夢の淡くして……』の大合唱の寮歌と共にその幕を閉ぢた。

○十二月八日　太平洋戦争。

唯一つの詩人的感激からペンを擲つて剣に代へ、真紅な血潮を希臘の自由の為飾つたバイロンの熱情は、感激を身上とする一部寮生の憧憬であり、そしてその熱情が憂国の偏執へと進み、争闘を近代生活の象徴化する程にまで至つたのである。而しながら世情は息苦しいまでに暗雲に閉ざされ、十月には既に大学生の卒業期の臨時の繰上げ、又徴集延期期間の短縮とが発表され、自己の身近に迫る変化にかなりの不安と動揺があつた。この中に太平洋戦開始の報は全寮生を興奮の坩堝に陥れた。長い間の国際的緊張、何物かを予感する重苦しい状態から解かれた反射的な快感と、将来の成算を慮る不安の中に、真珠湾空襲の報が落下したのである。続々入る快ニュースに寮生は得意の絶頂にあり、自己の行動を国家への犠牲により美化する夢に、心は遠く太平洋の彼方に飛んでゐた。堅実さを失つた浅はかな主観であつた。

○十二月十五日　会議室に寮生と寮務主任を集め、永井生徒課長より左記事項につき注意、太平洋戦争下の心構へ等につき訓示有り。

①戦時学生の心構へについて（永井生徒課長）

②各休暇中における学校自衛につき、生活部所定の第一群の地域に属する寮生に対して、第一空襲警報ありたる時登校防護する様伝達す。

③本日より火鉢の使用許可。

戦争といふものが現実の問題として身辺に迫つた今日、語るも聞くも真摯にしてまた生活の反省も深刻であつた。

○十二月二十六日　冬期休業に入り大部分は帰省、残寮者五十名。残寮生にて寮の防護に関し万全を期すべく各自の責任を分拠す。

○一月二十八日　灯下管制。火の用心等多事多彩な戦時に即応した寮の訓練を実施。

○一月三十一日　三年生送別全寮コンパ。

午後五時より本年度最後の全寮コンパを挙行。時局の歴史的変動により永い努力で築き上げた寮の伝統を如何に処理し発展せしめるかに、常に下級生を指導した三年生に対し、万雷の拍手で感謝の意を表した。去る三年生も『とに角、突進んで呉れ、運命を自分達の手で勇敢に突破して呉れ』と最後まで寮の発展を祈りつつコンパを終つた。

○二月二十三日　閉寮。

【昭和十七年度】

日支事変にて祖国日本の躍進目ざましく、大東亜戦争開始以来、皇軍南方各地を占領、日に日に日本の栄華上るにつれて、学而寮にも漸次戦風戦火舞ひ来り、勇躍動員報国団の実を挙げ、而も飽く迄戦争に対する批判反省を続け、流れに逆らはず拘らず進まざる勇敢泰然の態度を持し、吾が学而寮の確固不動の伝統を確立し、以て未来の優秀なる指導層たらん萌芽が一日々々と養育されつゝあつた。

○三月二十日　午後五時半より寮関係教官と生徒幹事、この新学期に対する打合会をなす。

○四月一日　午後一時より入学式。午後四時半より入寮式を行ふ。

○四月二日　始業式。

○四月六日　夜七時より理科一年の学而会を催し、日常生活上注意すべき事を談合す。

○四月七日　夜七時より文科一年の学而会を催し、寮生としての心

得を談議する。
○四月八日　大詔奉戴日、式行はる。
○四月十日　午後七時より寮図書室に於て校長を囲み幹事及び補佐の懇談会を催す。
○四月十一日　午後五時三十分より寮食堂において新入生歓迎全寮コンパ開催。午後十二時終了。先輩村谷正隆氏以下数名出席さる。
○四月十五日　放課後、第一回の報国隊の結成を行う。
○四月十七日　第一回寮生会食。しかして爾後会食は木曜日に変更さる。
○四月十八日　午後零時二十五分敵機B17、東京、名古屋、神戸を空襲し来れるを以て本地区は午後四時二十分、空襲警報発令さる。生徒は、寮生を中心として、また学校附近の通学生馳せ参じ、各部署につく。寮生は一時間交替にて午後八時より翌朝五時まで警衛に従事す。
○四月二十八日　校長室にて寮幹事（豊福、森永、森、加藤、大塚、山口）と校長と会食あり。空襲に備うるため三十五名宛交替せしめ警戒せしめる如く、課題の協議をせり。
○五月四日　青陵会（寮乱舞等）を五月九、十両日深江海岸において開催の件許可さる。
○五月七日　寮生と会食。消灯及び青陵会深江海岸合宿について戦時学徒として遺憾なき様注意あり。
○五月九日　昭和十七年度青陵会を糸島郡深江海岸において催せり。
九日十二時三十八分鳥飼駅発列車にて出発、前原下車。海岸伝いに深江海岸に四時着、直ちにテントを張り、あめ湯にて渇を医し夕食を取る。而して八時より九時までの一時間元気潑剌たる乱舞を催す。後就寝す。
十日は午前八時起床。宮城遙拝、体操、その後網引あり。小魚なれ共沢山の獲物あり。午後相撲あり。三時六分、深江発一路帰寮せり。
寮生はよく規律を守り、友情を増し、青陵会の目的を十分達成す。天気快適なり。
特記すべきは戦時下敵の空襲に備うるために、土曜日九日中は三十五名を警備に残し、夜は深江発の終列車にて三十五名即日帰省せしめ、七十名を以て万一の場合の校内整備に処し、而して九日残寮せるものは、十日の一番列車にて深江着参加。時偶の空襲に万全の警戒をなすと同時に報国の情炎深江海岸にて燃々と火花す。
○五月十六日　第二十回運動会挙行。快晴なり。卒業生来賓多数、盛大に催さる。マラソンに始まりクラスリレーに終り豚汁にて夕食をとる。

報国学而寮二十周年記念寮歌

理三甲　園本　厚

一、流星駆ける蒼穹に狂へる弧月上を見よ
四海騒然嵐咆へ銀竜天に昇れども
大地の護り厳として血の香漂ふ闘争碑
修理固成し皇祖（カミ）の大理想燦然として光あり
二、亜細亜極まる日東に逆扇懸かる大芙蓉
久遠興亜の烽火焚き一斗の土を血に変へて
不羈の闘魂炎々と灰土と共に燃えゆくを
従容として天を享け遙か雲間に見下せり
三、夢に彷徨（サマヨ）ふ時代（トキ）は逝き怒号の命天を拍つ
理想は常に熱にして叡知は常に力なり
実なき思弁児戯に似て虚言幾百何かせん

洋々流るゝ民族の浄き血汐をいざ汲まん

四、今泰山は安らぎて靖亜の魂の進む処

広袤万里大陸に鶏鳴高く曙光あり

文化の建設涌然と血を呼び熱を招かずや

友よ起たばや創造を誓ふ男子が時は来ぬ

五、いざ立たんかな一世の頽廃救はん木鐸ぞ

若き力に彩られ理想と叡知の剣持ち

進む正義の一条に栄ある黎明輝やかん

見よ九天の空高く黙示の燦と閃くを

六、さらば進まん若人の熱き友垣巡らして

大玄海の濤声は我等が胸に谺せり

嗚呼孜々として倦まざりし我等廿歳の丈夫たり

学而二百が赤熱は凝りて日本の先駆ぞ

○五月二十二日　剛健旅行。今津へ。

玉泉教授の講演、引続き宝探しの余興あり。

○五月三十日　九州四高校に水泳のインターハイが成立し、第一回の大会が五高において開催されるやうになり、福高の水泳選手は零時四〇分の汽車にて熊本に向け出発せり。

○六月五、六日　勤労作業実施。壱岐、今宿にて。

○六月十一日　寮生と例会の会食を行ひ、精神の弛緩及衛生などにつき注意を与ふ。

この頃の寮生も夜遅くまで娯楽団欒し、狂暴なる生活、一種の誇大視せるリベラリズムの渦中に身を任せ、自由奔放の生活をして居て、往々にして生徒課の眼を光らせて居た事であらう。

○六月十二日　受閲。

○六月二十四日　会報の例会をなし新幹事任命について相談す。

この頃、戦時勢力拡大に伴ふ勤労作業、報国団活動、軍事訓練盛に行はれて居たが、果して福高生がどれ丈の誠実さと真剣さとをもつて従事したかは甚だ疑問とされる。

○七月七日　百道海岸に於て水泳訓練実施さる。

○七月八日　従来禁止されて居た生徒の図書借出を許可さる。

○七月十日　本日より午前七時十分授業開始となれり。従つて寮の日課時限も変更され、午前六時点呼、午前六時朝食となる。

○七月十六日　卒業生と記念写真を撮影す。

○七月十八日　午前十一時より卒業式並壮行式挙行。暑中休暇に入る。

○八月二十日　夏期勤労作業に入る。

『学而』第二号よりこの頃の寮生気風を代表する資料として、文三乙白川七郎氏の記述せる『学而寮二十周年を迎えて』を併記し、以て当時の構想雰囲気を共に味いたいと思う。

行く者は猶水の如し、流れに浮ぶ水泡の且つ消え、且つ結びて久しくも止まる事なし。私は室見川の河辺に立つて休み無く流れ去る清水に浮び且つ消えて行く水泡を眺めながら、空覚えの方丈記の一節を口誦んで見た。私には静かに結んでは消えて行く水泡に長明の様な深刻な厭世感を感じ無かつたが、絶えず緩かに流れ去る室見の清流に結んでは消結んでは消えて、而も元の清流に帰つて行くその儘の有様が我学而寮廿年の歴史を暗示するものの如く感ぜられた。

流れ流れ去る室見川は学而寮廿年の時の流れであるように思える。川の流れて止まぬのも水の力であり、水泡を浮べ消すのも水の力である。奔流に浮ばんとする水泡も将に渦巻に消えんとする水泡も共に水

泡以上のものではなく、水に生れ水に消ゆる運命にある。然し水は流れて川であり、川は流れるが故に川であり、川を流すものあつて流れその故に水泡を生ずる。時は流れなり、それは生命をもち流れ流れて一時も止る事がない。時は過去、現在、未来と流れて我々を規定して行く。しかし我々の真摯な生活あつて始めて時に意義がある。我々をたゞ規定するだけが時とすれば、それは何等の意義をも持たなくなる。それは単なる概念上の時である。我々は時に対する容器といえよう。河に急流あり淵あり、その河底の異なるに従い水流の緩急が決せられる。我々の瞬間々々を過す態度により時の意義は変化する。

学而寮廿年の時の流れは、設立以来の先輩の真摯な生活により意義づけられて来た。時という流れに洗はれ、時の流れに形を変えられつゝしかも時の流れを変え、時の流れがぶつかる勢で流れの中に水泡を浮べては消え、浮べては消して行く有様の中に、人間と時との関係が――廿年の歴史が示されている。

言葉を変えれば、廿年の年月は寮にとつて生命であり、廿年の流れを瞬間々々に真摯な態度で持続して呉れた先輩の生活こそ、ある意味で時の流れを作つてくれた生命力である。吾々は先輩諸兄の時に対する真摯な生活の意義づけあつて廿年を寿ぐ事が出来るのである。

真摯な生活より生れた色々な現象、形式は時の中に様々に浮び消えるが、それは結局水泡の如きものにしかすぎず、時の生命と生活力との合作品で、時の中に再び消えてしまふ。

然しながら生命力こそ吾々を支へる力であり、時の中にあつて時を進めて行くものである。私は、この時の生命力たる先輩の真面目な生活を伝統と呼びたい。

伝統は水泡ではない。時と人間とに規定されたる水泡たる諸々の現象、形式は結局は一時のものであり、それらの形式は時に消え時に浮んで而も必然の力を以て時は流れる。

私は過去から現在に帰つて考へてみる。果して伝統は受け継がれてゐるか。それに対し充分なる事がいへないのではなからうか。

昨年十月、新体制が布かれ、吾々の上に一層の時局に対する緊迫感が増した事は週知の事実である。この際、我学而寮生の取つた態度を考へて見れば、現在に対する批判の一助となるであろう。当時の一般的動向は新体制に対し積極的に賛意を表してゐたのである。自分達の真面目な生活を出来るだけ合理的な、今一層国家的な形式に向けたいといふ傾向は、旧い年来の将に消えんとする形が、最後の足掻(マヽ)を四方八方に拡げて有害とまでなつて居るのをつぶさに見て来た人々には制しきれぬものがあつた。例へば、誤つた自己欺瞞的な放縦な自由主義が、自己の勝手な生活を掲げて、自分は自分で苦しみを解決したいと主張し、全く猫の額の程の領域にとぢこもり、他からの干渉を退けて来た。これに対する徹底的論駁が既に為されてゐたのである。この猫の額程の我良かれかしの自由主義は、自己に何等の責任をも負はず、自分の都合便利にのみ自由をかざし、他人の忠告に対しては自己の自由として門を鎖すのである。一個人の生活は猫の額でもなく国家社会、学校、寮のあらゆる生活を包括するものである。国家生活、寮生活と区別すべきものでもなく、個人生活、団体生活と概念的に区別すべきものでも無い。総べての綜合的な生活が吾々の踏み占めてゐる生活であり、個人の真摯な寮生活にも具現さるべきであり、個人生活とか寮生活とかは場所として定められて居るにすぎないと思はれる。自己の生活の為に団体生活は出来ないとは猫の額の組に入る者と思はれる。以上の様な考へ方より旧弊を打破し、新しい体制をつくらんとする熱

情は益々高まつてゐた。当然、歴史的必然性から改進せられねばならなかつた故に、千載一遇の好機至れりと進んで改革せんとする気運に充ちて居つた。然し寮問題に対する学校との改革上の方法について、真に理解するに到らずして多数の退寮者を出し、その熱情が薄らいだ事は遺憾であつた。以上要するに当時は決して新しい体制に対し先輩達が消極的でなかつた事を示したのである。

然らば現在はどうなるか。私は一言にして言へば寮生一般が意識過剰であり、小さな文字にとらはれて居る様に思へる。此れは社会一般にも言へるのかも知れない。又、言葉を変へれば歌ごころが失はれつゝあるともいへよう。当面当面の現実を糊塗して、行き当りばつたりに現実の重荷にあえいでいる様に思へる。

新体制とは旧体制との間に本質的に差異でも見出して、そこに一線を劃しようとする。新体制とは今迄無かつたもの、旧体制とは全く役に立たぬ物と考へる傾向があるのではなからうか。新と旧、それに果して本質的な差があるであらうか。私には温故知新といふ言葉の中にも以上に対する暗示がある様に思へる。私には新しい体制が寮生活の生命力をも断ち切るものでない。即ち伝統を断つもので無いと考へる。新旧の差は自己の生活の表現形式の新旧であり、一層現在といふ時を表はす最も価値のある形式選択の差の如く思はれる。その選択された形式の是非は、最も広い意味の真摯な生活を具現し得るや否やに有る、の如く思はれる。真摯に自己の生活を改善努力することこそいわゆる新体制に合致するものと思われる。

以上の点より見て、現在の寮生は充行れたものに対して初めより意識過剰に、文字にとらはれ、形式に囚はれ、目前処理の生活に汲々としている様に思われる。その結果、自分の眼前に有るものすべてが、自分には煩はしい物に見え、苦い乾いた物に見えるのではなからうか。これこそ〝歌ごころ〟の欠如であり、創造力を失ひ、寮生活の本質を喪ひつゝある憂ふべき現象の顕れではないだらうか。我と我、確乎たる捉はれない立場に立つて総べてを見るとき、その立場に立つて総ての中に没入する時、そこに真善美を見出すのではなかろうか。自分の周りに美を見出し、天才を見出す事が一番必要に思はれる。雲は天才であるといふ天才詩人の気持が大切である。自分の国家・社会・学校・寮・個人といふものを統合した大きな生活の中に、真摯にぶつかつて自らその中に真を見出し、美を見出す心である。天才を見出す心あつて生活の真摯あり、生活の意義があり、よつてその生活の進歩が計られる。事物に天才を見出す心こそ生活に深く沈潜して始めて得られるのであり、その沈潜の極限において更に新しい進歩発達が考へられる。私は歌ごころの欠除に対して、役員としての責任を感ずるものである。退嬰的な考へ方、歌ごころの欠如に大きな伝統への誤解がある様に思へる。我寮を意義ある廿といふ年にまで続け保つて益々立派なものにして行く各人各人の寮生活に対する真摯さが、寮の生命力であり寮の伝統である。生命力が生命の中に生むものが形であり水泡である。生命力の無い生命は廃物であり、単なる廿といふ年にすぎない。生命力あつて生命は持続される。生命を否定せんとする生命力の自己放棄は強く改めねばならぬ。形に恋々としてその生命力を疑ふに至つては主客顚倒と言はざるを得ない。

吾々は本年の持つ意義において先づ爽快さを感じなければならぬ。実に血沸き肉踊るの感がする。二十年の年を寿ぐと共に新しい体制への第一年目として、旧い物に培はれた力が飛躍を始めた年である。吾々はもつと真剣に考ふべき時である。吾々は真剣に自分達の周りを眺め

てそれが何であるかを知り、将来への方針を定めて美しい寮を作るだけの心の裕りを持たねばならぬ。私は寮生諸兄と共に今後益々寮の発展を計りたいと思ひます。

以上些か愚見を述べて巻頭の言に代へたいと思ひます。昭和十六年十月八日の夜記す。

十二月八日！　この日こそ、朝の静寂を破つて我が祖国は剣を執つて起つた忘るべからざる日である。開戦の報を知るや、一瞬我々は崇高なるいひ知れぬ感激と祖国愛の熱情に浸り、身も心も祖国の歩みに打込んでラヂオに耳をうちよせ幾度日本人たるの歓びを感じ我等の責務の重大を思つた事だらう。爾来武威は堂々大東亜の空を席捲しつゝあり、銃後燦として輝き硝煙末だ濃き所、建設の事業は始まるのである。

社会は文化の伝統を継承し後代に伝へねばならぬ。古代の文化を継承し現代に消化し更に新なる文化を創造しなければならぬ。即ち過去の文化を理解消化しこれを発展創造する主体がなければならぬ。これ我等学徒の務である。人間至る所青山あり。大稜威の下我等は八紘一宇の皇道を宣揚すべく大東亜の大地に建設の鍬を揮はん。

学而寮こゝに二十の歳を数う。我々はこの意義ある年に寮生たり得た事を心から喜ぶものである。

報国学而寮二十周年寮歌　　文三乙　林　迪広

一、神代より　血は滔々と流れたり
　天を仰いで　民族は
　栄ゆる時に　謳いあぐ
二、美しき　日本創めしそのかみの
　物語など　吾が血もて
　今静かには　思うなり
三、古は　防人こゝに屯して
　吾が民族の　高潔を
　猛々しき血もて　守りたり
四、元の寇　襲いし時も神風に
　石畳の彼方　海遠く
　筑紫の空は　澄みかへる
五、二千六百の　歴史はこゝに弥栄え
　天地初発の　神々の
　花をかざして　豊かなる
六、友さらば　愛しきをすて恋をおき
　永遠にはやまぬ　情熱を
　祖国の急に　注がなむ
七、梅かほる　筑紫のほとり二十年を
　赤き血わかし　ゆたけくも
　国護りたる　同胞よ
八、吾等今　その血をつぎて新しき
　いのちの歌を　たくましく
　朝な夕なに　歌はなむ
九、二十年の　生命めぐりて大陸に
　荒ぶる神を　しづめんと
　大御皇軍は　今し征く
十、さらば今　誓ひ新たに同胞よ
　かの南方に　星を追ひ
　息ある限り　馳せ行かむ

昭和十七年九月に第十九回の卒業式が催されたが、これは戦時中一刻でも早く有為な人物をあらゆる方面への知的指導層を輩出せしめんが為に、二年半修業が発令され、その第一回が本年行はれ、爾後十九年まで続いた。然しこの時代の生徒は殆んど軍事的に動員されて、その本分の学業をも殆んど抛棄し、尊い汗血を祖国の為に費し、その功業は追憶する能はざる涙ぐましいものが潜んでいた事であろう。寮生は学而寮こそは、東亜文化創造の淵源なりとの信念と矜持とを把持し以て二十年の伝統に輝く、我等の心のハイマートの意義と価値とを発揚する事に益々努め励んでいた。

○八月二十二日　本日高等学校二年制の発表あり。

高等学校のみならず全学制を短縮し、以て一刻も早く軍事の目的に採用せんとする法令が一般化し、高等学校も広い眼より眺むればミリタリスクールの外観を装いはしたものの、伝統を誇るその生命力なるものは何ら形を変えずに、徐々に養育されつゝあり、いはゞ卵の中の雛鶏の感じがするのであつた。

○八月二十四日　勤労作業を終り本日より新学年度授業開始す。尚昭和十七年度高等学校体育大会報告会あり。

○八月二十五日　第一学年基本訓練の水泳を百道海岸にて行ふ。

○八月二十八日　暴風雨の為に寮の硝子の破損及び煙突の破壊などの損害あり。

○九月十日　寮に於て会食。鶴教官より灯火管制及び掃除などにつき注意あり。

○九月十七日　第一学期の授業終了。

○九月十九日　第一学期試験開始。

○九月二十六日　第一学期試験終了。二十七日より三十日に至る迄試験休暇になる。

○十月六日　西一寮生十一名（名を秘す）、夜十一時過ぎ運動場にて乱舞をなしたるを以て叱責さる。

学校寮生のストームは、如何なる強圧の中といへども、〝馬鹿になれ〟〝裸になれと〟の先輩の遺訓に逆らはず、到る処で行はれ若人の血潮をいやが上にも之にたぎらせて居て、いわゆる感激交錯踊り疲れて、清夢を貪る別天地の空気は寮生をして吸はずしては置かざりし神の啓示が閃いて、偶然運悪く生徒監に見つかれば始末書を書かせられるが関の山、かかる自由、自治の雄叫びを遮るとも大流如何ともする能はざるものがあつた。

寮　歌　　玄寮　　文一・二　　石村　善助

若き力
雲は流るる　筑紫野に
永遠の生命　享けて立つ
若人の胸　血に燃ゆる

仰げ蒼空　群青の
強き力に　生けるなり
夕陽こむる　油獄を
仰ぎて正す　若き胸
青春の思　あふれくる

仰げ峨々たる　山容に
無限の力　こもるなり
永遠の潮　玄洋を
望みてたてる　学窓に
宿る行者の　胸は鳴る

望み限てなき　蒼海に
若き力ぞ　みちあふる

○十月十日　太宰府へ剛健旅行実施さる。

この日寮生百十四名、午前零時三十分校庭に集合し、制服、制帽、編上靴、巻脚絆を着用し、水筒及び朝食を携行、太宰府までの剛健旅行夜行軍を実施した。また寮生相互の親睦を計るを目的とする。経路は学校－薬院－井尻－雑餉隈－水城－都府楼－太宰府にして、午前一時出発途中四十五分行軍十五分休憩にして、途中一名の落伍者のみを出し、午前六時太宰府神社前に到着、社扉の開くを待ち、午前六時三十分整列天満宮に礼拝を行ひ、午前七時朝食をとりウドン一杯宛配給腹を満し、学而寮万歳三唱して、八時解散しその目的を完遂意気揚々帰寮す。

○十月十三日　福岡高等学校国民貯蓄組合規約成る。

○十月三十一日　東一寮理一・二権藤靖夫及原勲ヂフテリヤに罹る。

○十一月七日　本校創立第二十一回創立記念日を明日に迎ふるに当り、次に何時もの如く、慰霊祭を行ひ、夜は記念祭寮晩餐会を催す。

○十一月八日　創立記念日。

同窓会総会、亭々舎に於て午前十一時より開催。文化展及び寮体練会を行ひ大成功の裡に終る。

学校の運動会が臨時措置として卒業期が九月となれる関係上、五月に行はれるやうになつたために、寮の記念日の一つの行事として寮主催の運動会即ち体練会を催すこととなつた。これは寮生自体の発案にして学校側が之を許可した催物である。

この日天気晴朗、寮生は左の事項を守り種々の行事を覇気満々行つた。

一、進行の円滑を計る為、各寮共寮幹事の指揮に従つて行動されたし。
二、得点は各対寮競技一種目毎に第一位より順次六、五、四、三、二、一点を与へ総計により順位を決定す。
三、本日の総計による順位は従来の対寮マッチの一種目と見做して計算す。
四、対寮リレー以外の対寮マッチ出場は一人一種目とする。
五、1、3、4、8、の出場者の氏名は予め東二坂成の下に提出されたし。

主なる種目は次の如くである。

耐久競争。福高式バスケット。陸上ボート。百米競争。綱引。ボール蹴。騎馬戦。四百米。堅忍持久。障害物競争。合言葉。竿頭旗取。

寮生のみ親和して盛大なる体練会を催し、遺憾なくその精華を発揮した事は大いに伝統生命の上に飛躍を齎したであろう。

二十周年記念寮歌

一、弦月淡く天に倚り
松籟低く囁けば
元軍呑みし玄海の
波は黙示の華と散り
強虜のあげし叫喚に
答う九州男子の鯨波は
若人の胸になお迫る

二、弁舌好悪世をおほい
孤忠は梅と薫れども
時を得ずして散り去りぬ
されど其の香は六寮に

血潮と流れ、水先きの
熱き希望を育くみつ
名も青陵に咲き匂ふ

三、嗚呼筑紫野に生を享け
朔風渡る玄洋を
永久の啓示の創として
梅に矜持の盾を執り
文武の国に生ひ立ちし
意気に生きたる先達の
憧憬は天を仰ぐ哉

四、寮史燦たる二十年
今こそ、うたへ天地の
栄る時に生れ来て
創造の道と真理に
尽きぬ生命をそゝぎつゝ
理想の光求め行く
寮生我等二百名

――一六・十・廿五　西一寮　・細川――

○十一月十一日　文部省視察委員市川三喜及京大教授原随円両先生来校視察さる。

昨日文化展、及び運動会の為か寮生の出席状態悪く、寮内巡視また放課後加藤忠義に注意あり。このごろ、勤労作業、報国団活動、防火訓練等回数多く、母校母寮の警備に万全を期す。

○十一月二十四日　生徒出席状況悪しきをもつて、校長深憂の余り寮内を巡察さるる事となり、午後一時より二時間巡視されたるに、万年床多く、掃除悪しく寮総代幹事加藤忠義と共に寮内を巡視し、細心の注意をなせり。

○十二月八日　大東亜戦争第一週年記念行事行はる。

○十二月十一日　火鉢の使用許可す。

大東亜戦争勃発してここに二年、今や祖国は八紘一宇の大理想を戴いて、米英撃滅の『御軍』に力強き歩武を進めて居た。この秋学窓にある寮生一同負荷の大任重くこれを果すべく、更にもう一層日々の寮生自体の生活を反省し以て皇運扶翼すべき力を養つてた居たのである。

寮は国家の淵源であり世界の淵源であると言う自覚と自負を寮生は有し、そこに歓喜を見出して国家世界の仕事をする原動力となり反省と創造の一線を強く歩武していたと思はれる。この頃の寮生の意気を『学而』第三号より、抜萃して見よう。

草　莽　の　臣

○昭和十六年十二月八日　我々は宣戦の大詔を拝して感激に打震いながら、光明に輝く臣民の道を見出したのだ。あの神々しさ、それは筆舌を絶する日本人の魂の共感なのだ。

我々は名もなき民が陛下の赤子として、同胞の為に生命を捨てる事の如何に光栄である事かそれは論理に非ずして神話である。

一億同胞の期待を受けて祖国の将来を担い経世の大任に堪うる者は何人であろうか、私ははゞかる所なく高等学校及び陸軍士官学校海軍兵学校の生活であると断言する。活動に於て占める分野は夫々の特質を有している。即ち、彼ら武人の有するものは『強さ』であり、我らの有するものは万物に透徹せんとする烈しい情熱と鋭い知性、即ち創造の意志より生み出された『深さ』でなくてはならぬ、如何に学制改革が行はれようとも、我々の『深さ』は日本の『深さ』であることは

変りない。しかも国家は我々の『深さ』をますます純ならしめんと努力してゐるのだ。嘗つては自由自治が高校生の相言葉であり、ついには恣意と自由の混合した事もないとはいへぬ。しかし我々は自由自治といふ言葉に対して何らの執着をも有しない。これは勿論自治自由の無視を意味するのではない。将来の日本人の指導的位置に立つべき高校生の魂が之らの甚だ抽象的な概念によつて偉大となるであろうか。自由の為に死ぬるといふ事が果してあり得るであろうか。魂の偉大は生死間の深淵に臨んで発現する。日本の兵士が戦死する時叫ぶ言葉は『天皇陛下万歳』なる悲壮な雄叫びである。

高等学校生徒だけが特定の原理に基いて生活するといふことはない。我々の立脚地は忠であり、我々の目的は忠であり、我々の原理は忠である。日本人の最高絶対の道徳は忠なのだ。現実を直視し人生に徹せんとするものの前にはユダヤ的な国際人、世界人の観念より導かれる抽象的な規範などは幻にすぎない。我々の崇高なこの目的立脚地は唯、軍に存在するといふのではなく、それは我々臣民の営々として倦まざる努力と深刻な苦悩とによつて達し得べき目的であり、不断の反省によつて確保する立脚地である。

我々高校生が将来、国民の指導的地位に立つことを栄達と考へる愚か者は一人といへどもゐないにちがひない。黙々と土を耕す農夫、火花をちらしてハンマーを振ふ工員、あらゆる職場、地位の人々が陛下の赤子である。無位無官の彦九郎が御所を伏し拝んで、『草莽の臣……』といつて慟哭した名もなき民の心こそ先づ第一に肝に銘じなくてはならぬ。

近頃、高校生の萎縮が問題となつてゐる。

これは決して過渡期の現象だといつて見逃せない。過渡期〳〵といつてゐる間は過渡期なのだ。

すべて発展革新は本然の姿に立ち帰るときに行われる。大東亜戦争は日本自身が米英思想の残滓を流しさり、すめらみくにの本然に立ち帰りアジアがアジアとなる戦争であることは申すまでもない。我々が過去の因襲にとらわれている間は高校生の萎縮という事が起るが、起るのは必然だ。現実に面をむける者がどうして潑剌とした前進が出来ようか。本当に生れたまゝの日本人にならうではないか。我々は自信を失つてはならない。我々の青春に信頼しようではないか。毅然として現実を克服する若人こそ真の高校生なのだ。

以上拙い文章をもつて巻頭言に代える。

○十二月十一日　大東亜一周年記念として校内対抗武道演武大会を挙行す。理二・二銃剣道及び柔道に優勝し、文二・一が剣道に優勝す。

○十二月十八日　第二学期前期授業終る。

（昭和十八年）

○一月一日　新年拝賀式。

○一月六日　第二学期第二期の授業開始。

○一月十三日　綜合訓練終り後四時半より寮庭の清掃を行ふ。

○一月十五日　校長教頭寮内視察。

大東亜戦争もたけなはとなり、その赫々たる戦果に応へ、寮生は軍事教練乃至は防空訓練（屢々校内爆撃の想定の下に）を強化し、報国の名に背かずして着々としてその成果をなしつゝあつたが、一方寮内伝統の雰囲気にも新古をとはず、違つた角度からでもその本体は守られ、種々のファイトに燃え熾る精魂の勢い――正に破竹の勢い――は、又微笑ましいものがある。常に新しき自己潜入、反省、批判の目はよく世情の真髄を見究はめ、

醒めぬ日本の前衛の栄ある牙城青陵を
衛る男子のあゝ腕は鳴る。

の寮歌に溢れたる、いはゞ福高独得の精魂を漲らせて、来るべき日本の前衛として活躍出来る要素を醸し出して居た。

○一月三十一日　太宰府迄耐寒行軍実施さる。
○二月一日　東三寮南側の池の埋立を行ふ。
○二月二十日　学年試験開始。
○三月二十六日　寮生は概ね退寮するには送別会を開き会食を行ふ。

以上で大体昭和十七年度の学而寮正史を終了するに当り、一概に言ってその思想も構造も所謂戦争一点張りの色調が強く、聖戦の目的完遂の為の一方線を維持し続けて居た。

戦時色強しとは云へ『学而』と言ふ報国学而寮寮誌の中より主なる寮生の思索の跡を列記して結びとしよう。

――昭和十七年十二月八日――

大東亜戦争一週年の感銘すべき日

伝統と創造

鴻　寮　　豊福　正信

赫々の大東亜戦争一周年を迎へ一億同胞と共に我等青年学校学徒が、昨年十二月八日のあの感激を新たにするに当って、諸兄等と共に我等が生活の良き反省の機会を得たことは、何と喜ぶべきことであろうか。

畏くも宣戦の大詔を拝してより既に一年、今にして知る敵国の東亜に対する積年の禍瘡は、今将に我々の父兄や、先輩や、同輩の手によつて排除されんとしており、大東亜建設堂々の進軍は我等学徒の血を湧かせ肉を躍らせる。この事実に一度眼を転ずれば、これ程偉大な切実な現実が何処にあると我々はいゝ得るだろうか。この歴史的大転換を忘れて我々は何を現実と呼び得るであろうか。

内容を失つた形骸への迎合とその惰性が、歴史と伝統に憧憬を抱く高校生に現実を見失はせ、その創造的精神を奪い去り、現状打破の情熱を冷却せしめる。祖先の伝統を継承し、高校生活の意義を次代の青年に余すところなく受け渡さなければならない現下の高校生の責務は、現実の歴史的大転換と共に愈々重大であり、従つて高校生が誇りとする歴史と伝統については、歴史的転換の現実において、一層の反省がなされねばならない。

歴史が無限の過去から現在へ、現在から未知の未来に向う事実の単なる直線的系列ではなく、伝統が過去の風習や仕来りの単なる模倣や墨守ではないことは、この貴重な紙面を汚して喋々するまでもない。歴史は現在に動きつゝある生命であり、伝統は現実の創造的精神である。そして歴史的生命も、創造的精神も、我々が両脚を確と踏み緊めてゐるこの現実におけるそれでなければならない。現実の上に打ち建てられた建設の原動力であり、息吹でなければならないのである。過去は過ぎ去つて再び帰つて来ないものとしていづれへか流れ落ち、永遠に忘れられ顧みられない処に押しやられたのか。否、過去は現実に生きて居り、必然の力を以つて我々に迫つて来る。そして我々に創造を要求する。必然の力は同時に創造の原理である。現実の歴史的生命と創造的精神を知るものには、過去の大きな必然の力が身近に感ぜられるであらうし、更に未来に向つての頽廃的自由と、盲目的放縦とを許し与へられることはないであらう。現実の必然性を識らないが故に盲目であり、創造の原理を識らないが故に頽廃である。そして、これこそ正に現実の歴史的である所以ではあるまいか。現実は歴史的場面において躍動する。そこに真の創造がある。歴史を無視した現実は空

虚であり、そこには創造的精神がない。

が、この様なことは文化人である以上たれもが理解し得ることであり、異論はないと思はれる。ここにおいて我々が深く反省しなければならないことは、既に現実の歴史的なる所以を充分理解しながら、我々の生活が果して現実に対して忠実であるか否かといふ実践の問題である。実践の世界がそれを基礎として展開せられなければならない原始的、根源的原理は、理論的には充分納得出来る程明確である。我が学而寮も二十一年の歴史と伝統を持つているが、いつ如何なる時代の先輩の寮生活指導に関する説明を聞いても、我々はその理想を充分納得することが出来、概念的に把握することが出来る。それは問題が我々に取つて常に身近かに存し、直接切実に感ぜられることであるからであるが、それが余りにも日常的直接的である為に却つて忘却され、冷視され、かくてそこに現はれた生活には、何等の歴史的生命の躍動もなく、創造的精神の努力も見られない。我々が道路を歩行する時に、頭の中では目的や行先を考えているが、最も直接的な両脚や道路のことは殆ど念頭に置いていないのと同じ様に、我々は我々の生活の地盤でありその上に建設せられなければならない。余り身近かにある為一見平凡に思はれる現実を、敢て無視しようとはしないまでも、常に忘れ勝ちなのである。我々の生活は現実の実践的把握に於てなされてこそ、初めて有意義であり、価値生活であり得る。

先に大東亜戦争完遂の為の総力戦と、それに基く戦時生活が、現在の我々に取つて最も偉大な直接的な現実であり、更にそれが歴史的であるが故に必然的であるといつたが、その現実における我々の生活の理念が、我々に最も密接な関係を持つ——というよりは我々が両脚を以つて立つている足下の現実を、単に概念的に把握するのみならず、我々が歩行する為に——即ち生活する為に忘却すべからざる実践の原理として理解するに到つて、真に生命的、創造的生活と言へるであろうし、我々に与へられたものとしての現実は必然的であつて、決して偶然的ではないと言はねばならないのであろう。我々に与へられたものは必然的に与へられたものであつて偶然的に与へられたものではなく、従つて我々は、我々に与へられた現実に忠実でなくしてどうして我々自身の生活に忠実であり得ようか。日常我々に最も身近かな現実の実践的把握なくして、我々の生活の何処を生命の躍動と呼び、創造の努力と呼び得るだらうか。実践的把握とは理論に基いてなされた生活そのものであり、そこに表現せられた生命の理論の生活を通じての理解そのものである。歴史的生命と言ひ、創造的精神と言ひ、それは単なる個人的な、それ故に偶然的な意欲や感傷ではない。その根差す所は何処までも必然的に与へられた現実であり、我々が常に忘却したがる現実なのである。

今や日本は大東亜戦争完遂と、大東亜新秩序建設の為、国を挙げての総力戦に邁進しつゝあることは、そして過去一年間に於ける我が戦果が、正に古今未曾有の世界史的大偉業であることは、明白な事実であるが、この大いなる現実を歴史的たらしめ、必然的たらしめる所以のものが、歴史的生命とし、創造的精神として前線に於ては勿論、銃後の戦時生活に於ても充分発揮せられ、躍動してゐることは、我々の見逃し得ないことであり、我々がその現実の上に両脚を踏み緊めて立つてゐる以上、常に理解し得ることである。そして現実が余りにも直接的日常的であるが故に、動もすれば我々はそれを分り切つたこととし、陳腐平凡であるとして無視しようとする。かくて我々の生活が個人的消極的となり、伝統の継承ではなくして旧態の模倣や墨守に過ぎ

なくなり、自己の立つて居る現実の逞しい躍動の世界を知らず自己のみの微小の世界に閉ぢこもつて、個人の偶発的意欲や感傷に甘んじ、却つて些細な外部の圧迫や制約に惑はされ、個人主義的自由と反動に貴重な時間と労力とを無駄に費すことになる。

我が学而寮は、二十一年の歴史と共に、幾多の優秀な先輩を持つて居る。現実に先輩の偉業を回顧し、その伝統を承け継がねばならない我々に対して、学而寮の歴史が、即ち幾多の先輩諸兄が要求するものは、昔の生活の模倣や現実を無視した主義主張の墨守ではない。我が学而寮の伝統とは、我が現実の歴史的生命を正しく理解し創造的精神を自覚し、それを我々の生活に発揮し努力することでありこれこそ正に学而寮の歴史が我々に要求するものであらねばならない。それは与へられた現実に逞しく生きることであり、現実の地盤に両脚を踏み緊めて創造の力をなすことである。伝統は各時代に共通な精神であり、過去の生活様式はその具体的表現の形式乃至は一面的意味であつて、伝統の本質内容ではない。それは生活の様式ではなくして、精神でなければならない。伝統は生活様式伝承ではなく、各時代の生活様式に現はれた共通の精神を、我々に必然的に与へられた現実に即して表現することである。過去の生活様式に表現された伝統精神が、過去の生活様式においてのみ表現せられ得るとすれば、我々は自己の生活の何処に創造的精神を見出し得るであろうか。歴史的必然的に与えられた現実において、歴史の必然的要求によつて当然過去の生活様式とは異つた現実の我々の生活様式において、各時代に共通な精神を表現してこそ、我々の生活は真に伝統的創造的であるといえるのである。生活様式の異同が伝統の尊重あるいは破壊ではなく、生活そのものと、そこに表現せられた精神が直ちに伝統であり、生活する我々が創造的であること、創造的精神に基いて生活することが伝統の尊重である。動もすれば伝統は、刻印的な固定性や一定の限定的形式を持つた我々の生活から切り離すことの出来る対象的なものと考えられるが、もしそうであれば、伝統は我々の外にあつて、我々から守られるものとして固定化され、少しも躍動的ではなく創造的ではない。伝統は生活する我々の中にあり我々を生活せしめる原理である。過去の生活様式と比較対照して異同を論ずる現実の我々の生活様式は、伝統の具体的表現であり、一面的意味であつて、現実の理論とそれに基く生活——実践的把握こそ伝統の全面目である。理論において歴史的であり、実践において創造的である。

歴史に与えられた現実に対して忠実でなければならないという以上のような見解からすれば、我々は国家社会の要求する所に従い、指導者の命令のまゝに生活せねばならないし、それを以つて我々は自己の職責を尽し得ることになるではないかと直ちに考えるのは我々青年にあり勝ちな浅慮である。現実は我々生活するものに対して左様狭量ではない。必然的に与えられた現実は、その歴史的生命と創造的精神への参与を我々に期待する。国家社会の要請や指導者の命令はその参与の具体的直接的なある種の通路乃至は方法の指示であつて、それのみを以つて直ちに参与であるとすることは出来ない。歴史と創造への参与は、我々の全生活でなければならない。歴史的生命への参与を俟つて始めて我々の生活は創造的であり我々の誇るべき伝統であると言ひ得る。国家社会の要求や指導者の命令を自己の生活の圧迫強制、全生活の破壊云々とするのは現実に対する盲目であり、それらに従つて生活することのみに甘んずるのは現実に対する隷従である。偉大なる現実が我々に期待するものは個人的消極的盲目や隷従ではない。実に歴

史的生命への参与、創造の生活そのものなのである。大いなる現実から見れば、国家社会の要求や指導者の命令に対して個人的意欲や感傷から云々して熄むことを知らないのは何と笑止千万な微々たる問題ではないか、現実はまだまだ偉大である。それと共に高校生の使命もまだまだ大きな問題である。我々が次代の高校生に教へなければならないことは、その生活様式ではなくして生活することであり、歴史的必然的に与へられた現実の理論ではなくして、現実の歴史的生命への参与、創造的生活でなければならないのである。この重大な責務を持つている現代の高校生が果して与えられた現実に対して真面目であるか。その生活が現実に対して妥協的若しくは逃避的ではないかといふことが、以上の点から出発して反省されねばならないであろう。単に個人の生活様式や理念如何の問題ではなくして、理念に基く生活と、生活を通じての理念の実践的把握如何の問題である。

全ての文化生活も当為の世界も、この謙譲にして原始的な、而も偉大にして直接的な現実の把握に於てなされなければならない。蓋し実践的把握とは実践と理念の同時的相関的統一であろう。現実理論の単なる概念的知識を以て伝統とは呼び得ず、而も現実を無視した生活を以て創造とは称し得ない。伝統は単なるイデオロギーではなく、全一的生命者である。歴史的生命として現実に躍動するものである。我々の生活はその生命への参与でなければならない。現実の生命は、我々に参与と創造を期待することにおいて寛容であり、我々に必然的直接的に肉迫することにおいて深刻である。従つて我々の全生活は、この与へられた現実の二面的性格の全一的実践的把握でなければならない。我々の文化生活も価値生活もこの偉大なる現実に直面した時の驚異と歓喜ではあるまいか。生か死か。あれかこれかの択一的問題に直面した時の憤起と努力ではあるまいか。窮屈な殻を破つて自己の外界に一歩を踏み出した時の光輝と眩惑ではあるまいか。

国家多難の現実に生を享けた我々は誠に多幸である。現実は我々に歴史的生命への参与と創造の生活を期待してゐる。我々に課せられた問題は単に喜怒哀楽や生活の仕方の問題ではない。正に生死の問題である。現実を根源から揺り動かす問題である。あれかさもなければこれかの択一的な問題である。現実が偉大であればある程、我々学徒のなすべきことは多く、従つて、我々の生活は創造的である。現実は一刻の躊躇を許さない。我々は常に先へ進まねばならない。現実を踏み緊めて堂々進軍することが我々の創造であり、また伝統であり、感激ではあるまいか。

この最も直接的な而も根源的な処理に基いて、然らば具体的に我々は如何に生活すべきが問題になるであろう。その解決の為めの動きが我々の努力であり、価値生活であり、全ての文化現象である。解決せんが為に動き、動くことの中に解答を得る。文化といひ、価値といひ、現実に於ける我々の動きでなければならない。知りから動きへの一方向的因果関係ではなく、知りと動きとの相関的統一関係である。

学而寮二十一年の歴史と我等が先輩の偉業を回顧すれば、伝統の継承者、創造の学徒たる我々は誠に光栄と言はなければならない。寛容にして深刻な現実はこの光栄を弥が上にも光輝あらしめるであらう。而も現実の歴史的生命は無力なる反動者の卑屈な振舞に対して微動だにもせず、これに臨むに落伍者の宣告を以てするであらう。

希くば国家の興望を担へる学而寮二百の諸君、大東亜戦争二十年目の意義深き歳を迎ふるに当り、学徒としての栄誉愈々汚辱なきことを。将又創造児としての光栄愈々加はらんことを。

【昭和十八年度】

大東亜戦争たけなは、皇軍は南に北に赫々たる戦果をあげ、広大なる土地と、資源とは長期戦に具えての莫大なる効力を正にあげんとする時、昭和十八年を迎え、寮内に於ても益々その緊張を強め、所謂事色はなやかなる而も、自由自治をはき違えない深い、そして広い知識の持主たらんとして、各人の権威、自信を確立し、刻時でも早い優秀なる指導層としての日を夢みつゝ、身心共に緊張し、有為な人物人格の完成を急いでいた。

『戦争の原因はそれ自体である』とドストイエフスキーは言っている。戦争こそ平和の虚偽を粉砕するものであり、戦争の真理性は戦争即建設である所に存するのである。戦争とは集団的斗争関係をいうのでなく、国家と国家とが互に正義の戦であると主張し、公に神の名に於て行うものである。かくして戦争は世界歴史の動力であり、その中心は国家形成的民族を作る。理性のある寮生が日々の思索行動を反省する生活を持続し、伝統に育まれて創造を生み出す契機をこの年度の史跡を繙く時に味って見よう。

○四月一日　第二、三学年（第一学期）開始。

午後一時入学式。三時半入寮式。百十八名入寮。正服正帽も真新しく、あこがれの帽章を光らせ、国家多難の時局下に、決意の程も勇然と、二、三年の先輩の歓迎の辞、また、寮歌にその真情を汲み取り、夢故郷に馳せ勝ちではあるけれども、理一・三友清愛太郎を除くの外は全員真新しい父母の温い手になる床に入った。

○四月二日　始業式。

○四月五日　新体制に即応して授業が終ると共に、校内外の清掃及び全校体操を実施するようになった。一方寮では、教官方の宿泊が始まり、寮務方面及び、寮生の取締り、その他雑多の寮関係の顧問役となられ、第一陣は西原教官の宿泊となる。この間、寮生と先生方の親睦も一段と増し、色々な点で有利な路が開けたと思われる。

○四月七日　本日より寮においては毎週水曜日に朝食前に勅語奉唱を実施する事になり、本日はその第一日目として校長及び永井生徒主事出席の下に、寮総代の奉唱に続き、寮生一同厳粛な而も敬虔なる報国の念に燃えつゝ必勝の信念を一段と固くし、寮生一同の覇気を養成し、その団結のバンドを一層強めた。

戦争の激化に伴ひ、盛んに焼夷弾落下の想定の下に、屢々不意に防空演習が実施され、また一方では戦備の完璧を期する為に野外演習、または勤労作業が行はれ、学課と共に軍事訓練の負荷は、生徒をいやが上にも緊張せしめる糧となった。

○四月十七日　午後五時半より報国学而寮新入生歓迎晩餐会が挙行された。やゝ寮内の空気に馴れたかに見えても、まだ〳〵旧い昔の殻を身につけて居る新入生が、自己紹介や余興、または先輩の歓迎の辞等々で、いはゆる感激の二字の外は、何ら頭に浮ばざるが如く、伝統を創造する覚悟を自ら披瀝し、紐帯を結ぶ数々、学而寮は報国の名の下に、緊迫せる新しい生活に入った。

この日、内藤教官始め多数の来賓あり、食堂のイルミネーション、飾付けにも先輩の誠意がこめられ、その和気淳々なる中に午後十一時終了。

○四月二十一日（ママ）　校長出寮（ママ）勅語奉読。

このごろ学生生徒の中飲酒、質屋通ひ等に対する風紀問題に絡む取締り強化されたるも、混迷暗黒の世情下やはり寮生にても、ちよいちよいその痕跡なきにしもあらず、酒にて新生面を開かんとする情炎が

盛んであつた。

○四月二十一日（マヽ）　剣道部、柔道部幹事より寮生にして部員なるものの、寮外合宿を願ひ出でその許可を願ひたれども許されず。学校の強圧見るに価する程強固であつた。

○四月二十六日　学校長と寮図書室にて一学年との座談会あり、方時局下に対する高校生としての意識を研揚された。

○四月二十九日　天長節挙式。

○五月十一日　夕食後、東一寮の方より卑俗の唄が聞え、宿直教官巡視され注意を与へられた。このごろは、寮内にては寮歌及び軍歌の斉唱は許可されていたけれども、いはゆる流行歌なるものを蛮声にて歌ふ時は、各寮の班長は之に時としては制裁を加へ、厳に戒め以て堕落の兆を消すに大童であつた。兎に角規律の厳しい事はこうした端緒からも見てとれるけれども、寮内にては、反感多く昔の先輩の残せし遺訓を遵奉？する傾は多分に残され、挿話も数多くある事であろう。

○五月十七日　生徒代表幹事を文科は西山雄蔵、理科は増田聖を任命する事に内定す。

この頃、報国隊の訓練は屢々で、又、防火に具へる防空壕並びに貯水池設立の勤労作業行はれ、祖国日本征戦の勝利に副ひ、万全を期して居た。

○五月二十日　昼食時寮幹事、班長と生徒課教官との会食が行はれ、報国学而寮の職務遂行上の諸問題につき協議し、必勝の信念を固めた。

○五月二十一日　運動会準備。

○五月二十二日　この日天気清朗、運動会にはもってこいの天候、いかに戦雲急をつげ、福高の運動場を蔽ひたるとも、吾が福高生の〝のぼり旗〟応援旗舞ひ狂ふ蛮声大乱舞の下には瞬時たりと雖も自由の雄叫びが絶えない。皇紀二千六百三年第二十一回福高大運動会はかくして幕を開いた。

この日は丁度青少年学徒に賜はりたる勅語御下賜記念日であり、八時よりその奉戴式が先づあり、分列閲兵の後に、勇躍運動会のプログラムに従つて行事が進められて行つた。

応援団の打ち鳴らす太鼓の音、組毎に勝利の都度旗を打振つて狂ふ様は、正に別天地の騎士を偲ぶに足るものであり、純高校生の雄叫びは天までとゞき、飄然と吹く春風の中、弥が上にも情熱をもえさすに足るものがある。この日校長は上京中にて、代りに内藤教頭以下来席、多数の先輩を来賓として迎へ、彼等も若き昔に返つて、最も想い出深き夢をまのあたりに見、福高生と共に感無量、たゞ示すは乱舞の狂宴、時局下に相応しい而も興味津々たるものが多かつた。耐久競争に始まり、福高式籠球、陸上舟艇、倒立競争、障害物競争、兎と亀、川中島合戦、暗夜行路、蹴球競争、対級継走予選等々、観衆の熱援、生徒の乱舞、狂乱の巷と化して、中食の一時も楽しく、午後の種目に入る。

午後は、いざ鎌倉、旅は道連れ、竿頭旗取、鯉の滝上り、対部継走、唖と聾、大井川、対級継走決勝等きらびやかな競技を続け、四時十分その幕を閉ぢ、疲労を知らずに更に大乱舞の絶叫と共にその幕を閉ぢた。あわたゞしい一日なりしも寮生の中心活動著しく、見事その成果は、非常時下に相応しい堂々たるものであつた。

○五月二十七日　寮に於て生徒課と会食あり、三十日実施の鍛錬旅行について注意あり。

○五月二十九日　青陵会鍛錬会を深江海岸にて挙行。乱舞会が一躍時局に即応して鍛錬会と名が改められ、内容はともかく、伝統そのまゝの盛大なる春季行事の一つである。

○五月三十日　午前八時より対寮相撲を行う。対寮マッチなるものは各寮単位にその意識、団結を堅め、深江の海岸の荒波の音に血を湧かせ、必死の真剣さは例えようもなく、応援旗の飜るを見て選手はその意欲を渾身に集め、わが寮の華々しさを遺憾なく出し尽し、中食後学校長挨拶の後、深江より姪浜まで勇躍隊伍を整え、徒歩にて行進し、一名の落伍者もなく無事全員帰寮した。

○六月一日　福岡高等学校結核予防規約制定さる。このころの調査により結核に依る要注意や要養護及要休養生徒の数は三十名余に達し、これは憂へるべき現象なる故、かゝる制度を強化し、富国強兵の策の下、着々その成果を挙げんとする特筆すべき現象である。

○六月五日　連合艦隊司令長官故山本五十六元帥の国葬の日なる故、第三時限終了後遙拝式を行ふ。

○六月十日　寮生会食。

○六月十二日　昭和十八年学校教練査閲実施さる。

奥津少将査閲官となり、講評は良好なり。

○六月十八日　寮生全部にチブスの予防注射を行ふ。

○六月二十五日　寮生の防空演習を実施したが成績良好ならず、一段の要望を与えられた。

○七月三日　寮の新幹事及び幹事補の任命式が寮図書室にて行はれ、寮の改造その他を談じ合ふ。

午後五時より本夏卒業の寮生の送別コンパが行はれ、一入哀惜の念に浸り乍らまた何処かで会ふ日を約し、友情の紐帯一入と深まり、校長、教頭を始め三年の組主任出席され、新総代の送別の辞、寮歌等、高校のみの知る感激を覚え、後、団欒久しきに及ぶ。

○七月十二日　第一学期試験開始。

このころ既に戦局は不利となり、ガダルカナル島の計画的撤退より、ひたすら後退して遂にはラバウルの線まで到り、一方、北方にてはアッツ島の玉砕、かゝる客観情勢がすべて強力なる犠牲の巷へと寮生を運び、たま〳〵学制二年の大幅削減により、以て人的資源の増加を期した。かくして寮生も直接戦争への挺身を無理に強いられた形となつて行つた。かくして我が学而寮も従来の寮生の概念が一擲され、いわゆる自治自由の伝統を一時は捨て去り、かくして、寮生活なるものも、上よりの強制により、全くの束縛感を感じ、すべての改革を許されなかつた。一方寮生はこの柵の中にあつて、純正なる自覚の下に、すべての妥協や混迷から脱し去るべき革新気風なるものも相当強く、その声は外にこそ現われないが深く〳〵根をさし込んでいたと思われる。しかるにかゝる気運も至大なる圧制下にあつては、如何ともすべからず、この両者の矛盾から寮の気運なるものが、依存性を帯びるに到つて居たのである。

○七月十九日　試験終了。

これで第一学期の月日を閲した事になるが、夏季中は、勤労作業、報国隊活動あり、一層急迫せる国内情勢に即応してその態勢が強化された。

○八月二十一日　始業式。

学期始まつて早々より、軍事教練、所謂文部省直轄の修練訓練が実施され、寮内も一段と国内戦争態勢の先頭を切るに到つた。

○八月三十一日　午後三時半より南寮の新築竣工式が行はれるに当り、南寮の南庭に祭壇が設けられて、鳥飼八幡宮司祝主となり挙式。後三年生の試験準備の為の部屋、即ち寝室と自習室を別々に与へられるやうになる。

○九月一日　敵機南鳥島に来襲し、警戒警報発令され、寮生各部署につく。

祖国危機、国難一入と高まり、今や皇軍の敗色日に〳〵募り、全日本の軍備化の下、今迄の純高校生の姿も一変し、戦場へ、工場へ、学業を投げうつて走つた姿、感無量なるものがある。勤労作業がこの頃殆んど連日の如く行われて居て、寮生は非常の場合に備へる四十名余の警備員を残して、夜を日につぐとは正にこの事、疲れをも見せず、その健気な体力を一つの目的の為に捧げて居た。かくなれば、思想の統一もはたされず、上よりの莫大なる制御下にあつて単にミリタリズム全体主義の名の下に包含されて、独自の伝統、自由自治の精神も形式上一部は実質的に失はれてしまつた。かゝる状勢下にあつてこれに対する反旗も頗る熱烈ではあつたけれども、その仲介者中間者としての責務を感ずる寮総代の狼狽も察するに余りあるものがある。

○九月十日　校長、寮内を巡視される折、南寮に生活して居る三年生の部屋がものすごく不整頓にして、且、万年床幾多ありしに、非常態勢下かゝる伝統は今は適当せずとして注意さる。また学校欠席者にして寮内にくすぶるもの数名ありたる報告が生徒課にあり、増田幹事等を呼び出して注意を与へられた。

この記載は、寮の裏を知るに足るものであり、如何に上よりの抑圧が甚だしきとはいへ、それに反抗するまたは伝統の無意識的自覚による影を見るに足るものである。

○九月二十一日　第三学年卒業式。午前十時より挙行。卒業生百六十数名の多き出席を擁して、こゝに卒業生は祖国の負荷を双肩に担ひて、以て必勝の信念に決意を固めた。されど二十二日に『国内態勢強化方策』が情報局より発表あり、東条首相よりの国内対策強化演説の独得の放送あり、学徒出陣の企図が明かにされた。

またこの日、寮役員会が開かれ、学校の欠席者の多きを取締る事を相談し、日に募る緊迫感をいや増しに強化する具体策を錬つた。

○九月二十二日　校長、赤野教官等寮内を巡視され、各室毎に検閲を行ひ、ふしだらな生活をなすものに叱責の言葉が鋭かつた。

○九月二十六日　大日本飛行協会、大政翼賛会福岡支部、西日本新聞社主催の『決戦航空学徒大会』に全校生徒出席し、刻々と迫り来る時運の波に勇躍先立つて乗り切る若人の意気を示したのである。学徒の熱情は火花と化し、悲壮正に天もこくする学徒の決意の程は、察するに余りあり、青陵原一入と緊張の日を送つた。

○十月七日　寮幹事と生徒主事との会食あり、特に一年生の欠席多き事、又喫煙の事に関して、この取締り方を協議し、また夜行軍は無期延期とする事に決せり。

偶々徴兵検査延期停止となり、こゝに適令の我が福高生の壮行会の重大なる日が迫らうとして居る。

○十月十四日　文科一年一組の生徒が東中洲の平野屋食堂にて壮行会催しの許可を乞いしに、之を禁止したが、既に用意してありと強固なる故、三十分にて引揚げるように命ぜられた。

○十月二十日　遂に来るべき時到来す。臨時徴兵検査受検者の出陣の時は到来した。その盛大なる壮行式あり。なお受検者は式に先立ち、武運長久を祈願の為に住吉神社に参拝、いやが上にも神前の聖浄の中にあつて、来るべき戦場での奮斗を決意して、壮行式会場へと向つた。熱血に燃え、決意高鳴り、熱望久しかりし受検生は、いまや闘志満々、我が青陵健児の意気は沖天の感があつた。校旗入場、宮城遙拝、詔書奉読に次ぐ学校長の懇々たる訓辞、壮行の辞、次いで生徒総代の送辞、

堅かりし友垣の故に、その切々たる語調、涙流さずと雖も、心中血涙混々として湧くを覚えたのである。終って受検者総代答辞、熱烈なる闘魂に燃えた血気の代表生が吐くその熱弁、その悲壮なる心情、哀然として鬼神を慟哭せしむるの感があった。終って全校生に校庭にて取り囲まれ、円陣を作っての乱舞、感激の外何者をも知らず、また征く者も送る者も、今は別れ――永久の別れ――とも知らず、唯伝統故に結び合った友垣の崩れんとするを、一方では悲しむが如く、他方かゝる涙を抑へて微笑にて送り又別れる福高生の心境、悲哀切々たるものがあった。寮に於ても晩餐会あり、高校生活の縮図である寮生は、一時はたはたと音する哀惜の情が流れて、寮生の瞳は燃え、煮え沸ったであらう。さらば、友よ、征け、後に続かん。

友よ静かにうたはずや
　はかなくも我が青春の
楽しの秋も更け行くに
　なべての憂ひ打ち捨てよ
今青陵に酒宴して
　若き生命をたゝふるに

○十月二十七日　全校体操の時間は十数名の生徒が寮に逃げ込み注意を与へられた。

何度も繰り返す如く、高校生の意識思索は、恰も純正を保つが故に、さほどのくるいはない。時恰も皇軍敗退の時、寮は絶対専制的な生徒課の弾圧の下に、新制度たる報国学而寮と改名されて以来、寮生の自治自由の精神、又一方寮総代の権限、寮の風紀も又全く弾圧されるのではないかと見え、出て行く先輩は憂慮の念に堪えざる所あるも、上級生の正しい指導や、伝統の維持は脈々として存して居たのである。かかる逃亡は、時局上から見て罰せられるは当然自明の理ではあるが、寮生の根底に流れるかかる精神の一端とも見えるのである。弾圧が強まれば強まる程エスケープが多く、寮内にても退寮者が多かったのは事実、結合して反旗を飜へさんもその意図明るみに出され、叱責される状態であった。

ここに第二十二回の寮祭を催すの日近まり、この憤怒や、寮生の意気を示さんと大いに意識が向上した。この時代は特に各学年の階級意識は特に強烈なりと言へ、伝統に結ばれる寮生一同の発奮の結果は見るに価するものがあった。

○十一月六日　第二十二回寮祭記念行事の一つとして、文化展なるものを行ふ前に先づ慰霊祭を行ひ、各寮毎の文化展発表あり。その大要を右に記述する事にする。

国家超非常時の秋、高校生たるの本分を自覚し従来の動もすれば展覧をのみ目的とせし傾向を一切排除し、さゝやかながらも、蘊蓄を傾け孜々として研究に努め、以て爾後学問生活の発展に資せんとして成りし真摯な創造的作品。これ今次文化展の一大特徴とする所なり。希くは教官の御批評と御投票を以て、寮文化今後一層の向上に御援助下さらん事を。

十一月六日　　寮　文　化　部

その題目の内容は詳細でないが、左の記事より、当時の情況を思い出して見よう。

西一寮　（文一・一）
○日本結髪史要
○絵馬の研究
○鳥居小論

○蛍の光の文学的考察

【解説】古来我が国に於て蛍の光ほど神秘なものとして取扱はれて来たものは少い。文学史上に於ても独自の役目を果して来て、和歌俳句に引用されて来たのである。我々は蛍の光を文学上より考察して、あの夏の夜に燦然たる光を放つ蛍の光をあらゆる方面より研究せんとした。戦時下人心殺伐に傾き、動もすれば粗暴に走り易い時においてこの研究は日本人としてのゆとり、詩情を与へんとして取扱はれたのである。

西二寮　（文一・二）

○法隆寺

○黒田藩史

○国　学

【解説】悠久二千六百年の歴史を賭しての大東亜戦こそ国学の根底としての大和心の一大発露なり。今日国学の意義極めて重大なる事が痛感される。この研究の趣旨は、国学者を中心として、国学者の思想を究め、以て国学とは如何なるものなるかを究めんとするものなり。しかれども、この研究は完成せるものに非ず。これを期として今後の研究に待つもの大なりとす。

西三寮　（文一・三）

○大乗仏教

○東大寺盧舎那仏成立を背景としてその上代史概観

○大東亜の宗教

【解説】政治と宗教の関係の重要性及び、白人が東亜の植民化に如何に宗教を用いたか、それらは、現今極めて重要な問題である。大東亜共栄圏内に於て行はれる主なる宗教の歴史、地理的考察をなし、今後の我国の宗教的政策の根底を論じた研究である。

東一寮（理一・一）

○蟻の社会生活

○家相学の科学的検討

○戦闘機を中心とせる飛行観其の他

【解説】現代戦は航空戦である。人類が地上に生を享けてより空を飛ぶ事は絶えざる憧憬であつた。然し吾々はその憧れから生れる航空機の、科学の粋を集めた繊細な機体に潜む恐るべき破壊力には、何かしら重苦しい重圧を感ずる。而し現代青年は新しき創造の為決然起つて操縦桿を握り、荒廃なる廃墟の中から、新しき平和が芽をふく迄戦はねばならない。此の論に於て吾々は、航空機に対する科学としてのあらゆる検討を加へんとした。

東二寮（理一・二）

○スペクトルの研究

○翼

○石炭の研究

【解説】現在我々の用ひてゐる燃料中最も普遍的で多量に使はれてゐるのは、石炭である。冬の親しみ易いあたゝかさも、又汽車の動力となるのも、一塊の黒い石の化学変化に他ならぬ。私達は、此の黒い石、而も私達の脚下に幾千万と横たはつて居る黒い石に、驚嘆の目を開き、科学的メスをさし込んで見た。

東三寮（理一・三）

○薬草の研究

○動物の再生について

○大濠を探る

――湖沼学的、生物学的研究――

【解説】風光の美、豊富な水、四季折々の景物に福岡人士の目を楽しませる大濠も湖沼学的には殆んど研究されていない。大濠研究会員の手で沿革、地形、水深、水色、透明度、塩分、プランクトン、泥質、魚族に亘って綜合的に、実地に研究せるもの。

以上記載した題目の説明発表の紙は色とりどり寮内を飾り、一般人とて鑑賞する者多く、高校生の脳漿を絞れる作には、呆然たるものがあったのであろう。寮生はかゝる時にその真価を発揮する。軍事色強きとはいえ、かくまで堂々たる文化展は、当時の緊張、意気込みを裏づけるものである。寮の記念祭は翌日まで続く。

○十一月七日　午前八時より文化展及び寮第二回の青陵運動会開催さる。文化展は良好なる成績にて、観客もしばし我を忘れ華やかなりし一時、運動会も盛大裡に行われた。対寮マッチの変形たる青陵運動会もそのプログラムは春季運動会と変りはないが、寮生の意気の発露を見るに足るのがある。各寮共色取々の応援旗、太鼓、陣羽織、たすき、はなやかなる総出の乱舞。寮生一同落日の程も知らずにこの祝宴に酔った。

○十一月十一日　西一寮十九、二十室に主に盗難事件あり。これは十日の夜、行はれたものと思はれ、写真機、洋服、トランク、万年筆等盗まる。勤労の為の熟睡を機に、泥棒は外部より来たれるものと思はる。盗難事件が一番寮の空気を冷たくいやなものにするものである。

○十一月十二日　出陣学徒文科三十二名は戸山教官指揮の下に糸島郡北崎村唐宿に行軍宿泊。この中再び青陵を見ざりし者また幾人か居む。思へば悲壮なる出陣である。熱血永久に燃え熾り、十一月二十日入営生徒の仮卒業証書、仮修了証書授与式あり。式後出陣学徒全体に『日の丸』を贈った。この後久留米及び四十六部隊に入営の出陣学徒の見送りあり、征くも送るも必勝を約し訣別の情をはたと胸にひめ、明日への意気込みを作る。

○十二月六日　文部省視察委員学而寮視察。

○十二月七日　本日より亭々舎において中食を共にし従来の水曜日の会合はやめて、寮生指導の懇談をなす事となった。

○十二月八日　第二周年大詔奉戴式挙行。

○十二月十三日　火鉢の使用を許可さる。西一寮が南寮に移りたるも極めて乱雑にて目に余るものありたるに、全寮生南庭に集められ、緊張を促され叱責された。

○十二月十八日　第二学期試験開始。

○十二月二十一日　食費十銭値上。

（昭和十九年）

○一月一日　元旦、拝賀式。

○一月六日　授業開始。決戦の年なる自覚の下に、寮生も一段と緊張度を増した。

○一月十日　学徒冬期鍛練実施。

自一月十日至一月二十二日

六時半より柔道、七時より剣道、耐寒歩走訓練、及び合同体操。

このころは、殆んど学業を投げ打って、勤労動員に広範囲に分散し、耐寒を強ひられ、寮生も、さし迫る国難を前にして、必死の作業振り、戦力増強の最尖端を行くこの活動振りは、正に涙ぐましく、殆んど学業がそっち除けになり、知的水準の低落を来し、又一方学生たる自覚は、濃厚になるはいゝ方で、稀薄になる恐れあり。この心的恐慌に狂う寮生は、無明の世界に希望の旗をのみ盲目的に飜したのであるが、

理想の園を彷徨いつゝ嘆息の姿も見えたが、これは極めて暗々裡の中に行はれ、外部に出て来ると特高警察なる目が光つていたのである。

○二月十二日　第三学期試験開始。

終了後二月十二日より一ヶ月間九州飛行機会社にての勤労作業。汗と油に浸り乍ら、胸に白布の姓名を附して、奮闘した。かくして昭和十八年のあわたゞしい歴史はすぎ去つた。

戦局我に利あらず、敗退の中にあつて、学而寮の変貌も著しいが、とにかく上級生の指導よろしきを得て、自治の気は脈々としてつながつていた。幹部の所謂すべての妥協、依存をいましめあくまで中間の立場より、学而寮をより規律ある方向に導いて呉れたのは多謝の他はない。

あらゆる矛盾に苦しむ幹部又は一般寮生は、とにかく悲涙に咽ぶ事も度々であつた事だろう。この苦悩の中に雄々しく猛進し、前進する決意の程、又伝統自治を守護する寮生の気概は、青陵健児ならではなし得ない道であつたらう。

【昭和十九年度】

三年生の総代より二年の総代へと急変した一年間に、その慌しい変転にいよいよ軍色化した吾が学而寮、この間殆んど寮生活なるものは、第二義的となり、寮生も愛すべき学而寮からは巣立たねばならず、悲愴と云へばそれ迄であるが、一面から見れば戦争ありし故に、思惟活動、いはゆる思想の体系化が各人出来たとも思はれる。戦争と云ふ、今から考えて見れば呪詛すべき夢を今更云ふのも気が引けるが、昭和十九年に入つて戦局は急転直下、我に不利となり、既に大戦の終末は決して居たのである。日本の敗色日々に濃くなり、長期戦はもはや期し難く、憂悶の情が寮生に満ち溢れたとは云ふものの、必勝の信念は何時いかなる場所にても脳裡を離れず、ここに大なる矛盾があつたのである。

本土空襲の激化、大都市、主要軍事港湾都市、軍事施設は次々と爆撃され崩壊して行く。又日本本土周辺の海上には機雷が散布され、完全に祖国は孤立化する現情であつた。更にフイリピン戦により、日本天王山はあえなく降り、自爆隊と米英の称する特別攻撃隊も惜しい人命を強要して死に赴かしめ、涙なくしては見られざる戦跡を辿るのである。

かくしてこの年度は寮に於ては過渡期といへる。爾後その歴史を繙いて見よう。

○四月一日　午前十時より入学式挙行。この頃の入学試験は中学校長の推薦及び口頭試問などの簡単なものであつた。

午後二時より寮食堂に於て入寮式挙行。昭和十八年以降寮は二年迄即全寮制として、昭和十九年四月現在では大体東一寮には理甲三ノ一、二ノ一、一ノ一、東二寮には理甲三ノ一、二ノ一、一ノ二、東三には理乙の三ノ三、二ノ三、一ノ五、西一寮には理甲三ノ二、二ノ二、一ノ三、西二寮は理甲三ノ二、二ノ二、一ノ四、西三には文乙三ノ二、二ノ二、二ノ三、一ノロ、一ノハ、南寮には文甲三ノ一、二ノ一、一ノイとなつて居る。だから昭和十九年度には文科三クラス、理科五クラスに増加した事が知られる。

戦事指導者の国内決戦態勢完備に備えての強化策の一端であり、かくして学而寮も始まつて以来の人員過剰に陥り、統制の上にも幹部の地位は増々重大なるものと化したのである。而して暗黒と混沌の決戦の日は一日々々一刻々々と迫り来つつあるのである。

これに先立ち午後一時半寮図書室にて幹事、室長の任命あり。

○四月二日　泰国留学生三名の入学式あり。
○四月三日　太鼓の使用禁止。
○四月六日　校長一時過ぎ来寮。
○四月十日　日曜日午前中寮生のある者が西公園にて乱舞した形跡を生徒課が嗅ぎつけて、寮総代なる吉武、鶴並、矢野、増田、中島等を呼び注意さる。

かくの如く、全く寮生に対する学校の弾圧は強く、更に学校直属のものとなり独立した学而寮、昔の青陵も今は一個の宿泊所にすぎず、これは誠に憂うべき変動である。変動期、過渡期は正にこの年である。

○四月十五日　午後五時より報国学而寮において一年生歓迎晩餐会を行ひ、爾後余興、更に試胆会等も面白く行はれた。

この年度の新入学生は、非常に素直な、単純な性格を有して居て、つまり真情に溢れた従前の一年とは大凡その傾向を異にして居る。これは多分苛酷峻烈なる戦時下にあつて中学生活を送り鍛錬されて居て、既に戦争の型通りの束縛大なる学生々活を送り、而して高等学校なるものに対する架空の白夢なるものは大体持ち合せず、既成観念がないのに更に附け加へて、当時の高等学校も寮制度も戦時型なるは中学校と大差なく、従つて地盤をもつ夢であり、時運に対する束縛、捕虜の感強く、これを従前より脈々として流れ高等学校の真情の流れに浮かばせる為には、所謂上下別ありて親睦を期する指導、明朗快闊なる生活を以て指導する必要が強く寮総代のこの矛盾に対処する覚悟、煩雑なる方針決定は頗る苦しいものであつたに違ひない。これには先づ指導層の充実合意が一番の問題とされた。

昭和十九年度生徒総代　増田、西山。

○四月二十七日　寮生と中食時に会食を行ひ、図書室の消灯時刻を夜十二時に限る事を厳守する様に注意さる。

このごろはずつと消灯時間は十時三十分と言ふ事になつて居て、門限は十時であつたが、試験中は多少の緩和がなされた。灯火管制は末期になつて、本土空襲激化に伴ひ強化された模様である。寮生の日常生活を言へば、

朝六時　起床、屋外にて点呼、体操。
六時二十分　朝食以後自習登校。
十二時　中食。
午後三時以後日課として体操を課せられた。畑仕事、又各部運動をなす。
午後五時　夕食。
六時三十分まで、随意自由なる行動を許さる。
六時三十分以後自習、喧騒厳禁さる。外出の際は一々許可を要す。
十時　門限、点呼。
十時三十分　消灯。

尚十時半より以後は、図書室終夜灯にて、主に理科生の猛勉者が多く這入り込んで居たが、とかく十二時頃までに床に入り、それ以後の勉学者は少なかつた。それ故に消灯十二時の令が出たのであろう。

○四月二十九日　天長節拝賀式。式後生徒代表幹事決定あり。

文科二年二組　矢野　英
理科二年三組　楠　亮二

○四月三十日　日曜日の修練時刻に遅れたるものに禁足を命ぜられた。

理一・二　宮原、成富、上野、徳山
〃　〃四　山本

〃　〃五　木下、岡田、橋本、山口、黒田

○五月五日　応接室にて開催予定の体育大会プログラムの検討が実施された。即ちプログラムの中、陸上舟艇、蹴球、競争、暗夜行路の三種目に関し之を改め又は考慮する如く決定し、一方体育会をして之を実施するために乱舞会を最後にのみ行ふべく注意されたが、西山生徒代表はその自信が無かつたので、未決のまゝ解散となつた。この日又教官会議あり、左の事項が決定された。

一、西日本高等学校長会議の結果、従来行はれていた高校リーグ戦は当分行はざる事。

一、夏季休暇は七日乃至十日間位にしてその後は授業及び勤労作業を行う事。

一、勤労動員について。等々

以上の事項により、完全に、然も急速に高等学校なるものの特質に変化が来ている事が解る。これは時局と相対的に早められている。

○五月二十日　臨時試験終り、寮生に帰省外泊を許可した所試験後であつたので、帰省した者が夥しい数に上つた。

この事は当時の寮制度の変動期を意味する端的現象である。束縛感は反抗心を増大し、又すべての依存的傾向を打破させ、而して独自の世界に沈潜する事を教えられる寮生が、記念祭、文化展及び乱舞会の中絶などありて、寮内のあらゆる矛盾と束縛から脱れたい欲望は当時の特に一年生に多かつたと見てよいであろう。又一年の懐郷期でもあつて、勢かゝる風潮が生じたと思われる。

寮生は、情熱のはけ口を求めては夜晩く郊外にて乱舞をなし、大声壮語、それがたま〳〵憲兵や警察により取締られ、叱責されるものも、かの帰省者の如く夥しかつたのであらう。寮歌を高唱して六本松のポリスに摑まつたのも多く、反抗心は一層増したのである。

○五月二十七日　寮生清原宣夫君仙台飛行学校に入校の為帰省する。前日送別会ある。

○六月九日　査閲優良。

○六月十五日　第一回の北九州爆撃。

○六月十九日　第三学年の勤労動員に対する指令、文部省より到着す。

戦争指導者により、敗退既に硫黄島、フイリピンの線に来り、空襲の激化の開始せんとする頃、暗黒なる決戦の深淵に導かんとするこの儚い勝利の夢に包まれ悲壮なる足跡の一現象として見られるのがこの学徒動員なのである。

学徒動員なるものは、恐らく当時の寮生にはこの言葉を聞いて絶大なる追憶の域を広め、又回想述懐を齎らすに充分なる語であろう。この動員なるものが吾が学而寮に一大変転を齎らし、いはゆる過渡期の種々なる現象の変様として蔵される問題が多いのである。これはいづれ後に順次述べて行く事にする。

さて当時の寮生の思想傾向に一寸触れて見ると、今更こゝにいふ迄もなく、当時の状勢より戦争、それも国内に浸潤せんとして居るこの圧迫感によつて、それが余りにも急激なる為、戦争なるものへの純正冷静な批判は殆んどその影を潜めてしまつて、勝利に対する実践的貢献のみが寮生の頭を風靡して居たかの感がある。さりとて、若干のリベラリズムなるものの遺風は現存したけれども、そういう思想主義を高唱する気概ある者は少なく、とにかく大物気骨に富む者は少なかつたやうである。然して戦争に対する憤怒嫌悪を感ずるものも少なくはなかつたやうで若干マルクスやエンゲルス等の思想を有するものも居

たがこれは極めて局部末梢的なる人物に限られ、殆んど全部がミリタリストなる権利を主唱していたやうである。

○六月二十八日　寮第三学年生吉武総代以下十八名の為、壮行並びに送別の晩餐会あり。

七月一日よりいわゆる学業を投げ打っての学徒動員が始まった。緊迫せる寮は俄然色めき立って出動せる上級生の後に残る第二学年の幹部が任命されこれが一年の指導にあたる事になった。

これにより寮の空気が一変して若々しくなるとはいえ、やゝもすれば堕落に陥らんとも限らず、この事は寮生活に対しての三年の一大危惧であったけれどもこれも事なくして無事に経過したようである。新しい伝統の創造は日々刻々に築き上げられて行ったであろう。

上級生の動員と共に、在校する二年、一年の学生も勤労奉仕作業の期間が長くなり、従って真に勉学に専念する事は不可能となり、時局下また落着いて勉学すべき時でもなくなって来ていたのである。また徴兵検査延期停止の関係、また大学入学試験の関係により、若年齢歓迎となった為に、一般的にいって寮生の知識または文化水準の低下を見、これらも寮生活の障害の一つとして考へられるやうになったのかも知れない。

こゝに三年生父兄に対する動員に対する通知状を記して置く。

拝啓　御清祥段奉賀候

本校第三学年生徒全員（病弱者ヲ除ク）来ル七月一日ヨリ九月二十日マデ勤労動員令ニヨリ北九州地区軍需工場ニ出動勤務ニ服スル事ト相成候ニ付此段及御通知候

尚夙ニ御承知ノ事ト存候ヘ共動員令ニヨル勤務ハ従来ノ所謂勤労奉仕トハ性質ヲ異ニシ直接国家ノ命令ニヨルモノナルニ付御了知相成度申添候。　敬具

昭和十九年六月二十九日

福岡市大坪町一丁目

福　岡　高　等　学　校

第三学年生徒父兄殿

七月一日よりかくして第三学年の動員の火蓋は切られた。その要項を左に列記する。

第三学年勤労動員実施要項

修　練　部

（一）出動先及配置割当

○九州造船株式会社若松工場

（文科三年七七名、班長文三・三西山雄蔵）

○日本化成〃〃〃〃黒崎工場

（理科三年二組及三組、四六名、班長理三・二平川享）

○旭硝子〃〃〃〃牧山工場

（理科三年一組、四五名、班長理三・一大久保義）

（二）出動人員　一六八名。

（三）期間　自七月一日至九月二十日

（四）出発、集合日時及場所

理科三年―七月一日（土）午前八時、校庭。

文科三年―七月三日（日）　〃　　〃

かくして朝七時より五時まで正味九時間の労働が始まり、禁酒禁煙、又読書の取締り強化などを要請し、寮生の生きる道も、狭隘なるものであったにしても、伝統力なるものはその振興に努力して居たのである。

○七月十九日　サイパン島玉砕、占領されたるを以て正午英霊に対しての黙禱を捧ぐ。翌二十日に遂に東条内閣総辞職す。

○七月二十日　寮幹事集められ、寮生活の弛緩を叱責され、その建直しを要望さる。

前に述べて来た矛盾から、こゝに寮内の変動は当然引き起る事である。けれども、第二学年の指導は、三年生のそれに対して不確実であるとはいへ、その規律ある寮則の下に動く寮生の戦争への認識の一元化により、上から迫り来る外患の方がかゝる寮内に生じた内憂よりも遙かに大きな変動として考へられるのである。

○七月三十日　泰留学生テイニナコーニ溺死の事件あり。

○八月二日　第二学年通年動員通牒来る。

○八月六日　第一学年試験開始。

○八月十一日　午後六時より寮文科二年生の為に壮行送別晩餐会を挙行した。寮生よく時勢を認識して居て寮歌合唱にて閉会す。

○八月十三日　夏季鍛錬実施さる。国民儀礼の後に、鍛錬に入る。

八時十五分――八時半　継走決勝

八時半――十一時　銃剣道

十一時――十五時　闘　球

優勝組左の如し。

一、柔道優勝組　理二ノ一組

一、剣道　〃　理二ノ二組

一、継走　〃　理二ノ一組

一、闘球　〃　〃　〃

一、銃剣道〃　理二ノ二組

○八月十六日　文科第二学年生徒十五日に動員地に赴く筈なるに、警戒警報発令の為に一日後れて十六日午前七時校庭に集合し、出動先佐世保海軍工廠に動員出発す。出動人員一日一名にして、期間は昭和十九年八月十五日より昭和二十年三月までの間で、この間懐しき父母の許を離れ、また愛着一入深い学校寮との訣別の情も一入深く、勝利を信じての意識に熱き闘魂を燃やして勇躍工廠の門を潜ったのである。

かくして在寮せる理科二年及び一学年全部には国内決戦要項の下に、夏季鍛錬期間なるものを設け、予定通りに酷暑を厭はずに実施した。

かくして文科二年の上級生出動により、わが学而寮も何か気の抜けた感が漂ったけれども、新しき幹事による主として理科二年の指導層が成立、寮生活の先端を切って行った。

○八月二十二日　行軍実施。

次第に空襲の激化に伴ひ、緊張味頗る溢れ、数少ない寮生の危惧も一段と高まった事であらう。

夏休みもわづか十日間ばかりに短縮され、これも鍛錬期間の名に改められて行はれた。之が終って早速第二学期が九月一日に開始された。

○九月八日　この日愈々理科二年文科一年（文部省より正式には来らず）に勤労に出動の通牒来る為に、壮行式を挙行。

寮に於ても午後五時より出動学徒に対する送別壮行晩餐会を開催し、翌日は香椎宮迄の夜行軍を実施した。

大体理科二年一組は三菱化成動員に決定、また理科二年三組は黒崎工場動員に決定出発する。

これに引き換え、文、理科三年の退所式あり。

つゞいて理科二年二組及び文科一年計七十四名は、九月二十二日より翌年三月までの期間神戸製鋼所門司工場に出動出発す。

○九月二十五日　三年生は動員より既に引上げて来ていて、午前八

時より盛大に卒業式挙行。かくしてこれらの人々は卒業し去って行ったのである。あわたゞしい急転の渦巻の中に。

十月初旬には、理科一年のみで食糧増産の名目の下に運動場の開墾を始む。

かくして寮は一大変動を来し、在寮は理科の一年のみとなり、こゝに前例を見ざる一年生のみにて寮生活を運営して行く状態がスタートを切ったのである。寮を去り行く者の心中、新しき創造の責務を担う一年生の心中は如何ばかりであったろうか。一年のみの寮これこそあらゆる危惧や不安の念また一年のみに寮制度を任せる期待の渦巻が起り、そこに変動期過渡期と前に述べた事はこゝに原因を認められる。

この当時も文化部と生活部との活動が中心となって、寮を運営して居た。

学業をハンマーに握り代へた上級生の生活、これは察するに余りある大きな又烈しい変貌であった。三年生去り、又二年生が次いで出で、一年生のみの寮となり、一年生より幹部構成が成立し、こゝに同輩を指導する形となる。矢張り幹部の位置に立つものは、寮生の精神生活、肉体生活を教導薫化しなければならず、又飽く迄伝統の保持者でなくてはならない。が横の並行的地位にあってかゝる事は全く不可能な事実である。その有する権威の前には何人もこれに妥協し、又依存する事を否んだのである。かくしてこの年度は大きな矛盾を含んで悪くいへば学而寮の紊乱も避くべからざる運命となってしまって居た。これは先輩諸士の思ひも及ばぬ重大事件なのである。之に加へ前述した文化知識の低下に相俟って倍加する内憂は如何ともする能はざるものがあった事は予知し得る。

かくして生徒課の直轄下に入って指導を受けこゝに完全に寮独自の性格は破棄されたかに見える。自治の鐘は久しくその音を発せず。青陵にこだまする寮生の雄叫びは久しく失われた事になる。その寂寥よ。その原因は果して何処。

十月三十一日より十一月十一日まで秋季農繁期の為、動員として残寮せる理科一年百六十二名（健民修練三〇名除外）が糸島郡元岡村及び怡土村に出動す。

十月中旬以降、米英連合軍は、我が本土の周辺に接近、戦局は急激に緊迫し、台湾沖航空戦、比島沖海戦、米軍レイテ島上陸、また本土空襲の激化に伴う敗退一入と濃くなって来た。またこのころ徴兵令が改正され、満十七才より第二国民兵役に編入される事になった。

〇十一月十八日　午前九時より第二十三回創立記念式典を挙行し、十時より慰霊祭。

午後一時より創立記念体育会を催した。青陵原は何時になく寂びれ、太鼓の音を聞かず、伝統の波は何処に消え去って行ったか、また追慕の念混々として流れ出る一時であった。思ふに戦局の緊迫に伴ひ、学徒動員に殆んどすべての学年が出動し、残れる理一の生徒のみ、全校生の粋を肩に担ふは重荷であり、従って充分意を尽さず終ったのは、先輩諸士の想像だに及ばざる所又悲愴断腸の思ひもあらしめるであらう。

寮食堂に於ける記念晩餐会もまた同様の空気漂ひたり。

神風攻撃隊、一身の尊き魂を祖国日本の為に、あたら惜しまず、懐しい父母の顔を瞼に華とちった特攻隊の活動を想像した丈でも混々としてわく闘魂また報国の至誠を以て、寮生活なるものは行はれていったのであろう。

次いで十一月十九日より再び理科一年の勤労動員作業あり。しかし

て残寮するものは、体の弱い修練学徒三十余名にして、これらのメンバーが寮の生活を維持していたともいえるし、また寮及び学校を空襲から守り続け、必死の活動を続けていた。寮夜また何をか聞かん。団欒の声久しく聞かれず、また悲調一入深い。

○十二月二十二日　第二学期試験開始さる。

（昭和二十年）

○一月一日　新年拝賀式。

○一月四日　始業式挙行。

情勢日増しに険悪、寮にても険悪なる気を孕みながら明け暮れした昭和二十年には終戦といふ一大事件によつて再び完全なる自治寮が生れんとする。

一月八日より一月十八日まで学徒冬期耐寒訓練が催された。これは従前と同じ種目であり、寒気凛烈の中を修練して行つたこの頃の寮生にはまた想い出深いものがある事だろう。

次の二十年度採用者入学試験の調査が始められたが、これは例年に見ざる学科試験なしのインテリジェンステストなる入学試問が行はれ、一次選抜は中等学校の内申の書類調査が行はれた。これに合格したものが第二選抜としてのインテリジェンステスト及体格検査口頭試問が行はれた。これがまた例年にない一月十一日の事であつたのであつた。必然的に知的水準の下る事は自明の理である。

○一月十三日　日本文化講義あり。

講師　九州帝国大学総長　荒　川　文　六　氏

演題　『勝つ為に』

○二月四日　午前七時より油山一周の強行軍を行う。行程四〇キロ、参加者百七十名に達す。内三名は落伍す。

○三月二十八日（マヽ）　第三学期試験開始。

三月上旬二年動員退所式あり。

○三月十六日（マヽ）　理科一年は牧山、黒崎に出動す。

○三月二十二日　第二十二回卒業式。二百四十一名内文科生百十名。

戦局急迫。フイリツピン戦線急迫、米機動艦隊の本土接近、空襲、敵硫黄島上陸、戦は一刻々々最後の本土決戦の段階へと発展していく。

二年生の三月卒業これは最初にして最後となれる高校二年制卒業者である。

動員に明暮した昭和十九年も、寮においてはあらゆる変転の上に立つ所の陰鬱暗影の姿であり、これが終戦後再び芽を吹く自治寮への過渡期と見て差支えないならば、これこそわが学而寮における一大暗黒時代と称する事ができ、こゝにあらゆる崩壊の危険と険悪さが潜んでいた。とはいえ、新しき創造へ常に眼を向ける高校生には、長い間先輩諸士によつて残された遺訓なるものがある。これこそ、この伝統力の偉大さは、確固不動のものであり、いかに戦局が緊迫すといえども、依然として消え去らず、流るる水の如く後へ〳〵と押し流れていた。目には見えないけれども連続性をもつて。

学而寮よ！この一年の試煉変転のあわたゞしい中に、常に変らずロマンの香を漂はせ、常に見て来た懐しい寮窓を洩れてくる月光は永久に変らず、新しき命を幾度か創り出してくれた。徹底的に批判する日のまだ浅きに無理に、動員を強行されて、やゝ捨鉢の気なきにしもあらずであつた。わが寮生はあくまで学而寮青陵魂を漲らせて活躍してくれたのである。

かくして十九年度は暗々裡の異常な空気の漂う中にその幕を閉ぢるのである。

【昭和二十年度】

学徒総出陣。太平洋戦争は漸く急を告ぐる頃となつた。支那事変がもたらした昭和十五年頃からの滔々たる新体制の思想、必然的な外的圧迫、それらは全て余りにも激烈なる『全体』の圧力であつた。全体への個我の没入、新体制による自治の喪失、それらは当時寮生を激しい興奮の坩堝に叩きこんだものであつた。爾来年と共に戦ひの様相は苛酷となり、学生々活も一昔前とは似ても似つかぬ状態になつて来たのであつた。

決戦態勢といふ一つの全体的な形で一期を劃するものとすれば、それ以前が旧き時代であり、それ以後が新らしき時代であつたともいへるであろう。そして終戦も間近い二十年度には過渡期的な両者の対立は最早うかゞふ事は出来ない。伝統主義への批判が生じたのも、更に時代の認識を以つて精神的自由に代へんとする時代様相の自覚も、数年前の過渡期においてなされた事であつた。そして新体制に対する反抗——意識的なあるいは無意識的な——はなお以前の事であつた。十九年に開始された学徒通年動員は学生生活の破壊的な変革であつた。ナイフの傷跡のついた教室の机から、将また寮から、学生はペンをハンマーに鑪に持ちかえて旅立たねばならなかつた。あくまでインテリゲンテイヤであるべき学生が工場に働かねばならなくなつた事は、それが不利な戦争のもたらした必然的な影響である故に、また学生自体その運命を甘受し寧ろ欣然としてこれに参画したが故に一層当時の日本の置かれた悲劇の苛酷さを知らされるのである。全体主義、国家主義の時潮は最早動かすべからざるものとして全日本を支配し尽していた。学生もその支配の下に、寧ろ能動的に自己のうちにその傾向を認めて進んだのであつた。工場における学生々活、一時代前までは夢想だに及ばなかつた変遷である。学生はしかしこの様な生活のうちに何等かの意義を見出さねばならなかつた。もちろん以前のリベラリズムは論外としても、彼等には戦争といふもの以外には何も存在する事が許されなくなつて来たのであつた。すべては戦争完遂の為に集中されねばならなかつた。行動におけると同じく、思想におけるかゝる統一は明澄で自由な思索を妨げる。たとへ当時学生が時潮に対し全面的に肯定的であつたとしても、現在から見ればその肯定は盲目的といはざるを得ない。やがて来る敗戦に当つての激しい動揺、その後の懐疑混迷などは矢張りこの様な已むを得ない盲目的な思考の為であつたろう。

○昭和二十年度は八月十五日の終戦を境に二分して書かれねばならない。前半は敗戦直前の苦しい戦ひであり、後半は混沌と模索のうちに新しきものゝ胎動を見る時期である。この二つの時期の交替は当然予期さるべきものであつたとはいへ、尚その激しい変遷に変貌に驚かざるを得ない。八月十五日を契機に日本は完全に変つてしまつたのである。

まず前半の記述を進めよう。

前述の如く、十九年に開始された学徒通年動員は二十年に入つて益々強化され二十年四月開校当初においては、校内に残るは文科二年のみで、一年の入学も未定、残余は工場動員中であつた。例年ならば白線の香りも新らしい紅顔の少年群を迎えて、寮も学校も精気に満ちあふれるはずであるのに、今年は米機の襲来に備え、ゲートル姿のわずかな生徒が校門をくゞるといつた畸型的な四月であつた。動員中の学生に関してはあまり分明でない。記録も残されていない。連日の労働に疲れ果てた肉体に鞭打つて読書に討論に過す夜が続いたことであろう。その汗は尊いが無益な汗であつたのだ。

在校中の文科二年生は頻々たる空襲に不断の緊張と警戒を余儀なくされながらも、なお授業が続けられていた。それより以前、学校には西部軍の通信隊が動員中の空いた校舎と寮に入っていた。西寮全部、柔道場、体育館が彼等の占める所であった。

寮には文科二年十数名が残寮するのみで、昔日の寮生活の片鱗だにうかゞふことは出来ない。食事も悪く、不断の空襲に神経を消耗する生活は実に苦しいものであったに相違ない。以下日を遂って校内の状況を探る。

○四月四日　文科二年のみ授業開始。

〃　十五日　午前八時校庭に集合、修練実施、防空壕に掩蓋を作る。午後二時より姪浜白毫寺において錬成会の発会式行はる。

○四月二十一日　南方留学生入学式。

記録には連日、警戒警報、空襲警報の発令が記されてある。空襲のない日は最早珍らしい程となってゐた。天長節も精報(マヽ)注意報発令のさなかに行はれた。教授の工場出張も頻々である。しかも空襲警報発令中にも授業が行はれることが少くなかった。今夜にも焼夷弾の雨を浴びるやも知れず、校舎四寮の防衛は深刻な今日の、否たった今、今の瞬間の問題であって、毎朝の朝礼にはその分担、責任が繰返し〳〵強調され、来る夜も〳〵暗幕の中にゲートル巻で眠るのであった。校庭には防空壕が次々に掘られていった。修練の時間は殆ど例外なく防空壕の設備に費された。授業はなお続けられたとはいえ、警報によって断続され、悪化の一路をたどる食糧事情も加はって、授業の雰囲気も戦争末期の、苦しい疲れ切った様子が自ずと滲み出てくるのであった。社会思潮が――それは最早思潮というべきものではなかったかもしれない――すべての反抗者を葬りさり、皇道哲学的色彩に満ち、狂信と迷妄とが日一日とどん底へ祖国を追いこんで行く。それと同様に学友を戦地に、工場に送った学園には全体の統一に個を没するが為のあらゆる理論と行動が要求され、極く一部の反戦主義者を除いては、学生も批判精神の芽生えを摘みとられ、培うべき土も与えられず、偏った狂信に自己を律するのであった。日々の生活の苦しみに、戦況の不利に、疑問の影は度々彼等の心にきざしたがそれを表現することは出来なかった。彼等は内に抱くものが外界と如何に矛盾しやうとも、黙々として、少なくとも日々の行動には表はさずに生活しつゞけたのであった。

○五月五日　寮会議室に保管中の山口誠哉のトランク（小型）紛失。

○五月六日　八時十分より教官、生徒は運動場に集合。生徒は規定通り、柔道、剣道の二班に分れ、久永、山田両教官の指導を受ける。

○五月二十二日　青少年学徒に賜はりたる勅語奉戴式。

○五月三十日　寮食堂改築のため、寮生は本日より亭々舎にて食事をとることゝなる。

先に人員増加のため、部屋を取りひろげ、六畳を十四畳になしたが、更にそれに加ふるに食堂の改築が行はれたのである。西側の壁を拡げ、以前の壁の柱に食卓用の板がとりつけられた。

○六月三日　第一日曜にて、修練日に相当。午前八時、教官生徒校庭に集合。校庭の麦刈を行い、十一時握飯を松並木の下で共にし、十一時解散。

第一日曜は修練日として各種の鍛練行事が行はれた。

○六月十四日　学徒隊教職員並に幹部学徒特別訓練講習会。本日より二十三日まで十日間、文部省主催にて、久留米予科士官学校において実施。本校より秋山吉井両教官、及生徒六名が参加。

○六月十九日　米機六十機、本格的空襲。

この日に至るまで、記録は頻々として警戒警報の発令を告げながら、何等の被害も記されていないが、この日はじめて福岡市は六十機にのぼる米機の襲来をうけ、市内の大部分は一瞬にして灰燼に帰し、寮も遂に事務室を失はねばならなかつた。教官も、玉泉、鶴、信定、吉井、平山、西原各教授岩沢講師が罹災された。

二十二時十七分、情勢注意報の発令と共にラジオは唐津への襲来を報じた。

三十二分、夜陰を衝いて警戒警報が全市に鳴り渡つた。すはこそと床を蹴つて起上り、部署につくよりも早く、更に空襲警報のサイレンが無気味に断続した。サーチライトが夜空に美しい弧をえがいて索敵を続ける。『敵機来襲』監視員の叫びが聞える。と間もなく護国神社にぱつと火の手が上つた。それに続いて市内の各所に火災が起り、夜空を赤く染め始めた。寮の周辺にも焼夷弾が落ちはじめた。最初の一発は寮事務室の玄関前に落ち、屋根にもえ移らうとしたが、これは何のこともなく鎮火してしまつた。それから風呂場西側、西寮便所横、東一寮南、事務所北側、炊事場北側、と次々と落下したが、皆消し止められるか自然に消えるかして、無事を保つていた。しかし遂に二発の焼夷弾が事務室に命中、屋根を貫ぬいて二階に止りはげしくもえはじめた。その前上空を爆音が通りすぎたと思うと探照灯の光氾の中に黒ごまの様な焼夷弾がとらえられた。地上に出ていた伊藤教官はじめ生徒は一斉に事務室南の防空壕に飛びこんだ。その瞬間焼夷弾は命中したのである。火はみる〳〵うちに拡がつた。飛出したものゝ貧弱な消火陣では手のつけ様がない。せめて延焼を防がうと、伊藤教官と文二の宮原氏等は廊下の屋根に登り、鍬でこはしはじめた。その時には事務室の炎は益々ひどく、殆ど崩れかけんとして、廊下の破壊は実に危険な作業であつたが、三杯に一杯は教官達に下から水をかけ、漸く全寮罹災の難から免れたのであつた。多くの危険を冒しながら、寮を火災より守つた少数の人達こそ、尊い限りである。

後になつてしらべてみると、校内には大型焼夷弾二十一個、分解したエレクトロン焼夷弾が無数に落下し、松林蔭の壕にゐた通信隊の兵五名が直撃弾によつて倒れた他は、寮事務室が焼けたのみで学校に何等の被害がなかつたのは奇跡的な幸ひであつた。

事務室の焼失の為、事務は宿泊教官の宿泊室で取られることゝなつた。尚この焼失によつて歴代先輩の残した寮史資料は悉く焼失したのである。

戦火は遂に学而寮にも及んだ。一夜が明ければ校外でも昨日までの美しい市街は何処へやら、荒廃した焼跡が悲惨に横たはり戦の破局は日一日と深まつていくのである。

その後福岡にはこの様な大規模な空襲は見られなかつたが相変らずサイレンは無気味に毎日鳴り響いて市民の不安をそゝり立てた。

○七月二日　寮生の灯火管制不備のため、注意が与えられた。

○七月二十三日　夫々中学の動員先で勤労中であつた今年度新入生の入学式が漸く行はれた。七月の入学式は前代未聞のことであつた。そして式後わずか三日間の在校、それも訓練期間として与えられた。その後三菱化成黒崎工場に動員されるという事も戦時中なればこそであつた。

すでに多くは一箇年以上の動員を経た新入生の表情は若やいだ潑剌さを欠き、何処となく重苦しげであつた。激しい文言に彩られる校長、配属将校などの言葉に対しても、その表情は鈍い反応を示すばかりで

あつた。黒の丸帽に二条の白線丈はまだ新らしかつた。

入寮した一年生の三日間の日課は次の通りである。（七月二十四日の分）

午前　六、〇〇　起床洗面
　　一五　点呼朝礼体操
　　七、〇〇　朝食（会食）
　　八、〇〇　登校（行事）
　　一二、〇〇　昼食（会食）
午後　一、〇〇　講義
　　三、〇〇　体操作業
　　四、三〇　動員上の諸注意
　　五、〇〇　夕食（会食）
　　六、〇〇　生活訓練
　　八、〇〇　点呼、父祖礼拝
　　九、〇〇　消灯就寝

何時でも新入生を迎える四月は活気にあふれた生活が展開され、寮生活の最も充実した時期となるのであるのに、今年の入学は七月に行はれ、上級生も少なく過去において数ケ月から一年もの間動員生活を送つて来た新入生自体純粋な憧憬を抱くものも多くはなくて、その上高校生活は完全に変態化していた折とて、新入生の入学も工場から工場への移転という程度にすぎず、寮生活には何等の変化も与えることは出来なかつた。

〇七月二十六日　文科一年及び理科一年四、五、六組は吉井、穴山教官に引率されて八時二十分発の列車で、三菱化成黒崎工場に出動した。

一方理科一年一、二、三組も中原教官の引率の下に同牧山工場に出動して行つた。

わずか三日間の学校生活、それも厳しいスパルタ的な統制と訓練の下に送られた生活、黙々としていかなるものがあつたであろうか。

戦局は日一日と不利を伝える。

新入生を送り出して間もなく、再び動員令は校内に下つた。

〇七月三十日　理科一年原級生、及び新入生徒弱体者は鶴教官に率られて、福一〇三二工場技術隊に出動入隊。

〇七月三十一日　文科二年（特幹受験生を除く）及文科一年弱体生徒、福一〇三二工場総務隊に出動入隊。

かくして校内から一人あまさず生徒は動員されて行つた。留学生、遙々南方より来つた僅かの留学生を除いて。人気のなくなつた校内はけたゝましいサイレンの響をよそにひつそりと静まり返つてゐた。

八月に入つて愈々終戦も間近になつて来る。特幹受験の文科二年生が福一〇三二工場企業隊に入隊すると間もなく、広島にかの原子爆弾が炸裂した。新聞には只新型爆弾とのみ伝へられてゐたが、その惨害と威力は忽ちにして人々の恐怖をつのつた。終戦間近し、誰云ふともなくこんな噂もひそかに伝はりはじめたが、大部分の人々は現実の敗戦を目のあたりに見せつけられながらも、依然として本土決戦の呼号につられ、架空の勝利を夢みるのであつた。しかし敗戦は刻々として迫つた。上陸は何時か、竹槍を抱いて人々はいひ知れぬ恐怖を抑えて益々激化する米機の襲来を待つのであつた。原爆は更に長崎をも襲つた。

〇八月十五日　この日、八・一五革命と呼ばれる運命の日が訪れた。米英支ソ四国に対するポツダム宣言受諾の通知はすでに十四日に知ら

れていた。正午、重大放送との予告に生徒は各動員先でラジオの下に集つた。これ程の現実の中にあつて、なおも重大と称されるものとは何であろうか。当然にあるものが思はれるのであつたが、なおそれとするには余りに痛ましく、恐れと期待の交錯に悩みためらひつゝ集合したのであつた。

『……堪え難きを堪え、忍び難きを忍び……』

粛然としてうなだれる耳許を、陛下の玉音のみが流れていつた。あゝ敗戦、祖国は遂に破れたのだ。

ラジオが切れても誰一人動かうとするものはない。　涙、　涙。

動員の解除は早かつた。生徒は動員先から満員の列車に乗つて故郷へと帰途についた。切符の発売制限が強化され、郵便が混乱し、B29が超低空で飛来し、自決が連日の新聞を埋める一方においては、某処に陸軍部隊が集結、連合軍と決戦せんとしてゐる等の虚報乱れ飛ぶうちに、軍国主義日本はがら〳〵と崩れて行つた。学校でも、宿直の玉泉教授の所に、九州総監府より副総監来訪、停戦により連合軍の進駐あるにつき、九大、福高はその宿舎にあてられるやもしれざるに付き、宜敷くたのむとの依頼があつたりした。

翌日から校内は書類の整理で大童であつた。多くの書類が焼かれた。その煙、炎天の下に白々と立昇る煙、それは果してフェニックスの煙であつたろうか。

嵐はすぎ去つた。しかし暗雲去りし後の何と悲惨な祖国の姿であろう。涙と飢と孤児と廃墟と。国破れて山河あり、耳慣れた言葉が今や現実となり、緑の山々がうらぶれた祖国を黙々として見下している。インフレの波に札束が躍り、奔騰する物価と共に跳梁する強盗、戦犯の糾弾は日々の新聞を埋める。社会主義、共産主義の怒号の中に、喜を挙げて謳歌されるデモクラシー。

だまされた、と叫んで怒るもの、空ろな眼を地に落してうなだれるもの、吾が意を得たりとはね出でるもの。

混沌と頽廃と虚脱と。破れた祖国は今や苦難の絶頂に立つていた。

しかし、世情の混乱をよそに、学而寮の正門は九月十七日大きく開かれた。新生の門再生の門は今や健児百六十五名の歓声と共にうち開かれたのである。

終戦以降、二十年後半の状況を概観すると、そこには旧殻よりの脱出と、新生への胎動とを覗ふことが出来る。一つは制度上のものであり、一つは思想的なものである。八・一五革命と呼ばれる程の大きな変革ではあつたが戦時中のいろ〳〵な制度がなくなつたのは速急にではなく、やはり可成り徐々に行はれたのである。

点呼朝礼の廃止、校友会の発会、寮自治組織の確立、青陵会の成立等々の事が二十年後半から二十一年にかけて行はれ、二十一年において一応の落着きを見せる。二十年度はまだ暗中模索の時期といへるかもしれない。

日を追つて叙述を進めよう。

○九月十七日　午後二時より入寮開始。入寮者は希望者二百余名中百六十五名であつた。一室三人強である。

○九月十八日　三時より寮生を食堂に集め、校長より訓辞があつた。

○九月二十五日　寮幹事の任命があつた。津野田修吉、安藤氏等がその任に就いた。

寮の自治組織が確立されるのは二十一年になつてからであり、この頃はまだ組織は充分なものでなく、報国学而寮時代の名称が用ひられる。

○十月一日　校長、毎週月曜、寮において青少年学徒に賜りたる勅語を奉読することゝなる。

○十月二日　未曾有の食糧難に市内の下宿払底し、寮においても食事は極めて悪く、周辺の畑には作物が充満し、開寮以前可成り食糧を集めたが尚不足し、寮生は空腹のあまり自炊をはじめた。しかも、この日数名の生徒が室内で木製のごみ箱で飯盒を炊いたのが発見され、十二日に無期停学に処せられる事件が発生した。

○十月二十六日　先の自炊事件に続いて、今度は墜落事件が発生した。東一寮二年黒須氏及通学生伊藤氏、平井氏（寮生）が東一寮一室の鉄棒の欄干に腰をかけて談笑中、壺金が破損し、寮庭に墜落、負傷した。幸ひ傷は軽く、また平井氏は無傷であつた、この二つの事件は後々までも寮生の話題の種となつた。

秋が来れば、記念祭、記念祭とあらば寮祭、運動会と、毎年々々繰り返される楽しい行事も、支那事変以来久しく途絶え、細々と運動会のみが続けられ、僅か数人の見物人といふ時もあつた。恰も二十四週年に当つて、戦後初の記念祭は、復興の狼火として華やかに行はれた。食糧難と雖も、インフレと雖も、健児等の意気を挫くものはなかつた。何しろ久しく途絶えてゐたとて、準備も何も大童であつた。

○十一月七日　先づ学而寮晩餐会が午後五時より行はれた。乏しい乍らも心をこめた会食の後、お定りの訓話、それから愈々余興に入る。博多仁輪加も出れば特別出演の修善寺物語りも出た。寮生の笑顔、拍手、和気藹々の雰囲気のうちに夜は更けて行く。寮友集いし団欒の一駒であつた。

○十一月八日　明けて土曜日、創立二十四週年記念日である。何よりも先に、戦歿先輩生徒の慰霊祭が行はれたのも意義深いものがあつた。講堂正面にしつらへられた祭壇の白い所が一際目にしみる。不幸にして戦野に倒れた先輩生徒の霊の安らぎを祈る生徒の胸には無量の感慨が流れたことであろう。祖国の為にペンを棄て銃をとつた人々はもはや幽明境を異にしてゐる。あゝ戦に。

九時に慰霊祭が終了し、十時から運動会が開かれた。プログラムは次の通りである。

一、開会の辞
二、校長挨拶
三、寮歌合唱
四、競技開始
1　百米、四百米予選
2　棒倒し
3　人生航路（一年）
4　対部競走
5　玉運び（先生）
6　マラソン
7　煙草競走（先輩）
8　継走予選
中　食
9　クラス遊戯
10　障碍物競争（一年）
11　借物競走
12　樽転し（一般）
13　福高式籠球
14　ボール蹴り（先生）
15　百米、四百米決勝
16　パン喰ひ競争
17　化物
18　人生航路（二年）
19　継走決勝
大　乱　舞

右のうち、3番の一年人生航路において、新婚の段階に入り女装をなすものが続出した。

戦争中はもちろん、過去においてもさまで女装は許されてはゐなかつた。先生方は大分目をむかれたらしいが、その後何のこともなく女装は行はれる様になつた。これも『時代』のなす所であろう。また寮においても生徒課に無断でデコレーションを復活開催、相当の人々を

集めた。

その後文化展も開かれた。

この様に寮祭、運動会と日はちがつても一緒に文化展が開催された事は未だ嘗てなかつたことである。元来文化展は戦時中寮祭の廃止に依つて福高独得のものとして展示されたのであつたが、今度は一度に挙行され、類を見ない盛大なものとなつた。

天地をとゞろかす大乱舞によつて、この行楽の一日も終つた。舌づゝみを打たんと集る豚汁に豚の肉が少ないのは残念ではあつたが……。

○十一月十三日　生徒代表選挙。

文科　宮田寿幸

理科　伊藤敏明

両氏が当選した。

○十一月二十二日　昼食時、寮幹事、安藤、津野田両氏は寮事務室において、今朝夕の点呼には宿直教官は臨まないこと、並に教官は必ずしも食堂で生徒と会食しないことを申し渡された。その後、点呼は自然に消滅し、月曜の勅語奉読も宮城遙拝も何時とはなしに消滅して行つた。

○十一月二十三日――二十五日　文化展。

二十四日には、秋山六郎兵衛教授及岩崎講師、穴山講師の文化講演があり、一時からは生徒の研究発表会において、吉住、渡辺両氏の『数学に関して』の発表があつた。

この様に、文化展の性質もやゝ変つて来、お祭り的な要素を失ひ学術研究の段階に入つて来てゐる。記念祭の一環として行はれた行事の一つではあるが、他校に見られない特色のあるものである。

○十一月二十六日　折竹校長勇退、内藤教頭広高校長に栄転。

○十一月二十九日　午後一時から、講堂において本校主催第一回公開民主々義講演あり。今来、平山両教授の講演で、聴衆多く盛況ではあつたが、生徒の間には皮肉なさゝやきと嘲笑がないでもなかつた。

○十二月五日　寮生百八十一名、春日原元兵器廠に出動。これは県勤労課からの懇請により為されたものであつた。終戦後初の集団的勤労であつた。

○十二月十一日　山尾新校長着任。

○十二月十三日　授業終了。

二学期も終り近くなり、食糧事情は窮迫を極め、寮生は『階段を上るのさへきつい』と洩らすものもあつた程で、これとてさほど誇大な表現ではなかつた。その為二学期試験は延期され、冬期休暇も延期し、一月一杯となつた。

（昭和二十一年）

○一月一日　元旦、天皇陛下の『人間宣言』ともいはるべき詔書が渙発されたが、期待され乍らも人を驚ろかしたこの詔書、その歴史的な性格を持つた詔勅によつてこの年は始つたのだが、それに相応しく、二十一年は福高にとつても多事多難な年であつた。校友会発会、寮規約制定、軍関係学徒転入問題、青陵会創立二十五週年記念祭、食糧難、明けては銀竜会事件と事が続いてゐる。二十一年の三学期は年度よりいへば二十年度に属するが、寧ろ二十一年度の新局面展開の序幕的性格が大きい。

新学期の最初に当り、校長は元旦の詔書を奉読されたが、翌二日には御真影奉還もなされた。

前学期延長されてゐた試験が開始され（四日）、しばらくは試験に没頭する。

○三月五日　校友会発会式。

昭和十五年暮報国団の結成によつて廃止の憂き目にあつた校友会は五年後のこの日、漸く日の目を見ることゝなつた。社会科学研究会などの結成はやゝ遅れるが、戦前の各部は殆ど全部復活した。式は午後一時から講堂で行はれたが、その後校庭で、雑炊を喰ひ散会した。

○三月六日　校内弁論大会。

○三月七日　食糧難は益々ひどく、寮生の炊事も次第にその頻度を増し、電気焜炉を使ふものも多く、漏電、火災の懼れがあつたので、昼食時寮幹事は永井生徒課長より注意を受けた。炊事用には学校より木材を供給され、旧弓道場裏のかまど（戦時兵隊が使用したもの）で炊事をすることゝなつた。

三学期はあつけなく終つた。二年制が三年制に復活したので卒業生もなかつた。

終戦以来約半歳、復興はまだ〳〵である。生徒の思想的動揺も落ち着きを見せぬ。すべては次年度にまたねばならぬ。

【昭和二十一年度】

敗戦二年目の春が訪れた。野に山に桜花爛漫と咲き乱れ、自然の美粧は常に変らぬ絵巻物である。青陵原にも桜が咲いた。やつと昔に還つてマントを肩に逍遙する三四郎達、黒い肩に白い花弁がはらりと散つて、青陵の春は長閑である。

しかし春とはいひ乍ら戦に敗れた祖国は苦しみに喘いでゐた。破壊し尽くされた祖国を建設する為には、あらゆる努力が捧げられねばならなかつた。インフレといひ、孤児といひ、飢といひ、病患は深く且つ重い。

福高も学而寮もその再建の途上にあつた。自治の復活、高校生活の新生、学制改革が未だ伝へられぬ頃である。生徒は新らしき伝統の創業にその全力を傾けんとしてゐた。二十一年は新しき創業の一年である。生徒は過去をぬぎ棄て、如何にして福高を、学而寮を若き魂のハイマートたらしめるかと、日夜腐心してゐた。これからの福高の伝統を作るのは俺達だ、青陵は建設の力に漲つてゐた。世情の頽廃も混沌も、却つて彼等の意欲をそゝり立てた。真剣な思索が続けられ、事業は着々と進められた。生徒の思想的動揺も苦悩も、それは等しく高校生としての生活を真に意義あらしめんとする方向に向つてゐた。

○四月十七日　新学期は開始されたが、軍関係学徒の編入問題の為に、入学決定が遅れ、二三年のみの生活が開始された。

先づ最初に起つたのは寮規制定問題である。自治寮として自律の生活を築く為には、是非ともその中核たるべき綱領及び規約がなければならぬ。自治の再建は先づこの点より開始された。これより先、三学期に寮幹事は永井教授より、新学期からの自治寮としての発足をいひ渡され、寮規の原案を作る様にといはれそれより委員は各校の寮規を参照し、独自の原案を作製せんと鋭意努力を進めた。その結果成つた原案を、五月十四日、寮食堂において寮学而会を開催し、副総代永松氏より説明した。その後小委員会において審議され決定を見た。綱領及び規約は次の通りである。

福岡高等学校学而寮綱領

一、自由ヲ愛シ自治ヲ重ンジ寮生活ノ真髄ヲ発揮スヘシ

一、世運ノ進展ニ鑑ミ学而寮ノ伝統ニ遵ヒ寮生タルノ矜持ヲ失フヘカラス

一、広ク知識ヲ世界ニ求メ人類文化ノ発展ニ寄与スヘシ

寮　規

総　則

第一条　寮生ハ真ノ高校生タルノ自覚ノ下ニ本校生徒ノ中核タルヘシ

第二条　寮生ハ自治ノ精神ヲ発揚シ寮規ヲ遵守スヘシ

第三条　寮規ノ改廃ハ寮生大会ノ議ヲ経ルモノトス

組　織

本寮内ニ左ノ役員ヲ公選シ其ノ任期ヲ一ケ年トス

一、全寮総代　各寮総代ノ互選ニヨリ文理科ヨリ夫々一名ヲ出シ寮生ヲ代表シ寮内ヲ取締リ内外交渉ノ任ニアタル

二、各寮総代　各寮々生ノ選挙ニヨリ一名ヲ置キ各寮ヲ代表シ相互連絡ノ任ニアタル

三、各部総代　生活、文化、運動、園芸、各部委員中ヨリ互選ニヨリ夫々一名ヲ出シ各部毎全寮ニ関スル当該事務ニアタリ各寮ノ連絡ヲハカル

四、生活部委員　各寮々生ノ選挙ニヨリ一名ヲ出シ各寮ノ食事衛生等ノ任ニアタル

五、文化部委員　各寮々生ノ選挙ニヨリ一名ヲ出シ各寮ノ文化活動、図書室ノ管理等ノ任ニアタル

六、運動部委員　各寮々生ノ選挙ニヨリ一名ヲ出シ各寮ノ運動、娯楽等ヲ掌ル

七、園芸部委員　各寮々生ノ選挙ニヨリ一名ヲ出シ各寮ノ農園ノ経営、管理、寮内外、清掃等ヲ掌ル

八、室長　各寮ニ於テ各室毎三名ヲ選シ各室ノ管理ニツイテ全責任ヲ負フ

運　営

第一条　諸般ノ事項ヲ議センカ為ニハ寮生大会役員総会或ハ総代会議ヲ開クモノトス

第二条　寮生大会ハ全寮生ヲ以テ役員総会ハ役員ヲ以テ総代会議ハ各寮総代及各部総代ヲ以テ夫々組織シ議長ハ全寮総代之ニアタル

第三条　予算会ハ毎年一回開クモノトス

第四条　役員ノ交替ハ第一学期授業始メヲ以テス

第五条　スヘテノ会議ニ於ケル議決ハ出席者ノ過半数ノ同意ヲ以テシ可否同数ノトキハ全寮総代之ヲ決ス

第六条　学而寮全体ノ意見ハ全寮総代ヲ経テ其ノ効力ヲ発揮ス

第七条　学校トノ連絡ハ全寮総代ト補導課トヲ以テス

入寮及ヒ退寮

入寮及ヒ退寮セントスル者ハ全寮総代ニ其ノ旨ヲ述ヘ其ノ了解ヲ受クヘシ

其　ノ　他

其他細微ナル事項ハ寮生大会、役員総会、総代会議ニヨリ適宜之ヲ定ム

寮生ノ体面ヲ汚シ秩序ヲ紊ス者アルトキハ総代之ニ忠告ヲ与ヘ改悛ノ状ナキトキハ総代会議ニ諮リ退寮ヲ命スルコトアルヘシ

寮規は成つた。謳はれる自由と自治、高校生のシムボルは青陵に甦つたのである。一筋に真理を求め理想を追ひ、たくましき生の祝典を若き男子らは繰りひろげて行く。

寮規約の制定が、寮自治の大綱であるとするならば、青陵会の創立は寮をも含めた学校全体の自治の狼火といふことが出来やう。青陵会については校友会雑誌に次の一文がある。

生徒自治組織青陵会に就て

自治自由は高校生の誇りであり、吾々学生生活の根底である。戦時中も吾々は良くその言葉を叫び空しい戦を真実に戦つて来た。いざ終戦となり現実にその自治が許されるや充分発揮さるべき吾々の自治活動は案外無気力であり、無自覚なものであつた。永き拘束の惰性と、考へられた自治自由に対する懐疑の当然の結果であつたかもしれない。しかしやはり自治自由は吾々高校生の第一の要諦であり、吾々自身の手に直に自治を獲得する事が現在第一義の問題である。何も哲学的に解釈せよといふのではない。高校生としての明るき叡智と主体的な実践が要請されるのである。それを運営する具体的な組織として青陵会は生れ来つたのである。

青陵会は吾々の生活一般—学問、思想、共同生活等の向上発展を目ざしてゐるのである。そしてその根底は生徒各人の自律にある。各人—級会—青陵会、これ等は相互に媒介し合つてこそ始めてその真価を発揮しうる。そしてそれの主体的な実践は飽くまでも吾々生徒自体の手にあるのである。斯くの如くして青陵会もその存在の意義を有し、高校生の自治組織として正しき批判力と実践力をもちうるのである。青陵会に対し傍観的非難は許さるべきではない。それは青陵会が吾々のものであるを忘れて自治を他に任せるものである。生徒諸君、青陵会は飽くまで吾々自身の取り扱ふべき自治組織である。そして自由なる組織である。吾々は幾多の苦き失敗にひるまず、高き理想に向ひ共に進まうではないか。——

自治と自由、激烈な戦ひの最中にも只管に求められつゝあつた自由と自治は遂に与へられたのだ。そして日本全体が与へられたデモクラシーに戸迷ふ時、高校生も一時はその宝石を手にとり迷はねばならなかつたのである。その宝石をいかに活用するか、その為に寮の規約が生れ、青陵会が創立されたのである。爾来二十二年の授業料問題に至るまで青陵会は校の内外に大きな役割を果した。

○五月二十一日　校友会役員総会。

サッカー、卓球、海洋部独立。

○六月三日　大分経専牛尾健一、島沢吉一両氏来寮。

この頃より、また食糧事情の悪化甚だしく、遅配相継ぎ、遂に六月十五日より休暇に入ることゝなつた。寮を襲ふ食糧難は屢寮生活を破壊する程のものすらあつた。計画遅配などといふ言葉が使はれ、寮の倉庫は満てる時がなかつた。雑炊ばかりを摂り乍ら、寮生は尚も真摯な生活を続けた。中洲のおでんやに盃をくみ交はし寮歌放吟、更けゆく街頭に酩酊乱舞する高校生を戦前の典型といへるならば、寮庭に火を燃しうづくまつて飯盒の底をあほぎ、赤い火に頬を照らしながら、学問を恋愛を語る高校生は、戦後にしか見られない姿であつた。物質的な窮乏が直ちに精神的な影響を及ぼして来ることはあり勝ちなことである。寮生は社会の現実に対して、その思想的な混乱を自ら体験し思索を迫られると共に、毎日の生活それ自体とも闘はねばならなかつた。

夏休暇が終ると、漸く解決を見た軍関係学徒の編入もすみ、愈々一年生の入学がはじまつた。これより先、青陵会は新入生歓迎の為に、全新入生を一時寮に収容し、盛大な歓迎会を開かんとし、準備を重ねてゐた。

○九月十六日　午前十時より入学式。零時半より入寮式。入寮者は八拾二名であつた。生徒代表の司会の下に午後二時より新旧生徒の対面式が行はれ、引続き各部の紹介があり解散した。やがて日暮れ頃になると寮食堂で会食がはじめられた。新入生は寮生も通学生も挙つて食堂に集つた。まだ初々しい坊主頭の一年生を厳めしい姿の上級生が

とりかこむ。乏しいながらも心を籠めた晩餐がはじめられ、立ち上る煙草の煙と共に、あちこちで朗らかな笑ひ声が聞える。友情の集ひ、魂の餐宴はゆかりなくも青陵に集ひし数百の若き男子らの間に楽しげに繰りひろげられて行く。こゝまでは楽である。こゝからが行である。食事の跡が片附けられ、壇がしつらへられた、例の自己紹介がはじまるのである。喧騒と怒号、何をいつてもつまらない、黙つてしまふとまた怒鳴られる。またいふ、また怒鳴られる。次から次へと、こゝでは声の大きい者が勝である。自己紹介の行事と共に寮生活、学校生活に対する積極的な意見が華々しく飛び交ふ。自己紹介は、新入生に対する価値転換の意図を以て行はれるのであるが、それが単なる習慣的行事に堕しては、新入生に反感を抱かせる丈で何の効果も得られない、素裸になつて何の虚飾もなく、素直に自己をぶちまける。批判せられ、叩きつけられ、傷は大きく、苦しみは長い間残つてゐる。しかし、自己紹介で叩かれ、その結果、やはりあれこれと思索する必要にせまられるのである。言葉をかへれば一つの産婆術といへるのかもしれない。思索は対話によつてのみ得られる、といつた伝統的な考へ方が恐らくこの行事の根底をなしてゐるのであろう。ともあれ、今年も自己紹介は激しかつた、そして上級生、新入生の意見の開陳も多かつた。九時過、各室へ引揚げる皆の胸には、夫々異つてはゐるが深い感銘と、何かしら対決を迫つて来るものがひそんでゐたであろう。落着く暇もなく、寮庭にかゞり火がたかれどう〳〵と打鳴らされる太鼓と共に、大乱舞が繰りひろげられた。何時までも〳〵踊り続ける裸体の群像、あかあかと火に照らされる逞しい肉体、野性的な情熱の奔流は果しなく続いて行く。

やがて各室に帰つた生徒は、激しい感情の高潮に頬を染めてゐた。学問を、恋愛を、自治を、自由を、マルクスを、語りつゞける各部屋々々、青陵の灯は永劫に消えぬかの如くあか〳〵と輝いてゐた。

○九月二十五日　二三年の延期されてゐた第一学期試験が開始された。

○十月五日　この日より七日に至るまで、理三三の生徒の盟休があつた。銀竜会事件の発端である。これについては詳説を避ける。

○十月十一日　インターハイ復活により、出場選手は熊本へ出発した。各部のうちバレー部は全国大会に優勝をとげた。また野球、庭球（複）も西部予選に優勝、全国大会に出場したが惜しくも破れ去つた。

○十一月三日　明治節、憲法発布さる。講堂において祝典。

○十一月七日　再び記念祭は廻り来つた。今年は二十五周年祝典として、また福高再建の祝典として、戦前に勝る一大饗宴が展開されたのである。先づ二十五周年記念弁論大会が開催されたが、聴衆は少なかつた。また文化展も本日より公開された。

出　展　題　目

理三一　甘味の研究、天気予報

二　成績の分布、パン焼器の科学、珍らしい切手

三　物とは何か（結晶を切る）

四　鏡剣玉の文化史的考察

五　博多湾のプランクトン

文三一　男女中等学校思想調査　顔面装飾

二　ローマン主義以後の欧州芸術

三　カント永久平和論　方丈記

近世ヨーロッパにおける君主制滅亡史

理二一　星の国

二　家の歴史
三　石炭の研究
四　塩野草の研究
五　残島の概観
六　福岡附近の蟹について
文二一　学生思想運動史
二　犯罪の研究　観世音寺
三　郷土と万葉
理一一　電気器具の正体
二　太陽と地球
三　市電の研究
四　水の生態
文一一　児童の国
二　知られざる傑作

以上のうち、一位理二六、であつた。

○十一月八日　記念式典及寮晩餐会。

記念式典は午前十時より開催、校歌合唱の後、文部大臣その他より祝辞が送られ、二十年以上勤続者の表彰が行はれた。玉泉教授などである。

寮晩餐会は午後五時より開かれた。会食の後、校長、永井教授、諸教授、先輩の訓話があり、それから寮生有志登壇して意見の発表を行ひ、後余興に入つた。終了は正に十二時であつた。

○十一月九日　演劇、レコードコンサート、及音楽会。

一昔前までは、演劇部といへば、所謂『赤』の本拠と見做され、徹底的な弾圧を喰つたものであつたが、敗戦によつてこゝにも自由が甦えつたのである。午前中は『若い人』（文二三）社会劇『薄暗くなる頃』（文三二）『雨』（理三二）が上演され、またレコードコンサートが理三一を中心として化学教室で行はれた。午後に演劇部のアルトハイデルベルヒ、その前には音楽会が行はれ、この日は正に福高生のセンスの見せ所といふ所であつた。

○十一月十日　運動会。

中天にひらめく白旗赤旗、羽織袴の応援団、運動会はやはり佐高戦と共に記念祭の華である。紙面の都合上、プログラムは省略するが、観客すこぶる多く、非常な盛況であつた。また一方十一時から同窓会総会も開かれ、多数の新旧先輩相集ひ、盛会であつた。

寮はデコレーションを開催、相変らずの珍案奇策に観衆をあつといはせた。

運動会が終れば、七、八、九、十と四日間の祝典も終る。食糧難も、ゲルヒンも蹴散らして若人は心の底からこの数日を祝ひ楽しんだ。げに記念祭こそは高校生活の華であろう。

○十一月十二日　玉泉、越山両教授講演。

○十一月十四日　高校生も人間である、生きねばならぬ。また人間である以上霞を喰つて生きるわけにはいかぬ。食糧難は若人の生活を陰鬱にする最も大きな障碍である。記念祭も終つたこのころ、一時よかつた食糧難が又ぶり返えして来た。青陵会はこの食糧難に処する為、十日間の休業を学校に懇請した。この懇請は一年生の提案によるもので、午後一時より、牧川、今来、永井三教授と色々と懇談を重ねたが、真に困窮したものは組主任と相談して帰宅静養したらとのことで、休業は許されなかつた。所が翌々日の十六日、一年生の空気は急激に休暇説に傾き、午後一時より牧川教頭の所に一年生各組代表及寮生有志

来訪し、更に休暇を懇請した。牧川、永井、吉井、今来教授は応接室において前条を繰り返えしたのみで何等の変化も見られなかつた。その後対佐高戦（十一回延長戦六対五にて勝）をはさみ、十九日になつて一年生は一斉に自由欠席の形をとり欠席してしまつたのである。理一一は全員、二組は三名の出席のみで、外も大同小異であつた。その後二十日、二十一日、二十二日と欠席は続いた。学校側では二十日午後三時より寮の正副総代及生活部幹事を事務室に集め、寮食費の値上及危機突破資金の徴収などについて懇談、対策を練つた。翌二十一日、教官会議において一年生の要求通り休校するや否やの件を審議されたが、理由薄弱として休業せぬことに決定を見、一年生の休業は結局非合法なものとなつてしまつた。その後、市内の一年生から徐々に復校し、事は収まつたが、うらむべきは食糧難である。

しかし、食糧難とはいえ、この一年生の行動もやや軽率ではなかつたかと思はれる点が多く、又独断的な行動があつたことも否めないようである。二年三年はこれに対し、同情以上の強い態度には出ていないのである。

○十二月三日　放課後、一年生に永井教授より訓辞あり。更に危機突破資金として五十円宛徴収することに決定した。

やがて試験の終了と共に二学期も終つたが一年生の盟休的休業はあまり芳しからざる事件であつたといえよう。

寮の食事が、食糧難の為悪化し、その結果寮生は半ば自炊の生活を続けねばならなかつた。しかし、元来炊事の設備もない寮内のことであるから、何分にも火災の危険が多く、その為、風呂場横にヒーター室を約一万円の費用を以つて設備し、室内における炊事を止めてヒーター室で炊事をすることになつた。しかし、ともすれば漏電の懼れがあり、三学期の開始に当つて、学校より詳細な注意があつた。又ヒーター室の管理の為に新に電気部が設けられ、後には寮内の電気関係一切を取り扱うことになつた。

又、戦後直ちに設立された校友会より、校友会雑誌第一号が発刊された。これは戦後唯一の校友会雑誌となつた。

○一月二十一日　生徒代表選挙。

文科　有馬　賢

理科　安部竜夫

○二月六日　寮三年生送別会。

戦後三年制復活以来最初の卒業生である。校長、各教授、列席の下に開かれ、相当な御馳走と、又盛大な寮歌の合唱があつた。

○二月十四日　昨二十年六月十九日、福岡空襲に当つて寮事務室の消火に努めた文三の生徒に表彰状が授与された。

表彰状

右者昭和二十年六月十九日福岡市空襲に際し学校防衛に服務中、焼夷弾学而寮事務室に落下火災を生じたる時、敢闘克く延焼を防止せり

これ実に高校生たるの本領を発揮し範を後世に垂るゝものなり

仍つて茲に之を表彰す

二月十八日

福岡高等学校長

更にこの日、講堂において生徒援護会の問題について生徒大会が開催された。生徒援護会は生活難に苦しむ困窮学生の救済を目的として新生徒代表有馬賢、安部竜夫両氏等によつて企画発案されたものであつた。そしてその資金獲得の為に全生徒の春休みにおける占領軍労働

の報酬を充てん為に、生徒大会が開かれたのである。事実休暇には三百名の生徒が友情の汗を流し労働した。

福岡高等学校生徒援護会会則

一、本会は福岡高等学校生徒の福利厚生並に学資援助を目的とする

二、本会は事務所を福岡高等学校生徒課に置く

三、本会は左の役員を置く

会長　一　名　福岡高等学校々長

理事　若干名

幹事　若干名　福岡高等学校生徒課及生徒代表

四、理事は会長の諮問に応じ本会運営について審議する

五、幹事は本会の常務を処理する

六、寄附者を賛助員とする

七、毎年度の収支の決算は理事会の承認を経てこれを報告する

かくして成つた生徒援護会も基金の不足に悩み、二十二年五月に先輩より寄附を仰ぐことになつた。これについては次年度に譲る。

○二月十八日　卒業式。

○二月二十一日　一二年試験開始。

三学期も終りに近づいたころ、かの銀竜会事件が発生した。この事件については思想史にて述べることゝし、こゝでは触れない。

二十一年は再建の年であつた。理想の喪失と自由の獲得、この矛盾した二つの事実の上になされた再建は、当然多くの問題をはらまねばならなかつた。最後に起つた銀竜会事件も、終戦後の社会的な影響も可成りふくんでいる。来るべき二十二年度の発展の為に、二十一年度は混乱と軽信とを排しつゝ苦しみのうちに歩まねばならなかつた。新らしき伝統は果して形成され得たであろうか。それに関しては、本稿では触れることが少なかつた。それは思想史において論議されよう。

【昭和二十二年度】

終戦後迎える第二年目のわが学而寮は、若々しい新入生を迎えて、俄然その旗を高揚する。

再び見る世界の平和と秩序の標榜の下にあるとはいえ、その底を流れ行くカオスの波に一歩一歩と昂じて行く感があり、さりとて、自治寮として返り咲いたわが学而寮の寮庭に漲る春気を吸い、二百をオーバーする寮生の気風にも、昔よりの伝統の華はその芳香を漂はせ、新入生の増加と相俟つて益々その活気を呈し来つたのである。前年度と異なつて正規の四月に入寮者の入寮を見、リベラリズムといはれる自治組織の薫陶の下に、やゝ自治体は確立しつゝあつた。然し、純高校生の空気も、とかく軍関係より転入の上級生の間に醸し出される異色に触れてやゝ変動する傾きがないでもなかつたが、自由の名の下に、若人の情熱には変差がなかつたといえよう。

先に二十二年の正月に、六三三制の学制改革案が決定し、こゝに高等学校の旧制はその姿を消す事となり、時流に逆はずしてこの問題は、一時寮生の心胆を不安ならしめた事は事実であろう。かくして有終の美を飾らんとする気運は高まりつゝあつたと思はれるのである。

この年度の全寮総代の氏名は次の如くである。

全寮総代　文科　橋　本　豊　久

理科　本　田　　精

○四月十五日　第三、二学年授業開始。

このころは、アルバイトにて学資を稼ぐの外、学校に出校する生徒の状況は悪く、これも逆はれざる時潮とはいえ、誤れる真理への欲求が往々にして生徒全般の心底を洗つていた事は誠に遺憾である。

学而寮においては、春爛漫と共に、新入寮生に対する受入態勢が徐々に完成されんとしていて頗る活気を呈していた。

○四月二十三日　午後一時より講堂にて入学式挙行さる。学校長訓辞、生徒総代有馬賢氏の歓迎の辞は深く入学生の胸に感銘を与えたる感があつた。

午後三時より入寮式を挙行。新入寮生は八十六名の多きに達し、福高学而寮綱領より順次説諭される山尾学校長、次いで永井生徒課長の挨拶、総代、生徒代表の歓迎の辞交々寮生の未知の寮生活への憧憬は一段と強くなつた感がある。

上級生多数の寮歌合唱にも、若人の意気の発露が脈々としており、新入生の感激の昂じる中に盛会裡に終了した。

思えば嬉し同胞と
熱き感情の友垣を

こゝに新入生を迎えて寮制度の上に一つの異色を呈した。即ち、新入寮生の指導及び、高校生活の真髄ともいふべき寮生活の徹底を期する為に、こゝに新しい措置がとられる事になつた。三年の有志の発案になるこの制度は、八十六名の新入寮生を東一寮と東二寮の二寮に収容させ、一室平均五人の割で、文理混合を試み、上級生には、指導権、及び真高校生の面目に相応しい優秀な幹部を排列したのである。かくして残る四寮には、二、三年混合の寮が成立した理由である。

この文理科混合の成果は、良い結果を齎らし文理科の或程度の人格の交流は勿論多くの点において有利な状態を見せた。異色の漲つた当二寮では夜毎に活潑な寮歌演習が盛で、新入寮生のファイトも沖天の感があつたのである。

○四月三十日　午後五時より新入寮生の歓迎全寮コンパが行はれた。電飾燦として輝き、新入寮生を挿んで、校長教頭及一年組主任の出席の下に盛大にコンパは行はれて行つた。

想うに、頓に昂ずる物価の嵐にも拘らず、御馳走の数々は寮生を喜ばせ、和気靄々として寮食堂に漲り溢れ、感激の一夜であつた。

自己紹介が始まり、上級生の弥次頻発、一度に新寮生の度肝を抜く珍風景の中に活気は一段と昂じて行く。かくして一年の寮生活のノーマルなスタートは切られるのである。

○五月三日　新憲法施行記念日。

幸い、占領軍の宿舎が接近している為に、寮内の電力に関する官庁取扱いがはかられていてその特殊線による電力は、他の高校の羨望の的となつていた。その外エッセンは皆ヒーター室で行い、忙しいながらも生活上の一大援策になつていたのである。

○五月十五日　午後二時より自治委員会規定の草案の審議並びに生徒援護会の機構及び活動についての議題の下に生徒大会が挙行された。

○五月十九日　野村教官逝去。

学校内の生徒自治案も漸く設定され、それに基く活動も漸次盛となり、リベラリズムの高校の内容に劃一的変転を来したといえる。

このころの文化運動部の活動もこれと併行して盛であり、そのリストを左に掲げる。

二十二年度予算　九七四〇〇円

校友会費	一人一〇〇円	八五〇人
新入生入会金	〃　五〇円	二四八人

○総　務　部

○人文科学部

1、哲　学　部　　2、宗教坐禅部
3、社　研　部　　4、史学研究会

○自然科学部

○芸　術　部

1、図書雑誌部　　2、音　楽　部
3、演　劇　部

○弁　論　部

○運　動　部

1、野　球　部　　2、庭　球　部
3、陸上競技部　　4、水　泳　部
5、籠　球　部　　6、卓　球　部
7、排　球　部　　8、ラグビー部
9、サッカー部　　10、海　洋　部
11、跋　渉　部

リベラリズムの思想に貫かれて、再び自治寮として出発を始めた吾が学而寮は自治体として、自由と権威に基くあらゆる綱領完成の萌芽は着実に進められて居た。然し乍ら一方浸潤し来れる社会の動乱には、到底逆う事能はざるものがあり、標榜するリベラリズムなるものも、必然的に多くの社会的現実的制約の中に支持されねばならない宿命を担つて居たと云へよう。

それにも拘らず、超越的な余韻を多分に存する寮内には、自治自由の雄叫びは狂乱する程に活発であつて、寮歌は到る処より聞かれ、寮夜の静寂を破つて絶叫するストーム等にも、いわば燃え熾る情熱の迸りが見られ、治安維持による警察の手をも屢々借りざるを得ない状態であつた。

然し一方この熱情に反して、学校との寮の分離化、その独立性を確守せんとする風は、自治寮の名に相応わしい事とはいえ、学校を怠かにする風潮も強く、デカダンとまでは行かなくとも、多少怠惰な風潮もないではなかつた。然し、これも冷静に日々を哲学する寮生にとつては、あながち痛罵さるべき問題でもないのである。

六、三、三制による旧高校の廃止は、意あるものを嘆かしめた事は事実であるが、あくまで自由を標榜するが故に、かかる歴史的必然的生命たりし寮の有終の美を盛り返した年として特筆さるべき時代であつたといえよう。

○五月二十二日　寮生大会開催さる。

社会の一大寒心事たる食糧難は、寮内にも襲い来り、その心的影響も甚だしく悪化する一方の食生活を克服する為に、橋本総代は生徒代表と共に、屢々学校側との交渉を行つたのである。今までの自由の雄叫びもかゝる外部的条件には、その影をひそめざるを得ない破目に立ち到る。かくして、学校側もこれを重大なる協議事項として評議した結果、六月十四日にて授業を打ち切る旨を掲示した。これに対する寮生大会が開かれた理由である。かくして大勢如何ともする能はず、寮生は六月五日まで授業、しかして六日より夏休みに入る事を可決した。

五月三十日の生徒大会においては、六月十五日まで授業続行、試験は来学期に廻すが如く決定した。しかるに偶々有馬、安部生徒代表の辞意が明かにされたのに対し、生徒一般は、これを認めずこゝに多くの波乱を生じたのであつたが、結局の所、生徒側は今までの学校側の強圧に対する反動の念は強かつたとはいえ、とかく擡頭していた左傾に煽動されたとはいえ、或る意味においては、多少リベラリズムの軌道を逸した感がないでもなかつたのである。冷静な熱情の欠乏に起因

する所も大きかつたのであろう。

○六月五日　左の掲示あり。

六月十日　第一学期授業終。

六月十七日ー二十一日　第一学期試験。

六月二十二日ー九月十日　夏季休業。

○六月六日　右の案に対し、生徒代表及び寮総代の斡旋により全校生徒これに賛成し、この事件は一応の落着を見るに至つた。

○六月八日　九州四高校インターハイ行わる。野球、庭球であつて、寮投宿。

夏季行事として、インターハイの意義も大きく、旧高校の友愛も一入と深まるシーンである。寮においては歓迎ストーム、返礼ストームとその感激はまた一種独特の味がある。

五高、佐高戦より火蓋が切られ五高先勝し、わが福高は七高を見事九対四で圧倒したのである。

○六月九日　野球インターハイの優勝戦が香椎球場で行われ、応援団の熱援の下に堂々八対二で優勝、栄冠をかち得た。福高万歳！

○六月二十一日　第一学期終了。

新入生も伝統ある学而寮風に馴染み、来るべき二学期の実りに具へんとして威勢堂々寮を去つて行つた。社会の変動は募る一方、地上の楽園たりし寮内にも、電力削減、盗難事件等が吾々の生活の上に大暗黒面を見せつけ、吾々は凡そ昔のリベラリズムを標榜する事はその本質に於て狂ひを生じ、楽観主義は愚か、常に現実界に片足を踏み込まねばならなくなつたのである。

夏季休暇。之も必然的に吾々の対象が異るものがあつた。学資を稼ぐためにはアルバイトをせずばならず、之等に類した寮生の苦悩は、現実的社会に精錬される注目すべきモメントを醸し出したと見ていいだろう。然しこれに対しても飽くまで自由を評価する純学生としての立場を失してはならなかつた。況んや社会人たる事を誇示する趣向は又一面寮生活に大きな害毒を流す事になる。其処に非常に六ケ敷い寮の運営、方向性の問題が存したのである。

○七月十七日　夏季休暇中の催しである西部地区高校競技大会が十四日まで佐賀高等学校不知火校庭にて行われた。天気晴朗。福高は排球、卓球、ラグビーにそれぞれ優勝の栄冠をかち得た。

三ケ月にわたる例年にない長い休暇に、心身共に心ゆくまで静養した寮生は学期前十日ごろから既に寮灯を慕い続々帰寮。再び学而寮の空気は震動し始めた。

役員の交替も二学期を以て行われる。

全寮総代　文科　安東俊憲

理科　赤間陽一

○九月十一日　第二学期開始さる。

一学期の活気に較べて劣らぬ情熱的な雰囲気の狼火は再び寮を見舞つた。が、ここで注意せねばならない問題がある。寮生活なるものの運営で最も基調となり、重要な生活部の幹部も、外的コンデイシヨンの悪化に悩され、電力の方も一層制限を受け、十月中旬からは遂にヒーターの使用を禁止するが如き破目に陥り、この影響もあり、次第に擡頭して来るエゴイズムの風潮に拍車を掛けられ、ここに退寮者が激増した事実である。学校側としては、寮は飽くまで精神修養、人格形成の場であり、アパート化する事は絶対に阻止せねばならぬと力調したにも関らず、必然的運命とはいえ、かゝる外的圧力は寮生の心を揺がす大きな動機とならざるを得なかつた事は事実である。かゝるイージー

ゴーイングに寮風が考えられるようになつたのも又歴史的現実に即した因果として止むを得まい。

○十月三日　本年度生徒代表選挙。当選左の如し。

文科二年一組　渡辺　弘

理科二年四組　本間保一

かくして新しい転換の下にわが学而寮もその自治組織の成文ができ上り、ここに新しい自治体としての学而寮が整備された事になる。この綱領は、次の二十三年度正史の中に挿入したからここでは省く事にする。

○十月九日　新寮総代及新生活部総代焼失せる寮事務室の計画を生徒課と懇談す。

寮生待望の記念祭は近づきつゝある。文化活動、特に擡頭し来る新しい哲学図書思想の研究も盛んに行われ、自治体としての完成体を目指して夜毎に募る内的充実を外部に発露し、以て遺憾なく寮の面目を一新せんとして、その闘志に漲る寮生の活動は俄然呼び醒されたの感がある。

この記念祭を寮中心に行はんとして、生徒代表、応援団長、寮総代等大いに趣向を練り、色々の具体案を生ずるに至つたのである。

○十月二十六日　石川、出光氏等街頭ストームの掲示をなせるも、生徒課側は強固にこれを禁じ、以てこれを施行する事を禁じたのである。

既に、運動部、文化部展各々活発な行動によつて青陵は何時にない記念祭風な雰囲気が発散しつゝあつた。

第二十六週年記念祭は佐高歓迎ストームに始まる。

○十一月一日　佐高歓迎の街頭ストームを決行した。学校側はこの挙を黙認し生徒代表は、その責任を担い、青陵健児は、古来の遺風をこらして続々博多駅頭に集合した。既に観衆の波はこれを幾重にも取り囲んで、正に歴史的大行事は開かれんとしている。午後二時青陵健児二百有余紋付羽織、襷、褌の出で立ち、飜る青陵の幟にもわれわれ独自のシンボルが認められる。佐高遠征軍到着。生徒総代有馬賢氏の挑戦状朗読、その声打震い、一場深閑として情熱の逆流を思はしむるものがあつた。次いで応援団長の巻頭言に始まる狂奔の大乱舞開始。すべての憂愁を忘れ去つて、友垣にのみ生きんとする若人の情熱の声は、遠く玄海の濤を揺がすに似たるの感があつた。終つて呉服町東中洲を行進、誦する寮歌に意気軒昂天神町にて乱舞、ジープの同伴もしきり、渡辺通にては電車も止まるの大騒ぎ、何等事故なくしてこの日の感激のシーンは終つたのである。夜は学校にて佐高歓迎コンパが華々しく催され、百名余りの佐高生を迎えてのわが学而寮の寮夜も何時にない活気を呈し来つたのである。

これに先立ち、主に左傾の集団たる社研の寮生が、三十一日の夕方寮食堂においてダンスの講習を開催した事に対し、安東総代及び主要者が生徒課より叱責された。時代の波に乗つて、かゝる傾向は既に寮内に浸潤し来つたのであるが、兎角にかゝる情勢は、健全さを欠き、害毒を流す結果として恐れられたのであろう。

○十一月二日　創立二十六周年記念の行事として十一月一日の午後二時及び二日の午後六時より、講堂にて音楽会を開催した。園田久教授の指揮の下に、音楽部の大演奏合唱であつた。

○十一月三日　明治節。演劇とレコードコンサートが催された。山本有三原作の『同志の人々』一幕その外理三・一上演の『谷底』が行はれ、芸術祭の華々しさを加えた。

十一月二日(マヽ)には、佐高の遠征軍、野球、ラグビー、排球、卓球部の対佐高戦が華々しく展開。

両雄、多数の応援を背後に控え、舞い狂う若人の歓呼、空を翔る幟旗に、両選手の意気当に沖天、激戦に激戦を重ねて、遺憾なくその精魂を尽して相戦い、野球戦を除いた他の三種目には福高に凱歌が奏せられた。漂う興奮の波の中では、何か永久に消えずして、この滔々たる流れの中に厳存するものが感ぜられたのである。

○十一月七日　本校創立記念日。学校では文化展が公開され、既に人の波はその成果の鑑賞へと押し寄せて来た。一方寮祭が始まり、寮生の鬱積している意気の発露がかくして与えられると、何時にない自由の雄叫びが見え、更に寮の伝統に最大拍車を掛けんとする熱情に漲り、寮は一年の中でも最も充実せる雰囲気を自ら生ずるのである。

先に、一年生は東一、二寮のみに収容され、所謂文理科混合と称せられる異色ある形態を有し、優秀な上級生の指導下にあつた。偶々理科の二年の有志が従前の通りに各寮に分配せよという論題を提出し来り、寮生大会まで開き、賛否交々遂に、各寮に配分され、旧来の寮態勢(マヽ)を基く事となつた。これは記念祭後に実施する事に決つた。東一、二寮では一年の潑剌たる熱意の為か、優秀な寮デコレーション等が充実して居る。

午後五時より寮食堂にて全寮コンパが実施され、盛宴であり、寮生一同感動の中に、やがて進むべき未来を享楽したのである。

終つて夜十二時ごろまで寮生劇が行はれ、何れも成功裡に行つた。

東一寮　エピキロスの快楽
東二寮　神と男と女
東三寮　死をもてあそぶ男、長居は無用
西一寮　ドン　キホーテ
西二寮　海へ行く騎士
西三寮　ドモマタの死

何れの寮も、脚色、演出、演技、装置、照明等粋をこらし、扮するメッチェンも上出来、ここに甘き祝宴は興奮の極、しばし没我の境を作り出して呉れ有意義な一夜を明かした。

○十一月八日　文化展続行。

寮のデコレーション公開。半月許りの思索の結果を、諷刺、哄笑的に表現せんとその才を尽した成果は、自づと観衆を引き寄せ、寮の面目を遺憾なく発揮したのである。特に東一、二寮では一年の奮闘で上できのものが様々であつた。

一位をかち得たのは、東一、九室の『汝自身を知れ』というソクラテスのテーマを持ち来つて、大きな鏡を据え附けたのが、観衆特にインテリの投票を牛耳つたかと思はれる。その他主なものの題目のみを挙げて見れば、

『寝台白布之を父母に受く、敢て起床せざるは孝の始なり』（孔子）

十書目録、真理は拇み難し、校前の木を養え、東洋通徳、ハングリー狂想曲、曰不可解、蜜柑製交響楽、インフレ対策、内にはズボラな本日休業なども人の目を惹いた。

一方文化展では、一位は文三、二の『児童心理の研究』、理科では理二、四の『地球の進化』であつた。

明けて十一月九日、創立記念大運動会。天気晴朗、全員午前九時集合、校長訓辞。寮歌合唱の後に競技が開始された。

第二十六周年記念祭寮歌

作詩作曲　文三・二　有　馬　　賢

〝あゝ脊嶺に〟

一、あゝ脊嶺に雲湧きて
　　游子が狼火焚く処
古城の畔黎明(アケ)くれば
　　紅映ゆる紅映ゆる筑紫潟

二、ほうはい寄する玄海の
　　潮鳴り響く桃源に
雁渡り行くものを
　　流転の歴史流転の歴史思はずや

三、狂乱の民夢乱れ
　　世は混迷に迷う時
更に光を慕ふかな
　　愛の象徴(シルシ)ぞ愛の象徴ぞ自治の故郷(クニ)

四、伝えも清き南欧の
　　アゼンの森を宛然(サナガラ)に
青陵(ヲカ)に団える若き日の
　　真理(マコト)の夢を真理の夢を忘れじな

五、花散り星は遷れども
　　伝統(カタミ)に結ぶ憧憬者(ウタビト)が
紅葉のかげ美酒を酌む
　　感情(ナサケ)やこもれ感情やこもれ記念祭

清明なる朝の校庭を震はす寮歌は、吾人の胸を痛烈に衝くものを思はしめたのである。

各種の競技に混つて行はれる、福高独得の仮装行列、就中三年生の人生航路は観衆の興奮爆笑の的となつた。一週予選、福高式ラグビー、四週、三人四脚、クラス遊技、マラソン大濠一周、ボール蹴り（教授、先輩）、借物競争、対部競争、クラス継走決勝とその運行の移りは順調、何れも若人の意気を十二分に出露せしめている。その合間に見られる一年のクラス仮装、ノートルダムのせむし男等々、爆笑拍手の的となつた。次いで化物、人生航路、パン喰競争（一般）、煙草火附競争（教授、先輩）、百足競争等その熱技はすべての福高生を徹底的にその闘魂を灼尽したのである。クラス仮装の二、三年生の部は、何れも粋を尽し、二年では文二・一の『河童』が一位、第二位は理二・一の花園の平和、次いで理二・三狂猿、理二・四お人形さん、文二・二アラビヤ物語、理二・二維納の森の物語の順となる。これに次ぎ、三年之部では一位理三・六銀河、二位は理三・四のインターナショナル、ダービー、次いで理三・一玩具の兵隊、理三・三エデンの園生、理三・五天使、文三全のゼスチユア競争の順位となつて居る。

熱狂の裡に、黄昏迫る青陵の原頭に大乱舞を行い、等しく豚汁で高校の一才を取つたのである。この日総務バザーが行はれ盛況を極めた。

かくして、記念祭は円満成功裡にその幕を閉ぢた。昔にも優る観衆一万有三千名余を校庭に擁して、万色交々の色彩、終始福高生の才気を鑑賞賞翫、爆笑の中にも、その若人の知層に偉大なる依頼を寄せた。その古巣たる寮の寮祭に於ては頓に人の気色を惹き、何時にない賑かさ、デコレーションの影には、野蛮の洞窟に等しい環境を憚らず観客に見せつけて居た。

○十一月十三日　昼食時新生徒代表の任命あり。

文二・一　渡　辺　　弘
理二・四　本　間　保　一

東二寮よりこの新代表を出したと云ふので、得意の東二寮生は祝賀

ストームを行つた。

次いで一年生は、各寮希望別に配布されて、ここに昔の形式を取るに至つたがやや懐古的な風潮は見るにしても、新しい環境寮風にやゝに浸み込み、寛容な雰囲気の下に成長した。

一方電力悪化に伴い、ヒーターの使用禁止により、エッセン場が寮庭の一隅に設けられたが、各自七輪のエッセンが流行し、火事の懸念、又寮の破壊等憂々しき問題が惹起するに至る。

○十一月二十一日　寮小使を更に雇傭し充実した。このころ、盗難、火気、衛生等これらの対処上かゝる事情の止むなきに至つたのである。社会の暗黒面が、歴史的必然とはいえ寮の自治組織に包まれ始めた事は遺憾ともすべからざる運命である。

○十一月二十五日　電力の悪化に伴い金、土曜の両日を休業と決定した。

○十一月二十八日　文化活動の一助として、記念祭中に催される事に決定していた『暖流』の上演を学而寮主催で催し、観客を大分酔はしめたが、設備の不充分は免かれなかつた。

○十二月三日　福高生徒援護会が設立され、困窮生一乃至二名に貸借する事となつた。

○十二月十日　寮総代九配に電力の増配を懇請に行き、試験中は従来通り二〇〇〇キロの配電を得た。

○十二月十五日　第二学期試験開始。

○十二月二十二日　冬休暇開始。

やがて廃止さるべき運命にある吾が学而寮の最後段階としての自治組織はやゝ完成に達した感があつた。されどこれと殆んど歩を合せて歩み来つた社会のバンドはその自治自由の上にやはり抵抗し難い束縛を齎らしたのである。

かくして、先づ食生活に最も深い関心が寄せられる事は勿論の事、その他思想的にも、又学資等各方面に亘る懐疑的な不安、自己凝視の後に来る苦悩等を味ははないものはいなかつた。デカダニズムとエゴイズムはやゝに芽を萌したといえよう。しかし、高校生のシンボルの友情と意気に生きる寮は常に変らざる何かしら自づと感じられる温かさを秘めていたのである。仮に浸潤し来る現実の波は如何に冷たくとも、理想に生き真理を思索し続ける寮生の姿は寮窓を洩れる声の尽きざる限り存していたのである。

終戦後迎える三年目の正月、社会の危機は益々募る一方、高き知識層として日本を背負うべき寮生の自覚もいや益に増すばかりである。

○一月八日　第三学期開始さる。

このころの学生は通常堕落し、道徳観念に乏しいといはれ、これは前途の祖国に憂慮の問題とされた。これは高校生についてもいえない事はない、即ちかゝる要素は無い事はなかつた。これは、例えば、礼儀作法の面等に特に顕著な事実であつた。『衣食足知礼節』の根本概念の一現象であろうか。新しき世代の子たる自覚に欠ける事は往々にして吾人を不安暗黒の道への助長となつた理由である。

○一月十八日　会食時火気用心の事が強調された。

○一月二十一日　例年通りの寮において三年卒業生の餞別コンパを開催。各寮においても個々に餞別コンパ、友垣に結ばれた祝宴の一時を過したのである。この日各寮のストームも盛に応酬され、活気を呈し、前途の多幸を祈つたのであつた。

校長教頭三年各組々主任を招待した。

○二月二日　文部省より校内視察。新制度の改革案などを議した。

○二月七日　第三学期授業終了。
○二月十八日　第三学期試験終了。
かくして昭和二十二年の波瀾に富む年度はすぎ去って行く。日本の運命と呼応して、わが学而寮も新しき世代への転向の運命として、やがて青陵原頭からその姿を消去らんとしている。
思想の流れも、巧みな煽動的な傾向を示して来たとはいえ、寮生の裸になっての自己省察的な傾向は常に正しい判断を導いた事は自負すべき事であろう。就中寮はアゼンの園におけるが如く、かゝる環境の下に処他的にも恵まれており、人格相互の向上にはもってこいの楽園といえよう。
慌しい社会の変動には、迷はず進まず常に現実の中に則しながらも高校生たる特権は死守したのである。伝統と創造の光よ！学而寮は永久に死せず！若人の魂の揺籃地よ！

【昭和二十三年度】

終戦後迎える第三年目、従来の学而寮はまた元の自治寮に復帰したとはいえ、その間には多くの波瀾と大凡戦時中とは逆の態勢を整えるに至ったのである。学校制度は、文相安倍能成氏によって高校三年制復帰論が出て、ここに先づ高等学校は二年制より三年制になる事がマッカーサー司令部より発表されて、ここに純然たる昔の高校に復帰したのである。又前年には六・三・三制の学制改革案が決定し、ここに愈々旧制高校が廃され、姿を永久に隠す事になった。しかしこれに対する反対運動又は冷酷な批判はなく、しかも誰しも高等学校に生を寄せた者として、高校生活を憧憬し、夢幻の地として逍遙い歩いたものには、その廃止なるものは心中非常な苦痛であった。寮に残る者とて、不服なる者が多く従って伝統に対する執着を愛執を覚えずにはいさしめなかったのである。一方日本は、マ司令部の適切なる政策により、全く変装せる姿を顧み、従来のファッショ超国家主義は全くその影を認められなくなり、強圧的に又日本人独自の要望から成る民主国家として出発し、自由と平等を愛する典型的国民たらんと努めて居た国情であるから、この改革に対しても飽く迄強い反対論が持ち出される事を予想して居たのであるが、結局当時の時局の流れ奔流には到底抵抗し得なかったかにも見えるし、又必然的な高校の末路としてこれをあえて運動化しなかったかとも思はれるのである。終戦後の寮生は、何故に旧制の学校を閉鎖しなければならず、又学校改革の根本思想を探るのに汲々として居たのである。
寮の内部が如何に変様したかは、正に百八十度回転とはこの事であろう。けれども、自治と自由の寮精神を標榜した所でそこには社会の波につれて起る暗黒面がつきまとって居た事は注意されねばならない。総代たる位置にあるものも、従前の如く権威及び指導権の確立した人物として寮を新しき生面へと導く事が果して従前通りの遺法でいいのか、其処に偉大な矛盾が生ずる事は明瞭であり、この点苦悩の種となったのである。終戦直後は、軍関係に学徒出陣の学徒の復帰、及び軍関係からの転入生が多く、従って平均年令が高く従って又、軍国主義的思想を多年間体得したものが、いきなり高校生活に入り込んで果してその寮生活に身も心も浸潤し切ったかは疑問とされる。けれども今年度の新入生は、軍関係というのも殆んどその数が限定されており、未だ軍隊の内面にも認識が定らない中に入ったものが多く従って、その悪弊は殆んどなかった。されど自治寮なる名の下に、生徒課の指導は脈々として存してはいたが、昔の如く直接的でなく、悪くいえば任せ切りの情勢に陥ったのである。而して多く中学校より新入せる者の

中には、多分に学力の低下が認められ、所謂堕落せる社会の波に洗はれて、暗黒の世相に息を継いで来て、更に学而寮の従前と異なる緩和された規律下に生活を始めても、一概に浸潤し切つた面もある。これに対する幹部の指導権も仲々六ケ敷、各人の持つ自治の精神に先づ信頼し、時々これが惰俗に傾くを見ればこれを委員会で注意する程度のものであつたが、これに対する反対は当然予想しなければならなかつた。昭和二十三年度といえば実に変化に富む忙がしい年である。

先づ組織からいえば、従前の寮にては、一年生の全寮制が施行されていたのであるが、時勢の変化に伴い、かゝる強制に万端止むを得ざるものがあつて、入寮は随意という事に決定したのである。ここにアパート化する間接原因の萌芽がないでもない。高校生活は寮生活を以て本源となすのモットーはその観念が稀薄になつたとはいえ、上級生の残れるものは住みよくして難解なる寮に純然たる愛着を感ずるものが多かつたようであるが、偶にはかゝる概念を持ち合はせない者もいた様である。従つて一学期の初めには二百名をオーバーする人員を擁して、所謂自治の鐘も鳴り響いていた。寮制度を知る為に左の資料を掲げて置く。

福岡高等学校学而寮綱領

一、自由ヲ愛シ自治ヲ重ンジ寮生活ノ真髄ヲ発揮スベシ

一、世運ノ進展ニ鑑ミ学而寮ノ伝統ニ遵イ寮生タルノ矜持ヲ失ウベカラズ

一、広ク知識ヲ世界ニ求メ人類文化ノ発展ニ寄与スベシ

寮　規

総　則

第一条　寮生ハ真ノ高校生タルノ自覚ノ下ニ本校生徒ノ中核タルベシ

第二条　寮生ハ自治ノ精神ヲ発揚シ寮規ヲ遵守スベシ

第三条　寮規ノ改廃ハ寮生大会ノ議ヲ経ルモノトス

組　織

本寮内ニ左ノ役員ヲ公選シソノ任期ヲ一箇年間トス

一、全寮総代　各寮ノ互選ニヨリ文理科ヨリ夫々一名ヲ出シ寮生ヲ代表シ寮内ヲ取締リ内外交渉ノ任ニアタル

二、各寮総代　各寮寮生ノ選挙ニヨリ一名ヲ置キ各寮ヲ代表シ相互連絡ノ任ニアタル

三、各部総代　生活・文化・運動・園芸・電気・衛生各部委員中ヨリ互選ニヨリ夫々一名ヲ出シ各部毎全寮ニ関スル当該事務ニアタリ各寮ノ連絡ヲ計ル

四、生活部委員　各寮々生ノ選挙ニヨリ一名ヲ出シ各寮ノ食事、生活一般ノ任ニアタル

五、文化部委員　各寮々生ノ選挙ニヨリ一名ヲ出シ各寮ノ文化活動、図書室ノ管理等ノ任ニアタル

六、運動部委員　各寮々生ノ選挙ニヨリ一名ヲ出シ各寮ノ運動、娯楽等ヲ掌ル

七、園芸部委員　各寮々生ノ選挙ニヨリ一名ヲ出シ各寮ノ農園ノ経営、管理、寮内外ノ清掃等ヲ掌ル

八、電気部委員　各寮々生ノ選挙ニヨリ一名ヲ出シ各寮ノ電気電熱器ノ管理、電力計画ノ任ニアタル

九、衛生部委員　各寮々生ノ選挙ニヨリ一名ヲ出シ各寮ノ衛生清掃等ヲ掌ル

十、室　長　各寮ニ於テ各室毎一名ヲ互選シ各室ノ管理ニツイテ全責ヲ負ウ

運　営

第一条　諸般ノ事項ヲ議センガ為ニハ寮生大会役員総会或ハ総代会議ヲ開クモノトス

第二条　寮生大会ハ全寮ヲ以テ役員総会ハ役員ヲ以テ、総代会議ハ各寮総代及ビ各部総代ヲ以テ夫々組織シ議長ハ全寮総代之ニアタル

第三条　予算会ハ毎年一回開クモノトス

第四条　役員ノ交替ハ第二学期授業始メヲ以テス

第五条　スベテノ会議ニ於ケル議決ハ出席者ノ過半数ノ同意ヲ以テシ可否同数ノトキハ全寮総代之ヲ決ス

第六条　学而寮全体ノ意見ハ全寮総代ヲ経テソノ効力ヲ発揮ス

第七条　学校トノ連絡ハ全寮総代ト生徒課トヲ以テス

入寮及ビ退寮

入寮及ビ退寮セントスル者ハ全寮総代ニ其ノ旨ヲ述べ其ノ了解ヲ受クベシ

其　他

其ノ他細微ナル事項ハ寮生大会役員総会総代会議ニヨリ適宜之ヲ定ム

寮生ノ体面ヲ汚シ秩序ヲ紊ス者アルトキハ総代之ニ忠告ヲ与へ改悛ノ状ナキトキハ総代会議ニ諮リ退寮ヲ命ズルコトアルベシ

以　上

全寮総代　文科　安東俊憲
〃　〃　理科　赤間陽一

昔の高校への復帰これにも大きな波乱を予想せざるを得ない。即ち単なる復帰で終ってはならず、必然的に民主々義国家の流れから押して『寮の民主化』の声唱あり、独裁的専制権力を振り廻す事は歓迎されない結果となる。だが何等上よりの束縛を突如として除外された後の反動と弛緩とに対しては指導層の制約もある程度は必要であったがその施行範囲、権力の程度は全く総代の苦悶の的であった。

しかしこゝで問題となるのは、昔のリベラリズム時代の高校への復帰を試みるだけではいけなかった。何故ならば、昔のかゝる時代相と現今の時代相との上には平和という事は同一現象と見られるけれども、前者に比べて後者は敗戦という残酷なるレッテルの下にあらゆる思想は、たとえ言論の自由は許されていてもそこに根本的にゆるがす事の出来ない事実が横たわっているのだ。かゝる反省と熟慮の結果、未だ新しい構想を生み出さざる前に、急激なる解放感は如何ともすべからず、こゝに伝統—これは屢々批判の余地はあるにしてもとにかく種々な催し物が続く。先づ立上ったのは全寮ストーム、長髪、寮雨、又文化活動、対寮マッチの応援、又カフェ行き、混迷の世とはいえ、洒落にて新しき生活を切り開く特異な空気も乱れ存したのである。されども、このころの寮生にはあらゆる点で拘束あり自由に羽搏かれる日はなくて終った。

かくの如き昔のリベラリズムを模倣する事には、また色々な論議が行はれ、旧高校のシンボルを高校生活の愛と意気に生きるシンボルとする者に対し、既に軍隊の既成観念を有するものとの間にはしば〳〵衝突が齎らされていた。しばらくの間は高校の真の姿—あくまで外観的な—についての論争は絶えなかった。而して先づ外郭をしっかり形成して然る後に内面を充実して行くのだとする者が多くこれに対して新しき高校生活の尖端を行く者との間に論争が絶えなかったと見られるのである。かくして一方思想方面では、戦後新しく出て来たデカダ

ニズムなるものを追い行くものも多く現はれて来た。

これらのものはすべての寮の中心には厳として君臨していたとは思はれるが、さりとてロマンの境を彷徨する純真な要素は誰しも有していた。この心境はすべての高校生を通じて認められるものなのである。このころの寮生の中には、やたらに自己集中的となり、依他的感情を起さずに自己のみの生活や安逸に汲々として努める割拠的な小さなエゴイストの群もあり、かゝる二大潮流の嵐は、すべての寮生の経験せるものなのである。

又思想的にも暗黒の波瀾はあり、従来の戦時中の日本人すべてを支配した天皇制の問題、旧憲法の帝国主義的規定による道徳観念も思想方法も敗戦なる契機の下に一応解消してしまい、あらゆるものに認められたる自由の旗の下にはまだ〳〵惶々たる新しい光明なく、ダークの世界とケイオスの世界とが渦流を作り、寮生をして、如何に生きるべきかの思惟を度々阻害するものがあつたのである。かゝる客観状勢下にあつてデカダニズム、エゴイズム等々の思想が現われて来、又浮華、憂鬱の情況に照らし、一方食生活にも悩まされ、エッセンなる語は常に寮生の脳裡を離れず、一層困惑した生活の一路を辿る寮生のみじめな姿が歴々と浮び出て来る。

されど寮生の心の底に流れる不易の情熱は、憂国の念に駆られ、一日も早く文化国家を建設せんが為に、あらゆる絶望や苦悩の道を克服して更に高い教養の体得に身を躍らせる姿は尊かつた。

以上の風潮を記した後に今年度の歴史を繙く事にする。

入学試験も従前通りの学科試験が行はれ、中等学校（戦後は女子の志願も許可されていた）の秀才がこの狭き門を突破する為に、暑き日も寒き日も我れを忘れて螢火に親しみ、文科は六人に一人、理科は五人に一人の難関を目ざしたのである。このころは学校の内申、性行調査書も吟味せられここに桜薫る春暖の候、威風堂々合格者の入門を待つたのである。待望の福高又学而寮に夢多かりし過去の苦労も顔には浮かばず、唯感銘にのみ胸は打たれて、見るものすべてが新しい祝宴かの如くに見受けられた。

○四月十日　新入生入学式。一時より挙式。

校長訓辞。生徒課長祝辞。生徒総代本間保一の挨拶終つて新入生代表宣誓。一入感奮の気昂り、何となく若い感じの新入生の面には、決意の程が見受けられた。

この時の生徒代表は次の如くである。

生徒代表　文科　渡辺　弘（文三・一）

〃　〃　理科　本間保一（理三・四）

しかし渡辺弘氏は学期始めに胸患にて倒れ、新学期早々選挙改選がありこゝに左の如く決定。

生徒代表　文科　杉山照夫（文三・二）

かくして入学者二五五名は目出度く入学式を了え、新学期に対処したのである。

文科　八五名

一組（甲類）　四三名

二組（丙類）　四二名

理科　一七〇名

一組（甲類）　四一名

二組（甲類）　四四名

三組（甲類）　四四名

四組（乙類）　四一名

この中特異な注目を引いたのは理科一年四組の紅一点足立玲さん（福岡高女）である。青陵始まつて以来最初にして最後の高校生として、特殊の存在を加えた事は疑う余地はない。

この外理乙一年には朝鮮よりの留学生二名も特異なる存在である。

同日午後三時より寮食堂において新入生の入寮式を行う。新入寮者七十一名に及ぶ。

全寮制度は前述の如く一旦諸事情に廃止され、学而寮の伝統の下、真の自治の精神に身を任せ、自己の権威を確立する事に努める意志強固なるもののみを入寮させる制度となれり。

新春未だ日浅からず、桜咲きそめ、春の夢霞に含まれて、大きな希望と憧憬の的、愛すべき学而寮に入寮し、この日また学而寮にとつては一大祝福すべき日を迎えたのである。

但し二、三年の上級生は入寮式の後二日即十二日より授業開始なる故、殆んど帰寮するものなく、十数名の少ない歓迎の有様、これはあまりにも新入生にとつては悲しむべきまた無礼な態度であつたろう。

学校長始め、永井生徒課長その他一年の組主任の先生が来席され、こゝに入寮式は挙行された。父兄の方も二三人集つておられた。先づ学校長、学而寮綱領を始めとして諄々と時局の多難を説いて行かれ、学而寮の自治自由の精神を発揚し、自らの正しい自学の下に、高校の中核として、遺憾なく寮生活を味得するように説得された。

終つて両寮総代の歓迎の辞、生徒代表本間保一の祝辞何れも友情に溢ちた切々たるものであり、新入生の胸深く滲み渡る熱情の迸りを感ずるような気がしたのである。入寮者を歓迎して吟ずる上級生の寮歌も、少々活気にとぼしかつたとはいえ、その熱烈なる真情は汲み取られた事だろう。

燦爛夢の淡くして
　桃源の春何かせむ
武勇の国は南の
　南風薫る舞鶴城
……
思へば嬉し同胞と
　厚き情の友垣を
結ぶも長し十五秋
　星を仰げる記念祭

昭和十九年度に既に述べた新入生の態度とは正反対といつていゝ程に変つて、やゝもすれば惰性の強い、社会の波に徹底して洗われた中学生活の中より、更に評価高き憧れの高校生活に入る前に如何なる指導方針をとるかという事は、寮幹部の悩みはそこにあつた。完全な高校生活に滲透せしめるためには、従来のリベラリズム時代の伝統を参酌して、こゝろみに大掛りに新入生に対する導順を行おうとした。この結果は、実によく、日一日と伝統の波は近づいて行つた。

かくする中に二、三年の寮生が続々帰寮して来てこゝに大きな団欒の声は寮の隅々まで漲つたのである。このころまではまだ静寂な寮も、はやエッセン、寮雨と一入なつかしい、しかもしんみりする雑然たる空気が漂つて来た。

この時代の寮構成は、

東一寮（一名鴻寮）　文科甲丙。
東二寮（〃〃翹寮）　〃　〃
東三寮（〃〃辰寮）　理科甲。
西一寮（〃〃汪寮）　〃　〃

西二寮（〃〃溟寮）　〃　〃
西三寮（〃〃玄寮）　理科乙。
南　寮　　教官及その家族。
新総代室、事務室、小使室、応接室等。

○四月十五日　新入生歓迎全寮コンパ。

新学期第一の行事としてこの祝日が火蓋を切つた。校長始め諸先生の来席を拝し、一年を取り囲んでの和気靄々さ、ここに高校生活中最も忘れ難き一瞬がある。全寮総代の歓迎の辞。食糧難の折から、赤飯を始め御馳走の品々、貧しいながらも祝宴の香漂い四囲に満ちていた。

終つて新入生一人々々の自己紹介に移る。食堂入口の壇を一段と高くして、一人々々の姓名、出身中学、抱負、感想を上級生より片つ端から質問されて、一年はまづ胆をぬかれる。待ち構えて弥次る上級生の喧騒に負けまいとして、大言壮語すればたちまちの悪罵、否定の声が湧き起る。これは唯単に殻を打破る丈でなく、深く高校生活へ入る一つの入口としての行事であつて、単に新入生に威厳を保つだけでなく、真実の自己を凝視めさせ、夢多き生活に入らしめるに相異ない。紹介の後に、一人々々独得の余興をやり、それ〴〵の弥次を受けて、頭が変になつて降壇するのである。二、三度やり直しをさせられるものもあり、食堂に漲る爆笑の声、若人の楽園とはこの事か。

『寮に来ての感想は？』

『万年床多く、寮雨は、便所にまで行かなくてもよく、エネルギーの節約に……』

『床の中でや！』等々。

新入生はかくして次第々々に高校伝統の柵の中に押し込められて行く。歓迎ストーム、一年もやつと仕始めの乱舞を金切声あげて行う。ファイアーストーム、火あれば躍るはこれ野蛮人の習性。高校生活のそれにも似た所ありと雖も自ら裸になり切り、すべての憂悶を忘れ去り、こゝに新しき糧を見出すのである。感激又これにすぐるものあらん。各寮よりもちよれるむしろ、薪木の山に火ともり、やがて沖天の勢にて燃え熾るを見れば、褌一つの上級生寒気の中に続々集合し、火を自然と取り囲むのである。

かくして歓迎の巻頭言の声、深々として夜の静寂を破り、『あゝ玄海の……』に始まる乱舞が始まる。乱れ飛ぶ烽火！打ちちぎれるまでに振りまくる応援旗！世情の濁流を眼下に見下ろす若人の意気は又正に鬼神をふるわせるものがあつた。

学而寮よ！汝は見たるかこの雄々しき姿を。狂い騒ぎ、日毎に募る憂悶を他所にして荒れ狂うこの瞬間を。されど青陵原は迫る薄靄のはれるを見る。高校の末路を示し、悲哀の念又混々として湧き出てたるを。

この後、全寮進出ストーム、試胆会、各寮歓迎コンパ、エレベーター、説教ストーム等にて華々しく学而寮は火花を散らして行く。若人の想誰が知る。指導階級意識の体得は、真摯な問題とされ、この指導策も困難を極めていた。

このころのストームは全く物凄く、ストームの域より脱して、なぐり合い、又破壊的ストームと化し、ガラスの破損、すべての公営の事物の破壊は憂慮されるものがあつた。されど、新入生を迎えての沖天の意気は、これを如何ともするあたはざる要素が介在していた。

元来福高生には勉強一点ばりの坊ちやんが多かつたのであるが、時代相の異なつて来るにつれ、不安と憂鬱の感情は寮内いたる所に漂い、思想的に小さなわくの中に閉じこもり易いエゴイズム的傾向は特に強

かつたといえる。がしかし、いざ団結をという時には学而寮の名にかけてその意気物凄く、成果は優秀で、こゝに高校生の底を流れる真情があるように見える。

これに加えるに食料難の問題は一層堕落の一途を辿らせる要素となつたのである。昔の高校生の食生活には及はびもつかず、五百円そこ〳〵の寮費にて、わずか一六〇〇カロリー前後の保有量しか保てずに、寮生は食に彷徨う状態となる。

寮の沈滞、恐慌。悲惨という外はない。エッセンなるものは昭和十九年から行われていたようであるけれども、このころは毎日何時もかまの煙が立ち上らない日はなかつたのである。かく惨めな生活のどん底にあつて、その希望に満ちた芽をふくのは寮生をおいて外なかつた。

動揺！沈着！すべてのものはぐん〳〵渦巻き流れる。この波は遂に学而寮をも丸のみにせねばやまざる大勢であり、これに逆はず、迷はず冷静に自己内省、自己を完成、権威を確立する事が急務であつたわけである。

○四月十二日　新学期開始。

はり合のある生活は順々とすぎ去つて行く。レアルの社会の束縛を受けざるを得ない寮生の中にもアルバイト片手に学資を稼ぎながら通学するものも多かつた。されど惰性に基づく動乱は日々に募るばかり、各部の活動も人を得ずして日々に沈滞して行くばかりであつた。

この時寮歌合唱の声は各所より出で盛況を呈していた。

寮夜を吹く風も日に日に自由の新鮮さを加えこそすれ、その底にはあらゆる不安が漂ふ学而寮には、デカダニズムの風潮が漂つていたとは言え、寮生の雄叫びはすべての感情を浄化して、愈々夢想の園への躍進を齎らしたのである。

○五月二日　サマータイム制実施。

能率主義の世の中で、それを学校にも応用する事となつたのである。

○五月三日　新憲法施行記念日。

寮生苦悶の日は続く。この年度には、過去のリベラリズムの外延を行うか又、未来への新しき創造を行うべきかの二方面について、度々総代会議も行われたが結局時運は両者の中間論的なものへと発展して行つたかに見えた。

○五月十四日　生徒援護会給与生選考さる。

○五月二十日　定期身体検査実施さる。

狂乱の民夢乱れ
世は混迷に迷う時
更に光を慕ふかな
愛の象徴ぞ愛の象徴ぞ

自治の故郷
――二十二年度寮歌――

社会の状態と新しい戦後の思想―実存主義、超現実主義、デカダニズム等々―に依つて、寮生も従来の如くもはや社会より遊離した超自然的存在の余地が無くなつた事は事実である。高校生自体の社会面への突入は、社会性の体得はもはや疑う余地もなく差し迫つて来ている。これに即応して一方、自己集中的、自己沈潜的なエゴイズムの傾向は又一段と濃く見られる所の思潮の流れである。かゝる傾向の濃くなるにつれて、学校及び寮に対する従来のような関心又挺身の光が薄れたのは事実である。かゝるコスモポリチッシュな傾向はこの時代には一段と強化し、社会と個人との直結によつて、社会構成メンバーとしての自己をのみ凝視し、一般に寮生活に対する意識は失われつゝあつた

と思われる。かくして寮が他の下宿と同様の価値をしか有していないかに見えるアパート化のテンデンスは又否めない事実である。而して社会の悪い俗習をも一緒に寮に浸潤して来て、寮生の権威及び誇りをも一緒に洗い流す傾も見られる。かくして寮内には異常な空気が漂い、寮に対する意識なるものは、喪失されつゝあつた事は悲しむべき事実である。

紫罩むる凌晨に　今暁星の影揺れて
新潮たかく香るとこ　赤一輪の影させば
創生の子よ若人の　血潮は流る黎明の海

五月上旬対佐高戦実施され、福高遠征す。

本年度を以て終りを告げる対佐高戦遠征であるから、両雄その粋を尽して奮斗した。馬三頭を先頭に、佐高応援団長の歓迎の辞、それに応える福高の返礼の辞、共に声奮いその悲調鬼神を哭かしむるものあり。さりとてその情熱友愛に我等高校生の血はいやが上にも逆行する想を抱かせたのである。この感激、これこそ高校独得の夢であり、感情なのである。

試合は不知火原頭で行はれ、野球、ラグビーを始め、全種目に亘つて行はれた。野球は惜敗、必ず仇を報いんと誓つて、奮起の涙にくれた。青陵の応援旗ひとり風に打ちひしがれ、無念如何ともする能はず、悲涙彷彿、さながらその余韻嫋々として、青陵原頭にまで響いた。

一方ラグビーは精鋭を誇る吾が闘士の前に、敵はその力戦奮闘の前にはあえなく降り、青陵健児の意気はいやが上にも煮えたぎつたのであつた。先輩の流す感謝の涙、選手又嬉し涙を流し、こゝに又愛着すべき感銘深き情況を呈した。勝利を告げる応援団の乱舞、又沖天の呈、去り行く影を偲びての両高校の雄叫びである。かゝる友情に溢れた高校生活のシンボルを体して、踊り狂う姿、すべての憂鬱をも不安をも流し去つてしまう姿こそ、高校生の特権であり、伝統であり、誇りなのである。

かくして遠征の疲れも見せずに、寮生は悠々として引き上げたのである。

かゝる団体的な行動の中にあつては、伝統の力というか、高校生の通有性というか、寮の為福高の為という観念が強く見られる。しかしそれ以外の平坦なる生活においてはこの時代に見られる一般の風潮として自己の自己たる以外に、寮の一員分子たる観念がない。いい換えれば、利己的な分子が多い事である。かくして種々な面で色々の衝突を見るのである。かくして個人の価値を最大に評価して寮生活という概念に対する否定的な傾向が多分に濃厚になつて行く。かゝる態度は何も寮生の意識体験内に暗々裡の中に潜んで発顕するのではなくて、それが無批判的に無意識的に行われている事が危険なのである。この危険を孕む寮内に色々な波乱が予想される事は必然的であるといえる。

かゝる事情の下に、その惰性を克服し、又去り行く高校最後の試みとして、こゝに開始されたのが寮史編纂である。こゝにその趣旨を載せよう。これは六月下旬に寮食堂に張り出されたものなのである。この事業は全く有意義なものであるとはいえ、資料その他の問題で、動揺を来した。

寮史編纂について

戦の嵐は終熄した。而も我々を廻る幾多の嵐の終焉は果して何時の事であろうか。限りない不安と混迷は絶望の深淵に我々を誘い行く程に現代の一切の事象に立ち籠めている。そして世代の晩鐘の中に今しもその姿を消さんとする高校の表情に烈しい苦悶は蔽うべくもない。

而し去り行く者に対する惜別の念は、単なる哀愁であつてはならない。われわれは二十数星霜の輝ける伝統を更に光彩陸離たらしめる為に総ゆる努力の傾注をなすべきである。高校最後の年に当り、学而寮史の編纂を行はうとするのは、かゝる意識に基く。われわれの努力を最上に結集せんが為である。

学而寮創設以来の先輩の努力の跡は必ずやわれわれの混迷を解決に導くものと信ずる。寮生各位はこの意義を深く認識し、総ゆる協力を惜しまれる事なく、共に目的の遂行をなされん事を切望する次第である。

編纂は各寮文化部幹事によりなる学而寮史編纂委員会を主体として行はれる。具体的な活動としては、資金を卒業生諸先輩の寄附に仰ぐものとし、編纂の実際的活動は二学期より開始、出版は記念祭前後の予定である。

なお寮生諸兄にして先輩に連絡あるものは、文化部まで連絡されたい。

学　而　寮　文　化　部

前述の如き暗黒と不安の錯綜している寮内の空気を一新せんとして発議され又伝統を誇る学而寮の影を永遠なものたらしめんとして、発案されたこの企図は洵に有意義であり、寮生に対する過去の先輩の残した伝統に対する偉大なる認識を高揚し、一方寮生の意識を統一して、以て晩鐘響く桃源の里を浄化する点においても、又次代へ残す唯一の資源となるべきこの寮史編纂は実に価値あるものといえる。

一学期間はなお活潑な空気が漂い新入生を囲んで若々しい緑に満ちたという感がある。まだ寮生活なるものの意識観念も強く、愛着も高鳴つていたのである。未だ去り行く寮の悲哀なるものも見られず、従つて稚気と純真さ、明朗さと福高生の品位なるものは毅然として存していたのである。

○六月二十四日　授業料三倍値上（千二百円）絶対反対の生徒大会開催さる。

国内インフレーションに歩調を合せ、我等学園に対するいはゞ税金の波も押し寄せて来て、これは時局柄止むを得ない事とはいうものの、かゝる文部省の圧策に対しては、断固として反対し、学園の民主化をも共に表明せんとして立上つた。全学連及九学連に歩調を合せて、その経過を監視し、一方福高として取るべき道を決したのである。これには左翼系の猛烈な策動があつた事は否めないのである。

かくして、授業料反対に対する二日間の示威ストライキに入り、当分の間授業料を未払と結果はなつた。

考えて見るに、社会の大勢は滔々として進み、その余波が我が学園に訪れ、昔と大凡懸け離れた学校と社会との結びつきは、いよ〳〵堅実になつて行く跡を偲ぶに足るものである。これには飽くまでも学生としての純真性と、一方純粋なる思惟批判が要求され、且学生としての社会性の限界が最も大きな問題として残るのである。福高生の社会化は大きな試題（マヽ）であり、一方これを認容する事は是か否か？

○六月二十六日　第一学期の授業が終る。

○六月二十九日　〃〃〃試験開始さる。

○七月六日　同終了。

○七月七日　夏季休暇始め。

一学期間の寮生活を滞りなく終つた寮生は、精神肉体共に清新に又浩然の気を十二分に養わんとして一躍帰省してしまつた。しかるに社会の時潮に突つ込んでいかなければならないアルバイトの学生は、依

然寮に立て籠って学資を稼いでいた。かくの如くに苦労をする学生を社会は又同情の眼で見てくれる事だろう。

かくして寮全体に対する統一的な意識は殆んど見られず、こゝに大勢の流れにあるいは妥協し、あるいは批判も反対をもなさず、沈滞の空気は一段と濃くなって行く。

又役員交替の内定が学期の終りに決まった。彼等は最後の高校生活を如何に克服して行くかその点大いに苦しみ、自己の能力にかけて辞職は頻々として起り寮内の渦巻と相俟っていよ〳〵その変動の方向に拍車をかける事となった。

新役員氏名（内定）

全寮総代　文二甲　平野　宏
〃副総代　理二甲　有留照周
各寮総代　東一寮　文二甲　岡　康弘
東二寮　文二丙　平田好成
東三寮　理二甲　進　光顕
西一寮　〃　樋口総一郎
西二寮　〃　原沢高比古
西三寮　〃　乙　中山正造

一方夏季休暇を利用して寮史編纂の方は、文化部総代田中将を委員長とする福高学而寮史編纂委員会が生まれ、資金及び資料獲得へ奮斗する事となった。

五高校インターハイが、七月末から八月にかけて行はれ、最後のインターハイの精華が上げられ、福高は排球、卓球、ラグビーが優勝し、排球にては全高校インターハイにて優勝全国制覇をなし、その旗青陵原に永久に保持される事となる。亭々舎には他高校選手の合宿で賑はつたのである。

社会の変動にあえぎながら、各自の光明を追求して、八十日余の夏季休暇を終えて、憧れのハイマートえと寮生は各々の語り草を背負って帰寮して来た。思うに二学期よりの寮内の変動は今正に始まらんとしている。

○九月十三日　第二学期授業開始。

色々波乱を極めた後、二十三年度の新役員が左の如く決定。

全寮総代　文二丙　平田好成
〃　理二乙　渡辺　鄰
各寮総代　東一　文二甲　岡　康弘
東二　文二丙　名和太郎
東三　理二甲　進　光顕
西一　〃　樋口総一郎
西二　〃　原沢高義
西三　〃　乙　浅原芳資
各部総代　文化部　東二　文二丙　田中　将
生活部　西一　理二甲　岩野正宏
電気部　西一　〃　鍬田万喜雄

二学期になると先に述べた諸現象が増々募って行く。即ち、寮生は時局の大勢を止め得ずして、これに迷おうとも又批判の眼も向けずにたゞ自己なるものの中に価値を認めるのみで他はすべて否定し、就中寮生活なるものをも否定し勝な気運に満ちていた。かくして寮生活に対する観念も乏しくなって、イージーゴーイングな傾向を作るに至った。

寮内の色々の行事に対しても殆んどの者が無関心であった事は否め

ない。総代選挙、文化生活への自覚、寮史編纂等々殆んどがかゝる傾向を有するのである。しかし前にも述べたように一学期においては寮内の気風はなお活潑な澄切つた感じであつたのが、今や二学期に入つては著しくその顕著の跡を示しているように思はれる。

多くの寮生が、無暗に自己なるものの存在に沈潜し、自己の安易のみを求める期であつた。この原因は多々見出されるであろうが、見逃せない事実は、度々挙げた如く社会の暗黒と不安—勿論これは表面的には民主主義、自由自治と飾られてはいるが—がわが学而寮の深底にまで潮流して来た事、一方従来の寮制度においては、入寮退寮が非常に厳格でしかも寮の組織の上に大きな均衡が取れていたのに対し、このころでは、寮の空気になじめず、又安易な自己沈潜に都合のいい下宿生活への為に退寮者が激増した。しかして元来寮の伝統を担つて来た上級生がその数著しく減じ、従つて末期になれば、下宿難より入り来る上級生などが混淆し、ここに寮意識なるものは減ずる一方であつた。かくして寮総代始め新役員は、自己と寮を結びつける丈でも大きな苦悶の道を辿り、指導層を堅実にする策動に大童であつたが、これも外面上は不活潑といえる。

寮としての有機的活動は極めて稀にしか行はれず、いはゞ無政府的な拍車の上に拍車をかける事になる。たとえ一つの事だに個人の自由を尊重するが故に、或程度の独裁的な色合もなされず、一方すべての事を独制する理由にも行かなかつたのである。而して寮生自体が権威自由の炎をもやしてくれたならこれに越したことはない。中には強圧を求める声もないではなかつた。そこに大きな煩瑣な思考がなされるべきだ。学問に対する自覚は高揚し、自己のみに自恃的に行動する姿が一日一日と深まつて行つた。

○九月十八日　佐高の学校総務寮状況視察の為来寮。
○九月二十六日　七高寮総務寮状況視察の為来寮。
○九月二十八日　全寮総代始め新役員交替式挙行。
永井生徒課長始め、安宅、今来生徒課教官その他来席。全寮コンパを催す。

新全寮総代は次の如く挨拶した。

今や暗黒に満ちた社会の波にのまれつゝある我が学而寮も、愈々変転極まりない中にその影を没して行く。我等は今こそ最後の雄叫びをあげよう。来る記念祭には遺憾なく成果を上げられたい。今正に国家混沌の期、我等徒らに濁世に染む事なく、その底に澄み切る心の夢は常に堅持したいものである。有終の美を創造るは正に我々の意気一つであり、各自の奮起を要望する。

終つて亭々舎において新旧両寮総代と生徒課との親睦会あり。

○九月二十九日、十月一日　総代会議を開き、具体策を協議する。生活部、文化部は寮の中核として活動する必要があるので特にこの方面の協議をなす。文化活動は割に活潑で、レコードコンサート、読書会なども始めの中は仲々活潑であつた。生活部の食料難に対する方策は特に六ケ敷く、寮費も千円をオーバーする如くなり、これにても相当の窮乏を来し、各人エッセンを行う矢先、燃料の対策に窮したが、この為寮の破壊も多少ある事はあつたが、炭薪の購入も屢々行はれた。かゝるみぢめな寮生活を辿る寮生の窮迫は涙ぐましいものがあつた。

近々に開催される第二十七周年記念祭もこの頽廃し切つた寮意識を恢復せんと企てた寮総代は爾後切実に寮内の奮起を促しつゝ、一方寮の意識も記念祭の目標に統一され、やつともち直つた感がある。これは、いはば伝統の力といおうか、より深い高校魂の発露といえるし、

寮生全般の切実な願いでもあつた。

○十月四、五日　各寮総代バザー委員集合し、バザー及び寮祭についての協議をなす。

記念祭！最後の記念祭たる空気は既に濃くなつて行き、既に寮劇やその他の用意が始まりつゝあつた。

○十月九、十日　ラグビー部のインターハイ九州予選が行はれた為、佐高、七高、五高の選手投宿。何時もの事ながら大いに歓迎、又寮意識の充実を見せんとの歓迎ストーム、正に破竹の勢あり。

試合は福高グランドで行はれ、福高側の応援団の意気選手を益々鼓舞せしめ、優勝戦福高ー七高にて軽く敵を一蹴し、制覇の業をなし遂げたのである。

○十月十二日　記念祭費の予算を組む。寮生は大体百八十名の現状、さびれたりとはいえ、やはりかゝる行事には中核として働く事は古今を通じて変りはない。記念祭費を一人宛百円徴集し、総額壱万八千円を左の如く分配す。

文化部（デコレーション、バザー、寮生劇等文化面の費用）　約四千円。

生活部（主に全寮コンパの費用）　約壱万円。

予備費（電気等）　約四千円。

寮生すべてとはいい難いが、とにかく記念祭なる祝宴にあこがれる想いは、桃源の故郷に満ち〳〵て、ファイトのあらん限りを尽さんと意気天を衝くものがあつた。

この他の寮の組織、たとえば、寮室の移動、寮役員の変動、食事時間、帰省外泊下宿難の為、入退寮の自由、すべてにルーズがその権を恣にし、いわば自由のまゝに放任された無政府、無秩序の状態に置かれ、これを回復するだにその惰性反動は大きかつたのである。

記念祭近づく。終鐘油山より遠々として聞ゆ。

○十月二十五日　総代会議。記念祭日程その他を決定。事項左の如し。日程。

一、寮生は原則として十一月一日までに帰寮する事。

一、二日午後佐高歓迎街頭ストームを行う。

一、三、四日対佐高戦。

一、五、六、七日寮バザー。四日全寮コンパ。四、三〇P.m.　寮生劇六、三〇P.m.

一、〃　略式コンパ、四、三〇P.m.　六、七日デコレーション。

一、〃　運動会、ファイアーストーム。

決　定　事　項

一、寮歌決定。四作品の中多数決にて〝沈石紫く〟。

一、デコレーション。紙は日本ゴムよりの寄附にて、一室五枚配布す。

一、応援団。各寮より二名。ノボリ旗二本宛。応援団長、理二・三田村。

着々とその実を上げ、もはや火蓋を切らんとする。このころ寮内には緊張の波が押し寄せる。

第二十七周年記念祭寮歌。

『沈石紫（アヲ）く』　　作詞　文二・丙　平田好成
　　作曲　理二・甲　縄田照美

一、南薫寄する蒼空の
　　油嶽を廻る薄雲に
　　觴宴馳せて影清く
　　夢幻彷徨い嘆じつゝ

淡き紫明に友垣の
紐帯(キヅナ)美し筑紫潟

二、颯風荒び玄海の
　　溷濁の底喘ぎつゝ
光明(メイ)照らす真理へと
　　涕泣の巷魂魄の
沈石紫く熱血を
　　永遠の愛情(ナサケ)に狂はずや

三、伝統長き青陵の
　　雄史閉ぢ行く終鐘に
堅き団欒の途しるく
　　永劫の飛火燃ゆる時
桃源映えて悲調呼び
　　情熱もやす記念祭

○十月二十九、三十一、十一月一、二、三日　国民体育大会。

遂に最後の記念祭の幕は切つて落された。寮生の感慨又一入と深まり、玄海の高鳴りを遠くに聞き、真理の夢を忘れない寮生は立ち上つた。

前奏曲たる対佐高戦。

○十一月一日　佐高生及び国体出場の山高、四高、六高生の投宿について協議。二百名近くの大人数に福高の寮は大恐慌を来した。

明けて十一月二日、待ちに待つた街頭ストーム。午後一時半博多駅前に集合。応援団の出立目覚ましく、太鼓を載せた車力、法螺貝、蛮声怒号、ノボリ十数本、中には二十尺近くの大幟あり、夫々、鴻寮、翹寮、辰寮、汪寮、溟寮、玄寮とその名もゆかしく打ち並び、秋風に飜る姿、げに若人の血を湧かすに足らんや。寮より駅まで練り歩く、その雄姿よ。今日こそは我々の天下。地上の楽園。街頭に舞い狂はむ。いざ酔はん。

この日丁度国体にして博多の街も、ごつた返す賑い、はるばる遠路の人々にも驚歎させんと意気正に軒昂。

一時半既に二百余名の福高生が集合している。敵未だしと武者振り、待つ事久し。既に群衆多々我等を囲む。

一時四十五分遂に佐高選手、応援団来る。又斗志満々たる姿よ。おゝ今日味方にして明日は敵、いざ讃えんかな若き日を、若き生命を。

杉山生徒総代歓迎の辞を朗読。切々たるものあり。あゝ最終の対佐高戦！雄史は過ぎ行く。田村応援団長の迫々たる巻頭言に続く青陵健児二百余名の大乱舞。轟然たる太鼓の響に合せて、今を盛りと舞い狂い、若人の意気と愛の交錯せる渦巻きを一般の人々はどう見てとつたか。一般人はいざしらず、われ等高校生の血気はいや応なしに高まり、打振る幟、むしろ旗と共に、正に名残りつきない感激の一瞬。社会もいづこへか飛び去り行け、われ等至上の情魂は浄く高く羽搏かん。終つて佐高の返礼ストーム。不知火寮旗を打振い、これも覇気満々、感激新たなり。

宴の園に散る花は
　　又来む春は咲くとても
三年の春の過ぎ行かば
　　候鳥の身の君と我れ
……

福高、佐高の雄姿続々呉服町－天神町へと練り歩く。途中両者とも独得の寮歌を吟誦して行く。

天神町、渡辺通一丁目にて同様の物狂しい程の乱舞。疲れも知らず、

青陵健児意気高し。電車も止るの大騒ぎ。かくて街頭ストームは終了したのである。

午後六時より、寮食堂において、両高代表の先生、佐高運動部選手及び応援団及び本校運動部、寮生を交えて佐高歓迎会開催さる。アンパン、紅茶にてつゝましく行う。佐高生を取り囲んで明日の斗争をうそぶき合う。

青陵健児の歌う応援歌に応えて、相手方も、

〃いざ北筑の敵来れ！〃

と斗志会場に満つ。さて明日の勝利はいづこ？

寮はこの日最も賑やかな歓迎の辞深更に至るまで消えずして、夜更けにそぼ降る雨に皆憂慮の顔にて就寝す。

○十一月三日　文化の日。

昨夜来の雨、瀟々として寮窓を打つ。両雄の意気為に少し挫けたりとはいえ、ラグビー戦は雨中敢行さる。佐高応援団はすご〳〵と隠退して寮を去り、六日に延期の野球戦にて見えんと涙して帰る。寮の二階にむらがる人だまり、傘をさして応援する福高健児。雨中水浸りになって、奮斗又奮斗、観衆をしてそゞろ涙を催す景色。優勢なる福高遂に勝利をあぐ。この敢斗振りを見る者、又感歎措く能はざるものがあつた。

終って両選手スクラムを組んで

〃フレ、フレ佐高〳〵〃

〃フレ、フレ福高〳〵〃

と叫び合う哀調の中に遙に伝統を誇る高校ラグビー戦もその幕を閉ぢたのである。

あゝ、後に残るは空虚なる空気。音もなく消え去り行かんとする青陵。校庭寮庭の涙雨、又哀愁をそゝるに足るものがあつた。

○十一月四日　対佐高戦第二日目。

サッカー　3—2にて福高敗る。

卓　球　4—2にて福高快勝。

籠　球　福高惜敗。　庭球　4—1にて快勝。

○十一月五日　寮祭始まる。寮生待望の寮祭は先づ全寮コンパから幕を落した。永井先生始め多数来寮さる。全寮総代挨拶。

こゝ青陵原にも終鐘の音響き、我々は最後の祝宴に酔い、ありつたけの情熱を尽して、奮斗しよう。伝統を誇る学而寮も、その最後の試みとして寮史編纂なるものを企劃しており、二十有余年の伝統、又今日の感激我等の成果は必ずやその一頁を美しく色彩る事と思う。私は、この感激を寮歌に歌い、織り込んでおる。今こそ我々はスクラム強く、決して一部の者を犠牲にする事なく有終の美を飾ろう。

夕方より寮バザーを藤棚の下にて施行し、委員の奮斗は目覚ましかつた。かくして寮への愛着は一段と高じて行つたのである。

観客食堂を埋め、七時半より寮生劇始まる。即座の舞台も仲々洒落れていて、観衆の笑い又一入、この演技に吸いこまれたの感があつた。

これも寮生の奮発、努力の賜で、その結果は上できであり、最も有意義な一時であつた。

審査員　穴山先生、時野谷先生、有馬賢氏。

一、東二寮　〃気で病む人〃　モリエール

一、西三寮　〃結婚申し込み〃　チエーホフ

一、西一寮　〃エチルガソリン〃　長谷川如是閑

一、東一寮　〃博多仁輪加〃　飛入

一、西二寮　〃幸　福〃　久米正雄

一、東三寮　〃才女気取り〃　モリエール

素人にしては旨すぎる寮生の演技、若人の意気、知性が遺憾なく発揮され、胸のすくような一時であった。特にメッチェンの扮装は旨く、他の女も目を瞠る位のあでやかさ。たか声は。実際高校生の女装は、目立つてよくできる。

審査の結果、及び賞金。

一等　東三寮　才女気取り　金七百円。

二等　東二寮　気で病む人　金五百円。

三等　西三寮　結婚申し込み　金三百円。

寮生の奮発の結果は報いられ、大いに寮生の意気を示した事は特筆すべきである。

○十一月六日　本日より二日間寮デコレーション公開。相当多数の外来者あり、寮の面目を一新する事になった。

○十一月七日　運動会開催さる。永井先生、杉山生徒代表挨拶ありて、新寮歌発表。これに続いて種目開始す。観衆二万を超す年来にない盛況。人生航路を始め、仮装行列は戦時中には見られなかったもの、また高校生の才智に満ちた技巧は、観衆の爆笑を買い、その面白さは何ら不自然なく受取れたのである。かくして一方寮デコレーション観客も廊下に満ちる仕末、寮バザーも大盛況、人は青陵原に晩霞たなびくも知らず一日を乱舞し、陶酔し尽したのである。運動場の中央にあつて打ち鳴らす太鼓の音は恰も終鐘のそれに似ていた。終つて豚汁にて年を取り、全校生大乱舞。〃人生旅路〃を哀調迫り行く原頭にて、静吟したのである。

続いて七時より疲れも知らぬ寮生を主体とするファイアーストーム。狼火炎々として天にまでその火花を散らす時、全寮総代の巻頭言に始まり、裸体の遊子踊り狂う事、実に二十一回。余燼哀々、三三五五の寮生尚尽きざる哀愁をその余燼に託し見守る姿はいと涙流れる感があつた。

かくして永劫に寮生に宿るべき飛火は消えて行つた。しかしかくも清新な寮生の気運は、又これによつて清められた青陵原は又次代の若人の心をも浄化せん事を祈つて止まないのである。六日間に亘り、しかも二十七年の歴史をかくして一瞬の中に終熄せしめたのである。

学而寮よ！　さらば！　その歴史よ！

デコレーション。

一等　西一寮六室　動物園。

二〃　東一寮〃〃　世界名画大傑作集。

花散り星は遷れども
伝統(カタミ)に結ぶ憧憬(ウタビト)者が
紅葉の蔭美酒を酌む
感情(ナサケ)やこもれ

感情やこもれ記念祭

かくして寮生の意識は記念祭においてその頂点に達し、終つて後は前よりも一層惰性を引き戻し、暗澹たる道を辿る。この勢は物凄いものである。三年生は大学入試に全力を傾注し、一方一年生も新制大学への切替えで寮に対する観念が薄らぎ、こゝに分離の影が萌し、事実上学而寮は消え去つたとも見ていゝのである。

食生活は、日課の重大なる一面となり、自炊は一日も絶え間なく行われ、又経済的に急迫の寮生がアルバイトによつて学資生活費を稼ぐ。休み毎に帰郷せずに孜々として努める学生は、誠に涙ぐましいものがある。一方大日本育英会入会者も激増し、千八百円の支給を受けてい

る。

かくの如く窮迫した喘ぐ寮生は、この学而寮を飛び立つて如何に発展するだろうか。

昭和二十四年度新生徒総代の氏名は左の如くである。

文科　甲類　西嶋　久

理〃　〃〃　高原洋介

要するに寮内に無統一、又腐敗した空気が満ち満ちて、意識が全く地に堕ちた事は事実である。

十二月中旬、突然五高より大学法案反対のストライキが勃発し、その余波は先づ福高に及んだ。新制大学法案に全面的反対、学園のファッショ化、植民地化反対を標榜するこの運動が急に問題にされて来た。冷静保留の態度をとり続けた福高の自治連もあまりに急迫せるこの事態に大童の態であつた。丁度試験前の事ではあるし、事態は緊張を続けた。先づこの火が学而寮につき、寮門内に左翼系の連中が入り込み、先づ寮からの煽動に努めた。が、寮総代始め幹部は冷静に批判し以て事態を平穏裡に終結せんと努めた。

しかしながら、十二月十五日試験第二日目から遂に反対ストライキに進出、街頭宣伝その他の実際行動に乗り移つた。しかし内部は、学生の社会性の問題に煩悶する者が多く、かゝる運動も文部省に対する示威とこそなれ、特に左翼系に牛耳られた以上反撥も大きかつた事は否めない。十二月二十一日まで続き、遂に未完の儘となる。反対派の団結は特に弱く、多くの波乱をも防ぎ得なかつた事は大勢過激致し方ない事である。

○十二月二十二日　冬期休暇始め。

○一月十二日より第二学期試験続行さる。

同　十七日終了。

慌しく過ぎ去る昭和二十三年度もその余韻脈々たるものがある。寮は既にアパート化した感があり、しかしてそれに反撥する気力は蔵していたかに見える。ストームもこの学期の終りになつて物凄く行われ始めた。

寮の惰性に加えて、生じた盗難事件の頻発。これは寮生の暗澹さを一層加え、一方では寮生活なるものに対する意識を低めるものとなり、実にこれに対する方策は苦しさを加えた。

ここで変遷極まりなかつた新役員の最後のリストを載せて置こう。

寮総代（東一寮）　文二丙　木本正美

（〃二〃）　〃〃〃　美馬　昇

（〃三〃）　理二甲　永井彧男

（西一〃）　〃〃〃　樋口総一郎

（西二〃）　〃〃〃　国丸昭一

（西三〃）　〃〃乙　江上澄郎

○二月七日　三年一年を主とする惜別全寮コンパ午後五時より食堂にて開く。

惜別の気室内に漂い、経費一万有二千円をかけての御馳走に、校長先生始め、永井、安宅、山崎、今来、穴山、中沢、今岡、毛利、園田、時野谷先生の興趣溢れた御挨拶一入寮生の胸をはりさくばかりの思いあらしめたのである。本日は生徒が完璧押され勝ちの感であつた。和気靄々遺憾なくその哀傷を尽した。余興に入るや校長先生も二十年前に若返えられ、蕃声にて〃故人西に送る〃の詩吟を誦せられ、その威厳は強く寮生の肝胆を寒からしめ印象深いものがあつた。

各寮一人宛の余興も惜別の気に満ちて、最後に寮歌を斉唱するに及

んで一段と強くなって行った。

思えば伝統長き学而寮今や二十有余年の歴史を閉づるの日近しと雖も、我等の残せるその道たるや広く祖国への影を閃かすに足るものであろう。

理想の塔は月に冴え
まどろみ深き盃に

……

吟ずる寮生の瞳には永久に消えざる閃きが感ぜられたのである。

二月十日より三年生試験。十二日卒業式。

二月二十一日より一、二年試験。二十六日一年生修了式挙行さる。

一方寮史編纂の方は委員に人を得ず、難航を極め、前述の寮風に見られる雑多の要素が入り乱れて、遂に計画の如くならず、春季休暇に入ってようやく、有志の者のみ残寮し着々とその成果をあげたのである。

想えば長き伝統を誇る我が学而寮も、音なく消え去って行く運命にあった。寮生は最後の雄叫びをあげて次々と去って行く。この哀情を知る者は、そゞろ涙を催すのである。こゝ学而寮は幾星霜に亘って若人の心身を錬磨してくれた事だろう。歴史的運命とはいえ、この寮の空気を吸った者にとっては永久に忘れ得ざる想い出として、人生の波を乗り切って行く事だろう。

かくして新しき歴史世代は始まる。新しく生まれ変る学而寮はこゝに新しい歴史を繙き、繰り拡げられて行く。

さらば学而寮よ！その伝統よ！歴史よ！

さらば！　さらば！

彙　報

Ⅰ．九州大学史料収集・保存に関する委員会彙報

一九九七年　一月二四日　第一五回九州大学史料収集・保存に関する委員会

概算要求について審議した。

教官定員運用について審議した。

兼任教官の推薦について審議した。

公文書の移管について審議した。

一九九七年　四月二四日　第一六回九州大学史料収集・保存に関する委員会

振替要求案について審議した。

ユニバーシティ・ミュージアム構想について審議した。

兼任教官の推薦について審議した。

委員長の交代について審議した。

○九州大学史料収集・保存に関する委員会

委員長　○教育学部　教授　新谷恭明

副委員長　○農学部　教授　深尾清造

副委員長　○石炭研　教授　東定宣昌

○文学部　助教授　佐伯弘次

○法学部　教授　植田信廣

○経済学部　教授　荻野喜弘

理学部　教授　青木義和

○医学部　教授　多田功

歯学部　教授　坂井英隆

薬学部　教授　前田稔

工学部　教授　萩島哲

シ情　助教授　正代隆義

○比文研　教授　有馬學

数理研　助教授　福本康秀

総理工　教授　中島秀紀

生医研　教授　木村元喜

応研　教授　高雄善裕

機能研　教授　小山繁

健セ　助教授　冷川昭子

言文　教授　松原孝俊

医短　教授　布上董

医病　教授　野瀬善明

歯病　教授　池本清海

生環研　助教授　北野雅治

熱研　助教授　林静夫

情セ　助教授　古川善吾

アイセ　教授　大崎進

中央分析　助教授　坂下寛文

遺伝情報　教授　服巻保幸

留　セ　助教授　清水百合
有化研　助教授　菊池純一
大教セ　助教授　長野　剛
先端セ　助教授　中島　寛
大　型　教　授　廣川佐千男
図書館長　小山　勉
副学長　柴田洋三郎
事務局長　板橋一太

○は専門委員会委員
（一九九七年一二月現在）

II・九州大学大学史料室彙報

一九九七年　一月一七日　第一五回運営委員会
概算要求について審議した。
教官定員運用について審議した。
兼任教官の推薦について審議した。
公文書の移管について審議した。

一九九七年　四月一七日　第一六回運営委員会
振替要求案について審議した。
概算要求について審議した。
兼任教官の推薦について審議した。
委員長の交代について審議した。
九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクトの申請について審議した。

一九九七年　七月　三日　第一七回運営委員会
概算要求について審議した。
大学史料室の職場環境について審議した。
九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクトの申請について審議した。

一九九七年一〇月三〇日　第一八回運営委員会
概算要求について審議した。

○九州大学大学史料室

室　長　教　授　新谷恭明（教育学部）
室　員　講　師　折田悦郎
兼　任　助教授　佐伯弘次（文学部）
〃　教　授　植田信廣（法学部）
〃　教　授　荻野喜弘（経済学部）
〃　教　授　有馬　學（比文研）
〃　教　授　東定宣昌（石炭研）
事務補佐員　井澤華子
（一九九七年一二月現在）

九州大学大学史料叢書　第6輯

1998年3月20日 発 行

編 集
発 行　九州大学大学史料室

〒812-8581 福岡市東区箱崎6丁目10番1号
電 話　092（642）2292

印 刷　株式会社サガプリンティング

KYUSHU UNIVERSITY

UNIVERSITY ARCHIVAL RECORD SERIES

No.6 Mar. 1998

FUKUOKA HIGHER SCHOOL *GAKUJIRYŌSHI* I

ARCHIVES OF KYUSHU UNIVERSITY

FUKUOKA, JAPAN